三重県埋蔵文化財調査報告244

山村遺跡（第２次）発掘調査報告

２００４（平成16）年３月

三重県埋蔵文化財センター

序

今回発掘調査を行った山村遺跡は、第二名神自動車道にアクセスする県道四日市多度線に伴うものです。近域では、第二名神自動車道に伴う開発が非常に進み多くの遺跡の発掘が行われています。調査対象地は、丘陵斜面にあって四日市の市街地を一望できるところにあります。我々の先人達もこのような見晴らしのよい所に住処をもち、墓域を造成していったのは、自然の状況に左右されていることもありますが、景観というものも非常に大切にしてきたものと言えます。我々は、このような自然環境だけでなく遺跡そのものを維持し、後世に伝えていく義務があるのです。

調査地内においては、弥生時代から平安時代にかけての集落や墓域であることが確認できました。周辺の調査の状況を加えて考えられることは、隣域において弥生時代中期頃に集落が営まれ、ほぼ同時期にこの遺跡では方形周溝墓が造営されています。さらに古墳時代の終りごろから奈良時代の前半にかけて方形周溝墓を破壊した後に集落が造られています。時代の変化にともない人間が生活していく上で遺跡が破壊されていっている痕跡がありありと発掘調査において確認できました。今日、技術や科学の進歩によってならかの手段で遺跡が破壊されることなく保存できるすべが早く到来されることを望みたいものです。

なお、今回の報告書が山村遺跡の理解と今後の文化財保護に活用されることを希望し、保護行政に一層のご協力を頂けるようお願いします。最後に発掘調査でご協力頂いた、県土整備部道路整備課・四日市建設部・地元各位に感謝の意を表します。

平成16年3月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　吉 水 康 夫

例　　言

1　本書は、三重県四日市市山村町に所在する山村（やまむら）遺跡の第２次発掘調査報告書である。

2　調査は、次の体制により実施した。
調査主体　　三重県教育委員会
調査担当　　三重県埋蔵文化財センター
　　調査第一課　　技師　萩原義彦
発掘作業受託　大成エンジニアリング株式会社

3　本報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第１課及び資料普及グループが行った。発掘調査における遺構写真は、大成エンジニアリング株式会社が担当した。遺物写真は、萩原義彦が撮影した。本書の執筆・編集は萩原義彦が行った。

4　本書が対象とした実調査面積３,７００㎡である。

5　本書が対象とした現地調査期間は、平成11年９月28日から平成12年３月21日である。

6　本書で示す方位は、真北を用いた。なお、国土座標第Ⅵ系を用いた。この座標北は、０度18分西偏しており、磁北は、６度20分西偏している。

7　本書では、下記の遺構表示略記号を用いた。
ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＤ：溝　　ＳＸ：方形周溝墓
ＳＨ：竪穴住居　　ＳＫ：土坑

8　本書で表記する色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（20版、日本色研事業株式会社、1997年）

9　本報告書作成にあたっては、以下の方々から御助言・指導を得ることができた。
伊藤裕偉・竹内英昭・小濱学（斎宮歴史博物館）・水橋公恵（鈴鹿市教育委員会）・角正芳浩（四日市市教育委員会）・木野本和之（亀山市教育委員会）・大川勝宏・西村美幸（文化財保護室）・上村安生（県史編纂室）

10　本書が扱う発掘調査の原因事業は、平成11年度県道四日市多度線道路整備事業である。

11　発掘調査の経費は三重県県土整備部が負担した。

12　本書が扱う発掘調査の資料並びに出土遺物等は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

本　文　目　次

Ⅰ　前言 …… 1
　1　調査契機 …… 1
　2　調査方法 …… 1
　3　調査経過 …… 1
　4　調査日誌 …… 1
　5　文化財保護法等による諸通知 …… 5
Ⅱ　歴史的位置と地理的環境 …… 6
　1　地理的環境 …… 6
　2　歴史的環境 …… 6
Ⅲ　遺構 …… 14
　1　基本的層位及び地形 …… 14
　2　検出遺構 …… 14
Ⅳ　遺物 …… 71
　1　弥生時代 …… 71
　2　奈良時代 …… 78
　3　平安時代 …… 87
　4　鎌倉時代 …… 89
Ⅴ　まとめ …… 96
　1　弥生時代 …… 96
　2　奈良時代以降について …… 97
　3　小結 …… 99

挿図目次

第１図　遺跡位置図
第２図　遺跡地形図
第３図　調査区位置図
第４図　調査区地区割図
第５図　遺構平面図
第６図　調査区東壁土層断面図
第７図　調査区西壁土層断面図
第８図　１号墓平面図・周溝土層断面図
第９図　１号墓遺物出土状況図
第10図　３号墓遺物出土状況図
第11図　２～６号墓平面・周溝土層断面図
第12図　７号墓平面図
第13図　７号墓遺物出土状況図
第14図　８号墓平面図
第15図　９～11号墓周溝土層断面図
第16図　９～11号墓平面図
第17図　９号墓遺物出土状況図
第18図　10号墓遺物出土状況図
第19図　10号墓遺物出土状況図
第20図　11号墓遺物出土状況図
第21図　11号墓遺物出土状況図
第22図　11号墓遺物出土状況図
第23図　14号墓平面・周溝土層断面図
第24図　12号墓平面・周溝土層断面図
第25図　15号墓平面・周溝土層断面図
第26図　13号墓遺物出土状況図
第27図　14号墓遺物出土状況図
第28図　15号墓遺物出土状況図

第29図　17号墓遺物出土状況図
第30図　16・17・19号墓平面・周溝土層断面図
第31図　18号墓遺物出土状況図
第32図　19号墓遺物出土状況図
第33図　ＳＨ36・42実測図
第34図　ＳＨ50実測図
第35図　ＳＨ100・130実測図
第36図　ＳＨ112遺物出土状況図
第37図　ＳＨ80・116・121実測図
第38図　ＳＨ120・161・162実測図
第39図　ＳＨ176遺物出土状況図
第40図　ＳＢ163実測図
第41図　ＳＢ164実測図
第42図　ＳＢ167・168実測図
第43図　ＳＢ165実測図
第44図　ＳＢ169実測図
第45図　ＳＢ170実測図
第46図　ＳＢ171実測図
第47図　ＳＢ172・173・174実測図
第48図　ＳＢ175実測図
第49図　ＳＫ143実測図
第50図　ＳＤ76遺物出土状況図
第51図　ＳＫ90実測図
第52図　ＳＫ166実測図
第53図　ＳＫ73実測図
第54図　出土遺物実測図（１）
第55図　出土遺物実測図（２）
第56図　出土遺物実測図（３）
第57図　出土遺物実測図（４）
第58図　出土遺物実測図（５）
第59図　出土遺物実測図（６）
第60図　出土遺物実測図（７）
第61図　出土遺物実測図（８）
第62図　出土遺物実測図（９）
第63図　出土遺物実測図（10）
第64図　出土遺物実測図（11）
第65図　出土遺物実測図（12）
第66図　出土遺物実測図（13）
第67図　出土遺物実測図（14）
第68図　方形周溝墓略図
第69図　竪穴住居略図
第70図　掘立柱建物略図

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表
第２表　遺構一覧表（１）
第３表　遺構一覧表（２）
第４表　遺構一覧表（３）
第５表　出土遺物観察表（１）
第６表　出土遺物観察表（２）
第７表　出土遺物観察表（３）
第８表　出土遺物観察表（４）
第９表　出土遺物観察表（５）
第10表　出土遺物観察表（６）
第11表　県内方形周溝墓一覧表（１）
第12表　県内方形周溝墓一覧表（２）

図 版 目 次

図版１　山村遺跡遠景（南西から）・山村遺跡遠景（南から）
図版２　山村遺跡、菟上遺跡、伊坂遺跡遠景（南西から）・菟上遺跡から山村遺跡を望む（北西から）
図版３　調査前風景（北から）・調査前風景（北から）
図版４　調査風景（北から）・調査風景（北から）
図版５　完掘状況（北西から）・完掘状況（南東から）
図版６　１号墓完掘状況（南西から）・方形周溝墓群完掘状況（北西から）
図版７　１号墓遺物出土状況（西から）・１号墓遺物出土状況（北から）

図版８　１号墓遺物出土状況（東から）・１号墓遺物出土状況（西から）
図版９　３号墓完掘状況（西から）・３号墓遺物出土状況（北から）
図版10　３号墓遺物出土状況（北から）・４号墓完掘状況（西から）
図版11　５号墓完掘状況（西から）・方形周溝墓群（北から）
図版12　方形周溝墓群（北から）・10及び11号墓完掘状況（北から）
図版13　９号墓遺物出土状況（北から）・９号墓遺物出土状況（南から）
図版14　９号墓遺物出土状況（北から）・10号墓遺物出土状況（西から）
図版15　11号墓遺物出土状況（西から）・11号墓遺物出土状況（南から）
図版16　11号墓遺物出土状況（南西から）・11号墓遺物出土状況（東から）
図版17　11号墓遺物出土状況（東から）・７及び８号墓完掘状況（東から）
図版18　８号墓完掘状況（南から）・７号墓遺物出土状況（東から）
図版19　12及び13号墓完掘状況（北西から）・13号墓遺物出土状況（北から）
図版20　14号墓完掘状況（東から）・14号墓遺物出土状況（南から）
図版21　15号墓完掘状況（東から）・15号墓遺物出土状況（南から）
図版22　17号墓完掘状況（東から）・17号墓完掘状況（北から）
図版23　17号墓遺物出土状況（東から）・17号墓遺物出土状況（南から）
図版24　17号墓遺物出土状況（北から）・18号墓遺物出土状況（西から）
図版25　ＳＨ36完掘状況（西から）・ＳＨ42完掘状況（東から）
図版26　ＳＨ50完掘状況（北から）・ＳＨ50周辺完掘状況（北から）
図版27　ＳＨ80完掘状況（北から）・ＳＨ80及び116、121完掘状況（東南から）
図版28　ＳＨ80カマド跡遺物出土状況（南から）・ＳＨ87完掘状況（東から）
図版29　ＳＨ100及び130完掘状況（北東から）・ＳＨ100周辺完掘状況（北東から）
図版30　ＳＨ112遺物出土状況（北から）・ＳＨ149完掘状況（北から）
図版31　ＳＨ157完掘状況（北から）・ＳＨ120、161、162完掘状況（北から）
図版32　ＳＨ120、161、162完掘状況（東から）・ＳＨ176遺物出土状況（北から）
図版33　掘立柱建物群完掘状況（北から）・掘立柱建物群完掘状況（東から）
図版34　掘立柱建物群完掘状況（北東から）・掘立柱建物群完掘状況（北から）
図版35　ＳＢ164完掘状況（北から）・ＳＢ164完掘状況（東から）
図版36　ＳＫ143完掘状況（東から）・ＳＤ76遺物出土状況（西から）
図版37　ＳＫ166遺物出土状況（東から）・ＳＫ12検出状況（東から）
図版38　出土遺物
図版39　出土遺物
図版40　出土遺物
図版41　出土遺物
図版42　出土遺物
図版43　出土遺物
図版44　出土遺物
図版45　出土遺物
図版46　出土遺物
図版47　出土遺物
図版48　出土遺物

Ⅰ　前　言

1　調査契機

現在の県道四日市多度線は、阻隘かつ曲折著しい。その為、第二名神自動車道へのアクセスルートとして道路建設が予定された。この開発予定の県道は、周知の遺跡である山村遺跡を通過することが判明し、平成10年６月に試掘調査が行われた。その結果、試掘坑において土坑及び竪穴住居とみられる遺構が存在することが確認され、発掘調査が必要であると判断された。

調査地は、丘陵斜面上で北から南東・南西方向に向かって下る斜面上である。かつては、全面が畑地として耕作が行われていたものの現在は、一部の畑地を残して既に竹林、荒蕪地と化している。

調査区は幅約40ｍ×長さ約100ｍであり、北西部分は谷地形であるため調査範囲外である。調査は、北側から重機によって表土除去を行い、作業の関係上表土掘削を北部分と南部分の２回に分けて行った。

また、調査の途中においてさらに北側に遺構が広がると判断されたため拡張することとなり、現地調査は、平成11年９月28日から開始し、平成12年３月21日に終了した。最終的な調査面積は、約3,700㎡となった。

2　調査方法

発掘調査は、重機によって表土を掘削し、包含層及び遺構掘削には人力によって行った。調査に際しての４ｍメッシュの地区割については、工事予定地の道路の中心線に沿って地区設定を行い、東西方向にアルファベット（西から東にかけてＡ、Ｂ、Ｃ、～）、南北方向に数字（北から南にかけて１、２、３、～）を設定した。各グリッドの名称は、北西隅の杭のナンバーをそのグリッド名とした。

また、途中から北側に拡張した部分については、南北方向の数字を利用して、（南から北へ１、101 、102 、～）設定した。

遺構番号は、遺物が出土した遺構に限り１番から付けている。柱穴の遺物は、各グリッド毎に１番から付けている（例：Ａ２区Ｐｉｔ１、Ｂ６区Ｐｉｔ８など）。

遺構平面図については、４ｍメッシュの地区設定を流用して３ｍメッシュ（１／20）で作成し、基準点は後から付した。方形周溝墓周溝断面図・調査区東西壁面図・掘立柱建物柱穴断面図は、１／20で、遺物出土状況・竪穴住居等の個別図は１／10で作成した。また、遺構・遺物出土の状況に応じてその都度実測図を作成した。

3　調査経過

現地における発掘調査は、平成11年９月28日から重機による表土掘削を行い、10月４日から作業員を投入し、平成12年３月21日に終了した。

また、現地説明会は、平成12年１月29日に行い、約220名の参加を得ることができた。現地作業にあたっては、以下の方々の協力によって無事に調査を終えることができ、心から感謝の念を表したい。

飯田　保、池田敏男、伊藤正一、伊藤なみ江、稲垣みち子、井上裕文、臼田　旭、内田大介、片桐かおり、片桐忠司、鎌田真貴子、葛山　清、坂とし子、鈴木三之助、竹内増夫、土井司良、仲　輝久、中山洋之助、奈須美香子、西山拓馬、野呂作利、萩野正吾、波田晶子、服部昭一郎、林　清治、林　直人、樋口　隆、平野太郎、吹原弘規、福島　功、細川　昇、堀木　勉、堀内義隆、三木茂一、美登正春、宮本光子、三輪直美、水谷久子、山本正二、山下三郎、渡辺光夫　（五十音順、敬称略）

4　調査日誌

９／10（金）現地にて大成エンジニアリング株式会社調査担当者と事前協議（大成：早川・板野、埋文センター：森川・萩原）。

９／28（火）調査範囲設定を行い、調査前のレベルを確認する。その後に重機による調査区表土掘削開始。約400㎡を掘削した所でに終了。

９／29（水）引き続き重機による表土掘削。約 600

㎡掘削した後に終了。

9／30（木）引き続き重機による表土掘削。約 500㎡掘削した後に終了。トータル約1500㎡。

10／1（金）表土掘削は、午前中にて終了。調査区の地区設定を行う。ベルトコンベアを東側に設置する。

10／4（月）調査区東側に排水溝を掘削する。調査区全面に乾燥防止の為、ブルーシートをかける。遺構検出を行い、後に遺構カードの実測。

10／5（火）作業員の事故防止のために安全大会を実施、終了後作業再開、遺構検出に取り掛かる。ＳＤ４が大型の方形周溝墓と判明する。（当初は、古墳と考えていた。上層遺物に須恵器等出土した為。）

10／6（水）遺構検出後、ＳＤ４周辺の柱穴、現代耕作溝等の掘削。また、ＳＤ４の西側周溝の掘削。

10／7（木）雨天の為、作業中止。プレハブ内にて遺物整理、写真整理を行う。

10／8（金）ＳＤ４西側周溝掘削、遺構検出後溝・柱穴遺構掘削。作業終了後ブルーシートをかけ、発掘用具の手入れを行う。

10／12（火）ＳＤ４西側周溝掘削、ＳＤ９北側周溝掘削、方形周溝墓の周溝から弥生土器細頸壺出土。調査区全体を安全確保のためのトラロープの縄張りを行う。仮設農道を造設する。（地元の畑の耕作者から苦情を受ける。）

10／13（水）ＳＤ９南・西側周溝掘削、Ｆ及びG13・14・15・16区の遺構検出を行う。ＳＤ９南から西側周溝にかけてのコーナー部分に弥生土器細頸壺出土。

10／14（木）ＳＤ４西側周溝掘削終了、北・南側周溝掘削に取り掛かる。南側周溝において一部がＳＫ12によって削られていることが判明。ＳＤ９から南側の溝の掘削開始。

10／15（金）午前中ブルーシートを全面に掛ける。午後から雨天の為、作業中止。

10／18（月）ＳＤ４北・南側周溝掘削、北側から西側にかけてのコーナー部分で弥生土器細頸壺など出土。ＳＤ16東側周溝掘削開始。溝底付近から弥生土器壺出土。ＳＤ14北・西側周溝掘削開始。ＳＤ４の畦の断面撮影。Ｆ７・８・９・10・11区付近遺構検出を行う。

10／19（火）午前、ＳＤ16北・東側周溝掘削。ＳＤ14南側の方形周溝墓の西側周溝を掘削。午後から雨の為、作業中止。

10／20（水）ＳＤ16北・東側周溝掘削。（方形周溝墓の四辺のコーナー部分が切れているため、以下ＳＤで番号を付けるように変えた。）ＳＤ４の西側に存在する方形周溝墓の北・東側周溝の掘削開始。（ＳＤ20・23）ＳＤ16東側周溝出土の弥生土器壺の写真撮影。

10／21（木）ＳＤ20・23の北側に存在する方形周溝墓の東側周溝の掘削開始（ＳＤ25）。Ｆ・Ｇ５～８区遺構検出後掘削。３間×２間の東西棟である総柱建物の柱穴を検出後、以下それらを掘り下げる。

10／22（金）ＳＤ20・23・25掘削。ＳＤ９・14の周溝断面の写真撮影。総柱建物の柱穴掘削。

10／25（月）総柱建物の柱穴掘削。ＳＤ16東側周溝断面の写真撮影。Ｅ５～16区にかけて遺構検出後掘削開始。

10／26（火）ＳＤ20・23・25掘削及びＳＤ25の北側周溝のＳＤ31掘削開始。

10／27（水）雨天の為、作業中止。出土遺物のピックアップを行う。図面・写真整理作業。

10／28（木）ＳＤ４断面図作成（１／10）。Ｃ・Ｄ６～15区の遺構検出。ＳＤ29・30の掘削を行う。

10／29（金）午前、安全大会において現場作業において作業における注意点などを作業員に説明する。午後から昨日検出した遺構掘削にかかる（ＳＤ27・29・30・32）。また、遺構検出で不明瞭な地区についても再検出を行う。

11／１（月）雨天の為、作業中止。出土遺物のピックアップを行う。図面・写真整理作業。

11／２（火）10月中に検出した遺構の掘削後、Ａ・Ｂ７～16区の遺構検出を行う。ＳＤ16断面図作成（１／10）。重機によって調査区から排土を移動させる。

11／４（木）重機によって南半分の表土掘削開始。先日検出した遺構掘削。竪穴住居をはじめとした溝など取り掛かる。また、南半分の調査区東側に排水溝を掘削する。

11／５（金）重機による南半分の表土掘削が終了。引き続き調査区東側に排水溝を掘削する。Ａ８区にある竪穴住居掘削。ＳＤ16の東側に出土している弥生土器壺の実測（１／10）。その他の検出遺構掘削。

11／８（月）Ｂ15・16に検出した竪穴住居掘削。北半分の掘り残した遺構の掘削、南半分の地区設定及び表土掘削土量計算後、遺構検出に取りかかる。ＳＤ９・16の断面図作成（１／10）。

11／９（火）Ｂ15・16に検出したＳＨ50の竪穴住居掘削。ＳＤ23の遺物写真撮影。終了後実測にかかる。北半分の掘残した遺構の掘削・南半分の遺構検出に取りかかる。

11／10（水）ＳＨ50の掘削。Ａ～Ｊ16～19区の遺構検出を行うかなり不明瞭なため、何度も行う。竪穴住居と方形周溝墓の重複と考えられる。非常にわかりにくい。

11／11（木）Ａ11・12区の竪穴住居掘削。各方形周溝墓の遺物・断面撮影。Ａ～Ｊ16～19区の遺構検出。

11／12（金）雨天の為、作業中止。出土遺物のピックアップを行う。図面・写真整理作業。

11／15（月）ベルトコンベアーの手入れ。Ａ～Ｊ16～19区の遺構検出。午後から雨天の為、作業中止。

11／16（火）各方形周溝墓の遺物・断面撮影。Ａ～Ｊ16～21区の遺構検出。検出遺構の掘削。方形周溝墓の配列が異なっていることが判明。小規模なものが周溝を利用して繋ぎ合わせになったとも考えられる。時期的な要因であろうか。

11／17（水）実測が終了した方形周溝墓の遺物の取り上げる。変わらず不明瞭なＡ～Ｊ16～21区の遺構検出を再度行う。ＳＤ34の出土遺物の写真撮影。

11／18（木）不明瞭なＡ～Ｊ16～21区の遺構検出を再度行う。明確になった遺構を中心に掘削を行う。ＳＤ29・30の断面撮影。Ａ～Ｅ16～20区にかけての柱穴掘削を行う。ＳＤ66の掘削作業を行う。ＳＤ66は、西方向に90°屈曲する。また、ＳＤ16も途切れずに西方向に折れ曲がることが判明する。コーナー近くで弥生土器壺が出土する。さらに、ＳＤ29・ＳＤ66の間に空間が存在している。何らかの出入口とも考えられる。

11／19（金）ＳＨ50の下層に方形周溝墓の東側周溝が存在することが判明、かなり大きな方形周溝墓の周溝とみられ、ＳＤ４と同規模と見られる。Ａ～Ｅ16～20区にかけての柱穴掘削を行う。ＳＤ66の東側に伸びて取りつくＳＤ65掘削。Ａ～Ｊ16～21区の遺構検出を行いかなりの遺構が判明する。大規模な方形周溝墓が乱立したもの変化していると考えられる。Ａ～Ｃ23～26区にかけての遺構検出。遺構は、かなり希薄になってきている。しかし、方形周溝墓らしい溝が存在する。

11／22（月）遺構掘削作業を一時中止して、ＳＤの写真撮影及び断面の実測（１／10）、竪穴住居の平面・断面図（１／10）、遺物出土状況図・立面図（１／10）の作成を行う。

11／24（水）調査区の南側（Ａ～Ｅ15～20）に向かって遺構検出を行う。遺構検出後、遺構掘削を行う。

11／25（木）前日に行った作業を引き続き行う。22

日に実測終了した遺物の取り上げ作業を行う。

11／26・29（金・月）引き続き遺構検出・掘削を行う。

11／30（火）作業員向けの安全大会を実施する。大会終了後、遺構・遺物の実測作業と遺構検出・掘削を行う。

12／１（水）調査区の北側に残していた立木の伐採を行う。その間に遺構・遺物の実測作業を行う。

12／２（木）調査区の南側（Ａ～Ｅ15～20）に向かって遺構検出を再度行う。検出しきれなかった遺構について改めて遺構検出後、掘削を行う。

12／３（金）調査区の南側（Ａ～Ｅ15～20）の遺構掘削（竪穴住居跡、土坑、柱穴）。竪穴住居平面・断面図作成。方形周溝墓の断面図作成。調査区北側の部分拡張を行う。

12／６（月）調査区北側の部分拡張を行う。掘立柱建物跡の清掃後写真撮影。調査区の南側（Ａ～Ｅ15～20）の遺構掘削（竪穴住居跡、土坑、柱穴）。竪穴住居平面・断面図作成。

12／７（火）調査区北側の部分拡張を行う。Ｆ19・20区の竪穴住居（ＳＨ100 ）、Ｂ21・22区竪穴住居（ＳＨ80）掘削。方形周溝墓の個別写真撮影。竪穴住居平面・断面図作成。

12／８（水）方形周溝墓の個別写真撮影。Ｅ・Ｆ・Ｇ19～22区の溝・柱穴掘削。北側部分拡張区の遺構検出。方形周溝墓が続くことが判明。

12／９（木）Ｅ・Ｆ・Ｇ21～24区にかけて遺構検出後、掘削。

12／10（金）ＳＨ80の隣の竪穴住居掘削。Ｄ・Ｅ・Ｆ22～24区にかけて遺構検出後、竪穴住居が３棟重なり合うことが判明する。随時掘削開始。

12／13（月）引き続き先週の検出遺構の掘削。北側から順番に遺構清掃後、個別写真撮影を行う。また、遺物出土状況の実測等を行う。

12／14（火）引き続き前日からの作業を行う。ＳＨ50の完掘状況、方形周溝墓周溝内からの遺物出土状況の写真撮影。ＳＨ118の掘削、ＳＤ31の遺物取り上げなどを行う。

12／15（水）ＳＨ42完掘状況の写真撮影。ＳＨ94・118、ＳＤ47・76・123などの断面実測。Ａ～Ｊ24～26にかけて遺構検出及び遺構掘削。

12／16（木）ＳＨ100などの断面実測を行う。ＳＨ112掘削作業。ＳＨ112からの遺物多く、竪穴住居出土遺物の資料としては良好。

12／17（金）ＳＨ80・94・100の平面図作成、ＳＤ29・76断面実測。調査区北側の遺構検出及び遺構掘削。北側においても方形周溝墓が存在し調査区内全域において方形周溝墓が存在することが判明、弥生時代における墓域とみられる。

12／20（月）一部から全景写真撮影のための清掃を開始する。また、実測できていない個所の実測及び個別写真撮影。調査区北側の遺構検出・掘削を行う。

12／21（火）遺構清掃。

12／22（水）全景写真撮影（北から中心に行う。及び方形周溝墓の列ごとの単位で写真撮影を行う。

12／24・27・28（金・月・火）写真撮影を引き続き行う。終了後、調査区保護のためブルーシートを全面に掛ける。

１／５～７（水～金）遺物出土状況撮影・出土遺物実測・調査区西・東壁精査。

１／11（火）出土遺物実測後、遺物の取り上げを行う。平面実測のために３ｍメッシュの準備を行う。

１／12（水）実測のために３ｍメッシュの地区割を行う。また、その作業と併行して土量の計算を行う。午後から雨のため作業中止。

１／13（木）雨の為、作業中止

1／14（金）３ｍメッシュの地区設定。できるところから順次実測開始。できた平面図にレベルを入れる作業を行う。

1／17～21（月～金）平面図作成（1／20）。

1／24～28（月～金）平面図作成及びレベル入れる作業を行う。また、現地説明会の為に準備作業を行う。歩道整備及び遺構整備、さらに調査区外の順路、展示用遺物の整理作業を行う。

1／29（土）現地説明会。約220名もの参加者あり、近隣での他の遺跡の現地説明会にも多くの参加者を得る。

1／31（月）平面図作成及びレベルを入れる作業。掘立柱建物の柱穴の半裁断面作成。

2／1（火）平面図にレベルを入れる作業を行う。掘立柱建物の柱穴の半裁作業。

2／2～4（水～金）調査区全体・方形周溝墓のコンタ図作成。

2／7・8（月・火）方形周溝墓のコンタ図作成。

2／9・10（水・木）柱穴半裁後断面図作成。

2／14～17（月～木）柱穴半裁後断面図作成。

2／18（金）ＳＨ80の完掘状況の写真撮影。

2／21（月）写真撮影（撮り忘れた個所）、柱穴半裁後断面図作成。

2／22（火）柱穴半裁後断面図作成。

2／23（水）西壁断面図作成。柱穴半裁後断面図作成。

2／24（木）竪穴住居の重複部分の掘り下げ及び写真撮影・実測を行う。今日で現場作業打ち切り。

2／25（金）今日から遺物整理作業及び図面・写真等の整理作業を実施する。抜け落ちた部分の追加。

2／28～3／3（月～金）図面・写真等の整理作業。

3／6～10（月～金）図面・写真等の整理作業。

3／13～17（月～金）図面・写真等の整理作業。

3／21（火）大成エンジニアリングから図面・写真等の成果品納品等を行う。

5　文化財保護法等による諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、以下によって行っている。

・法第57条の３第１項（文化庁長官宛）

平成11年７月16日付道整第198号（県知事通知）

・法第98条の２第１項（文化庁長官宛）

平成11年10月６日付教埋第274号（県教育長宛）

・遺失物法第１条第１項の規定にかかる文化財発見・認定通知

平成12年５月26日付教生第229‐5号（四日市北警察署宛）

平成12年５月26日付教埋第229‐5号（県教育長通知）

Ⅱ　地理的環境と歴史的環境

1　地理的環境

山村遺跡（1）の所在する四日市市山村町は、紀伊半島の東端にある伊勢平野の北部に位置し、東は伊勢湾である。行政区分上での四日市市は、西側で三重郡菰野町及び滋賀県、北側は東から三重郡川越町・朝日町・桑名市・員弁郡東員町・大安町、南側は三重郡楠町・鈴鹿市と接している。

四日市市周辺の地形は、鈴鹿山脈を源とする朝明・海蔵・三滝・内部・鈴鹿川によって形成された沖積平野と丘陵地帯である。

今回発掘調査を行った山村遺跡は、四日市市の北東部山村町字西谷・西平子に所在する。遺跡の立地状況は、朝明川下流の左岸、朝明丘陵の南縁部分の丘陵尾根上である。調査地の標高は、約31～37mである。

2　歴史的環境

四日市市を含め周辺の歴史的な環境を時代順におってみていきたい。旧石器時代の遺跡数は、僅かであるが確認されている。鈴鹿市とほぼ隣接し、北側に内部川の大きく広がる沖積地を望む台地上で宮ノ上Ａ遺跡[1]（2）があり、ナイフ形石器が採集されている。近域の鈴鹿市域側にほぼ南へ1㎞ほど離れた台地上には富士山遺跡（3）・境谷遺跡（4）・寺山遺跡（5）・国分西ノ岡遺跡（6）・茶山遺跡[2]（7）といった遺跡が多く所在しており、この地域に濃密に分布していることが窺える。四日市市南西部の内部川と鎌谷川に挟まれた扇状地性の台地に内戸谷Ｂ遺跡[3]（8）があり、ナイフ形石器が採集されている。西山小割遺跡[4]（9）は同じ台地上に立地し、石核やチャート剥片が採集されている。これら知られている遺跡のほとんどが発掘調査されていないため不明瞭な部分が残るものの、この時期に該当する遺跡がやや偏って集中的に存在している。現段階では台地上の遺跡が主であり、今後の発掘調査に期待したい。

縄文時代に入ると発掘調査によって確認されている遺跡があり、旧石器時代と比較してやや良好である。まず、草創期では有茎尖頭器が採集されている東北山Ａ遺跡[5]（10）や中尾山遺跡[6]（11）がある。発掘調査例では内部川中流域左岸の台地上の一色山遺跡[7]（12）から出土している。遺物では押型文土器や石製品、遺構では竪穴住居かもしれないが炉址を検出している。有茎尖頭器は単独で出土する例も他にあり、この時期の生活状況を窺える。

早期から前期にかけて四日市市域では不明であるが四日市の南西方向の亀山市における大鼻遺跡[8]で早

1	山村遺跡	13	西ヶ広遺跡	25	上畑遺跡	37	貝野遺跡
2	宮ノ上Ａ遺跡	14	土丹遺跡	26	五百山遺跡	38	中村遺跡
3	富士山遺跡	15	大谷遺跡	27	辻子遺跡	39	智積廃寺
4	境谷遺跡	16	永井遺跡	28	金塚遺跡	40	大膳寺跡
5	寺山遺跡	17	重地山銅鐸出土地	29	城ノ谷遺跡	41	縄生廃寺
6	国分西ノ岡遺跡	18	丸岡遺跡	30	志氐神社古墳	42	額田廃寺
7	茶山遺跡	19	平戸山遺跡	31	高塚古墳	43	小杉大谷窯跡
8	内戸谷Ｂ遺跡	20	八幡山遺跡	32	持光寺山古墳群	44	岡山古窯跡群
9	西山小割遺跡	21	菟上遺跡	33	広古墳群Ａ・Ｂ支群	45	伊坂城跡
10	東北山Ａ遺跡	22	山奥遺跡	34	広永横穴墓	46	赤堀城跡
11	中尾山遺跡	23	東日野遺跡	35	岡山古墳	47	茂福城跡
12	一色山遺跡	24	狐穴遺跡	36	上野遺跡		

第１表　周辺遺跡一覧表

第１図　遺跡位置図（１／50,000）『この地図は、国土地理院発行「四日市」「桑名」（１／25,000）を掲載したものである』（承認番号　平15部復、第254号）

第 2 図　遺跡地形図（1／5,000）

期の竪穴住居と炉址が確認されており北勢地域で最古であろうと考えられる。

中期に至ると発掘調査例も増えてくる。昭和44年からの東名阪自動車道の建設工事に伴って発掘調査が行われた西ヶ広遺跡[9]（13）がある。西ヶ広遺跡は、市内北部を東流する朝明川中流域の左岸の舌状に張り出した台地上に立地している。この時期以外の遺構も数多くあるが中期後葉の縄文土器が土坑から出土している。

市域外でみてみると北勢町川向遺跡[10]、鈴鹿市東庄内Ｂ遺跡[11]、北一色遺跡[12]、西川遺跡[13]、西条遺跡[14]、亀山市大垣内遺跡[15]において竪穴住居が検出されており、集落が各地域に形成されていく状況が窺える。

晩期での調査例では、三滝川中流域右岸で沖積地に立地する土丹遺跡[16]（14）がある。遺構は土坑があり、遺物は甕形土器で馬見塚式に相当する。土丹遺跡を除いて台地上での遺跡がほとんどであり、晩期に至って沖積地に遺跡が存在し始める。

弥生時代に入って前期の遺跡は非常に少ない。しかしながら発掘調査によって判明している中で特に有名である大谷遺跡[17]（15）・永井遺跡[18]（16）がある。この両遺跡は、海蔵川と三滝川に挟まれた生桑丘陵の北側と南側に所在している。共に低湿地を正面に有しており食料生産に向いた環境にあったとみられる。大谷遺跡は、昭和41・42年に四日市市教育委員会によって発掘調査が行われている。遺跡の中心時期は、弥生時代前期から後期・古墳時代後期にわたる集落跡であることが判明した。この遺跡では環壕とみられる溝があり、住居址も確認されている。また、遺物も多い。もう一方の永井遺跡では、前期以降の遺構も検出されているが弧状に巡る６条の溝があり、環壕を彷彿とするがやや浅い。この２遺跡以外でも前期の遺物を採集されたと伝えられ今後、調査例が増えてもおかしくはないであろう[19]。

中期には、伊坂町重地山銅鐸出土地[20]（17）、丸岡遺跡[21]（18）、永井遺跡、平戸山遺跡[22]（19）、八幡山遺跡[23]（20）などがある。丸岡遺跡は、朝明川左岸の台地上に立地している。昭和46年に試掘調査が行われた。中期の壺等が出土している。永井遺跡では、前期だけでなく中期も含む遺跡である中期中葉の溝、中期後葉の方形周溝墓を検出しており、それら遺構に伴って遺物も出土している。平戸山遺跡は、三滝川右岸の丘陵上に立地している。昭和59年に発掘調査が行われている。遺構は土坑だけであるが、遺物は中期後葉の良好な資料が出土している。

八幡山遺跡は、後述する五百山遺跡に隣接するものの谷を挟んだ地形によって断絶した遺跡である。この遺跡の範囲内に八幡塚古墳が存在したが昭和49年の発掘調査後に消滅した。昭和58年に遺跡範囲確認調査が行われ、竪穴住居が確認されている。遺物には、中期後葉とみられるものがあり、この頃から営まれた集落であろう。

なお、第２名神自動車道に関連する発掘調査によって菟上遺跡[24]（21）では中期中葉から後葉にかけての集落跡が確認されている。竪穴住居及び掘立柱建物が多く検出されており当遺跡と関わりの深い遺跡とみて間違いなかろう。

中期として一括りで述べたが発掘調査では、中期中葉から後葉にかけての遺跡が主を占める。その一方で中期前葉の遺跡を確認することができず、中期全体を通じての状況を窺い知れる遺跡は、少ない。

後期にはいると一気に遺跡数は増加し、調査例も多い。西ヶ広遺跡、山奥遺跡[25]（22）、大谷遺跡、永井遺跡、東日野遺跡[26]（23）、狐穴遺跡[27]（24）、上畑遺跡[28]（25）、五百山遺跡[29]（26）、菟上遺跡、辻子遺跡[30]（27）、金塚遺跡[31]（28）、城ノ谷遺跡[32]（29）などが存在する。

西ヶ広遺跡は、調査によって後期の竪穴住居が検出され、遺物も多く出土し、かなりの大規模な集落であることが判明した。

山奥遺跡は、国道１号線と東名阪自動車道四日市東インターを結ぶ県道富田山城線と大矢知と垂坂を結ぶ市道との交差点から西側の緩やかな斜面に位置している。昭和52・53年からの発掘調査によって弥生時代後期及び古墳時代後期の集落であることが判明した。その後においても発掘調査が継続され、大規模な集落であることや時期が限定されることが判明している。

大谷遺跡では、前期と比較して遺物量は少ないが検出した竪穴住居等の遺構は、永井遺跡よりも明確に残る。しかし、大谷遺跡には、中期とみられる遺構を検出されていない。永井遺跡においても竪穴住居が確認されている。しかし、全体的に遺構は浅い。

後期前葉とみられる遺物が出土している。

東日野遺跡は、市の西方の台地上に立地している。昭和36年に発掘調査が行われている。調査によって竪穴住居等が確認されている。遺物は、後期後葉とみられるものである。

狐穴遺跡は、後述する五百山遺跡の谷一つ隔てた南側に所在する遺跡である。昭和58年に遺跡範囲確認調査が行われ、後期前葉とみられる竪穴住居を検出している。また、遺物には中期にまで遡りえるものもあり中期からの遺跡とも考えられる。

上畑遺跡は、永井遺跡のすぐそばにある遺跡で昭和42年に発掘調査が行われ後期の竪穴住居が確認されている。永井遺跡においても後期の集落址があり関連性について考慮すべきであろう。

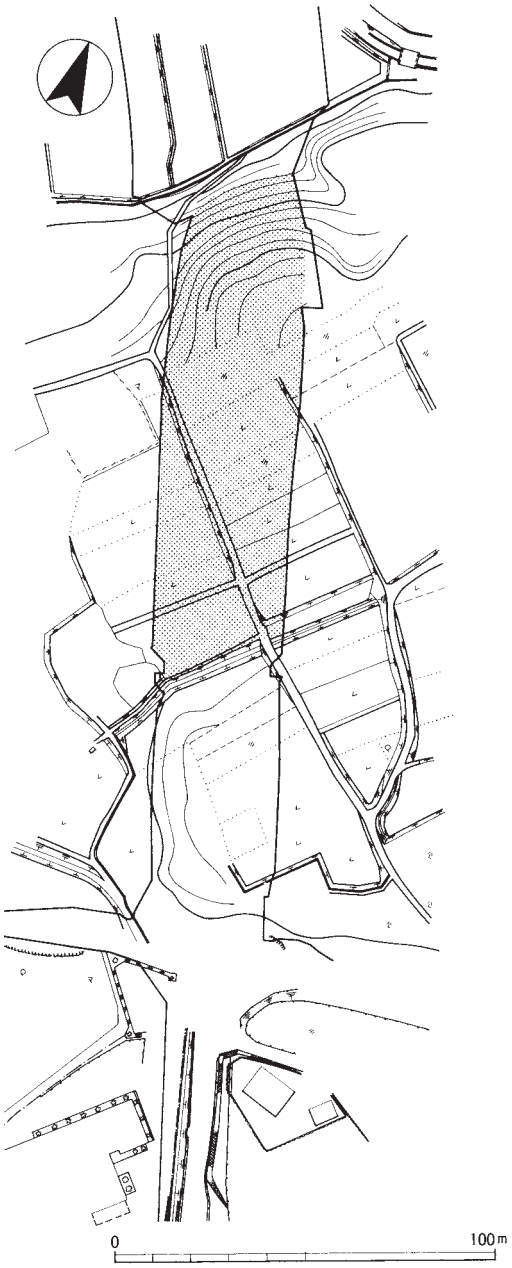
五百山遺跡は、かなりの部分が破壊されてしまっており不明な部分が多い。しかし、多くの遺物が採集されており後期前葉にかけての遺跡であることが窺える。

菟上遺跡・辻子遺跡・金塚遺跡・城ノ谷遺跡は、近畿自動車道名古屋神戸線に伴う発掘調査によるものである。とりわけ金塚遺跡では、竪穴住居から銅鐸片が出土しており、伊坂銅鐸との関連性について貴重な資料をえることができた。また、墳墓も確認されている。後期について言えることは、ほぼ市内全域にわたって展開している状況が窺える。この時期は、全体的に多くの集落が海に面する丘陵平坦部に立地しており、次代に続く要素を内包していると考えられる。

古墳時代前期では、この地域を代表する前期古墳には、市内に志氐神社古墳[33]（30）がある。志氐神社古墳は、社務所によって前方部が削平されているものの、内行花文鏡・碧玉製車輪石・硬玉製勾玉・碧玉製区管玉・ガラス製小玉を出土した前方後円墳である。かつて陪塚が所在したと伝わる。『三重県三重郡三重村考古誌考』[34]によると四日市市内西坂部町御館に前方後円墳が存在したと伝えられる。桑名市で高塚山古墳[35]（31）や三角縁神獣鏡を出土したとみられる古墳もあり、前期古墳は、実際もっと多く存在していたと考えてよかろう。

市内において確認できる古墳は、175基を数える。そのほとんどが後期古墳であって、墳形も円墳であるものがほとんどである。持光寺山古墳群（32）の6号墳、広古墳群A支群（33）の1号墳から3号墳、広古墳群B支群の1号墳が方墳であり、これら古墳の被葬者は、他の古墳の被葬者と同一視すべきでなかろう[36]。また、古墳が造営される一方で横穴墓が造営される。広永横穴墓[37]（34）・金塚横穴墓[38]などが調査によって判明している。さらに、山村遺跡の直ぐ南側には岡山古墳[39]（35）が存在している。2基存在したと言われるが現状では1基だけである。

一方、前期の集落跡としては、不明な部分が多い。上野遺跡[40]（36）、辻子遺跡で竪穴住居が確認されてい



第3図　調査区位置図（1／2,000）

るのみで弥生時代後期から引く続くべき集落の様相は、今後の課題である。古墳時代中期以降の様相についても判明していることは、微々たるものである。集落を形成する場所を台地や丘陵から低地に移行したためであろうか。

奈良・平安時代では、かなり大規模な遺跡が目を引き、古墳時代後期とは変わって異なる様相である。大規模な遺跡として西ヶ広遺跡がある。この遺跡では奈良時代の掘立柱建物、竪穴住居など数多くの遺構が検出されている。三面庇付きの掘立柱建物あ棟方向を揃えて建てられており何らかの規格性を持っていたことが窺える。この遺跡は、朝明郡衙跡とも想定されるほどの大規模さである。遺物においても円面硯や墨書土器などが出土している。

昭和43年に発掘調査された貝野遺跡[41]（37）では、7世紀後半から8世紀にかけての竪穴住居と掘立柱建物を数多く検出している。掘立柱建物の棟方向は、揃えられていない。西ヶ広遺跡と異なるものを有しており、西ヶ広遺跡が公的とするとこの貝野遺跡は、一般的な集落ではなかろうか。遺物は、須恵器から灰釉陶器まで出土している。

永井遺跡でも奈良時代の竪穴住居、奈良～平安時代の掘立柱建物を検出しており、同様にこの時期の集落と考えてよかろう。

昭和53年に発掘調査された中村遺跡[42]（38）では奈良時代の掘立柱建物が検出されている。遺構については、貝野遺跡と同様の状況である。遺物も須恵器から灰釉陶器、製塩土器まで出土している。

今回調査した山村遺跡は、貝野遺跡や中村遺跡と同様の様相を示す。とくに中村遺跡は、製塩土器等が出土している。

四日市市内での寺院跡では、智積廃寺[43]（39）及び大膳寺跡[44]（40）があり発掘調査が行われている。智積廃寺は、金堂・講堂・僧房跡などの建物や瓦類や?仏などが出土しており7世紀後半に建立されたとみられる。大膳寺跡は、瓦当文様から平安時代の建立であろうとみられる。また、隣接する朝日町の縄生廃寺[45]（41）や桑名市の額田廃寺[46]（42）がとりわけ著名である。両寺院とも同時期頃の建立とみられており、額田廃寺は、伽藍配置が法隆寺と同様であることが発掘調査で判明している。

次に生産に係わる遺跡についてもみていきたい。とりわけ伊勢湾に向かって東流する河川によって開かれた丘陵斜面に十七基に及ぶ古窯跡がある。中でも岡山丘陵と垂坂山丘陵に所在するものが多い。垂坂山丘陵には、小杉大谷窯跡[47]（43）がある。この窯跡は、久居市久居古窯跡[48]（五世紀後半）に次いで古く考えられ、五世紀末から六世紀初頭にかけて操業される。ここでは須恵器・円筒埴輪が生産されている。八世紀以降は、岡山丘陵にある窯跡が主になる。岡山古窯跡群（1～7号窯[49]）（44）は、昭和35年から相次いで発掘調査が行われており、山村遺跡出土の須恵器と非常に似通ったものもありこの窯跡から供給されていた可能性が高い。また、

また、この地域は古代官道の東海道が存在した。西ヶ広遺跡と菟上遺跡間の南北方向の谷は、河曲駅家から朝明郡家を経て榎撫駅家に向かう東海道の可能性を持っている。

鎌倉～室町時代にかけては、この時期を代表する遺物である陶器椀（山茶椀）が確認されている遺跡が多い反面、集落について判明していることが少ない。溝・土坑・柱穴等の遺構を検出している遺跡は、多いが明確に掘立柱建物を確認しているのは、辻子遺跡、上野遺跡を含めても少ない。しかし、集落に対して城館跡は、数多い。そのほとんどは、比高差の小さい丘陵や段丘あるいは台地の縁辺部に立地し、自然の地形を利用して築かれている。調査されているものには、伊坂城跡[50]（45）、広永城跡[51]、赤堀城跡[52]（46）、茂福城跡[53]（47）、東員町山田城跡[54]などがある。近世に至って、この地域は天領・大名領・旗本領が複雑に入り組んで変遷し幕末を迎える。

［註］

①『四日市市史』第二巻　史料編考古Ⅰ（四日市市　1988年）　P 9

②『鈴鹿市遺跡地図』（鈴鹿市教育委員会　1987年）

③註①と同じ　P 3

④註①と同じ　P 4

⑤註①と同じ　P22

⑥註①と同じ　P47

⑦小玉道明・下村登良男・山澤義貴・谷本鋭次・井上光夫「一色山遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』（三重

県教育委員会　1970年）　P19

註①と同じ　P51

⑧山田猛ほか『大鼻遺跡』（三重県埋蔵文化財センター　1994年）

⑨小玉道明・下村登良男・山澤義貴・谷本鋭次・井上光夫「西ヶ広遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』（三重県教育委員会　1970年）　P92

註①と同じ　P19

⑩春日井恒・山崎恒哉・松本覚『川向遺跡発掘調査報告』（北勢町教育委員会　1993年）

⑪小玉道明・下村登良男・山澤義貴・谷本鋭次・井上光夫「東庄内Ｂ遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』（三重県教育委員会　1970年）　P45

⑫「第一章　郷土のあけぼの―狩猟から農耕へ―」（『鈴鹿市史』第一巻　鈴鹿市教育委員会　1980年）　P59

⑬中森成行「西川遺跡」『郡山遺跡群発掘調査報告Ⅰ』（鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会　1983年）P33

⑭倉田直純・服部芳人・穂積裕昌「西条遺跡」『平成元年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告―第１分冊―』（三重県埋蔵文化財センター　1990年）

P111

⑮亀山隆『大垣内古墳発掘調査報告書Ⅰ』（亀山市教育委員会　1997年）　P33　縄文土器実測図

⑯小玉道明・下村登良男・山澤義貴・谷本鋭次・井上光夫「智積廃寺・土丹遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』（三重県教育委員会　1970年）　P148

註①と同じ　P25

⑰小玉道明『大谷遺跡発掘調査報告―Ａ地区・Ｂ地区―』（四日市市教育委員会　1967年）

小玉道明『大谷遺跡発掘調査報告Ⅱ―Ｃ地区の遺構―』（四日市市教育委員会　1976年）

註①と同じ　P106

⑱小玉道明・伊藤洋ほか『永井遺跡発掘調査報告』（四日市市教育委員会　1973年）

註①と同じ　P121

⑲東堀遺跡・森ヶ山Ａ・Ｂ遺跡において前期土器が採集されている。前期新段階のものであろう。

註①と同じ　東堀遺跡　P160。

森ヶ山Ａ・Ｂ遺跡　P164。

⑳註①と同じ　P83

㉑註①と同じ　P67

㉒註①と同じ　P132

㉓小玉道明ほか『八幡塚古墳発掘調査報告』（四日市市教育委員会　1975年）

『八幡山遺跡他範囲確認発掘調査』（四日市市教育委員会　1984年）

註①と同じ　P177

㉔城吉基・穂積裕昌・尾野公恵・田中美穂「菟上遺跡」『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』（三重県埋蔵文化財センター　2000年）

船越重伸・穂積裕昌・水橋公恵・水谷裕康・赤松一秀・田中美穂「菟上遺跡」『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』（三重県埋蔵文化財センター　2001年）

㉕註①と同じ　P96

㉖小玉道明『東日野弥生住居址群・岡山古窯址群第１号窯』（四日市市教育委員会・四日市遺跡を守る会　1966年）

註①と同じ　P140

㉗『八幡山遺跡他範囲確認発掘調査』（四日市市教育委員会　1984年）

註①と同じ　P185

㉘小玉道明『上畑住居址群発掘調査概要』（四日市市教育委員会　1967年）

小玉道明「三重県四日市市上畑遺跡」『日本考古学年報二〇』（1972年）

註①と同じ　P120

㉙註①と同じ　P180

㉚山本義浩・倉田文美「辻子遺跡」『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』（三重県埋蔵文化財センター　1999年）

倉田文美・田中久生「辻子遺跡」『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』（三重県埋蔵文化財センター　2000年）

㉛森川幸雄・服部芳人・水橋公恵・倉田文美・角正芳浩・松下孝幸『金塚遺跡・金塚横穴墓・山村遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　2002年）

㉜田中久生「城ノ谷遺跡」『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』（三重県埋蔵文化財センター　2000年）

㉝註①と同じ　P224

古墳そのものは、市指定史跡である。

遺物は、市指定有形文化財である。

㉞鈴木敏雄『三重縣三重郡三重村考古誌考』「字御館野における古墳「大塚」並に古墳群」の項において前方後円墳１基と円墳10数基が図に示されており、前方後円墳が存在していた。

㉟『桑名市史』本編（桑名市教育委員会　1987年）Ｐ26

㊱小玉道明・早川裕己『四日市の後期古墳』（四日市市教育委員会　1974年）

註①と同じ　Ｐ195以降

持光寺山古墳群６号墳　Ｐ202

広古墳群Ａ・Ｂ支群　Ｐ205

㊲田中久生「広永城跡・古墳群・横穴墓群」『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』（三重県埋蔵文化財センター　1999年）

㊳森川幸雄・服部芳人・水橋公恵・倉田文美・角正芳浩・松下孝幸『金塚遺跡・金塚横穴墓・山村遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　2002年）

㊴註①と同じ　Ｐ213

㊵春日井恒・花井千幸『上野遺跡』（四日市市遺跡調査会　1991年）

春日井恒『上野遺跡２』（四日市市遺跡調査会　1992年）

『四日市市史』第三巻　史料編考古Ⅱ（四日市市　1993年）　Ｐ382

㊶林博通『貝野遺跡―古代集落址の調査報告』（四日市市教育委員会　1969年）

『四日市市史』第三巻　史料編考古Ⅱ（四日市市　1993年）　Ｐ96

㊷『中村遺跡』（四日市市教育委員会　1979年）

『四日市市史』第三巻　史料編考古Ⅱ（四日市市　1993年）　Ｐ59

㊸『智積廃寺発掘調査報告書』（四日市市教育委員会　1968年）

『四日市市史』第三巻　史料編考古Ⅱ（四日市市　1993年）　Ｐ296

㊹『大膳寺跡』（四日市市教育委員会　1978～82年）

『四日市市史』第三巻　史料編考古Ⅱ（四日市市　1993年）　Ｐ302

㊺早川裕己『縄生廃寺発掘調査報告』（朝日町教育委員会　1988年）

早川裕己『縄生廃寺範囲確認調査報告Ⅰ』（朝日町教育委員会　1988年）

早川裕己『縄生廃寺範囲確認調査報告Ⅱ』（朝日町教育委員会　1988年）

㊻小玉道明「額田廃寺発掘調査概要」『桑名市博物館紀要第１号』（桑名市博物館　1987年）

㊼小玉道明『小杉大谷古窯址』（四日市市教育委員会　1974年）

『四日市市史』第三巻　史料編考古Ⅱ（四日市市　1993年）　Ｐ275

㊽小玉道明・山澤義貴『久居古窯址群発掘調査報告』（久居古窯址群発掘調査団　1968年）

『久居市史』上巻（久居市史編纂委員会　1972年）Ｐ42

㊾山澤義貴『岡山古窯址群第一号窯』（四日市市教育委員会　1966年）

小玉道明・山澤義貴『岡山古窯址群発掘調査報告』（四日市市教育委員会　1971年）

『四日市市史』第三巻　史料編考古Ⅱ（四日市市　1993年）　Ｐ250

㊿木野本和之・服部芳人「伊坂城跡」『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』（三重県埋蔵文化財センター　2000年）

竹田憲治『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』（三重県埋蔵文化財センター　2000年）

『四日市市史』第三巻　史料編考古Ⅱ（四日市市　1993年）　Ｐ328

51田中久生「広永城跡・古墳群・横穴墓群」『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』（三重県埋蔵文化財センター　1999年）

『四日市市史』第三巻　史料編考古Ⅱ（四日市市　1993年）　Ｐ331

52北野保・名坂秀『赤堀城跡』（四日市市教育委員会　1986年）

『赤堀城跡２』（四日市市遺跡調査会　1989年）

『赤堀城跡３』（四日市市遺跡調査会　1993年）

荒木昌俊『赤堀城跡４』（四日市市遺跡調査会　2000年）

『四日市市史』第三巻　史料編考古Ⅱ（四日市市　1993年）　Ｐ352

53『茂福城跡』（四日市市茂福城跡調査会　1978年）

『四日市市史』第三巻　史料編考古Ⅱ（四日市市　1993年）　Ｐ337

54松本覚・久志本鉄也『山田城跡発掘調査報告』（東員町教育委員会　1984年）

Ⅲ　遺　構

1　基本的層位及び地形

今回の調査対象地は朝明川左岸の台地上から南西方向に張り出す緩やかな斜面で、調査地の標高は31～37mである。山村遺跡は標高30～50mに及ぶ台地全体を占め、東西約290m・南北約230mで総面積約30,000㎡である。調査地は、その一角に過ぎない。調査区内の北側で標高が最も高く37mで、南側で最も低く31mである。標高差は、６mに及んでいる。

土層の基本的な層位は、第１層が表土、第２層が地山である黄褐色粘質土（Hue10YR5/6）ないし黄褐色粘質土（Hue7.5YR5/8）が主で斜面を下るにつれて砂礫層である。遺構の検出作業は第２層上面において行い、弥生時代から鎌倉時代にいたる遺構を検出することができた。とりわけ弥生時代の方形周溝墓は、ほぼ調査区全面において確認された。また、奈良時代の竪穴住居や掘立柱建物・柱穴・溝などを含め平安時代の遺構等も同一面において遺構検出ができ、発掘調査は複雑で難解を極めることとなり、辛苦することとなった。

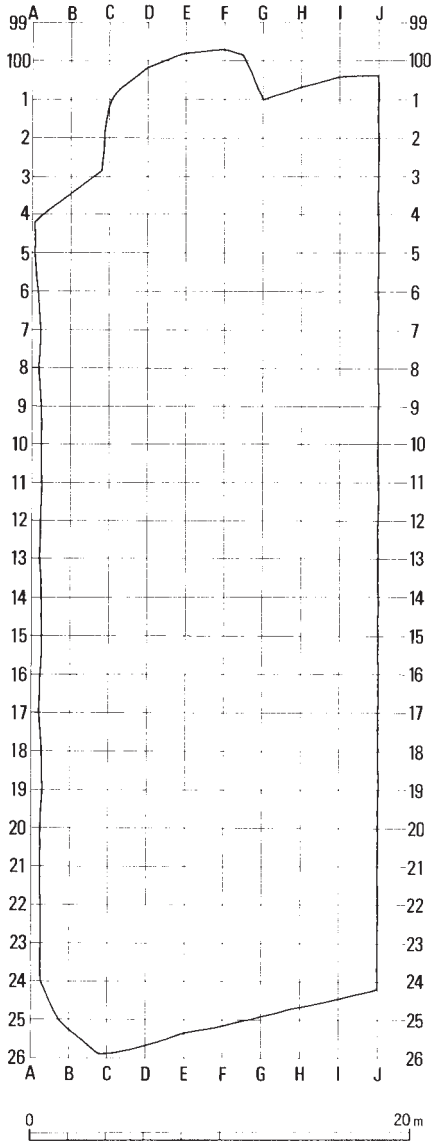
2　検出遺構

発掘調査によって判明した遺構は、弥生時代中期の方形周溝墓19基（１～19号墓）、奈良時代の掘立柱建物（12棟）・竪穴住居（20棟以上）・土坑・溝、平安時代の土坑（２基）、鎌倉時代の土坑がある。遺構は、主なものについて記述する。遺構の詳細な個々のデータについては、遺構一覧表を参照されたい。（第２～４表　遺構一覧表）なお、調査区が北に対して西側に21.5°振っている。しかしながら、文章中における東西南北の表記は、調査区の長辺に対して南北の方位を、短辺に対して東西の方位を与えている。

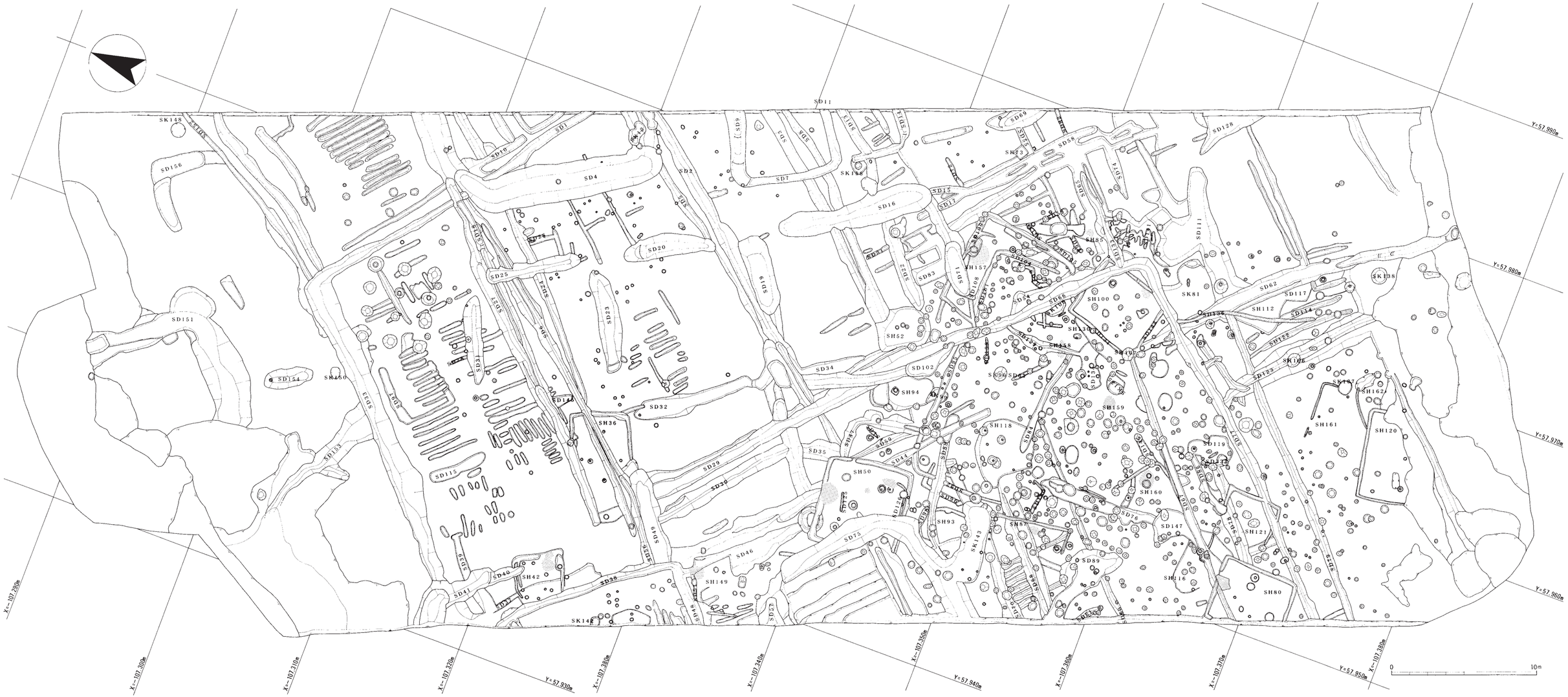
(1) 弥生時代

ほぼ調査区全体にわたって判明した方形周溝墓は、19基を数える。いずれも埋葬主体とみられる痕跡は、確認できず、後世による削平を受けたとみられる。

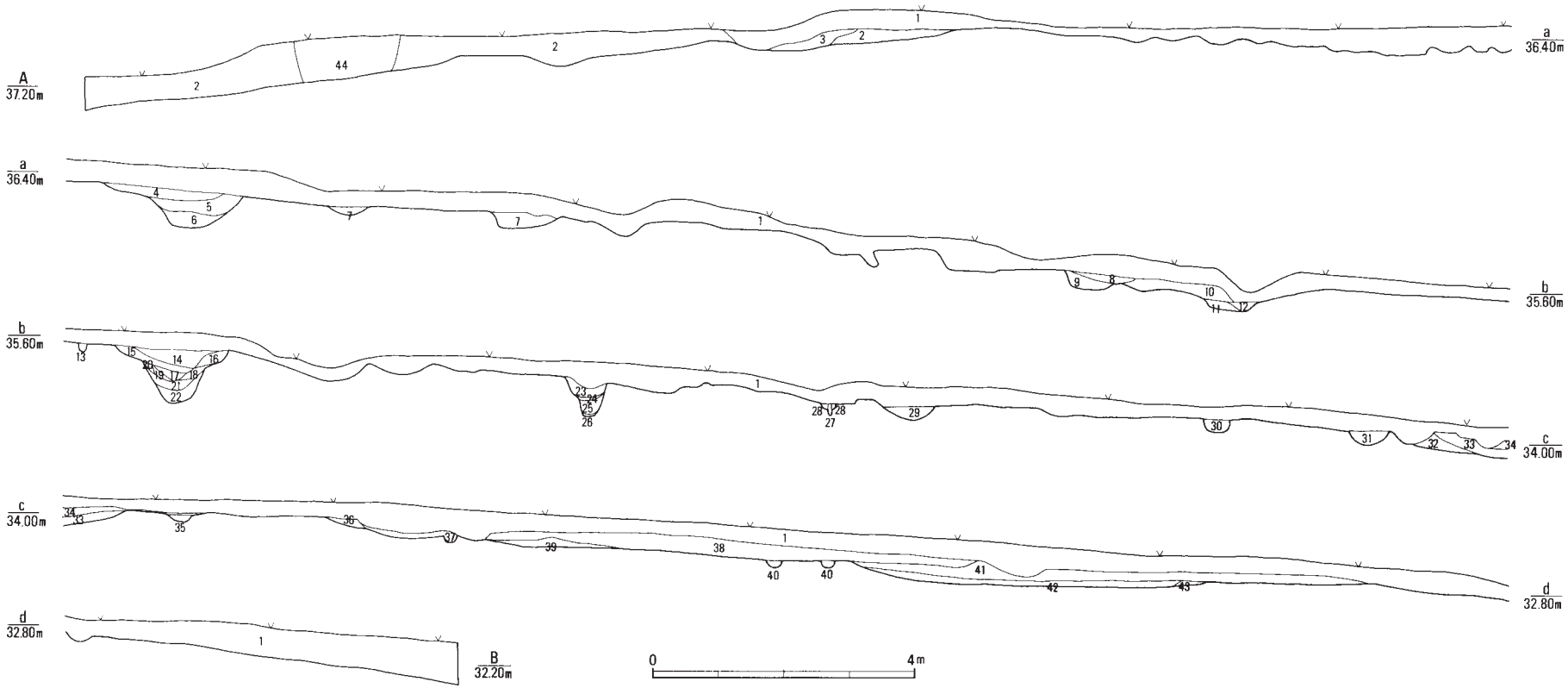
とりわけ調査区西側～中央部分にかけての方形周溝墓は、周溝を共有する形で直線的に連続し、四隅に陸橋を有したものや周溝が全周するものがある。東側において四隅ではなく、中央からやや寄った位置に陸橋部を有しているものも存在しており、方形周溝墓の造営の有り方に変化をみいだすことができそうである。また、方形周溝墓はおおよそ北から南にかけて直線的に連続しており、それぞれＡグループ・Ｂグループ・Ｃグループとし、Ａグループは、調査区東側を中心に南北方向のものを、Ｂグループは調査区中央２列で構成されてＢグループ東群、Ｂグループ西群と分ける。Ｃグループは、調査区西側



第４図　調査区地区割図（１／800）

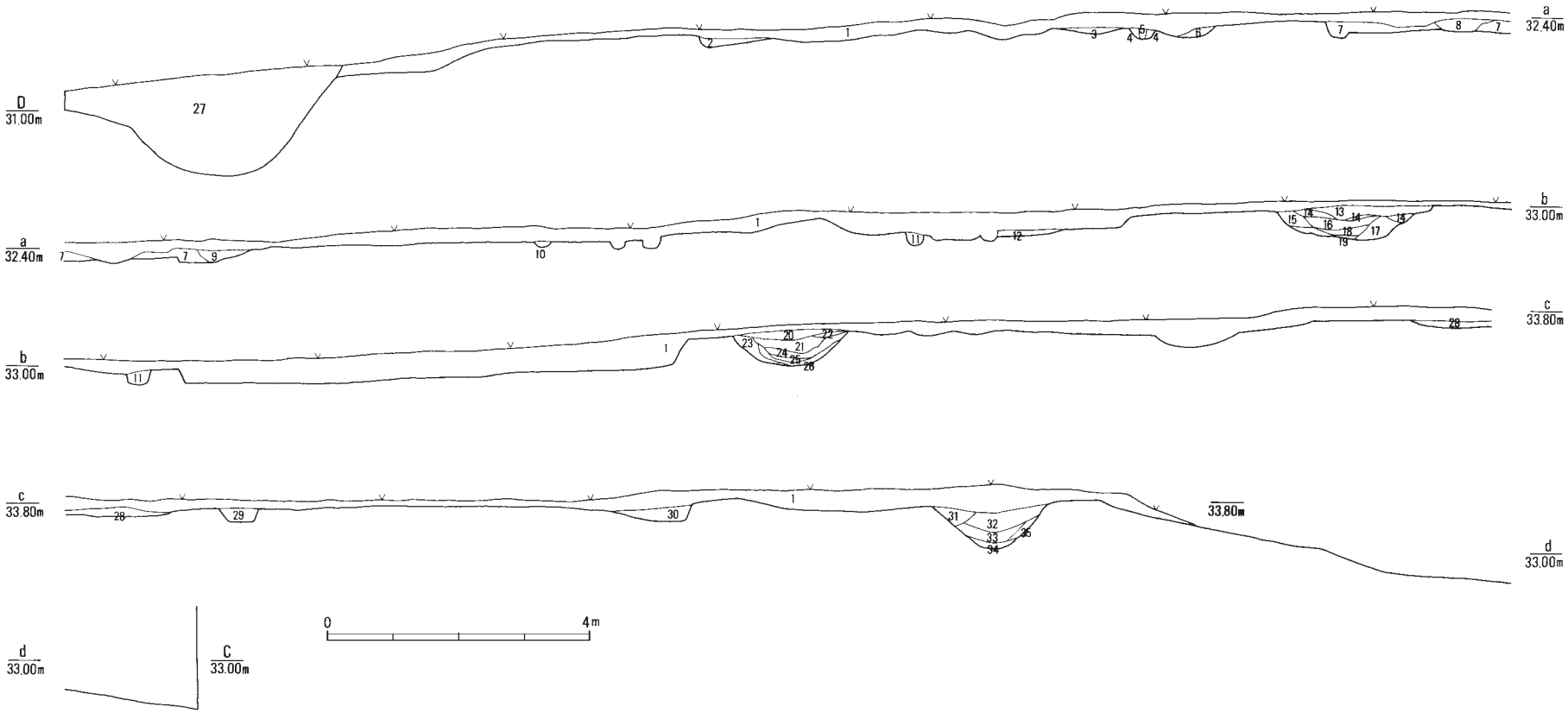


第５図　遺構平面図（１／200）



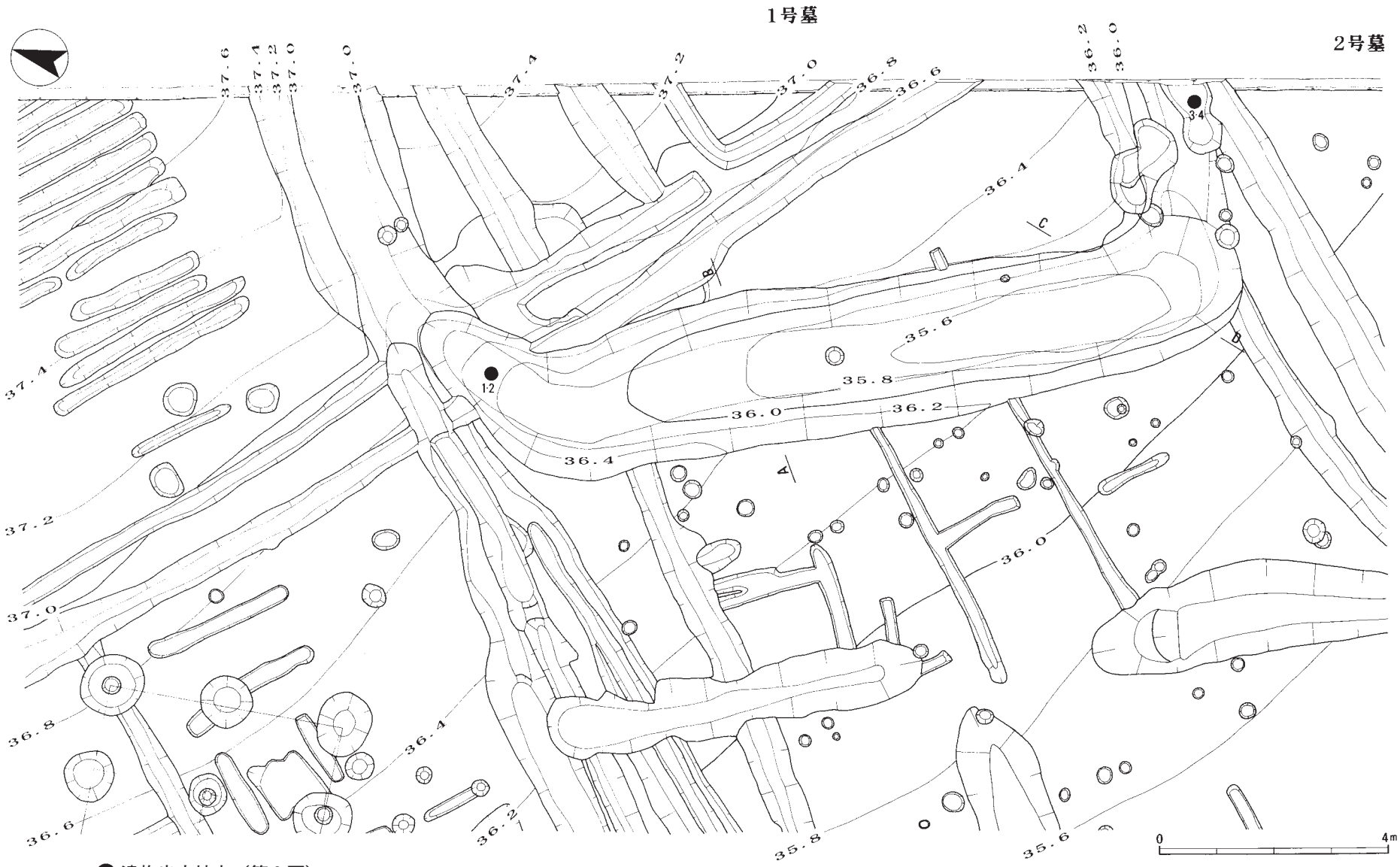
1	灰黄褐色砂質土（表土）	Hue10YR5/2	12	9と同じ		23	14と同じ		34	22と同じ	
2	明黄褐色砂質土	Hue10YR6/6	13	6と同じ		24	15と同じ		35	29と同じ	
3	褐色土	Hue10YR4/4	14	にぶい黄褐色砂質土	Hue10YR5/3	25	褐色土	Hue7.5YR4/4	36	29と同じ	
4	暗褐色砂質土	Hue10YR3/3	15	灰褐色砂質土	Hue7.5YR4/2	26	7と同じ		37	灰黄褐色砂質土	Hue10YR4/2
5	灰褐色砂質土	Hue7.5YR5/2	16	15と同じ		27	18と同じ		38	8と同じ	
6	褐灰色砂質土	Hue7.5YR5/1	17	黒褐色土	Hue10YR3/2	28	黄褐色土	Hue10YR5/6	39	灰黄褐色砂質土	Hue10YR5/2（黄褐色土ブロック含む）
7	にぶい褐色土	Hue7.5YR5/3	18	にぶい黄褐色土	Hue10YR4/3	29	灰黄褐色土	Hue10YR5/2	40	灰黄褐色土	Hue10YR4/2
8	にぶい黄褐色砂質土	Hue10YR4/3	19	17と同じ		30	29と同じ		41	にぶい黄褐色砂質土	Hue10YR4/3（小礫を多く含む）
9	褐灰色砂質土	Hue10YR4/1	20	18と同じ		31	29と同じ		42	褐色土	Hue10YR4/6
10	5と同じ		21	灰黄褐色土（炭化物含む）	Hue10YR4/2	32	にぶい黄褐色土	Hue10YR5/4	43	褐灰色粘質土	Hue7.5YR5/1
11	明黄褐色砂質土	Hue10YR4/2	22	灰黄褐色砂質土	Hue10YR5/2	33	8と同じ		44	木根痕跡	

第6図　調査区東壁土層断面図（1／100）

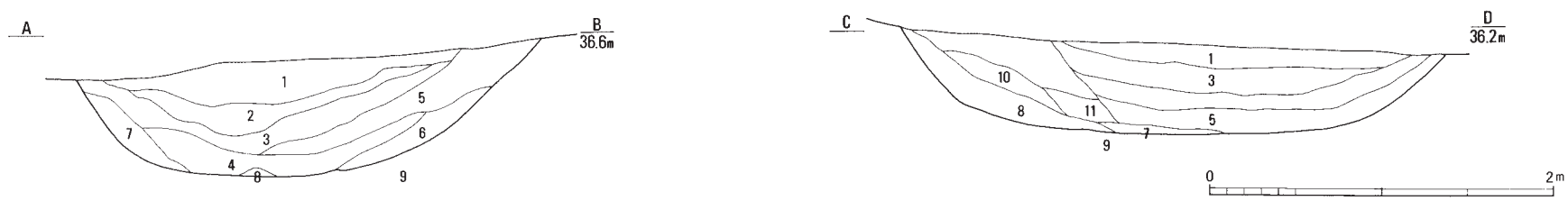


						20	明黄褐色土	Hue2.5YR6/8	33 黄褐色砂質土 Hue10YR5/6
						21	灰黄褐色土	Hue10YR4/2	34 褐色土 Hue10YR4/6
			9	6と同じ		22	オリーブ褐色土	Hue2.5YR4/6	
			10	4と同じ		23	15と同じ		
			11	灰黄褐色土	Hue10YR5/2	24	16と同じ		
1	灰黄褐色砂質土（表土）	Hue10YR5/2	12	明灰褐色砂質土	Hue7.5YR7/1	25	18と同じ		
2	にぶい黄褐色砂質土	Hue10YR5/3	13	明黄褐色土	Hue2.5YR6/8	26	14と同じ		
3	2と同じ		14	灰黄褐色土	Hue10YR4/2	27	木根痕跡		
4	2と同じ		15	にぶい黄褐色土	Hue10YR5/4	28	褐灰色砂質土	Hue10YR4/1	
5	褐灰色土	Hue10YR4/1	16	にぶい黄褐色土	Hue10YR5/3	29	21と同じ		
6	褐灰色砂質土	Hue10YR5/2	17	15と同じ		30	黒褐色砂質土	Hue10YR3/1	
7	にぶい黄褐色粘土	Hue10YR5/3	18	にぶい黄褐色土	Hue10YR4/3	31	暗褐色砂質土	Hue10YR3/3	
8	灰黄褐色砂質土	Hue10YR4/2	19	黄褐色土	Hue10YR5/6	32	灰黄褐色砂質土	Hue10YR4/2 （小礫を多量に含む）	

第7図　調査区西壁土層断面図（1／100）

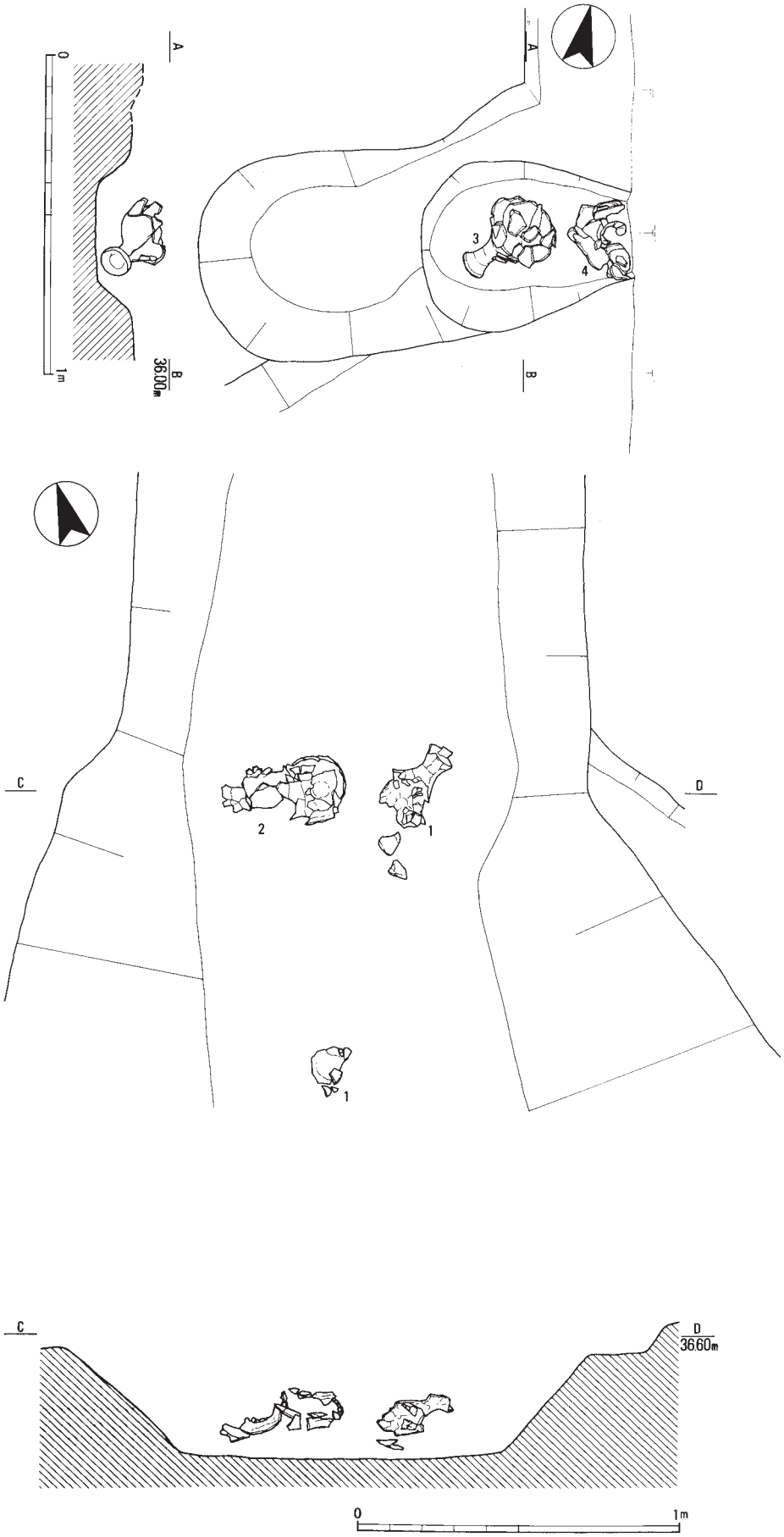


●遺物出土地点（第９図）



1	暗褐色砂質土	Hue10YR3/3	6	褐色砂質土	Hue7.5YR4/3	11	褐色砂質土（褐灰色土混り）	Hue7.5YR4/3
2	黒褐色砂質土	Hue10YR3/1	7	明褐色砂質土	Hue7.5YR5/6	12	黒褐色砂質土（暗褐色土混り）	Hue7.5YR3/1
3	褐色砂質土（褐灰色土混り）	Hue7.5YR4/4	8	褐色粘質土（灰褐色土混り）	Hue7.5YR4/6			
4	褐灰色砂質土（褐灰色土混り）	Hue10YR4/1	9	明褐色粘質土	Hue7.5YR5/8			
5	褐色砂質土	Hue7.5YR4/4	10	褐色砂質土（褐灰色土混り）	Hue7.5YR4/3			

第８図　１号墓平面図（１／100）**・周溝土層断面図**（１／40）



第９図　１号墓遺物出土状況図（１／20）

を中心に整列していないものである。おおよそ全体的にみて３群、内実としては４群として捉えることができそうである。

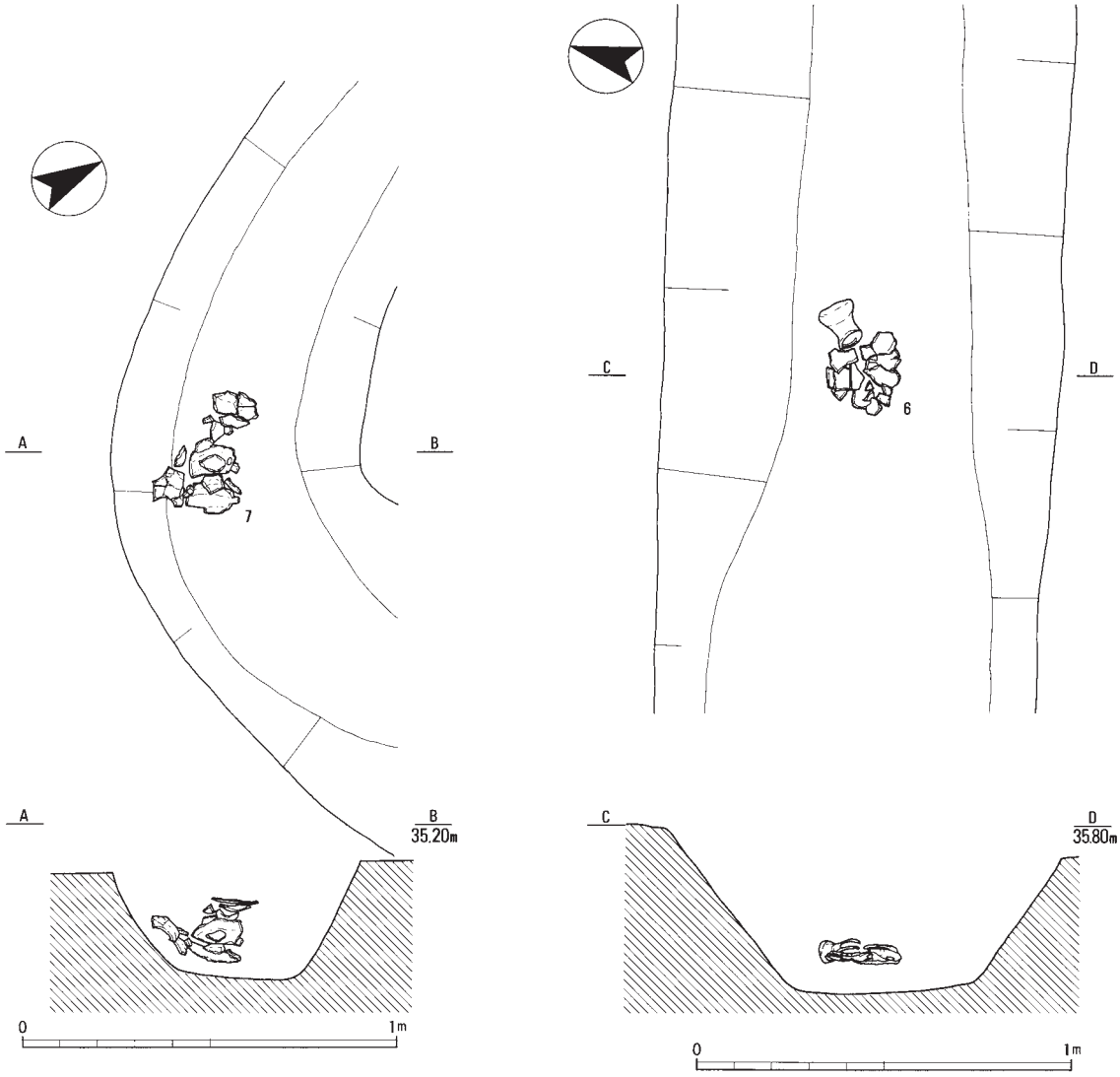
１）方形周溝墓

①１号墓　Ａグループのなかで最も北側に位置している。７号墓がＡグループの中で最初の造営の可能性もあるが１号墓との時期の前後関係が不明のためとりあえずここでは、１号墓からとしておく。削平を受けているものの調査区のなかで標高が最も高い場所に造営されている。さらに、確認した全ての方形周溝墓の中で一番規模の大なるものであろうが部分的に確認できた。周溝（ＳＤ４）は、ほぼ全周していると考えられそうである。ただ周溝の北西と南西の２つのコーナー部分は、周溝の最深部と比較して非常に浅い。全体の規模は、墳墓裾から南北13.7mである。

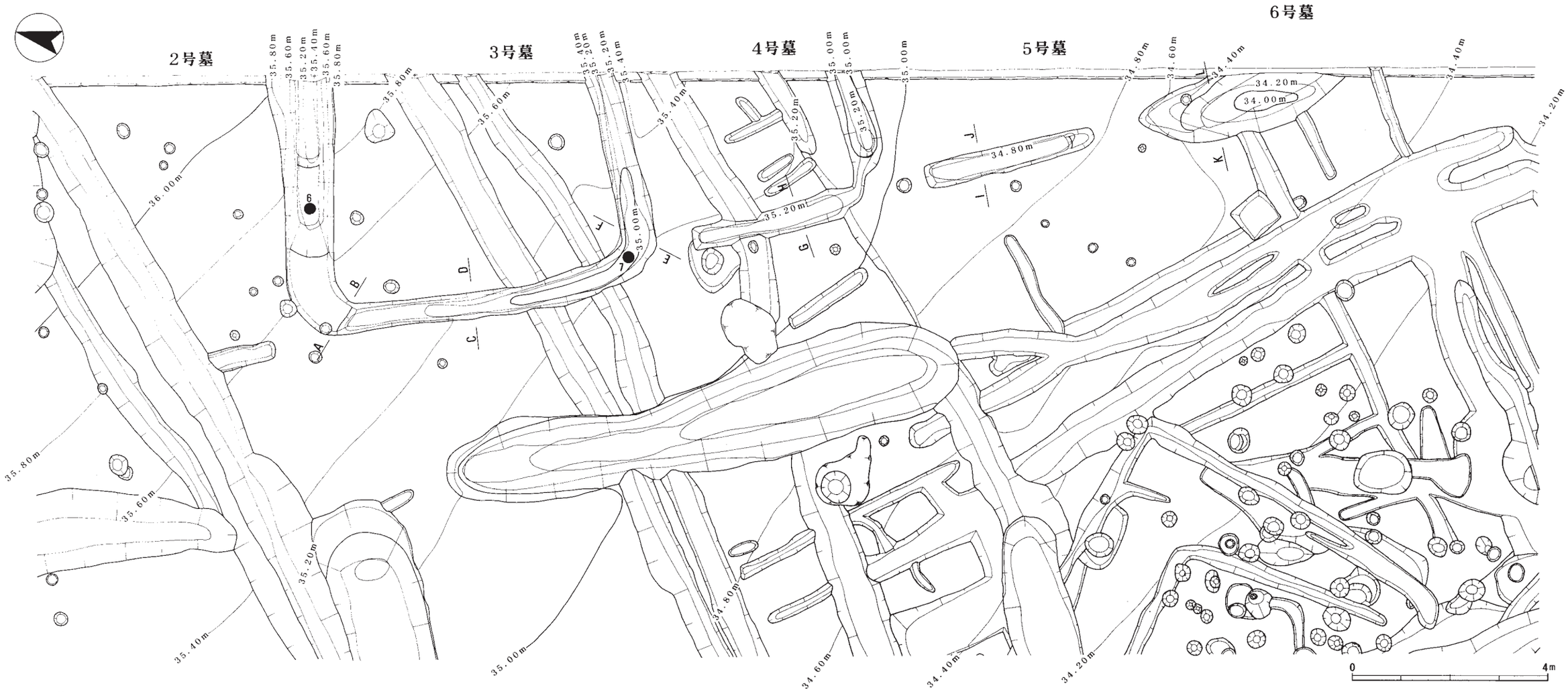
西側周溝（ＳＤ４）の規模は、幅2.72m・深さ0.75mである。墳墓側が直線的であるのに対し外縁側は、やや柔らかに弧状を描いている。

北側周溝は、全体的に東西方向の耕作溝と重複し、削平されることによってやや複雑な状況であるため幅・深さの規模について明確にしきれない。北側の周溝から西側の周溝にかけてのコーナー部において溝底から浮いた状態で細頸壺（１・２）が出土している。転落したものとみられる。ただ、１号墓北側においても方形周溝墓が存在した可能性を含めると一概に１号墓からの転落であると言い切ることはできない。

南側周溝は、一部を後世の土坑によって削平されているが規模は、幅1.16m・深さ0.2mである。２

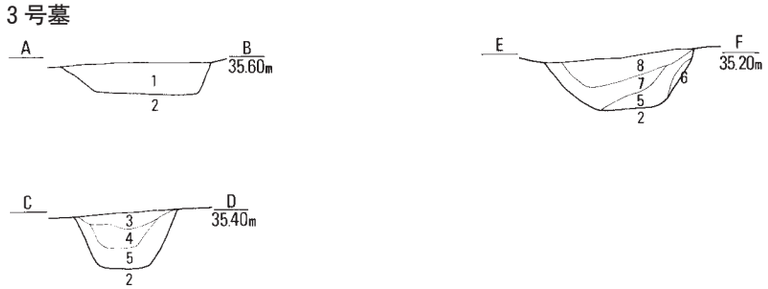


第10図　３号墓遺物出土状況図（１／20）

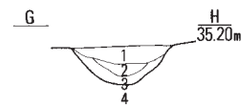


●遺物出土地点（第10図）

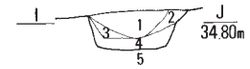
3 号墓



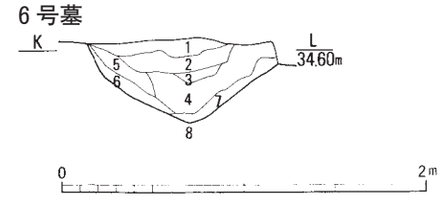
4 号墓



5 号墓



6 号墓



1	赤褐色砂質土	Hue2YR4/8
2	明褐色粘質土	Hue7.5YR5/8
3	暗褐色砂質土（黒褐色土混り）	Hue7.5YR3/4
4	黒褐色砂質土（2cm前後の礫含む）	Hue7.5YR3/1
5	褐色砂質土	Hue7.5YR4/6
6	褐色粘質土	Hue7.5YR4/6
7	灰褐色砂質土	Hue7.5YR4/2
8	褐灰色砂質土	Hue7.5YR4/4

1	暗褐色砂質土（褐灰色土混り）	Hue7.5YR3/4
2	褐色砂質土	Hue7.5YR4/6
3	褐色粘質土	Hue7.5YR4/6
4	明褐色粘質土	Hue7.5YR5/8

1	黒褐色砂質土（1～3cm前後の礫含む）	Hue10YR3/1
2	暗褐色粘質土	Hue7.5YR3/4
3	褐灰色砂質土	Hue7.5YR4/1
4	褐色粘質土	Hue7.5YR4/6
5	明褐色粘質土	Hue7.5YR5/8

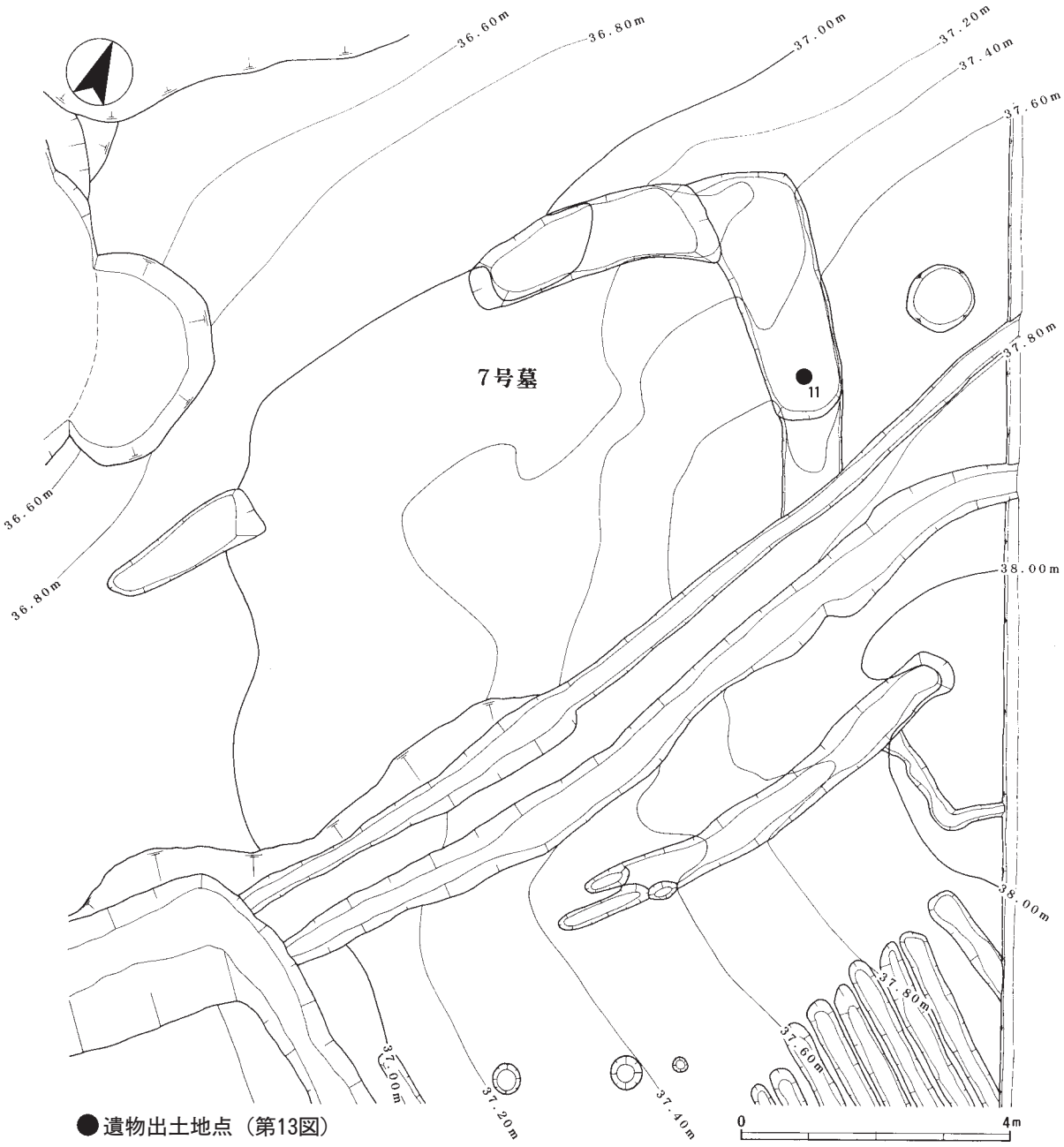
1	灰黄褐色砂質土（0.5～2cm前後の礫含む）	Hue10YR6/2
2	灰黄褐色砂質土（炭化物含む）	Hue10YR6/2
3	灰黄褐色砂質土（褐色土混り）	Hue10YR6/2
4	にぶい黄褐色砂質土（0.5～2cm前後の礫含む）	Hue10YR5/3
5	にぶい黄褐色砂質土（0.5～2cm前後の礫含む褐色土混り）	Hue10YR5/3
6	褐色砂質土（にぶい黄褐色土混り）	Hue10YR4/6
7	褐色砂質土（0.1～0.5cm前後の礫含む灰黄褐色土混り）	Hue10YR4/6
8	明褐色粘質土	Hue7.5YR5/8

第11図　2～6号墓平面図（1／100）**・周溝土層断面図**（1／40）

号墓と共有していたとみられる。周溝と調査区の壁際において溝底から浮いた状態で細頸壺（３・４）が出土している。１号墓ないし２号墓からの転落したものとみられる。１～４の遺物の時期から中期中葉とみられる。

②２号墓　Ａグループの内の１基である。１号墓の南隣に位置している。１号墓同様調査区との兼ね合いによって西側を中心に検出することができた。１号墓と比較して急激な変化があったのかかなり規模が縮小している。また、１号墓の西側の周溝と不揃いでやや墳丘部分が南に突き出していたとみられる。周溝は、西側が一部分だけ確認できた。北側は、１号墓の南側の周溝（ＳＤ４）を共有していたとみられる。南側の周溝は、３号墓の北側の周溝（ＳＤ９）と共有している。すくなくとも西南のコーナー部分が陸橋状になっていたかもしれない。２号墓の全体の規模は、南北5.5mである。東西は不明である。西側周溝は、平面形が直線的である。規模は、検出長1.31m・幅0.36～0.46m・深さ0.08～0.1mである。非常に浅い。耕作溝の可能性も充分あるが埋土の土質・土色から周溝と判断した。

南側周溝（ＳＤ９）は、方形周溝墓３号墓と共有



第12図　７号墓平面図（１／100）

している。平面形は、２・３号墓側ともにやや直線的である。規模は、幅１～1.38m・深さ0.1～0.27mである。西にいくにつれて徐々に深くなる傾向を示している。西南部は、非常に浅くなっている。遺物は、溝底から浮いた状態で広口壺（５）・細頸壺（６・７）が出土している。３号墓と共有する周溝であるため２号墓ないし３号墓のどちらかの転落したものである。５～７の遺物の時期から中期中葉とみられる。

③３号墓　Ａグループの一角を占める。２号墓の南隣に位置している。周溝は、調査区との兼ね合いで西側を中心に検出することができた。ただ、西側の周溝（ＳＤ７）は、北側のもの（ＳＤ９）と南側のもの（ＳＤ11）と比較して幅も狭く、かなり浅い。３号墓の全体の規模は、南北６ｍである。

西側周溝（ＳＤ７）は、平面形が直線的である。周溝の規模は、幅0.54～0.66m・深さ0.2～0.3mである。

北側周溝（ＳＤ９）は、２号墓の南側周溝と共有している。

南側周溝（ＳＤ11）も平面形は、直線的である。周溝の規模は、幅0.61m・深さ0.32～0.5mである。４号墓の北側の周溝と共有している。遺物は、溝底から浮いた状態で太頸壺（８）・細頸壺（９）が出土している。３号墓か４号墓からの転落したものであろう。８・９の遺物時期から中期中葉とみられる。

④４号墓　Ａグループの一角を占める。３号墓の南隣に位置している。調査区との兼ね合いによって西側を中心に確認することができた。周溝の南西のコーナー部分は、陸橋状に残っている。全体の規模は、南北4.85mである。

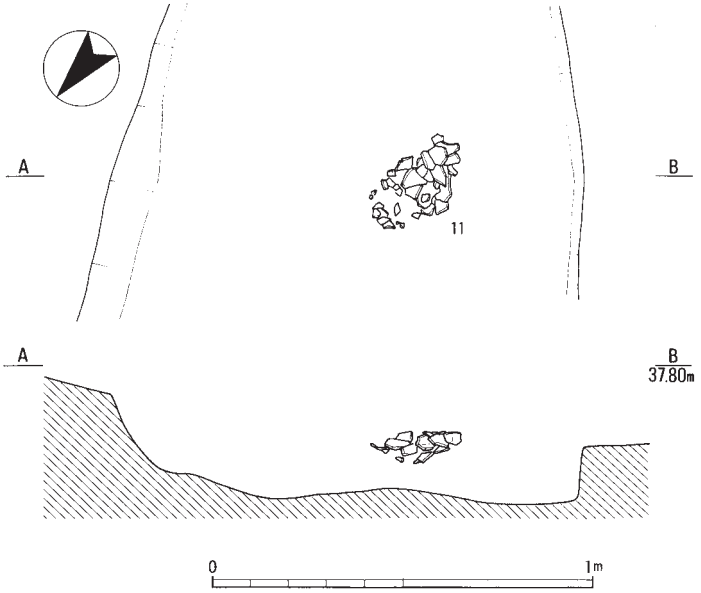
西側周溝は、一部を後世の遺構によって削平されているものの幅0.56m・深さ0.1～0.2mである。南北のものと比較しても全体的に細く、浅い。北側の周溝は、３号墓の南側の周溝と共有している。

南側周溝は、平面形が直線的である。規模は、幅0.75m・深さ0.2～0.3mである。５号墓の北側の周溝と共有している。遺物は、南側の周溝の溝底から浮いた状態で小型壺ないし鉢（10）が出土している。４号墓か５号墓から転落したものとみられる。

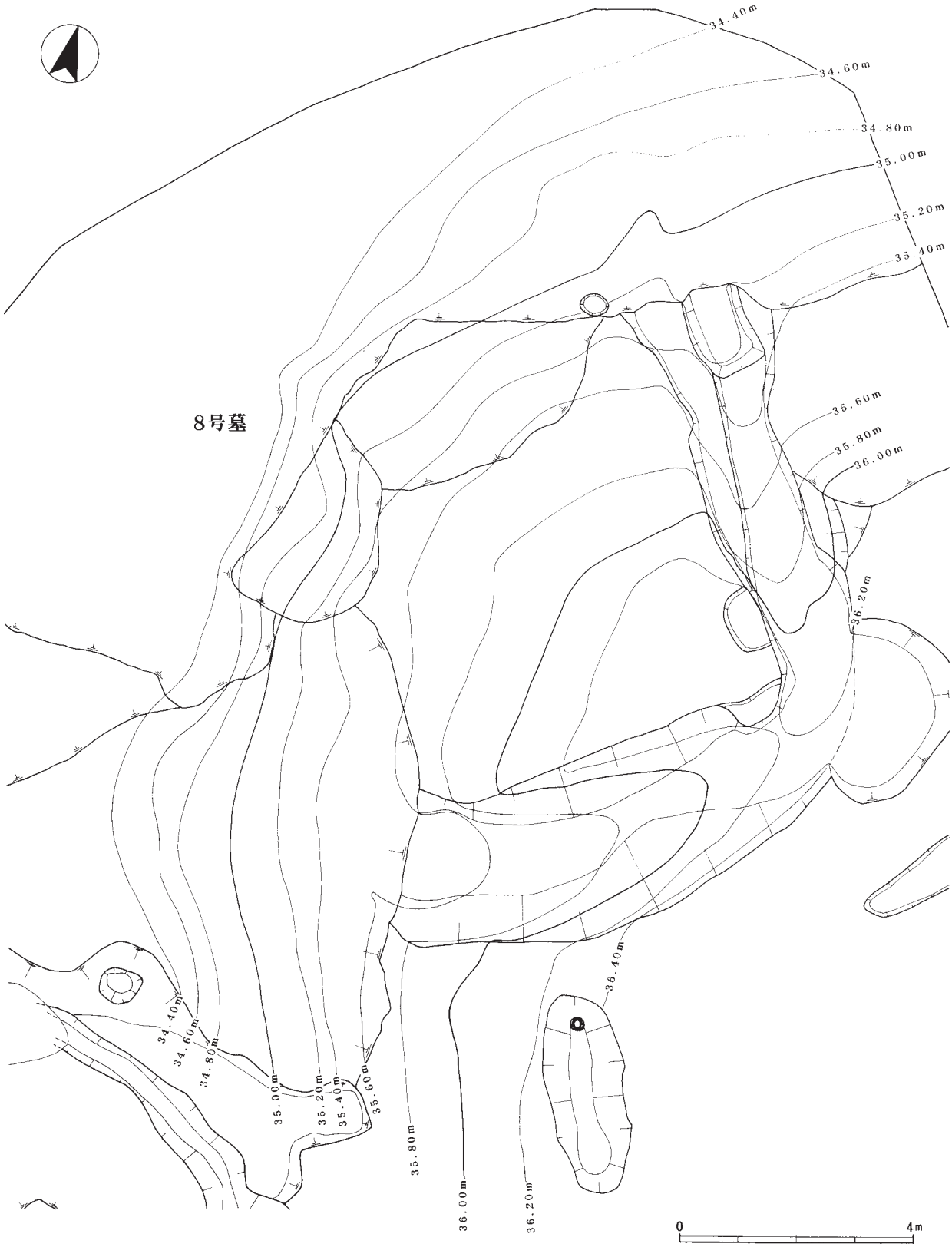
⑤５号墓　Ａグループの内の１基である。４号墓の南隣に位置している。調査区との兼ね合いによって西半分を確認することができた。周溝は、北側と西側を検出することができた。周溝の南西と北西の２つのコーナー部分は、陸橋状に残っている。全体の規模は、周溝を検出していないため不明であるがおおよそ５ｍ前後であろう。

西側周溝は、平面形がほぼ直線的で検出長3.58m・幅0.44～0.56m・深さ0.02～0.2mである。

北側周溝（ＳＤ14）は、４号墓の南側の周溝と共

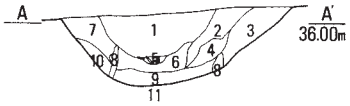


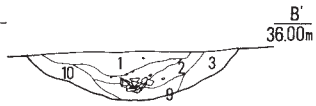
第13図　７号墓遺物出土状況図（１／20）



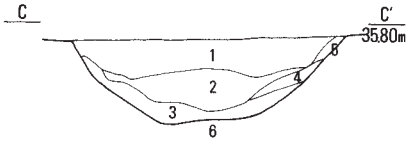
第14図　8号墓平面図（1／100）

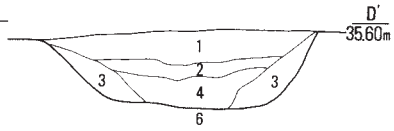
9号墓



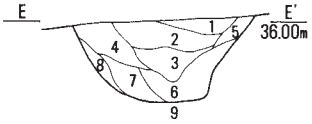


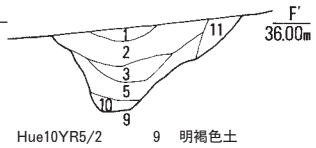
1	黒褐色砂質土（1～3cm前後の礫を含む）	Hue7.5YR3/1	5	黒褐色砂質土（0.5cm前後の砂礫を含む）	Hue7.5YR3/1	9	黒褐色土（1～2cm前後の礫を含む）	Hue7.5YR3/1
2	黒褐色砂質土（1cmの礫を含む）	Hue7.5YR3/1	6	黒褐色砂質土（0.1～0.5cm前後の砂礫を含む）	Hue7.5YR3/2	10	褐色土	Hue7.5YR4/3
3	褐色土	Hue7.5YR4/6	7	褐色砂質土（木の根痕）	Hue7.5YR4/3	11	明褐色土	Hue7.5YR5/8
4	暗褐色砂質土	Hue7.5YR3/3	8	黒褐色土（1～2cm前後の礫を含む）	Hue7.5YR3/2			



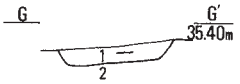


1	褐灰色砂質土（2.5cm以下の礫を含む）	Hue7.5YR4/1	4	にぶい黄褐色砂質土	Hue10YR4/1
2	褐灰色砂質土（1.5cm以下の礫を含む）	Hue7.5YR4/1	5	灰黄褐色砂質土	Hue10YR5/2
3	灰褐色砂質土（1cm以下の礫を含む）	Hue7.5YR4/2	6	明褐色土	Hue7.5YR5/8



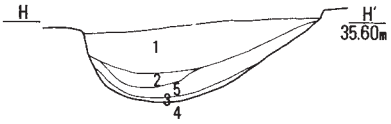


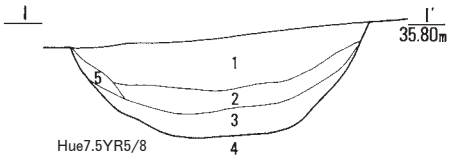
1	にぶい黄橙色砂質土	Hue10YR6/3	5	灰黄褐色砂質土（小礫を含む）	Hue10YR5/2	9	明褐色土	Hue7.5YR5/8
2	褐灰色砂質土（1cm前後の礫を含む）	Hue7.5YR5/1	6	黄褐色砂質土	Hue10YR5/2	10	褐灰色砂質土	Hue7.5YR5/1
3	褐灰色砂質土（小礫を含む）	Hue7.5YR4/1	7	灰黄褐色土（小礫を含む）	Hue10YR5/2	11	にぶい黄褐色砂質土	Hue10YR5/3
4	にぶい黄褐色砂質土	Hue10YR5/3	8	にぶい黄褐色砂質土	Hue10YR5/4			



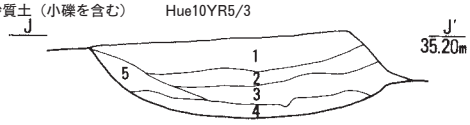
1	褐色砂質土（0.5～1cm前後の礫を含む）	Hue10YR4/6
2	明褐色土	Hue7.5YR5/8

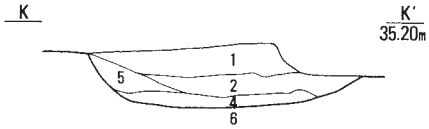
10号墳



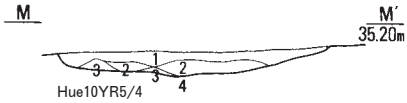


1	褐灰色砂質土（0.5～1cm以下の小礫を含む）	Hue7.5YR4/1	4	明褐色土	Hue7.5YR5/8
2	褐灰色砂質土（小礫を含む）	Hue7.5YR4/1	5	黄褐色粘質土	Hue10YR5/6
3	にぶい黄褐色砂質土（小礫を含む）	Hue10YR5/3			



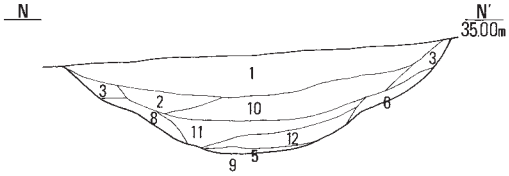


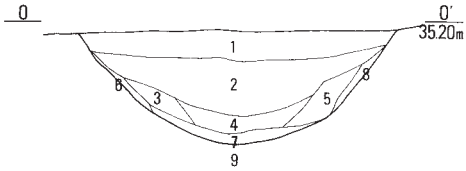
1	灰黄褐色砂質土（2cm以下の小礫を含む）	Hue10YR4/2	4	明黄褐色粘質土	Hue10YR6/6
2	褐色砂質土（黄褐色土ブロック含む）	Hue10YR4/6	5	にぶい黄褐色砂質土	Hue10YR4/3
3	褐灰色砂質土（小礫を含む）	Hue10YR4/1	6	明褐色土	Hue7.5YR5/8



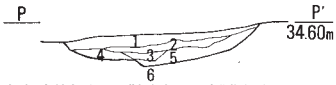
1	灰黄褐色土	Hue10YR6/2	3	にぶい黄褐色土	Hue10YR5/4
2	褐灰色土	Hue10YR6/1	4	明褐色土	Hue7.5YR5/8

11号墓

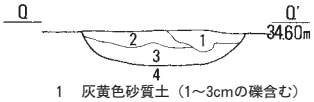




1	暗褐色砂質土（0.1～0.3cmの小礫を含む褐灰色土混り）	Hue7.5YR3/3	5	褐色粘質土（褐灰色土混り）	Hue7.5YR4/6	9	明褐色土	Hue7.5YR5/8
2	黒褐色砂質土（0.2～0.3cmの小礫を含む褐色土混り）	Hue7.5YR4/1	6	褐色粘質土	Hue7.5YR4/6	10	黒褐色砂質土（褐色土混り）	Hue7.5YR3/2
3	褐色砂質土	Hue7.5YR4/4	7	にぶい褐色粘質土	Hue7.5YR5/4	11	黒褐色砂層（1cm前後の小礫含む）	Hue7.5YR3/1
4	褐色粘質土（1～2cmの小礫を含む）	Hue7.5YR4/4	8	明褐色粘質土	Hue7.5YR5/8	12	黒褐色粘質土（褐色土混り、1cm前後の小礫含む）	Hue7.5YR3/1

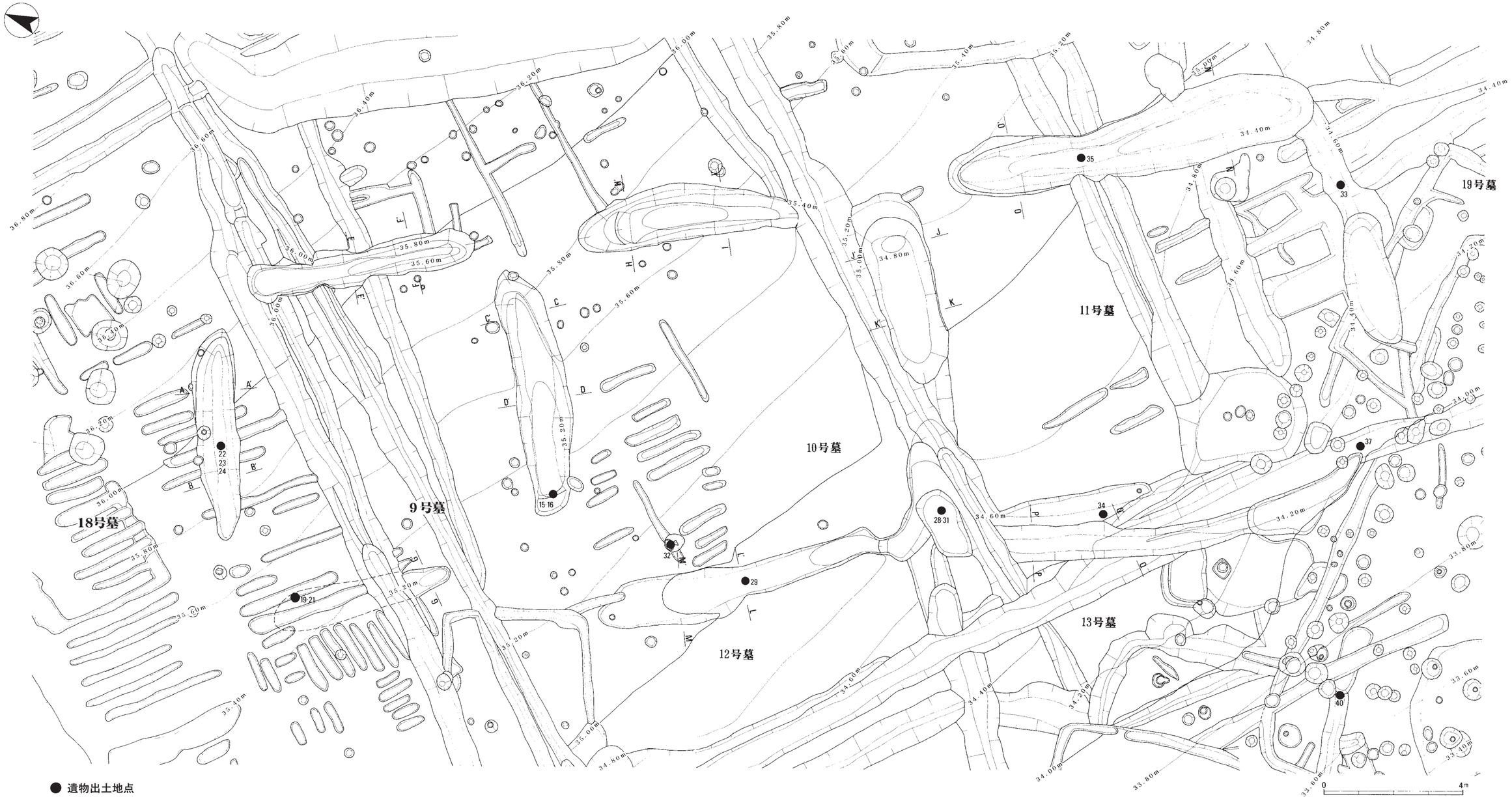


1	褐色砂質土（にぶい黄褐色土混り、炭化物含む）	Hue7.5YR4/4
2	黒褐色砂質土（にぶい黄褐色土混り）	Hue7.5YR4/4
3	褐色砂質土	Hue7.5YR4/4
4	褐色粘質土	Hue7.5YR4/6
5	褐色砂質土	Hue7.5YR4/3
6	明褐色土	Hue7.5YR5/8

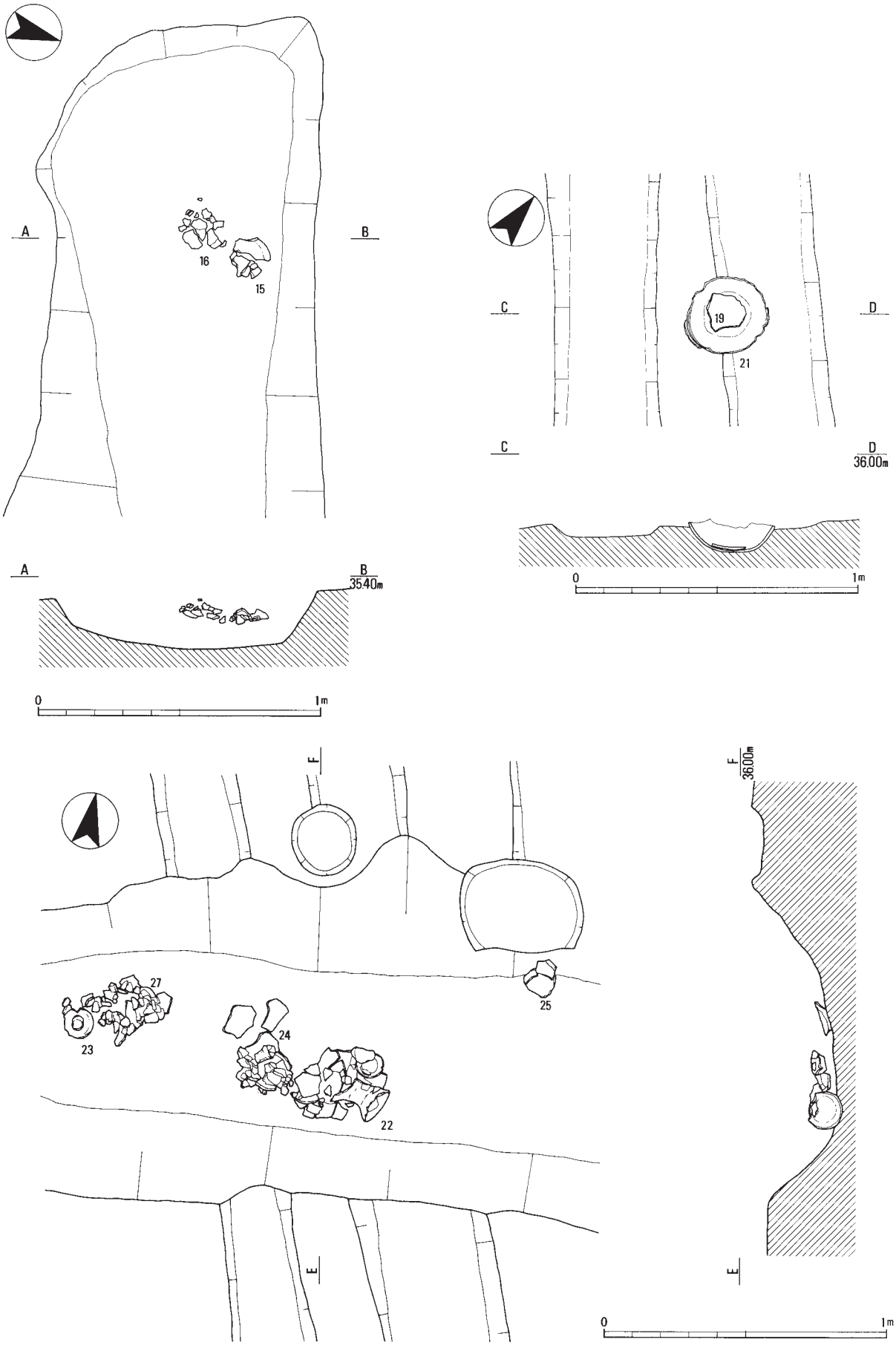


1	灰黄色砂質土（1～3cmの礫含む）	Hue10YR4/2
2	暗褐色粘質土（1～3cmの礫含む）	Hue10YR3/3
3	暗褐色粘質土（明褐色粘質土混り）	Hue10YR3/3
4	明褐色土	Hue7.5YR5/8

第15図　9～11号墓周溝土層断面図（1／40）



第16図　9～11号墓平面図（1／100）

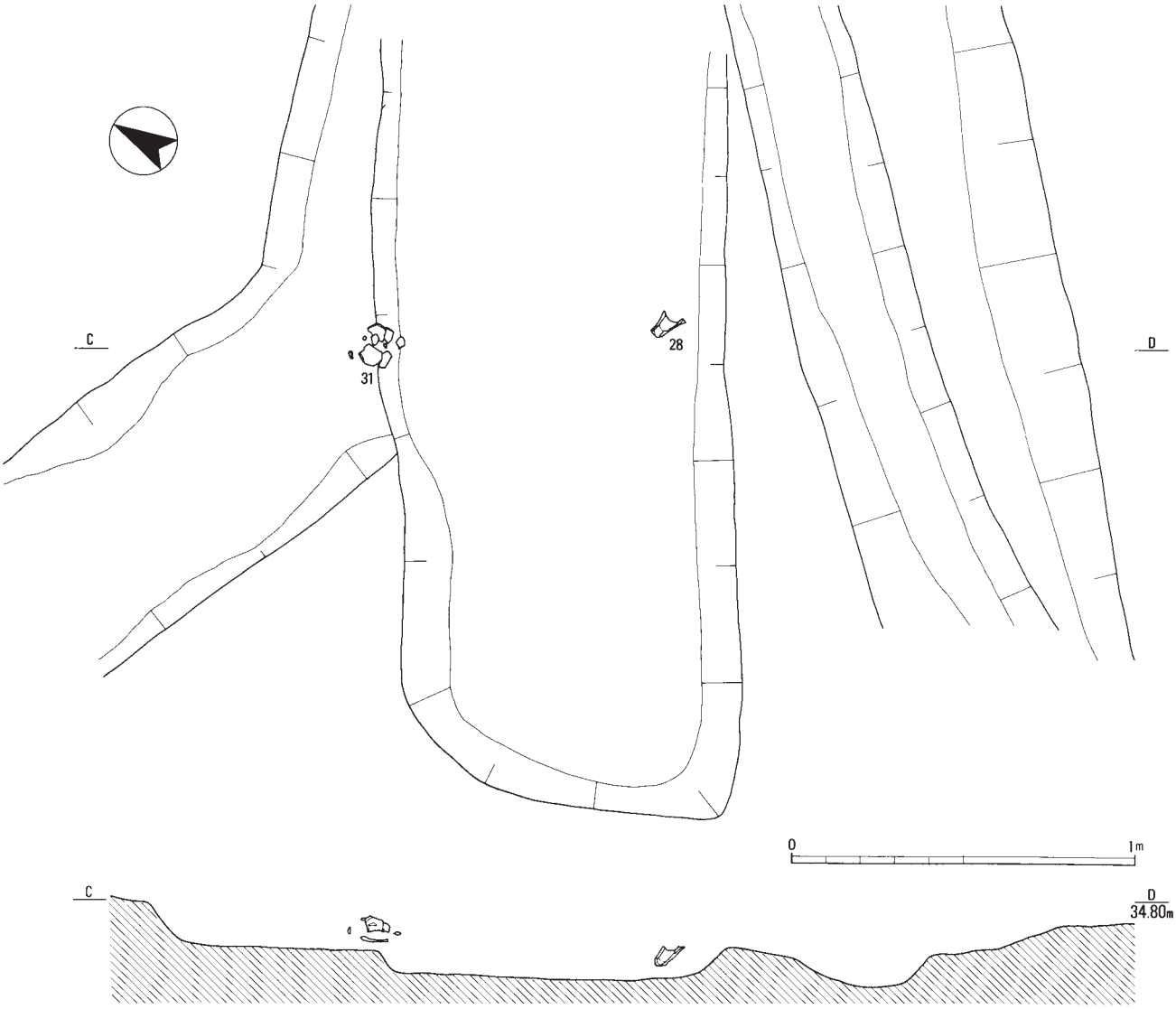


第17図　9号墓遺物出土状況図（1／20）

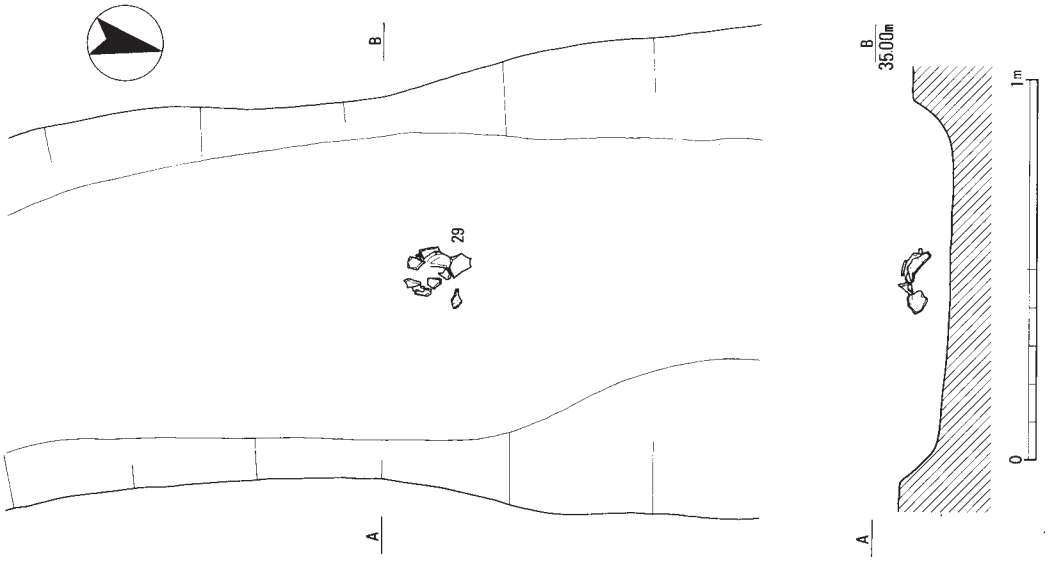
有している。遺物は、出土していない。

⑥６号墓　Ａグループのなかで確認した最も南側に位置している。大半が調査区外であるが周溝の一部を確認することができた。周溝は、西側の周溝の一部分だけである。周溝の北西のコーナー部分は、陸橋状に残っている。全体の規模は、不明である。しかし、２～５号墓の周溝よりも規模的に大きいので方形周溝墓の規模も大きいとみられる。

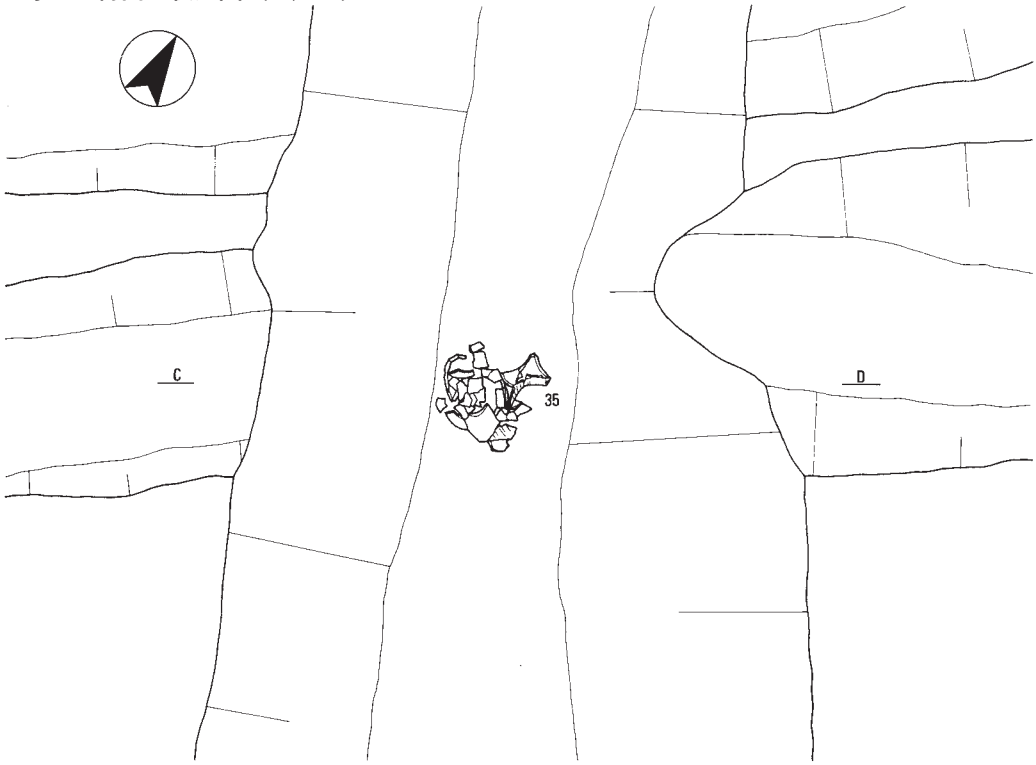
西側周溝の規模は、検出長3.4m・検出幅1.28m・深さ0.06～0.44mである。墳墓側が直線的であるのに対し外側は、やや柔らかに弧状を描いているとみられる。調査区外に向かって深くなっている。２号墓から５号墓にかけての西側の周溝と掘削の状況が異なっているが、２号墓から列状に墳墓を揃えていることに変わりはない。

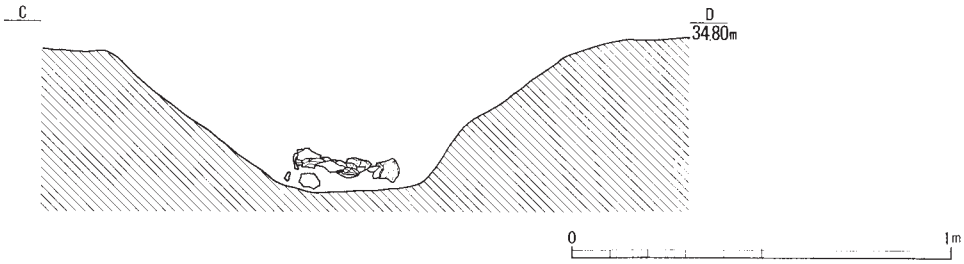


第18図　10号墓遺物出土状況図（１／20）



第19図　10号墓遺物出土状況図（1／20）

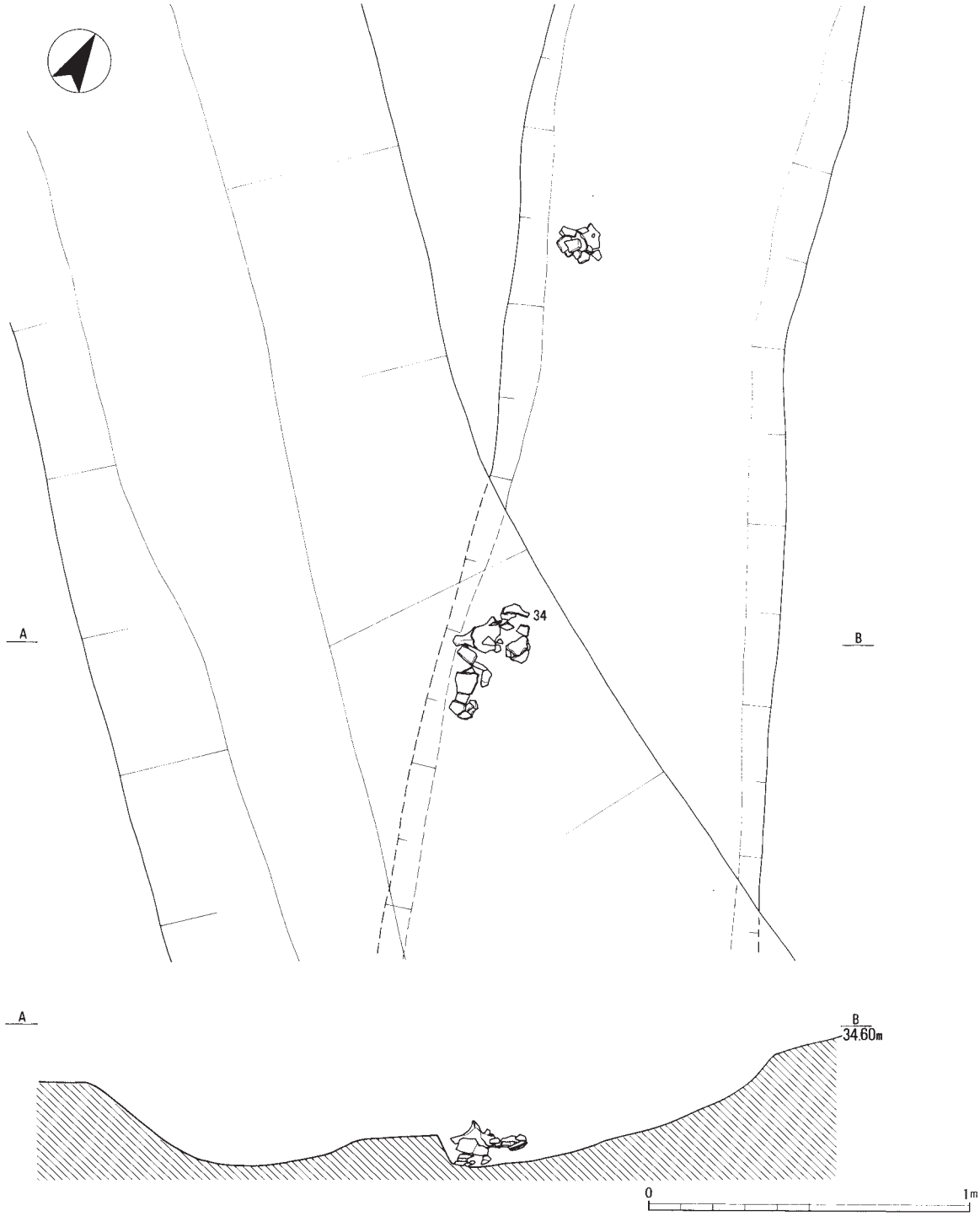




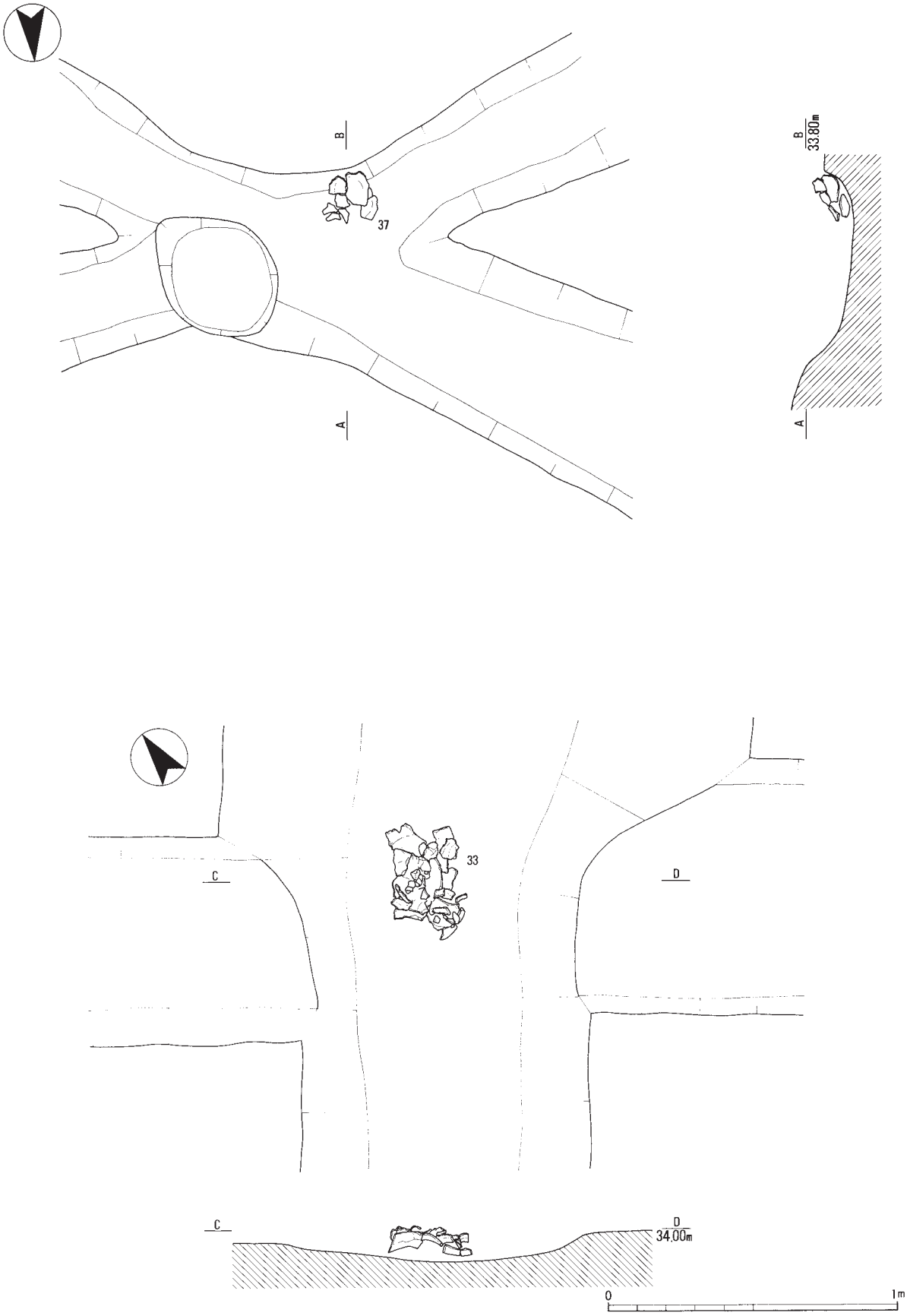
第20図　11号墓遺物出土状況図（1／20）

⑦７号墓　Ａグループのなかで最も北側に位置している。Ａグループの墳墓を揃えていない点を考慮するとＡグループから外れる可能性もないわけでない。１号墓から空間地があって南西側で削平を受けているものの調査区のなかで標高が最も高い場所から北側への急斜面にかけての地形に造営されている。周溝は、北側から東側にかけての「Ｌ」字形の部分だけを検出することができた。山田分類の「半辺陸橋型」とも考えられるが、削平を受けて偶然この部分が残っただけかも知れない。全体の規模は、東西4.3m以上・南北3.6m以上としか言えない。

東側周溝（ＳＤ156）は、全体的に弧状である。周溝の規模は、幅0.86～1.38m・深さ0.07～0.15mである。北側の周溝の規模は、幅0.92～1.04m・深さ



第21図　11号墓遺物出土状況図（１／20）



第22図　11号墓遺物出土状況図（1／20）

0.08～0.2mである。共に非常に浅い。遺物は、溝底からやや浮いた状態で細頸壺（11）が出土している。遺物時期から中期中葉とみられる。

⑧８号墓　Ｂグループ東側のなかで最も北側に位置している。削平を受けているものの調査区のなかで標高が最も高い場所に造営されている。周溝は、西から東及び南側の一部まで残っている。丘陵頂上部であるため北及び西側の周溝は、崩れていると考えられ、本来は全周していたかもしれない。全体の規模は、東西6.88m・南北7.62m以上である。

東側及び南側周溝（ＳＤ151）は、墳墓側が直線的で周溝外縁部は弧状である。東側の周溝の規模は、幅1.47～2.12m・深さ0.28～0.38mである。南側の周溝の規模は、幅2.08～2.9m・深さ0.18～0.7mである。遺物は、溝底から浮いた状態で壺体部から底部(12・13・14)にかけてのものが出土している。

⑨９号墓　Ｂグループ東側の一角を占めている。８号墓と13～14mの空間が空いているものの墳墓を揃えるように造営されている。また、３～４mの空間地を挟んで１号墓の西側である。周溝は、四つのコーナー部分全てが陸橋状に残っている。全体の規模は、南北8.9m・東西8.8mである。平面形は、正方形である。

東側周溝（ＳＤ25）は、全体的に直線的である。周溝の規模は、検出長6.68m・幅1.1m・深さ0.36～0.53mである。遺物は、細頸壺（20）が溝底から浮いた状態で出土している。９号墓から転落したものである。

北側周溝（ＳＤ31）は、平面形で墳墓側が外縁部側よりも直線的である。周溝の規模は、検出長6.12m・幅1.28m・深さ0.4～0.5mである。遺物は、広口壺（22）・壺（23）・細頸壺（24）・壺体部から底部（25・27）が溝底から浮いた状態で出土している。９号墓か18号墓から転落したものとみられる。壺底部（26）がＳＤ28から出土しているがＳＤ31からの混じりこみとみて差し支えなかろう。

南側周溝（ＳＤ23）は、10号墓と共有している。規模は、検出長7.16m・幅1.6m・深さ0.28～0.42mである。平面形は、一見して「ブーメラン」状に近く、墳墓側が直線的で外縁部側も緩やかな弧状である。遺物は、太頸壺等（15～17）が溝底から浮いた状態で出土している。遺物は、９号墓か10号墓から転落したものであろう。

西側周溝（ＳＤ145）は、後世による削平によるものの僅かであるが確認できた。周溝の規模は、検出長1.32m・幅0.78m・深さ0.05～0.07mである。南側の周溝の延長線上において弥生土器を検出している浅い窪みを確認している。そのため南側の周溝がそこまであったと考えられる。遺物は、上記のものを含めて底部穿孔の壺底部（18）や壺底部（19・21）が溝底からやや浮いた状態で出土している。遺物は、９号墓から転落したものとみられる。遺物の時期から中期後葉とみられる。

⑩10号墓　Ｂグループ東側の一角を占める。９号墓の南隣に位置している。ほぼ８・９号墓の墳墓を揃えて造営されている。周溝は、３つのコーナー部分が陸橋状に残っている。西南のコーナー部分だけが繋がっている。全体の規模は、南北11m・東西9.8mである。平面形は、やや長方形である。

東側周溝（ＳＤ20）の平面形は、「ブーメラン」状で墳墓側が直線的で周溝外縁部は、弧状である。周溝の規模は、検出長6.4m・幅1.63m・深さ0.19～0.46mである。遺物は、細頸壺（29・30）が溝底から浮いた状態で出土している。10号墓の墳丘から転落したものとみられる。

北側周溝（ＳＤ23）は、９号墓の南側の周溝と共有している。

南側周溝（ＳＤ19）は後世の撹乱によって削平を受け全体について明確にできないが、現状では直線的である。11号墓の北側の周溝と共有している。周溝の規模は、検出長7.48m・幅1.9m・深さ0.09～0.37mである。遺物は、細頸壺（28）が溝底からやや浮いた状態で出土している。10号墓ないし11号墓からの転落したものであろう。

西側周溝（ＳＤ32）は、平面形がほぼ直線的であるが全体的に浅い。12号墓の東側の周溝と共有している。周溝の規模は、検出長8.38m・幅0.8～1.5m・深さ0.05～0.07mである。９号墓の西側の周溝と若干不揃いである。しかしながら、この周溝のやや北側において検出面上において太頸壺が出土していることから周溝そのものは、もうすこし北側によっていたとみられる。さらに墳墓の規模を考えると南北

方向にやや広がり気味であること、周溝そのものがもうすこし北側によっているならば９号墓の墳墓と揃うことを考慮すると東西の規模は、９号墓と同じクラスであると言えよう。遺物は、溝底から浮いた状態で出土した太頸壺（31・32）がある。遺物は、12号墓との共有の周溝であるためどちらかからの転落したものとみられる。遺物の時期から中期中葉とみられる。

⑪11号墓　Ｂグループ東側の一角を占める。10号墓の南隣でほぼ９・10号墓に揃うように造営されている。周溝は、北東と南西のコーナー部分が陸橋状に残っている。「半辺陸橋型」と捉えることができそうである。全体の規模は、東西11ｍ・南北12.4ｍである。平面形は、ほぼ正方形に近い。

東側周溝（ＳＤ16）は、平面形がやや直線的である。周溝の規模は、検出長10.81ｍ・幅2.06ｍ・深さ0.48～0.6ｍである。削平の状況にも左右されているであろうが９号墓と10号墓の東側の周溝と比較してもかなり大きく深い。遺物は、細頸壺（35）が溝底から浮いた状態で出土している。

北側周溝（ＳＤ19）は、10号墓と共有している。

南側周溝（ＳＤ71）は、かなり後世の遺構によって削平され、浅いもののある程度残存している。平面形は、やや直線的である。周溝の規模は、幅1.55ｍ・深さ0.1～0.32ｍである。遺物は、太頸壺（33）が溝底から浮いた状態で出土している。

西側周溝（ＳＤ34・102）は、10号墓西側の周溝と同様に細長く、浅い。平面形は、全体的に緩いカーブを描く。また、ＳＤ19・32及び12号墓の北側の周溝と連結している。周溝の規模は、連結部分を含めると検出長9.12ｍ・幅0.78～１ｍ・深さ0.1～0.2ｍである。遺物は、細頸壺（34）・壺底部（36・37）が溝底から浮いた状態で出土しており転落したものであろう。遺物の時期から中期中葉とみられる。

⑫12号墓　Ｂグループ西側の１基である。10号墓西側に隣接するものである。北側及び南側は、10号墓の墳墓とほぼ揃えて造営されている。周溝は、北東のコーナー部分が陸橋状に残っている。全体の規模は、南北10.3ｍ・東西10.3ｍである。平面形は、正方形である。東側の周溝（ＳＤ32）は、10号墓の西側の周溝と共有している。

南側周溝は、削平を受けているものの10号墓及び11号墓の周溝と連結している。平面形は、直線的である。周溝の規模は、連結部分を含めて検出長7.98ｍ・幅1.15～1.2ｍ・深さ0.1～0.3ｍである。

西側周溝（ＳＤ46）は、後世の削平を受けてしまっており全体を掴み難い。周溝の規模は、検出長5.44ｍ・幅2.06ｍ・深さ0.1～0.15ｍである。南東のコーナー部分において14号墓と連結していた可能性は、充分にある。遺物は、溝底から浮いた状態で細頸壺（38）・壺底部（39）が出土している。12号墓ないし13号墓からの転落とみられる。

北側周溝（ＳＤ49）は、後世の溝に削平されてしまっており不明な部分も多いが墳墓側でやや直線的である。周溝の規模は、検出長6.66ｍ・幅1.4ｍ・深さ0.12～0.3ｍである。遺物の時期から中期中葉とみられる。

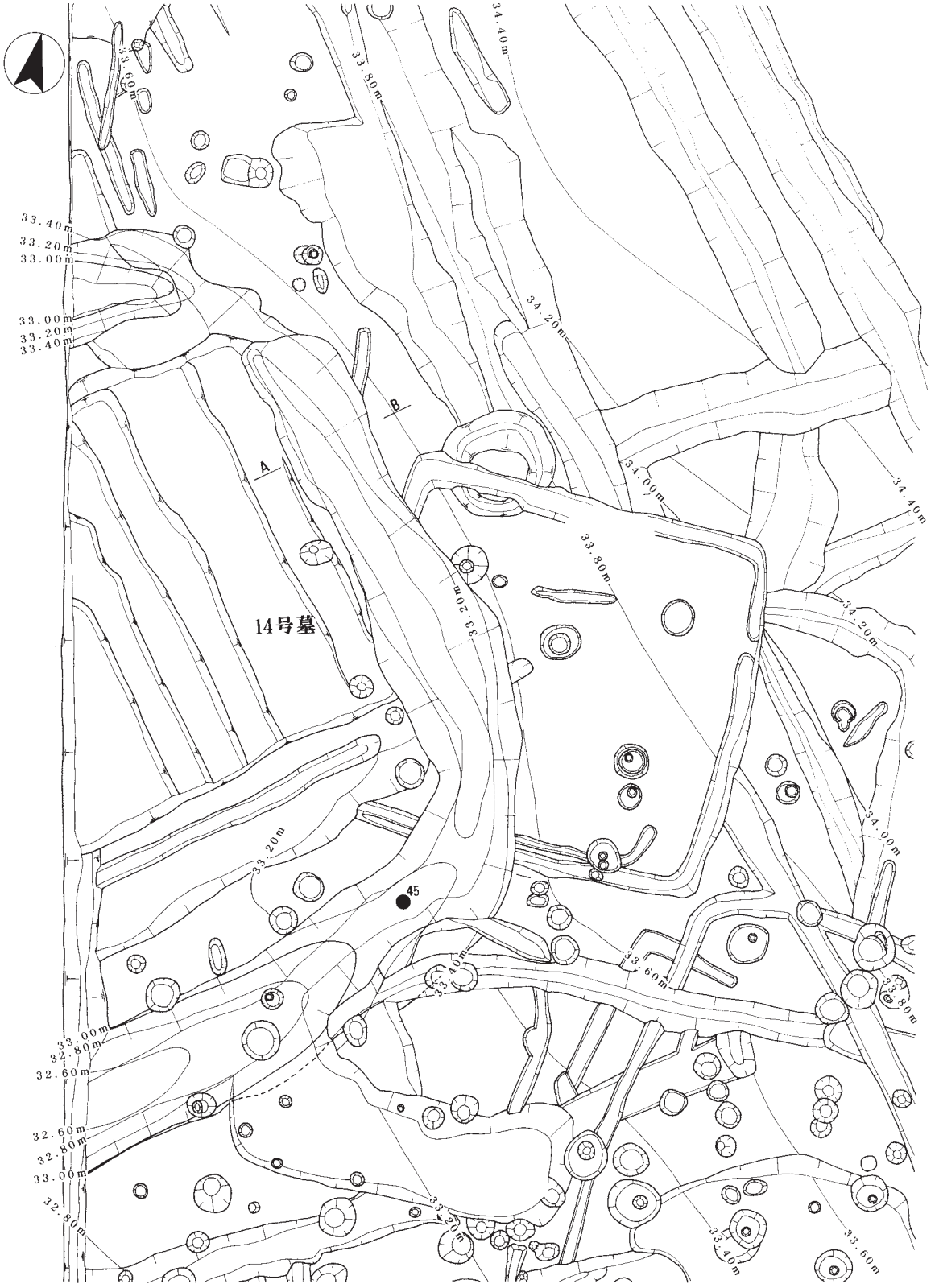
⑬13号墓　調査によって明確にできなかったがＢグループ西側の最も南側に位置していると考えられる。全体の規模は11・12号墓と同等クラスとみられる。周溝は、僅かであるが一部確認できているが後世の削平を受けて消滅した可能性が強い。ＳＤ88周辺において弥生土器細頸壺（40）が出土している。

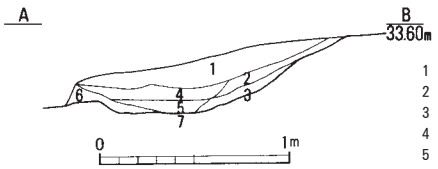
東側周溝は11号墓の西側周溝と、北側周溝は12号墓の南側周溝と共有しているとみられる。

⑭14号墓　Ｃグループのなかで最も北側に位置している。調査区との兼ね合いもあって東半分を確認できた。周溝（ＳＤ57・75）は、ほぼ全周していると考えられそうである。周溝の南東と北東の２つのコーナー部分は、周溝の最深部と比較して非常に浅くなっている。平面形は、墳墓側が直線的で周溝外縁部は弧状である。全体の規模は南北10．6ｍ、東西７ｍ以上である。

周溝の規模は、東側で幅2.08ｍ・深さ0.5ｍで、南側で幅1.92ｍ・深さ0.25～0.4ｍ、北側で幅1.16ｍ・深さ0.46ｍである。東側のものが幅広でやや深い。遺物は、南東のコーナー部分の溝底近くから細頸壺（45）・底部に穿孔されている可能性がある壺底部（46）が出土しており転落したものであろう。遺物の時期から中期中葉とみられる。

⑮15号墓　Ｃグループのなかで最も南側に位置している。14号墓と離れているため前後関係は、不明

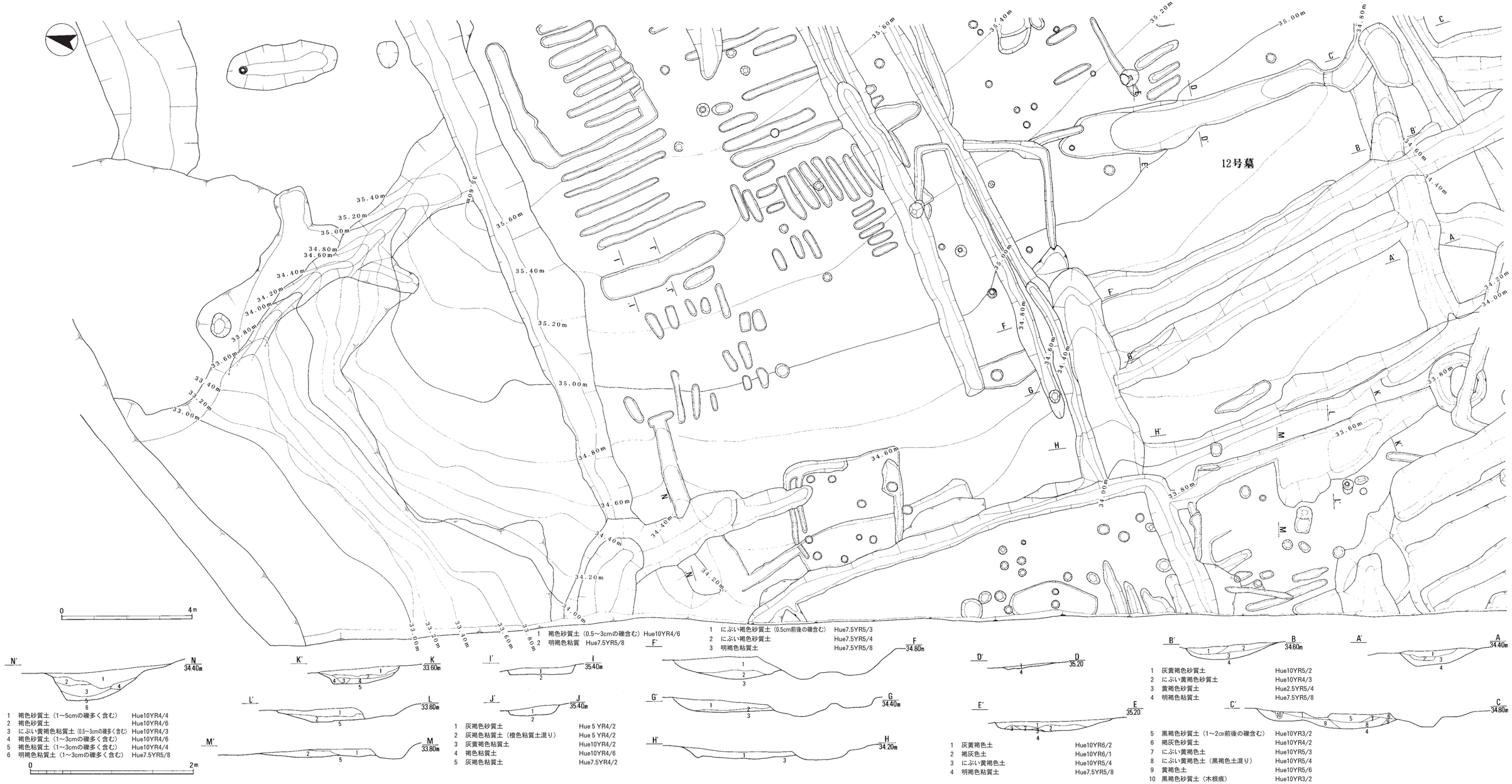




●遺物出土地点（第27図）

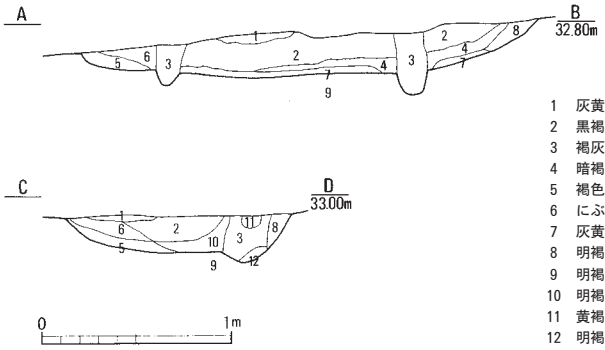
1	褐灰色砂質土（赤褐色砂質土混り）	Hue5YR4/1
2	褐色砂質土（灰黄褐色砂質土混り）	Hue7.5YR4/4
3	明褐色砂質土（灰黄褐色砂質土混り）	Hue7.5YR5/8
4	褐灰色粘質土（赤褐色砂質土混り）	Hue7.5YR4/1
5	褐灰色粘質土（赤褐色砂質土混り）	Hue7.5YR4/1
6	明褐色粘質土	Hue7.5YR5/8
7	黄褐色粘質土	Hue10YR5/8

第23図　14号墓平面図（1／100）**・周溝土層断面図**（1／40）



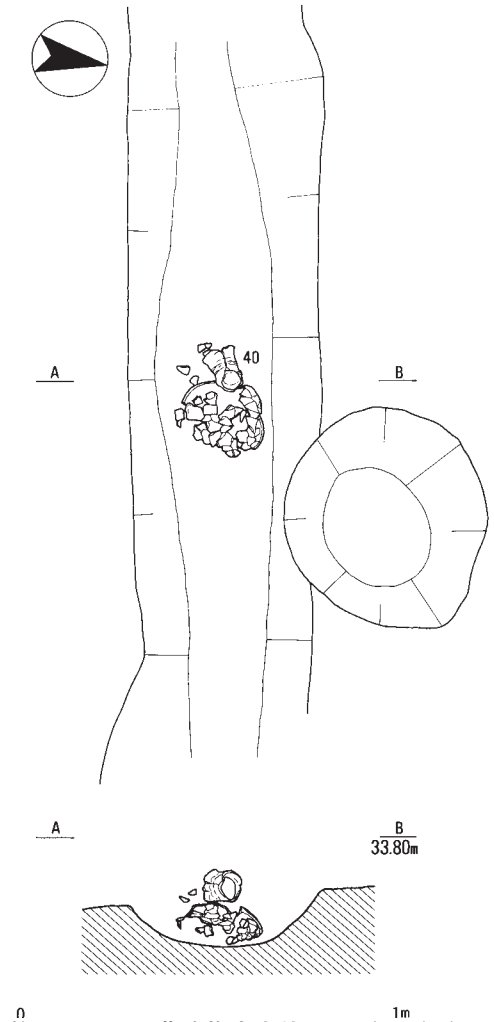
第24図　12号墓平面図（1／100）**・周溝土層断面図**（1／40）

● 遺物出土地点（第28図）

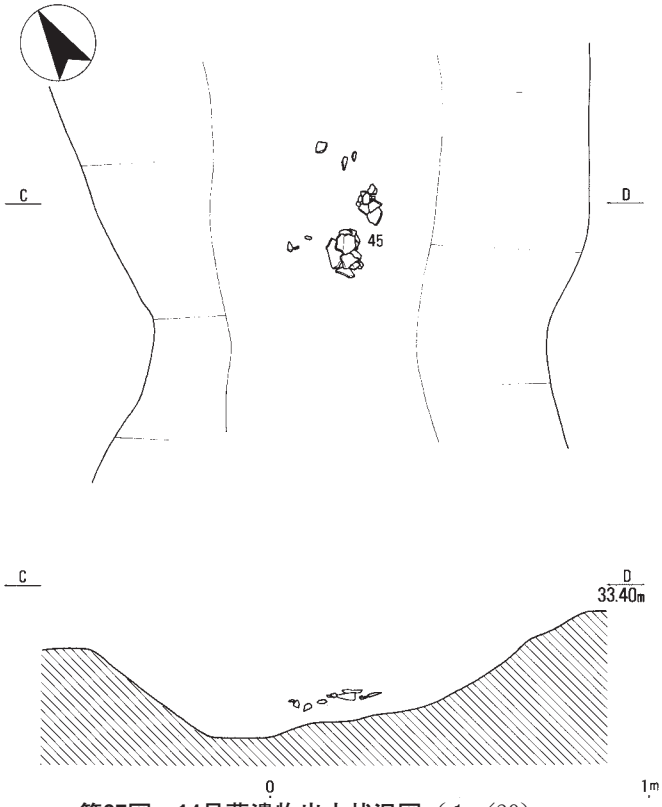


1	灰黄褐色砂質土（1～3cm前後の礫含む）	Hue10YR4/2
2	黒褐色粘土	Hue7.5YR3/2
3	褐灰色砂質土	Hue10YR4/1
4	暗褐色粘土	Hue7.5YR3/3
5	褐色粘質土	Hue10YR4/4
6	にぶい黄褐色粘質土	Hue10YR4/3
7	灰黄褐色粘質土	Hue10YR4/2
8	明褐色粘質土（灰褐色粘質土混り）	Hue7.5YR5/8
9	明褐色粘質土	Hue7.5YR5/8
10	明褐色粘質土（褐色粘質土混り）	Hue7.5YR5/8
11	黄褐色粘質土	Hue10YR5/8
12	明褐色粘質土（灰褐色粘質土混り）	Hue7.5YR3/2

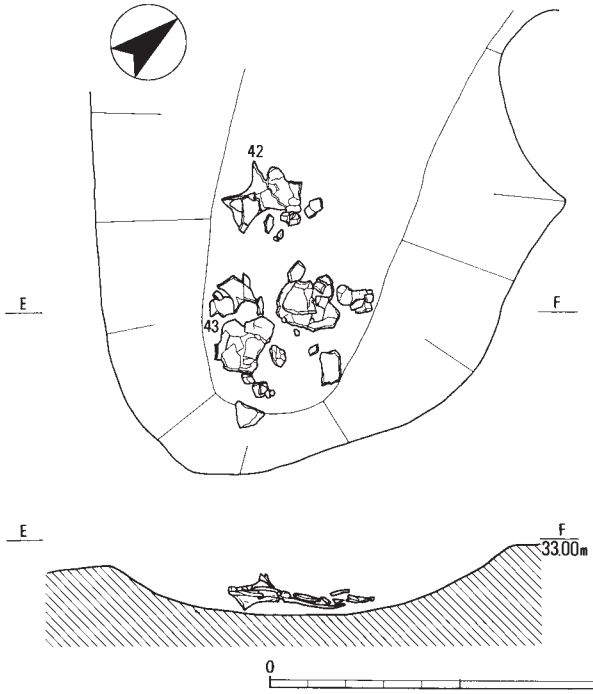
第25図　15号墓平面図（1／100）・周溝土層断面図（1／40）



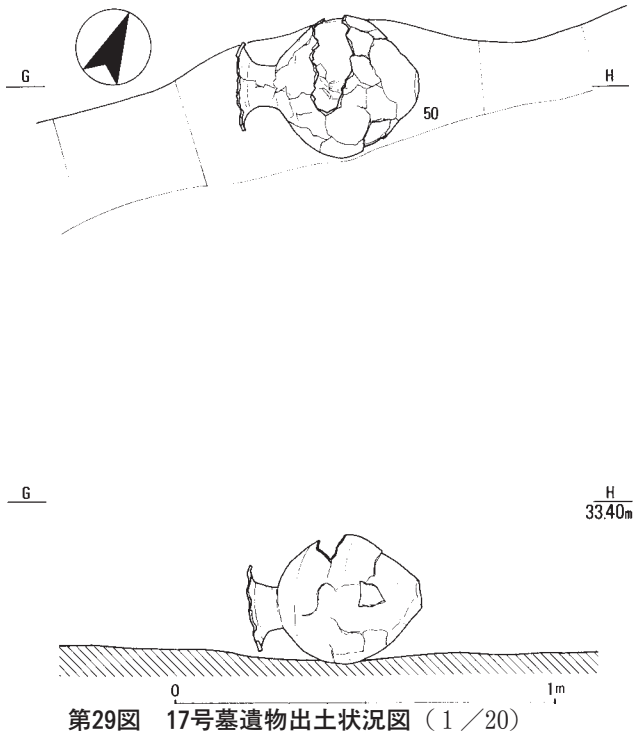
第26図　13号墓遺物出土状況図（1／20）



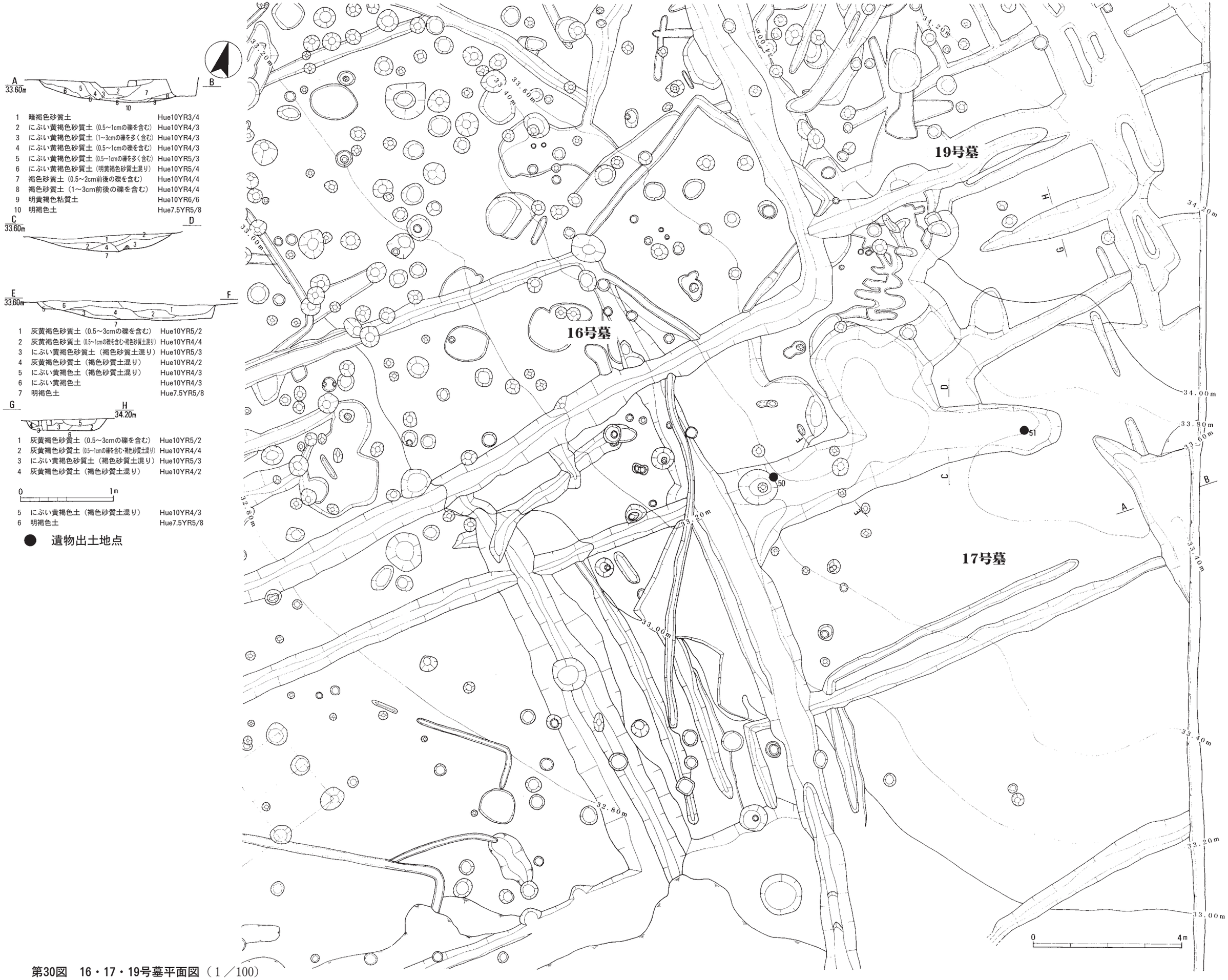
第27図　14号墓遺物出土状況図（1／20）



第28図　15号墓遺物出土状況図（1／20）



第29図　17号墓遺物出土状況図（1／20）



第30図　16・17・19号墓平面図（1／100）
・周溝土層断面図（1／40）

である。周溝（ＳＤ89・147）は、東側において開口し、若干南に寄っている。一応ここでは、山田分類の「中央陸橋型」と判断できるかもしれない。開口部の幅2.5mである。全体の規模は、南北10.3m・東西6.8m以上とみられる。

東から南側にかけての周溝（ＳＤ147）は、平面形が開口部付近を中心に墳墓外に膨らみ先太りの形になっている。細くなっている部分で屈曲しコーナー部になっている。周溝の規模は、検出長5.7m・幅0.9〜2.51m・深さ0.15〜0.27mである。遺物は、細頸壺（41・44）が溝底から浮いた状態で出土しており、転落したものと考えられる。

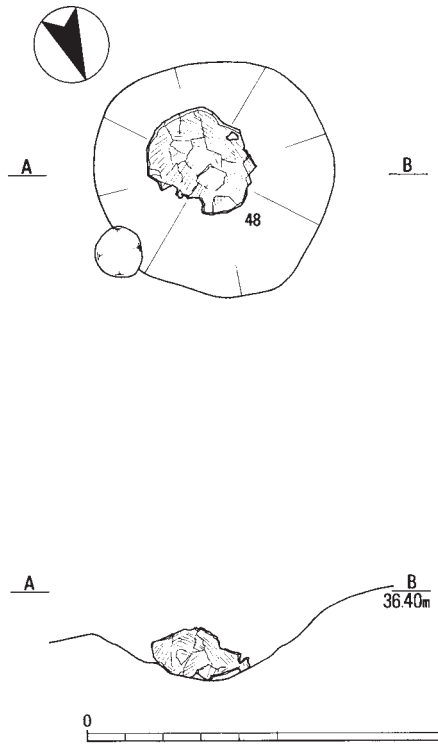
東から北側にかけての周溝（ＳＤ89）は、後世の遺構によってかなり削平を受けてかなり浅い。平面形は、ＳＤ147に似通っている。周溝の規模は、検出長6.56m・幅0.9〜2.65m・深さ0.02〜0.19mである。全体的にみて墳墓側が直線的であるのに対し周溝外縁部は、やや柔らかに弧状を描いている。遺物は、細頸壺（42・43）が溝底から浮いた状態で出土しており、転落したものと考えられる。遺物の時期から中期中葉とみられる。

⑯16号墓　調査区のなかでやや南側に位置している。Ｃグループの１基である。後世の遺構によってかなり削平を受けている。周溝は、コーナー部分（ＳＤ119・134）だけが残っており、少なくともコーナー部分が周溝の最深部で、全周ないし中央部に陸橋部を持つ可能性が高い。全体の規模は、東西8.6m・南北9.8m前後とみられる。ほぼ正方形であったであろうと推測される。

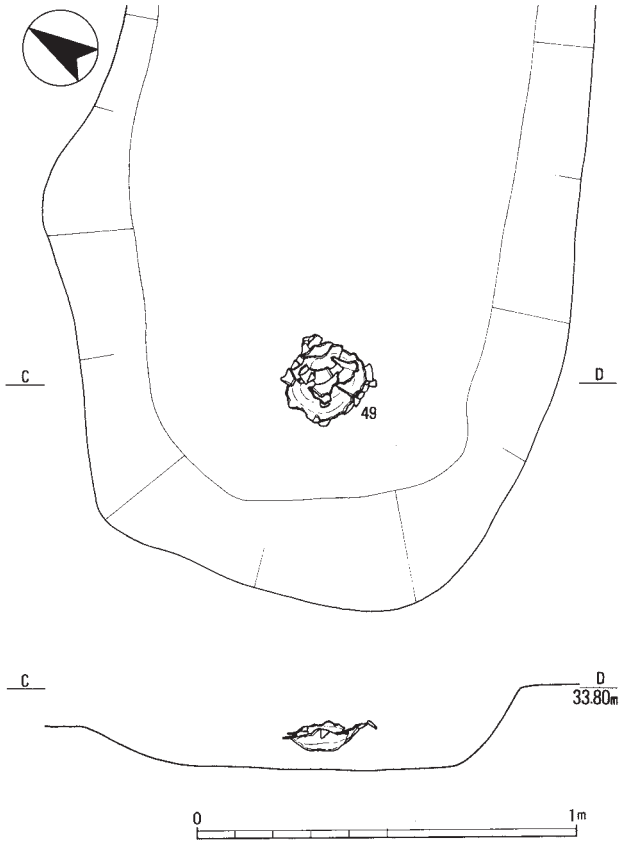
コーナー部分（ＳＤ119）は平面形が「Ｌ」字状で、規模は検出長3.6m・幅1.96m・深さ0.03〜0.06mでかなり浅い。

もう一方のコーナー部分（ＳＤ134）も平面形が「Ｌ」字状で、規模は検出長3.3m・幅１〜1.5m・深さ0.02mでこちらもかなり浅い。おそらく17号墓の北側の周溝と連結していたとみられる。

⑰17号墓　Ｃグループの１基である。調査区のなかで最も南側に位置している。削平を受けているものの北側を中心に東及び西側の周溝の一部を検出することができた。周溝の北東のコーナー部に陸橋部分を確認できる。南側は、斜面の傾斜地であるため削平されているとみられ検出できなかった。全体の



第31図　18号墓遺物出土状況図（１／20）



第32図　19号墓遺物出土状況図（１／20）

規模は、東西11.8m・南北６m以上である。Ｂグループ東側の９・10・11・19号墓の墳墓群と揃えられていた造営された可能性が高い。

東側周溝（ＳＤ128）は、東半分が調査区外であるものの確認できた。平面形は、その加減もあり三角形状である。規模は、検出長5.28m・幅1.96m・深さ0.03～0.2mである。

北側周溝（ＳＤ111）は、平面形が直線的な形状である。規模は、検出長9.15m・幅1.36～1.66m・深さ0.2～0.3mである。遺物は、溝底から浮いた状態で大型壺（50）・細頸壺（51・52）が出土している。大型壺は、溝底より上で横倒しの状態で出土しており、他のものも含めて転落したものであろうとみられる。

西側周溝（ＳＤ117）は、後世の遺構によってかなり削平を受けてかなり不明瞭である。遺物の時期から中期中葉とみられる。

⑱18号墓　Ｂグループ東側に属する８号墓と９号墓間の13～14mの空間地に想定できそうである。その理由はＳＫ150とその周辺から弥生土器が出土していることとその出土点は９号墓の北側の周溝北裾から９m前後である。その規模は、９号墓のものに相似することといったことである。後世の削平を受けていることで18号墓の周溝そのものが消滅してしまい、土坑状に遺物出土の部分だけが残存したのでなかろうか。おおよその推定規模は９m前後で、平面形は正方形とみられる。ＳＫ150が18号墓の北側の周溝最深部辺りとも考えられる。遺物は、この18号墓付近出土の包含層のものを含めて細頸壺（47・48）・広口壺（53）・壺体部（54）・壺底部（55・56）が出土している。

⑲19号墓　Ｂグループ東側に属する11号墓と17号墓間の空間地に想定できそうである。その理由は、弥生土器が出土している溝ＳＤ74がある。ＳＤ74から11号墓の南北間は、12mであり11号墓の南北方向の規模と一致するからである。ここに方形周溝墓が存在しないとＳＤ74の存在する説明をつけることができない。よってＳＤ74が南側の周溝とみなすことができよう。推定であるが全体の規模は、南北12.4mとみられる。平面形はやや長方形であろう。

南側周溝（ＳＤ74）は、平面形が直線的である。規模は、検出長4.6m・幅1.28m・深さ0.06～0.4mである。遺物は、溝底から浮いた状態で壺体部（49）が出土している。

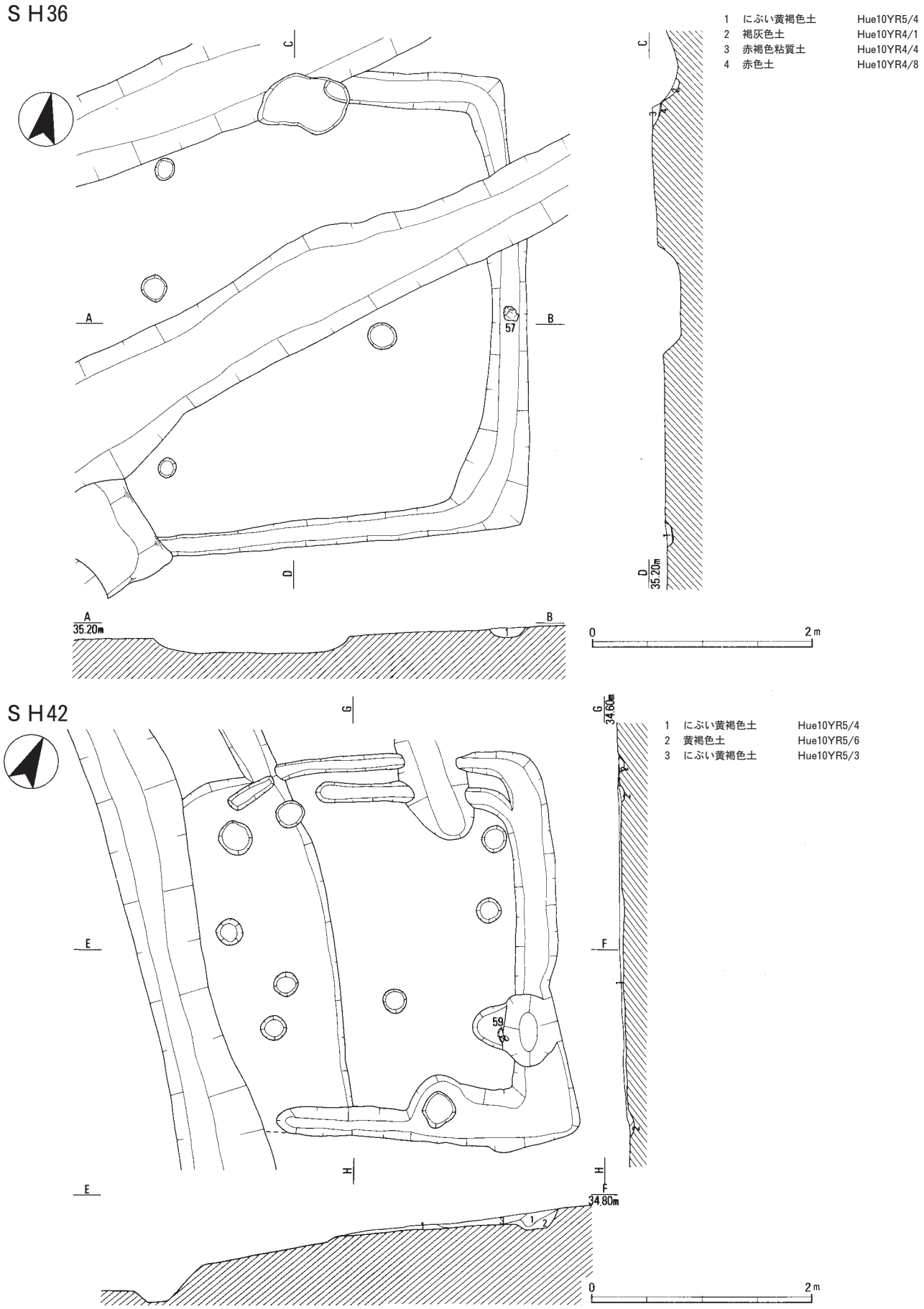
（２）奈良時代

調査区の中央から西側にかけては、竪穴住居は点々と存在してまばらである。中央付近から東側にかけては、非常にかたまって検出することができた。そのため竪穴住居は、重複が著しく少なくとも３回以上の建て直しを行っていることが判明した。また、掘立柱建物は、３間×２間の総柱建物が調査区西北の位置に存在しており、その建物から南側にかけて建物群があったと判断される。

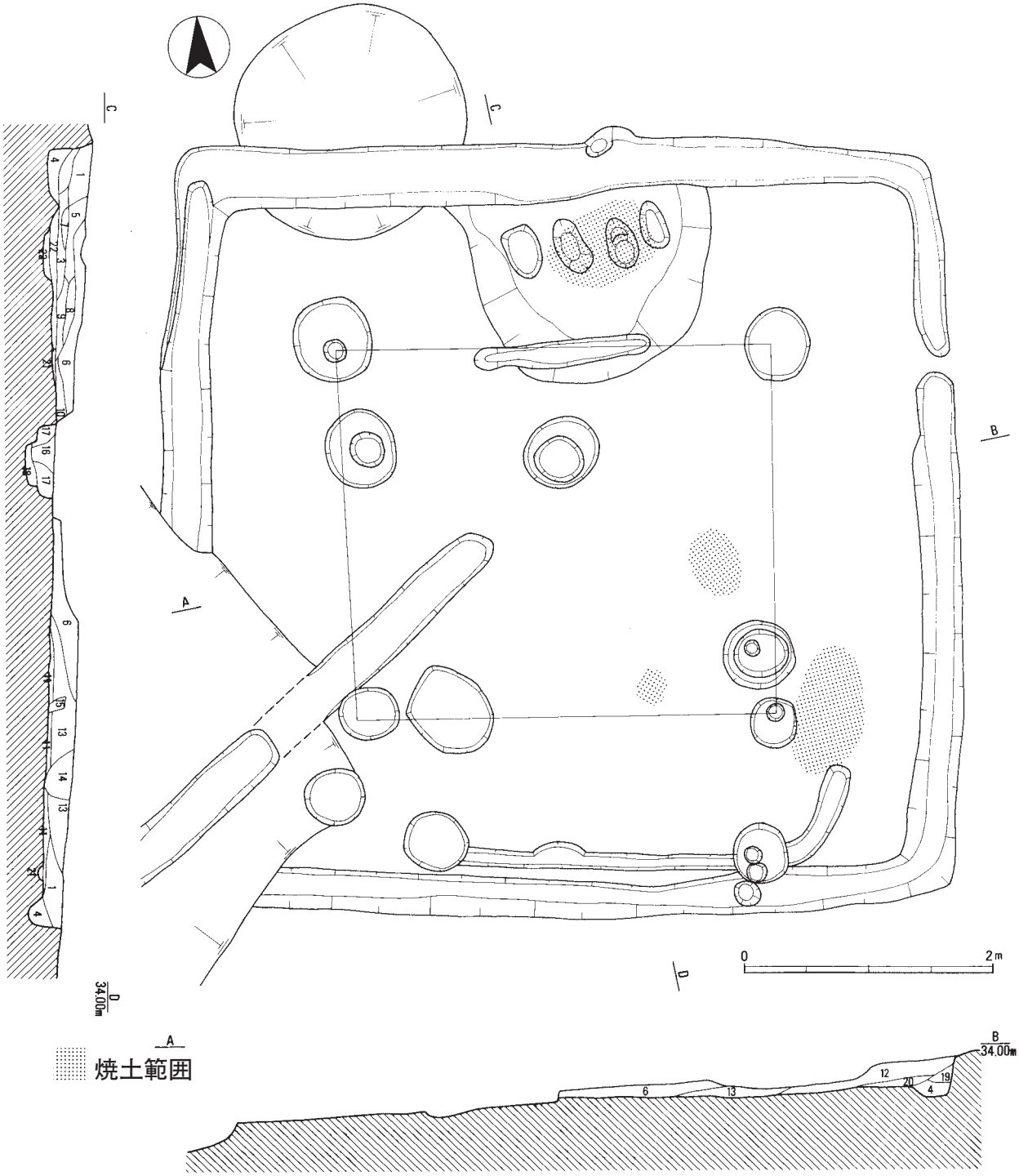
１）竪穴住居

①ＳＨ36　Ｄ９区において検出した。調査区の西側中ほどに位置している。平面形は、長方形であろうか。規模は南北4.18m・東西3.3m以上で、床面積は約13.8㎡以上である。深さは、ほぼ遺構検出面で検出できほとんど深さはない。主柱穴とみられる西側の２つの柱穴間は、南北2.75mで柱穴の径はそれぞれ0.2m前後・深さ0.03mである。主柱穴でない可能性も捨てきれない。北側壁周溝中央付近において焼土痕跡が認められた。カマド跡とみられる。貯蔵穴は確認できなかった。壁周溝は、北から東西側にかけて幅0.25～0.5m・深さ0.06mである。東南隅がやや幅広に残る。遺物には、土師器杯（57）が出土している。この竪穴住居の時期は、７世紀後半とみられる。

②ＳＨ42　Ｂ・Ｃ８区において検出した。調査区の最も南西側に位置している。平面形は、ほぼ正方形であろう。規模は南北3.62m・東西3.3m以上で、床面積は11.9㎡以上である。深さは全体的に浅く、遺構検出面から0.08mである。主柱穴と捉えた柱穴間は、東西2.4mで柱穴の径は0.23～0.3m・深さ0.08mである。主柱穴でない可能性も捨てきれない。東側壁周溝の南寄りで焼土痕跡が認められた。カマド跡とみられる。貯蔵穴は検出できなかった。しかし南側の壁周溝やや東寄りに柱穴状の遺構が認められる。壁周溝は、北と東及び南側にかけて確認した。規模は、幅0.14～0.38m・深さ0.08mである。北側の壁周溝の内側にもう１条溝が認められた。一方の増築ないし建て直しとみられる。ここでは、東と南

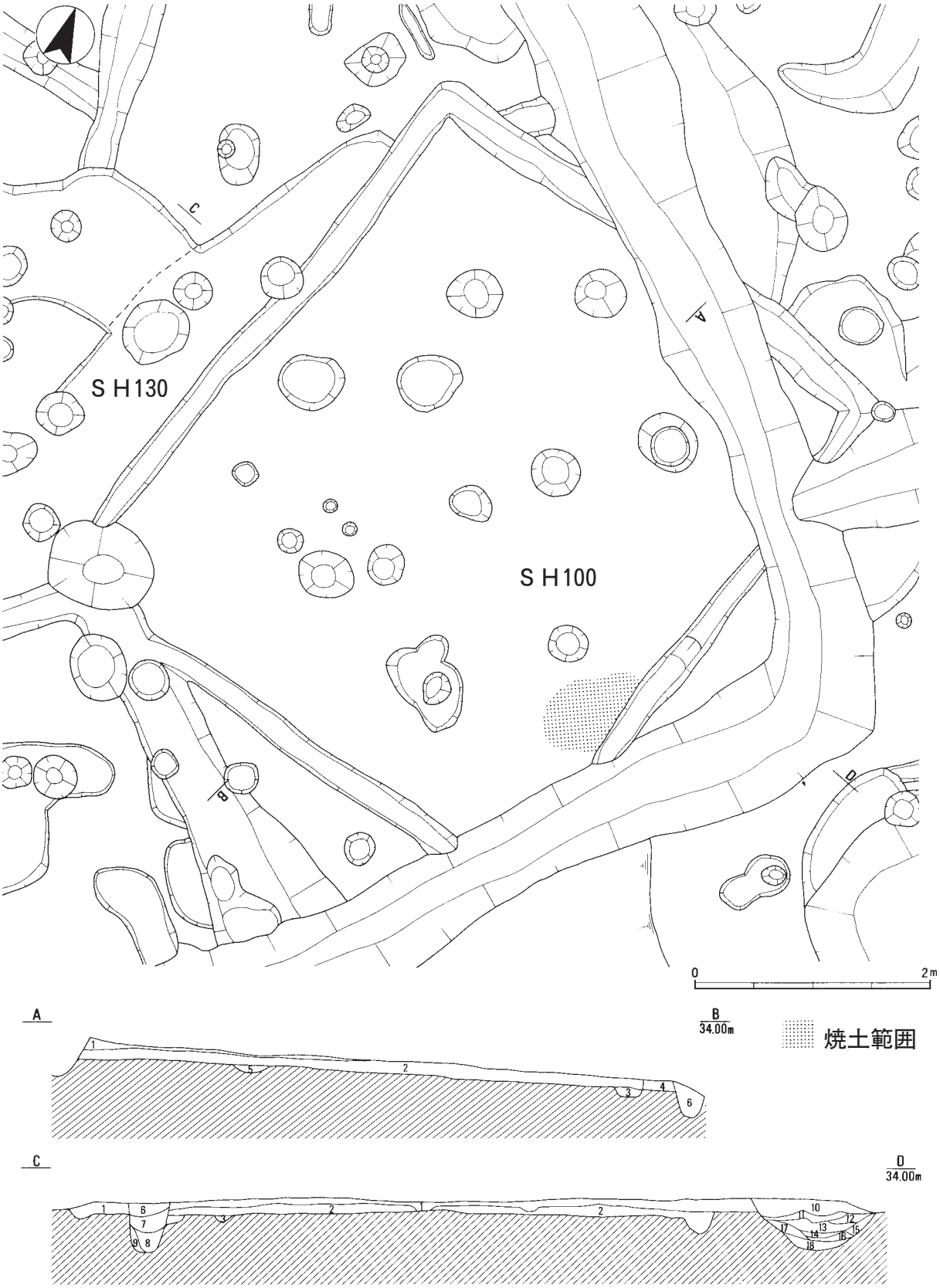


第33図　ＳＨ36・42実測図（１／50）



1	褐色土	Hue7.5YR4/6	11	褐灰色土	Hue7.5YR4/1
2	褐灰色土	Hue7.5YR4/1（褐色土粒子を含む）	12	褐色土	Hue7.5YR4/4（黒褐色土を含む）
3	褐灰色土	Hue7.5YR4/1	13	明褐色粘質土	Hue7.5YR5/6
4	褐灰色粘質土	Hue7.5YR4/1	14	褐色土	Hue7.5YR4/4
5	明褐色粘質土	Hue7.5YR5/8	15	黒褐色土	Hue10YR2/1
6	褐色土	Hue7.5YR4/3	16	褐灰色粘質土	Hue10YR4/1
7	灰褐色土	Hue7.5YR4/2	17	明褐色粘質土	Hue7.5YR6/8
8	褐色土	Hue7.5YR4/4	18	明黄褐色粘質土	Hue10YR6/8
9	明褐色粘質土	Hue7.5YR5/8	19	灰黄褐色土	Hue10YR4/2
10	褐色土	Hue7.5YR4/3	20	灰黄褐色砂質土	Hue10YR4/2（明褐色土を多く含む）

第34図　ＳＨ50実測図（１／50）



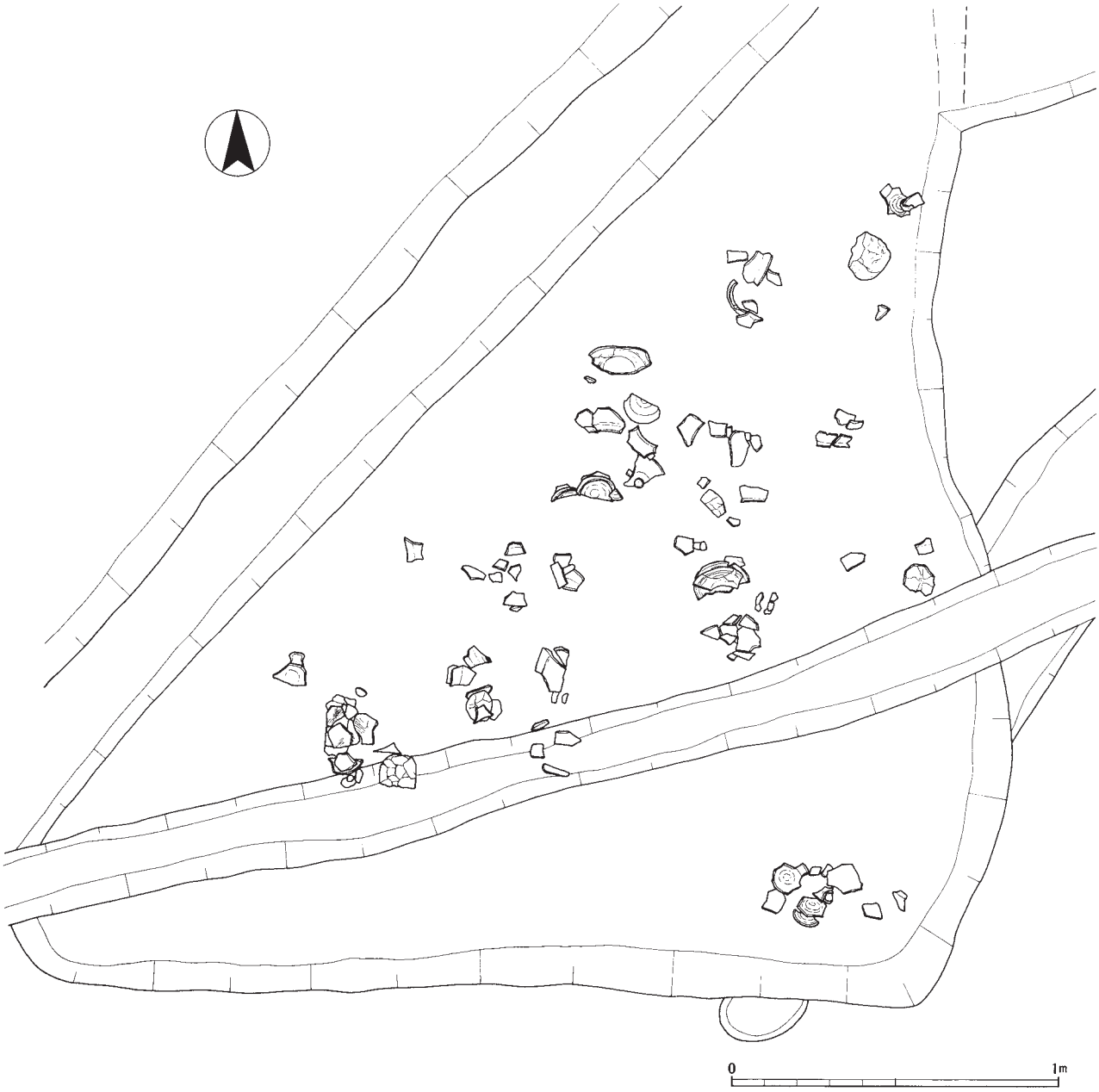
第35図　S H100・130実測図（1／50）

側の壁周溝が北側と比較して幅広であることから建て直しの可能性があろう。遺物には、須恵器杯蓋・杯身（58・59）が出土している。この竪穴住居の時期は、7世紀末から8世紀初頭とみられる。

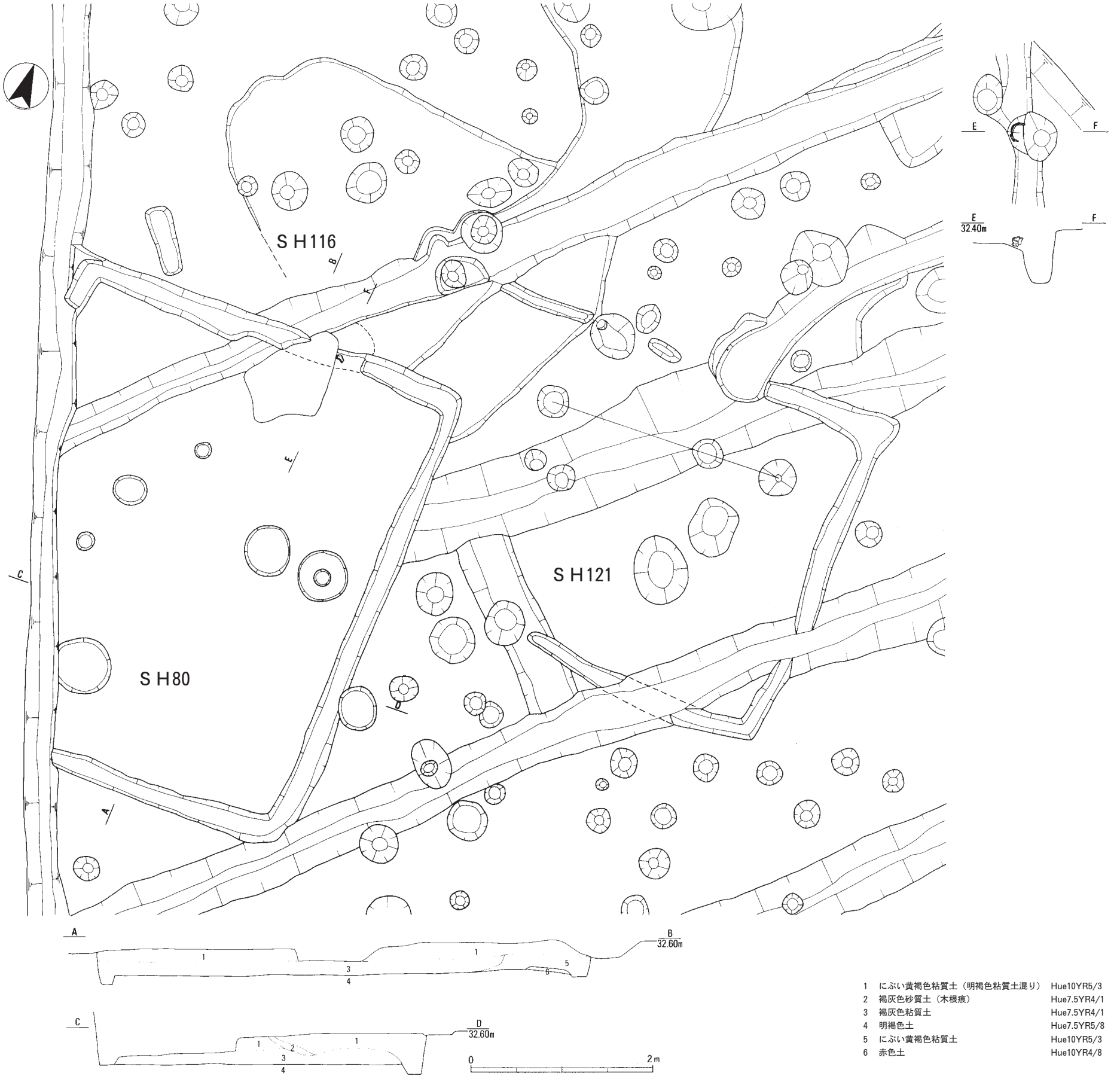
③ＳＨ50　Ｃ・Ｄ13区からＣ・Ｄ14区にかけて検出した。調査区の中央やや南側に位置している。検出した竪穴住居のなかで最も大きいものである。平面形は、ほぼ正方形である。規模は南北6.23m・東西6.6mで、床面積は41.1㎡である。深さは、遺構検出面から最深部で0.25mである。主柱穴間は、南北3m・東西3.52mで柱穴の径は0.44～0.7m・深さ0.08～0.52mである。北側壁周溝中央付近において焼土痕跡が認められた。カマド跡とみられる。貯蔵穴は確認できなかった。壁周溝は、ほぼ全周している。規模は、幅0.3m前後・深さ0.15m前後である。

また、建て替えがあったとみられ、竪穴住居内において壁周溝及び焼土痕跡が数カ所にわたってみとめられた。遺物は、土師器杯・甕・須恵器杯蓋・高杯（60～65）が出土している。この竪穴住居の時期は、7世紀後葉とみられる。

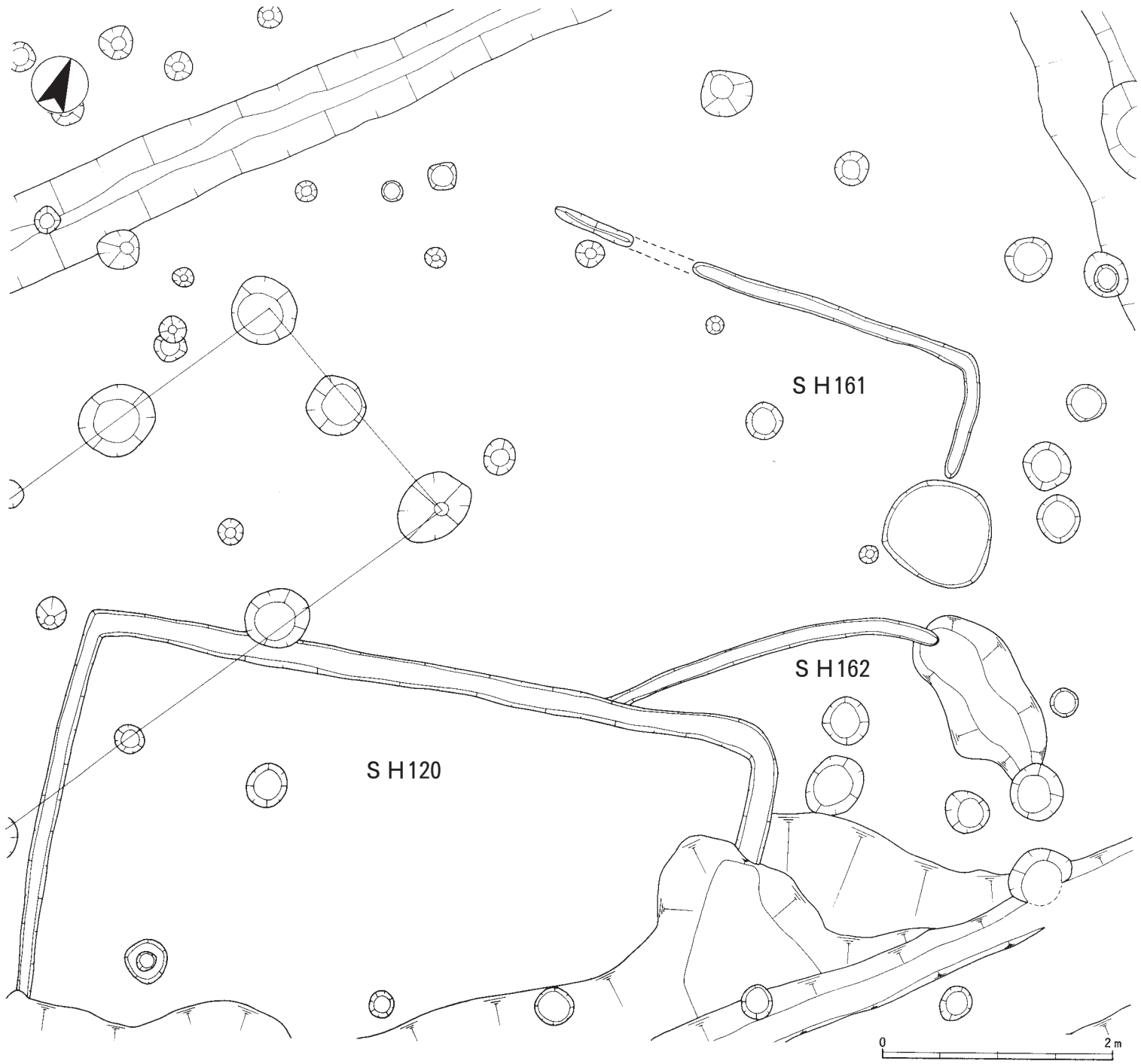
④ＳＨ80　Ｂ20・21区において検出した。竪穴住居の一部は、調査区外であるが大部分を検出することができた。平面形は、長方形で南北に長い。規模



第36図　ＳＨ112遺物出土状況図（1／20）



第37図　ＳＨ80・116・121実測図　（１／50）



第38図　ＳＨ120・161・162平面図　（１／50）

は南北5.5m・東西4.54mで、床面積は約25㎡である。深さは、遺構検出面から0.3〜0.4mである。柱穴を確認しているものの主柱穴と判断し難い。北側やや東寄り付近において焼土痕跡が認められた。カマド跡とみられる。貯蔵穴は確認できなかった。壁周溝は、ほぼ全周している。溝の規模は、幅0.26m前後・深さ0.1m前後である。遺物には、土師器皿・甕・須恵器杯蓋・鉢・製塩土器（66〜72）が出土している。この竪穴住居の時期は、8世紀初頭とみられる。

⑤ＳＨ93　Ｂ15区からＣ15区にかけて検出した。調査区の中程南側に位置している。平面形は、やや長方形であろう。規模は一辺3m以上である。壁周溝は、北側から東側にかけて確認できた。ＳＤ98もこの竪穴住居の壁周溝の可能性が高い。カマド跡や貯蔵穴は、確認できなかった。遺物は、須恵器杯蓋・杯身（73・74）が出土している。この竪穴住居の時期は、8世紀前葉から中葉とみられる。

⑥ＳＨ100　Ｇ18・19区において検出した。調査区のやや東側中ほどに位置している。平面形はほぼ長方形で長辺5.55m・短辺4.77mで、床面積は26.5㎡である。検出面からの深さは0.12m前後である。確実性にやや欠けるものの主柱穴間は、東西1.8m・南北3.1mである。柱穴の径は0.24〜0.5m・深さ0.1〜0.29mである。東側の壁周溝南寄りにおいて焼土痕跡があり、カマド跡とみられる。貯蔵穴は確認できなかった。壁周溝はほぼ全周する。溝の規模は、幅0.26〜0.3m、深さ0.07〜0.2mである。ＳＤ136は、この竪穴住居の排水溝の可能性が高い。遺物には、土師器皿・甕・須恵器杯身・椀・甕（79〜85）が出土している。この竪穴住居の時期は、7世紀後葉から8世紀前葉にかけてとみられる。

⑦ＳＨ112　Ｇ20区からＧ21区にかけて検出した。調査区の北東部に位置している。平面形は後世の溝によって削平されており不明であるが、検出長で長辺3.2m以上・短辺2.9m以上である。深さは、検出面から0.1m前後である。主柱穴とみられるものは、確認できなかった。また、南東寄りの箇所で焼土痕跡が認められた。カマド跡とみられる。貯蔵穴や壁周溝も確認できなかった。遺物は、まとまっており良好な一括資料である。出土したものは、土師器甕・鍋か甑の把手部分・須恵器杯蓋・杯身・椀・高杯・鉢（86〜109）がある。竪穴住居の時期は、7世紀後葉から8世紀前葉にかけてとみられる。

⑧ＳＨ116　Ｃ19区からＣ20区にかけて検出した。調査区の南東側中に位置している。ＳＨ80とＳＨ121によって東側半分は削平されているが、僅かであるが西側を中心に確認できた。平面形は、現状では判断できない。規模は、一辺4.4m以上である。主柱穴は、判断つかない。カマド跡や貯蔵穴、壁周溝は検出できなかった。ＳＨ80・121との重複関係からみると最も古い竪穴住居とみられる。

⑨ＳＨ120　Ｄ23区からＥ23区にかけて検出した。調査区の最も東側に位置している。平面形は、長方形か正方形か断定できない。規模は、長辺6.25m・短辺3.49m以上である。深さは、遺構検出面において壁周溝を確認しているためほとんどない。主柱穴は、判断しがたい。カマド跡や貯蔵穴は検出できなかった。壁周溝は、西側を中心に検出できた。溝の規模は、幅0.22m前後・深さ0.1m前後である。竪穴住居の時期は遺物が出土していないため決め手に欠くが、おおよそ他の竪穴住居と兼ね合いを考えると7世紀末から8世紀初頭と考えてよかろう。

⑩ＳＨ121　Ｃ20区からＤ20区にかけて検出した。調査区の南東側に位置している。平面形は、長方形である。規模は長辺4.58m・短辺3.98mで、床面積は約18.2㎡である。深さは、遺構検出面で壁周溝を確認した。主柱穴は、判断し難い。カマド跡や貯蔵穴は確認できなかった。壁周溝は、ほぼ全周しており、幅0.3m前後・深さ0.2m前後である。竪穴住居の時期は遺物が出土していないため決め手に欠くが、おおよそ他の竪穴住居と兼ね合いを考えると7世紀末から8世紀初頭と考えてよかろう。ＳＨ80との重複関係からみるとＳＨ80よりも古いと考えられる。

⑪ＳＨ130　Ｆ18区からＧ18地区にかけて検出した。竪穴住居ＳＨ100によってかなり削平を受けている。平面形は、正方形であろうか。一辺3.5m前後・もう一辺が0.28m以上である。主柱穴は、他の竪穴住居でも判断つかないものがある。貯蔵穴・壁周溝・カマド跡は、確認できなかった。竪穴住居の時期は遺物が出土していないため決め手に欠くが、おおよそ他の竪穴住居と兼ね合いを考えると7世紀

末から8世紀初頭と考えてよかろう。さらにＳＨ100との重複関係からＳＨ100よりも古いとみられる。

⑫ＳＨ149　Ｂ11・12区において検出した。調査区の南側壁際に位置している。平面形は、断定できないが長方形であろう。規模は、一辺3.9mである。もう一辺は、不明である。主柱穴は、判断し難い。西壁やや北寄りで焼土痕跡をのこす。カマド跡とみられる。貯蔵穴は検出できなかった。壁周溝は北から東側にかけて部分的に残り、規模は幅0.18m・深さ0.05mである。竪穴住居の時期は遺物が出土していないため決め手に欠くが、おおよそ他の竪穴住居と兼ね合いを考えると７世紀末から８世紀初頭と考えてよかろう。

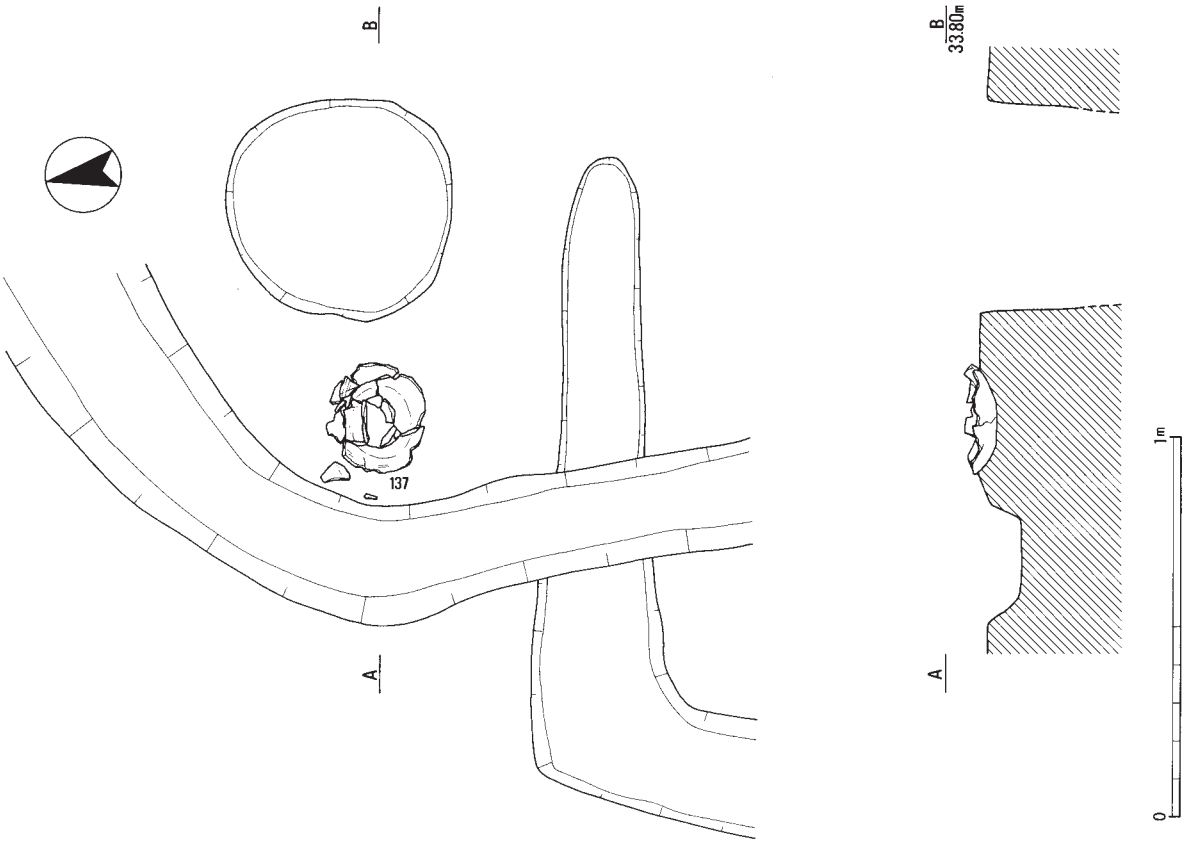
⑬ＳＨ161　Ｄ22区からＦ22区にかけて検出した。調査区の東側中ほどに位置している。竪穴住居ＳＨ120・162と重複している。平面形は、長方形であろう。壁周溝は、北側の一部及び西側にかけて幅0.15m前後・深さ0.05m前後である。貯蔵穴の可能性のある遺構（ＳＫ137）を検出している。ＳＫ137は平面形がほぼ円形で、規模は長径0.95m・短径0.89m・深さ0.04mである。かなり浅い。竪穴住居の時期は遺物が出土していないため決め手に欠くが、おおよそ他の竪穴住居と兼ね合いを考えると７世紀末から８世紀初頭と考えてよかろう。

⑭ＳＨ162　Ｄ23区からＦ23区にかけて検出した。調査区の東側中ほどに位置している。ＳＨ120と重複している。平面形は、長方形であろうか判断できかねる。西側の壁周溝のみ確認できた。規模等は、全く不明である。西側の壁周溝は、幅0.2m前後・深さ0.03m前後である。竪穴住居の時期は遺物が出土していないため決め手に欠くが、おおよそ他の竪穴住居と兼ね合いを考えると７世紀末から８世紀初頭と考えてよかろう。

⑮ＳＨ176　Ｃ15区周辺においてあったとみられる。遺物は、137が出土している。おそらく貯蔵穴用の土師器と考えられる。

２）掘立柱建物

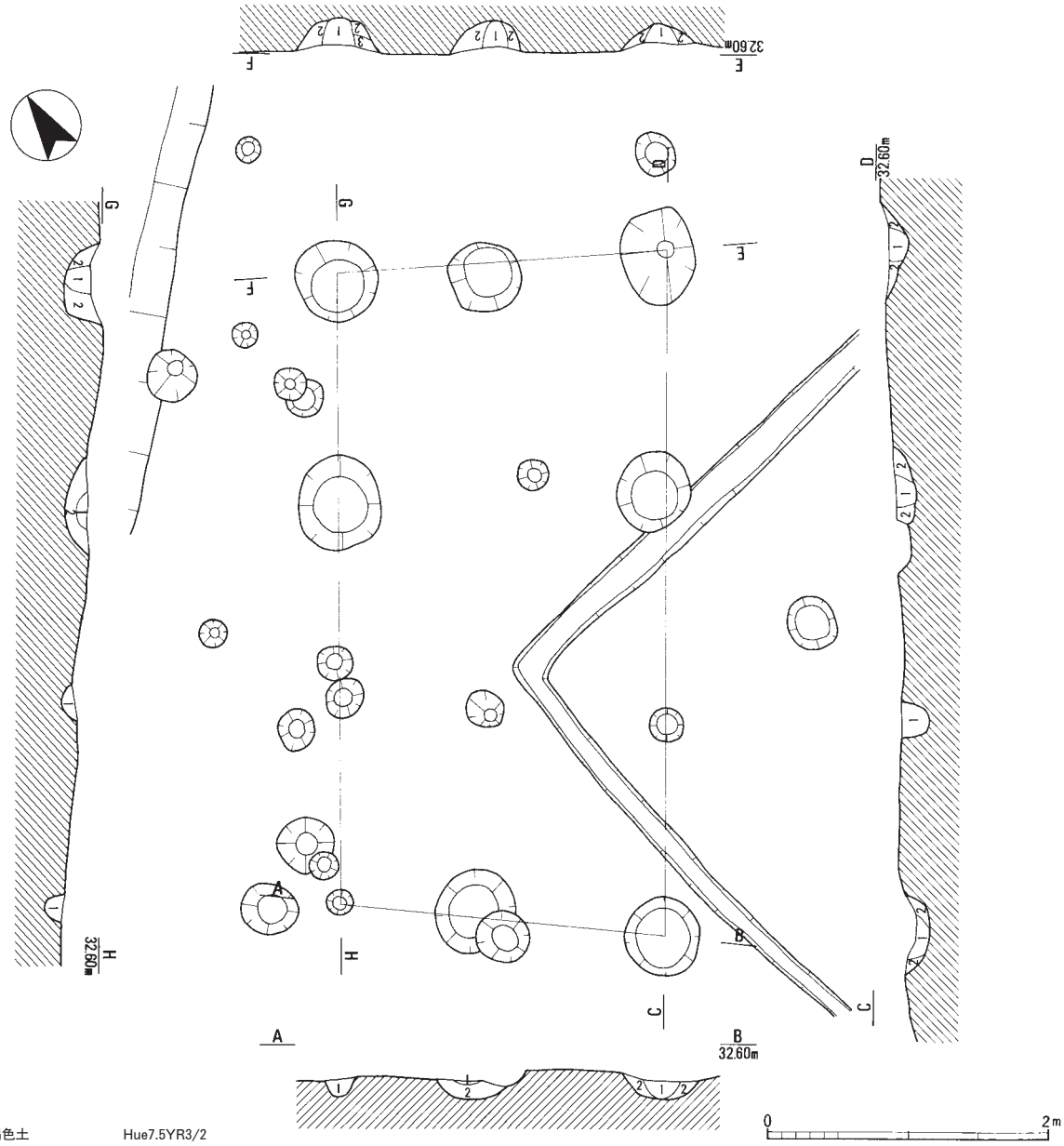
①ＳＢ163　Ｃ22区からＣ23区にかけて検出した。調査区の東側やや南よりに位置している。掘立柱建物は、桁行３間×梁行２間の側柱建物で南北棟であ



第39図　ＳＨ176遺物出土状況図（１／20）

る。棟方向は北で西に32度振れる。掘立柱建物の柱掘形は、大体が円形で0.2～0.6mである。深さ0.1～0.2mで浅く、削平されたと考えられる。柱痕跡は、明瞭に残り径0.2～0.3mを測る。建物規模は、桁行4.49～4.9m・梁行2.32～2.34mで、柱間寸法は桁行5.5尺＋5.5尺＋５尺・梁行４尺等間と推定される。したがって、建物全体の推定規模は、桁行が4.85m（16尺）、梁行が2.42m（８尺）となる。出土遺物がなく時期を判断するのに決めてを欠く。また、建物の方位も他の掘立柱建物と異なるため、奈良時代でなく中世の可能性も捨てきれない。

②ＳＢ164　Ｇ・Ｈ５区からＧ・Ｈ６区にかけて検出した。調査区の北西側中央部付近に位置している。掘立柱建物は、桁行３間×梁行２間の総柱建物で東西棟である。建物の方位は、北で西に８度振れる。掘立柱建物の柱掘形は、大体が円形ないし楕円形で0.8～1.1mである。深さ0.2～0.6mである。柱痕跡の径は0.25～0.3mである。建物規模は、桁行4.82～4.96m・梁行3.94～４mで、柱間寸法は桁行5.5尺＋5.5尺＋５尺・梁行6.5尺等間と推定される。し



1　黒褐色土　Hue7.5YR3/2
2　灰褐色土　Hue7.5YR4/2
3　褐色土　Hue10YR4/6

第40図　ＳＢ163実測図（１／50）

たがって、建物全体の推定規模は、桁行が4.85m（16尺）、梁行が3.94m（13尺）となる。出土遺物は、土師器甕（110）がある。掘立柱建物の時期は、おおよそ8世紀中葉から後葉であろう。

③ＳＢ165　Ｂ・Ｃ16区からＢ・Ｃ17区にかけて検出した。調査区中央部の西側に位置している。掘立柱建物は、桁行3間×梁行2間の側柱建物で南北棟である。柱掘形は、大体が円形で0.5～0.6m・深さ0.3～0.65mである。建物は桁行が北で西に振れる。建物規模は、桁行5.2～5.3m・梁行4.2～4.7mで、柱間寸法は桁行5.5尺等間・梁行7尺等間と推定される。したがって、建物全体の推定規模は、桁行が5m（16尺5寸）、梁行が4.24m（14尺）となる。出土遺物は、須恵器壺蓋（111）がある。掘立柱建物の時期は、おおよそ8世紀後半とみられる。

④ＳＢ167　Ｆ・Ｇ15区からＦ・Ｇ16区にかけて検出した。調査区の東側やや南よりに位置している。掘立柱建物は、桁行3間×梁行2間の側柱建物で東西棟である。建物の方位は、北である。掘立柱建物の柱掘形は、大体が円形で0.3～0.55mである。深さ0.3～0.5mである。建物規模は、桁行3.88～4.15m・梁行3.75～3.85mで、柱間寸法は桁行4.5尺等間・梁行6尺と推定される。したがって、建物全体の推定規模は、桁行が4.09m（13.5尺）、梁行が3.64m（12尺）となる。出土遺物は、須恵器鉢（112）がある。掘立柱建物の時期は、おおよそ8世紀中葉から後葉であろう。

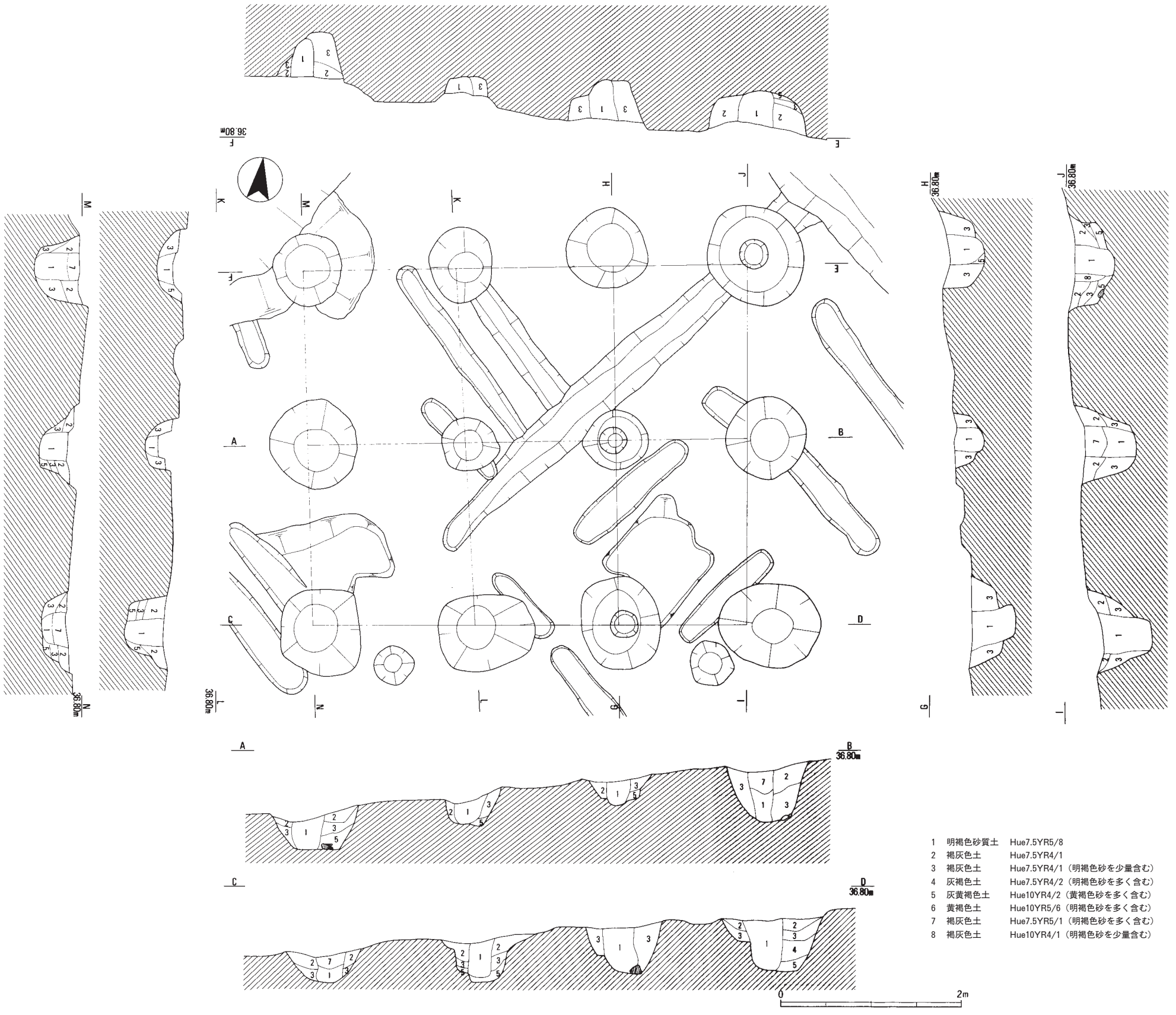
⑤ＳＢ168　Ｆ・Ｇ15区からＦ・Ｇ16区にかけて検出した。調査区の東側やや南よりに位置している。掘立柱建物は、桁行3間×梁行2間の側柱建物で東西棟である。建物の方位は、北である。掘立柱建物の柱掘形は、大体が円形で径0.2～0.5mで、深さ0.3～0.6mである。建物規模は、桁行3.28～3.62m・梁行3.2～3.4mで、柱間寸法は桁行4尺＋4尺＋3尺・梁行4尺＋6尺と推定される。したがって、建物全体の推定規模は、桁行が3.33m（11尺）、梁行が3.03m（10尺）となる。出土遺物はないため、掘立柱建物の時期の決め手に欠く。

⑥ＳＢ169　Ｅ・Ｆ20区からＥ・Ｆ21区にかけて検出した。調査区の東側やや南よりに位置している。掘立柱建物は、桁行3間×梁行2間の側柱建物で東西棟である。建物の方位は、北である。掘立柱建物の柱掘形は、大体が円形で0.5～0.6mである。深さ0.2～0.35mである。南側柱は後世の溝によって削平されたとみられる。建物規模は、桁行4.5～4.6m・梁行3.28mで、柱間寸法は桁行5尺＋5.5尺＋5尺・梁行5尺等間と推定される。したがって、建物全体の推定規模は、桁行が4.7m（15.5尺）、梁行が3.03m（10尺）となる。出土遺物はないため、掘立柱建物の時期の決め手に欠く。

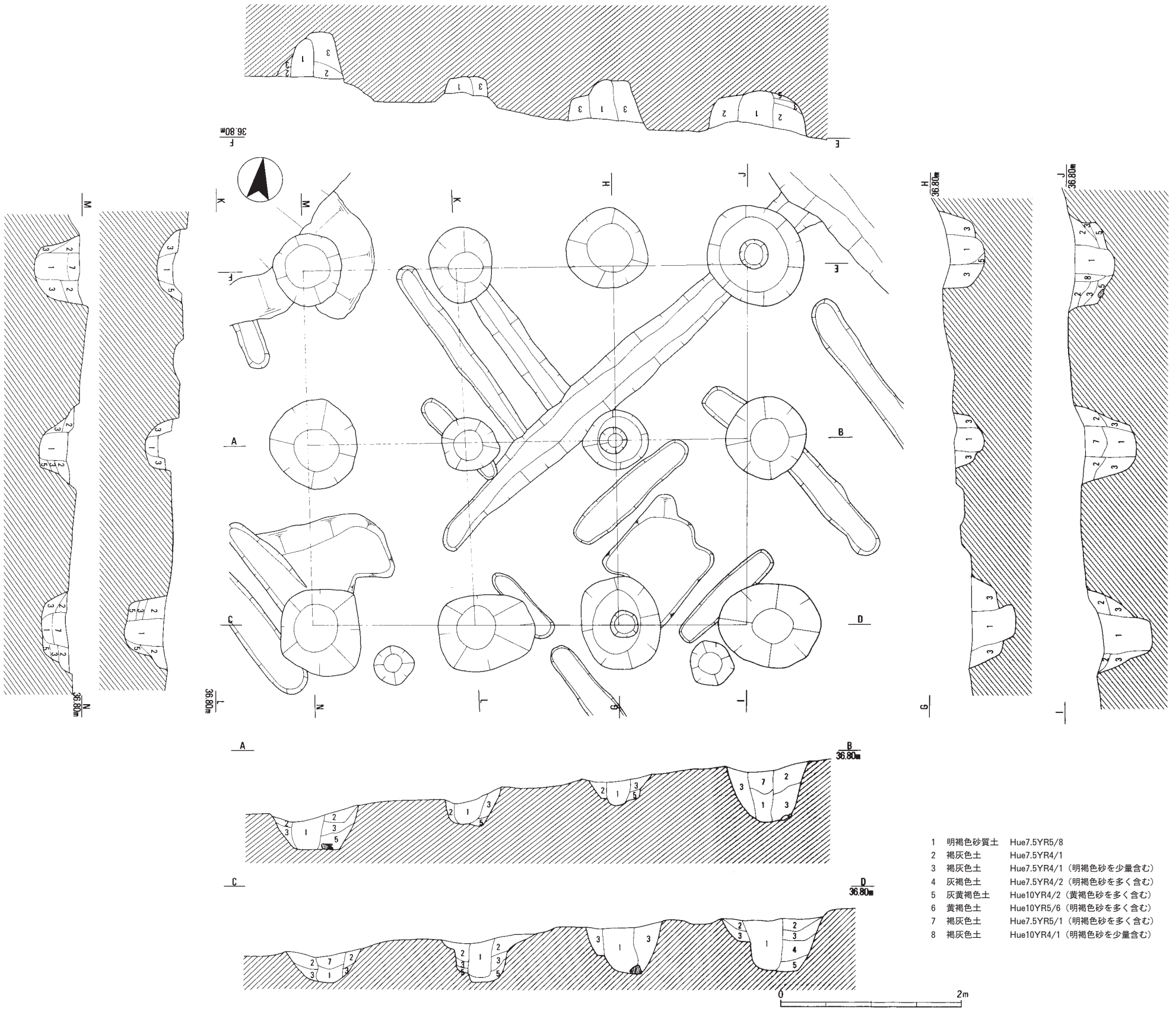
⑦ＳＢ170　Ｄ・Ｅ14区からＤ・Ｅ15区にかけて検出した。調査区の東側やや南よりに位置している。掘立柱建物は、桁行3間×梁行2間の側柱建物で東西棟である。建物方位は、北で東に振れる。掘立柱建物の柱掘形は、大体が円形で0.3～0.7mで、深さ0.3～0.7mでやや西側の柱が深い。建物規模は、桁行3.7～3.75m・梁行3.2～3.25mで、柱間寸法は桁行4.5尺＋4尺＋4尺・梁行5.5尺等間と推定される。したがって、建物全体の推定規模は、桁行が3.79m（12.5尺）、梁行が3.33m（11尺）となる。出土遺物は、土師器甕・製塩土器（113～115）がある。掘立柱建物の時期は、おおよそ8世紀中頃以降であろう。

⑧ＳＢ171　Ｅ・Ｆ23区からＥ・Ｆ24区にかけて検出した。調査区の東側やや南よりに位置している。掘立柱建物は、桁行3間×梁行2間の側柱建物で南北棟である。建物の方位は北で西に振れる。掘立柱建物の柱掘形は、大体が円形で0.35～0.7mで、深さ0.1～0.5mで南側の柱穴は、浅く後世の削平によるものとみられる。建物規模は、桁行6.62～6.7m・梁行4.06～4.28mで、柱間寸法は桁行5.5尺＋10尺＋6.5尺・梁行6.5尺＋7尺と推定される。したがって、建物全体の推定規模は、桁行が6.67m（22尺）、梁行が4.09m（13.5尺）となる。出土遺物はないため、掘立柱建物の時期の決め手に欠く。

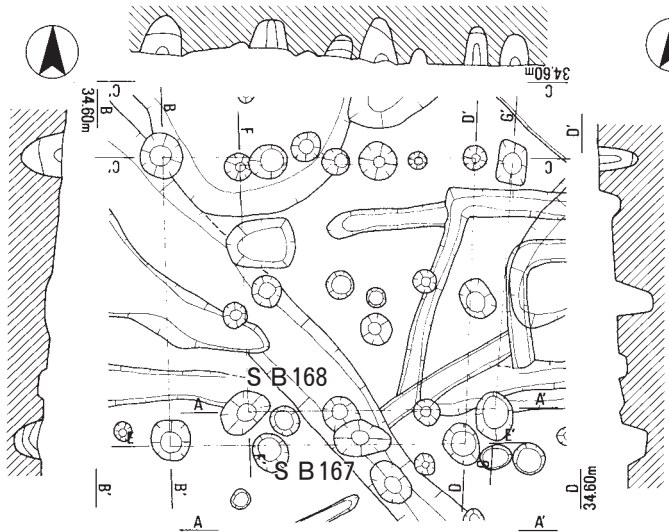
⑨ＳＢ172　Ｃ・Ｄ・Ｅ17区からＣ・Ｄ・Ｅ19区にかけて検出した。調査区の東側やや南よりに位置している。掘立柱建物は、桁行3間×梁行3間の側柱建物である。掘立柱建物の柱掘形は、大体が円形で0.4～0.65m、深さ0.35～0.6mである。建物の方位は、梁行が北で東に振れる。建物規模は桁行4.32～4.5m・梁行4.45～4.52mで、柱間寸法は桁行5.5



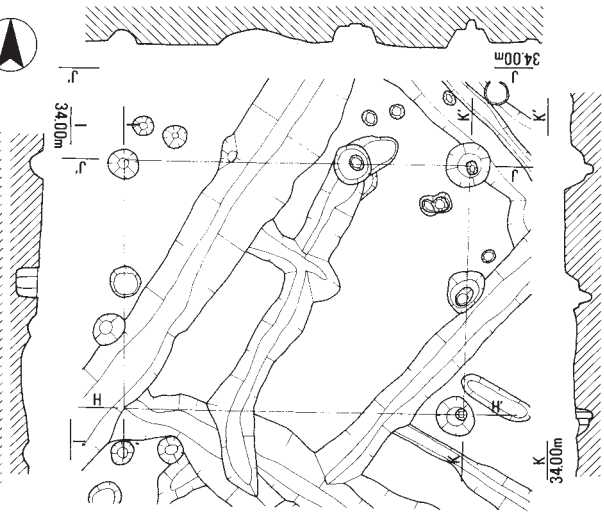
第41図　ＳＢ164実測図　（1／50）



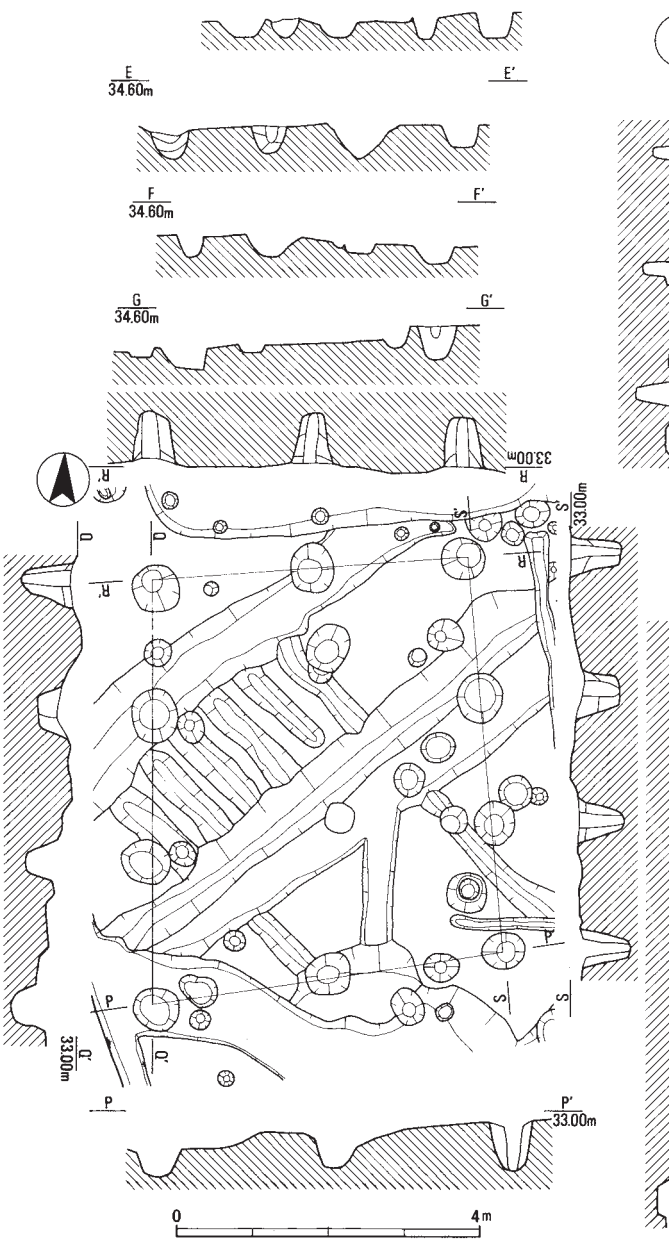
第41図　ＳＢ164実測図　（1／50）



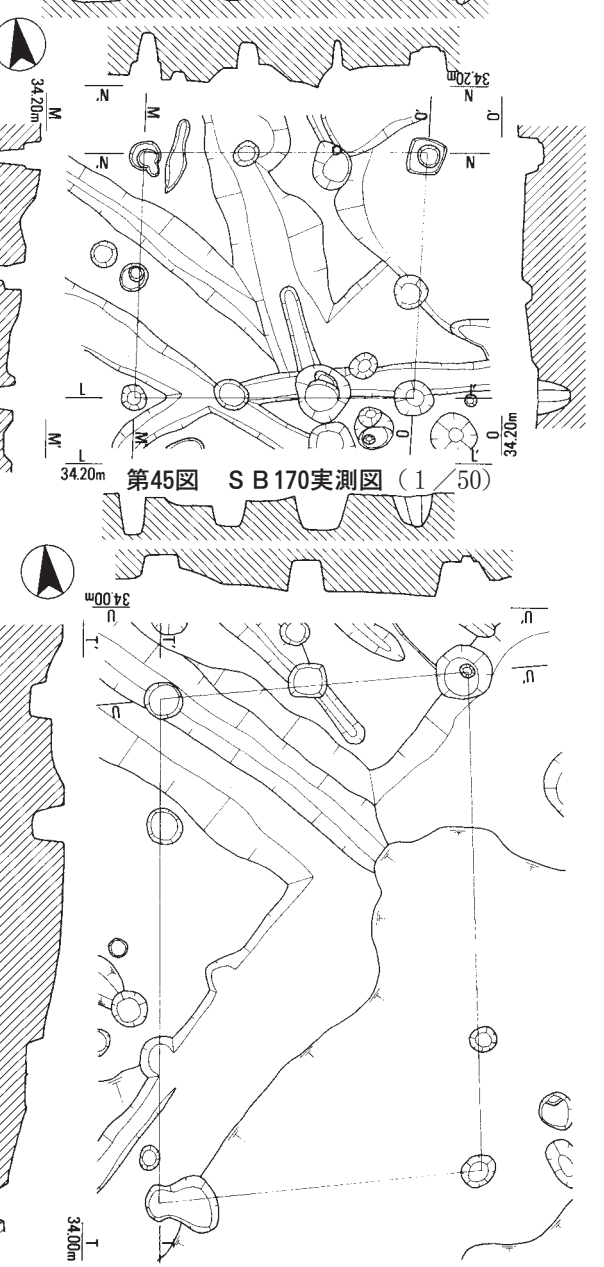
第42図　ＳＢ167・168実測図（１／50）



第44図　ＳＢ169実測図（１／50）



第43図　ＳＢ165実測図（１／50）



第45図　ＳＢ170実測図（１／50）

第46図　ＳＢ171実測図（１／50）

尺＋４尺＋5.5尺・梁行4.5尺＋5.5尺＋5.5尺と推定される。したがって、建物全体の推定規模は、桁行が4.55m（15尺）、梁行が4.7m（15.5尺）となる。出土遺物は、須恵器杯蓋（116）がある。掘立柱建物の時期は、おおよそ８世紀中葉から後葉であろう。

⑩ＳＢ173　Ｃ・Ｄ・Ｅ17区からＣ・Ｄ・Ｅ19区にかけて検出した。調査区の東側やや南よりに位置している。掘立柱建物は、桁行３間×梁行３間の側柱建物である。掘立柱建物の柱掘形は、大体が円形で0.4～0.7mで、深さ0.15～0.5mである。建物の方位は北である。建物規模は、桁行6.32～6.42m・梁行6.32～6.48mで、柱間寸法は桁行７尺＋5.5尺＋8.5尺・梁行７尺＋７尺＋８尺と推定される。したがって、建物全体の推定規模は、桁行が6.36m（21尺）、梁行が6.67m（22尺）となる。出土遺物は、土師器杯・高杯・須恵器杯蓋・甕（117～120）がある。掘立柱建物の時期は、おおよそ８世紀中頃以降であろう。

⑪ＳＢ174　Ｃ・Ｄ・Ｅ17区からＣ・Ｄ・Ｅ19区にかけて検出した。調査区の東側やや南よりに位置している。掘立柱建物は、桁行４間×梁行３間の側柱建物で南北棟である。建物の方位は北である。掘立柱建物の柱掘形はほとんどが円形で0.3～0.75mで、深さ0.3～0.8mである。建物の方位は、北である。建物規模は、桁行7.2～7.7m・梁行6.86～7.42mで、柱間寸法は桁行6.5尺＋6.5尺＋７尺＋4.5尺・梁行6.5尺＋9.5尺＋8.5尺と推定される。したがって、建物全体の推定規模は、桁行が7.42m（24.5尺）、梁行が7.42m（24.5尺）となる。出土遺物はないため、掘立柱建物の時期の決め手に欠く。

⑫ＳＢ175　Ａ・Ｂ18区からＡ・Ｂ19区にかけて検出した。調査区の東側やや南よりに位置している。掘立柱建物は、桁行３間×梁行２間の側柱建物で南北棟である。掘立柱建物の柱掘形は、大体が円形で0.3～0.6m、深さ0.2～0.6mである。建物の方位は、北で西に振れる。建物規模は、桁行5.72～5.96m・梁行3.94～4.06mで、柱間寸法は桁行６尺＋6.5尺＋6.5尺・梁行6.5尺等間と推定される。したがって、建物全体の推定規模は、桁行が5.76m（19尺）、梁行が3.94m（13尺）となる。出土遺物は、土師器甕（121）がある。掘立柱建物の時期は、おおよそ８世紀中頃以降であろう。

３）土坑

①ＳＫ81　Ｇ19区からＧ20区において検出した。調査区の東側やや北よりである。平面形はやや楕円形で、長径1.91m・短径1.82m・深さ0.15mである。遺物は土師器杯・須恵器杯身（138～140）が出土している。遺構の時期は、おおよそ８世紀中葉であろう。

②ＳＫ90　Ｅ16区において検出した。調査区の中央やや東よりである。平面形はやや楕円形で、長径１m・短径0.88m・深さ0.47mである。出土遺物はないため、遺構の時期の決め手に欠く。

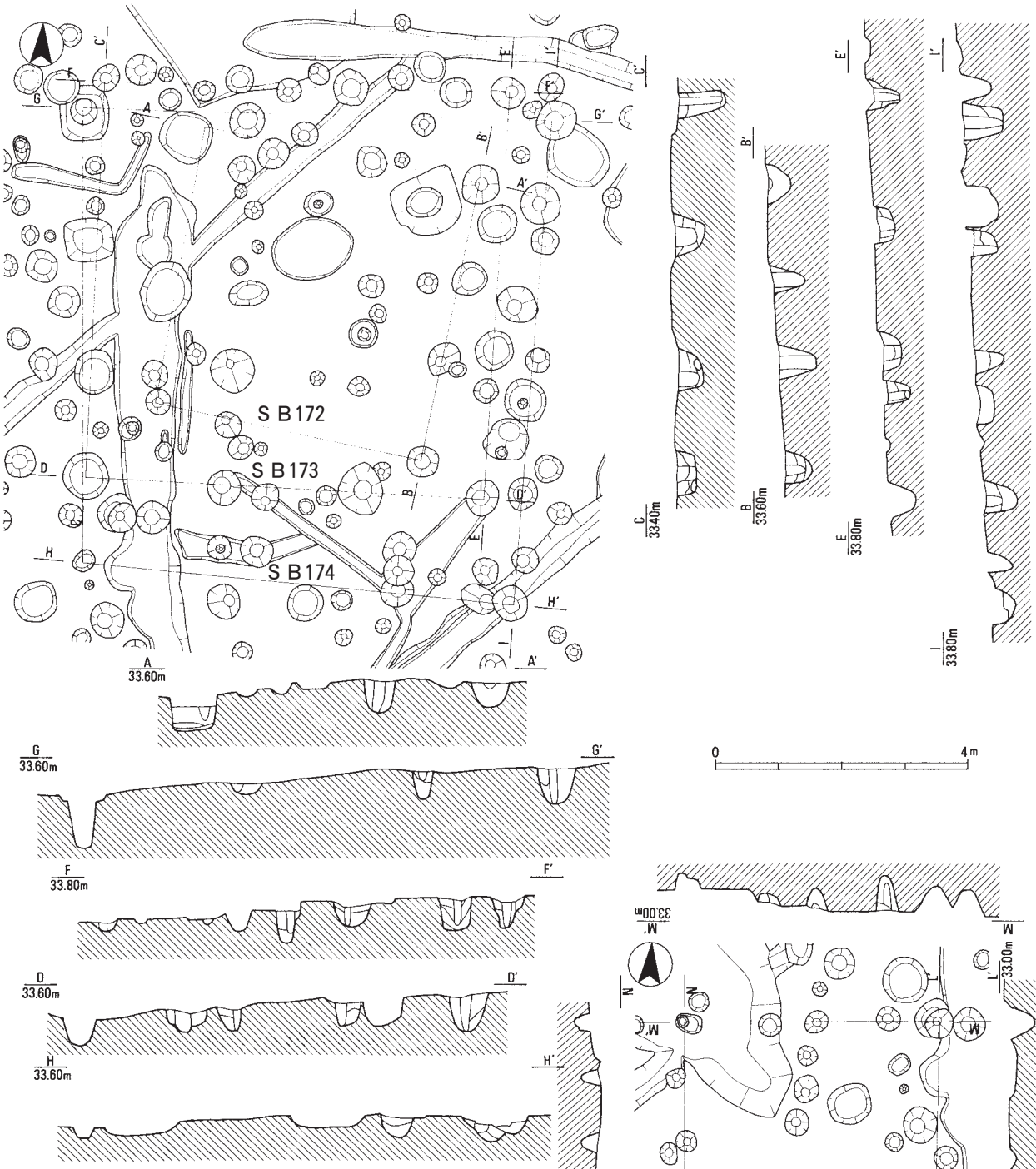
③ＳＫ142　Ａ９区において検出した。調査区西側南壁そばである。調査区によって全面検出できなかったが平面形はやや楕円形で、長径0.64m・短径0.52m・深さ0.18mである。すぐ東側には、竪穴住居が存在しておりその貯蔵穴の可能性もある。遺物は土師器甕（141）が出土している。遺構の時期は、おおよそ８世紀中葉であろう。

④ＳＫ143　Ｂ16区において検出した。方形周溝墓の14号墓そばである。平面形は長方形で、長辺5.62m・短辺1.73m・深さ0.33～0.47mである。現状では、何の遺構か不明である。出土遺物はないため、遺構の時期の決め手に欠く。

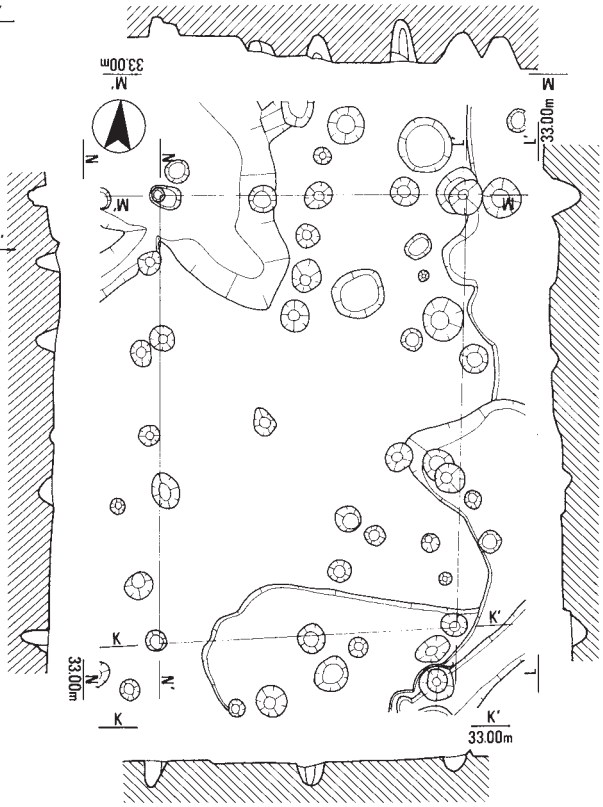
４）溝

①ＳＤ47　調査区中央部やや南よりのＤ14区からＤ15区にかけて検出した。竪穴住居ＳＨ50のほぼ北隣に位置している。ほぼ「コ」の字状に掘削されたものである。西側から北側にかけてのコーナー部分は、やや緩やかに屈折して、北側から東側にかけては、やや鋭角に屈折し途中でなくなる。溝の規模は、幅0.64～0.81m・深さ0.1～0.3mである。竪穴住居の壁周溝の可能性は、充分ある。遺物は、知多式製塩土器（144）が出土している。遺構の時期は、おおよそ８世紀中葉であろう。

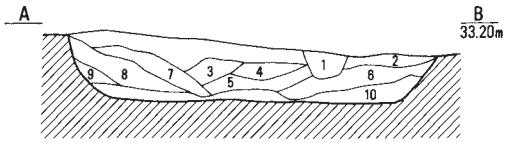
②ＳＤ76　調査区中央部やや南よりのＤ17・18区からＢ19・20区にかけて検出した。東西方向に掘削されたものである。幅0.61～1.02m・深さ0.05～0.2mである。耕作溝と比較して掘削の方向が異なり、竪穴住居の壁周溝にしては長すぎである。区画に伴う溝であろうか。遺物は、須恵器杯身・短頸壺(150・



第47図　ＳＢ172・173・174実測図（１／50）



第48図　ＳＢ175実測図（１／50）



1　暗褐色砂質土　（にぶい黄褐色砂質土混り・0.5～1cm礫含む）
2　暗褐色砂質土　（0.5～2cm礫含む）
3　褐色砂質土　（1～3cm礫含む）
4　褐色砂質土　（明褐色砂質土混り）
5　褐色砂質土　（0.5～1cm礫含む）
6　褐色砂質土　（明褐色砂質土混り・0.3～0.5cm礫含む）
7　褐色砂質土　（にぶい黄褐色砂質土混り・0.5～1cm礫含む）
8　にぶい黄褐色土　（明褐色砂混り・0.5～1cm礫含む）
9　褐色土　（にぶい黄褐色土混り）
10　褐色土　（明褐色砂混り・0.5～1cm礫含む）

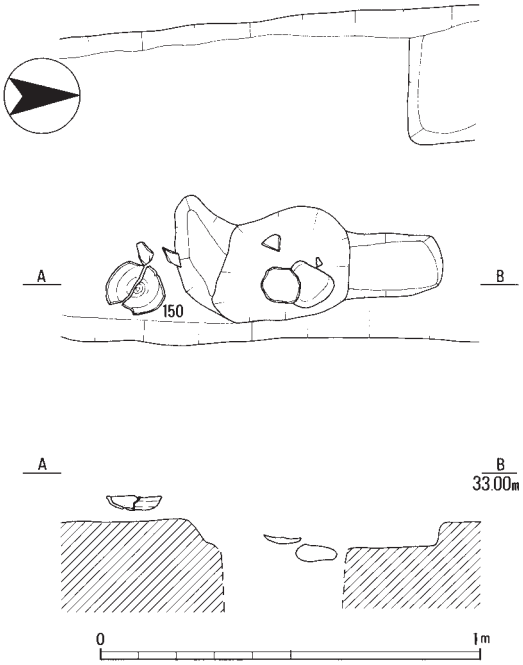
第49図　ＳＫ143実測図（１／40）

151）が出土している。建物の時期は、おおよそ８世紀中葉以降であろう。

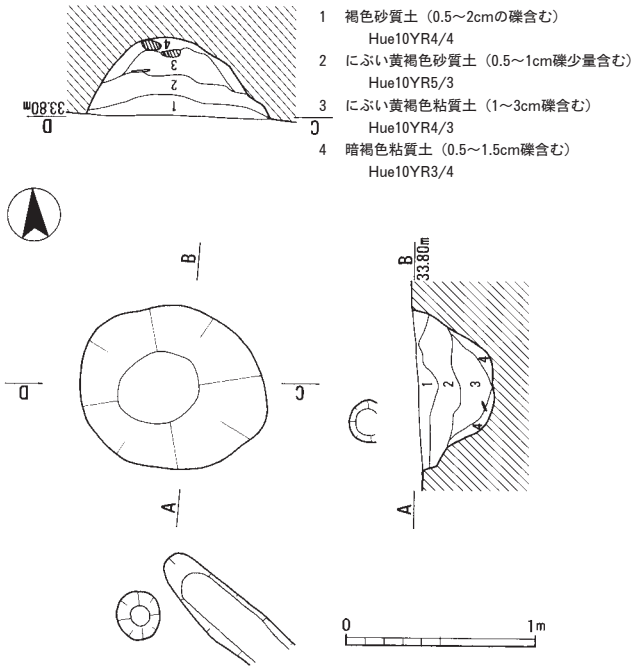
③ＳＤ84　調査区中央部中程のＥ17・18区にかけて検出した。幅0.4ｍ・深さ0.07ｍである。耕作溝と比較して掘削の方向が異なり、竪穴住居の壁周溝にしては長すぎである。竪穴住居の排水溝や区画に伴う溝の可能性もある。出土遺物はないため、遺構の時期の決め手に欠く。

④ＳＤ92（ＳＤ95・ＳＤ101・ＳＤ104）　調査区中央部やや南よりのＤ15・16区からＨ17区にかけて検出した。幅0.27～0.41ｍ・深さ0.05～0.12ｍである。耕作溝と比較して掘削の方向が異なり、竪穴住居の壁周溝にしては長すぎである。区画溝の可能性がありえる。遺物は、土師器杯・甕・須恵器杯身・椀（155～157・161）が出土している。遺構の時期は、おおよそ８世紀中葉であろう。

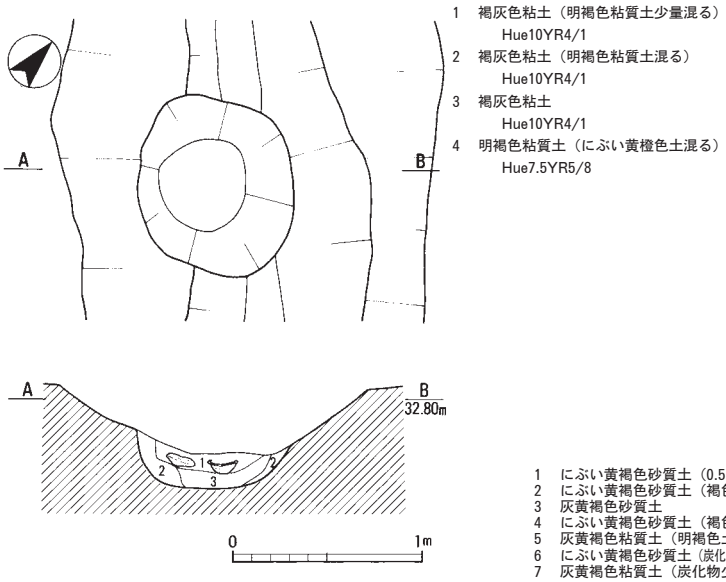
⑤ＳＤ98　調査区中央部やや南よりのＤ15区にかけて検出した。ほぼ「コ」の字状に掘削されたもの



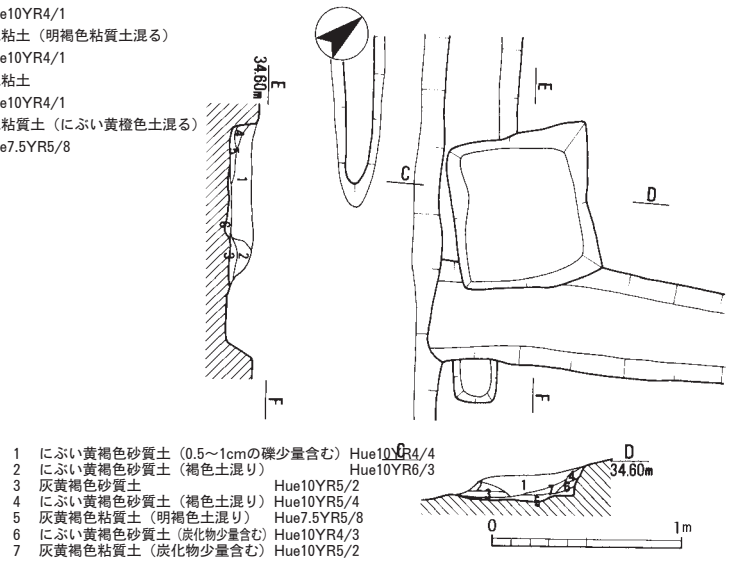
第50図　ＳＤ76遺物出土状況図（１／20）



第51図　ＳＫ90実測図（１／40）



第52図　ＳＫ166実測図（１／40）



第53図　ＳＫ73実測図（１／40）

である。溝の規模は、幅0.41m・深さ0.05mである。竪穴住居の壁周溝の可能性が高い。出土遺物はないため、遺構の時期の決め手に欠く。

⑥ＳＤ108（竪穴住居ＳＨ157）　調査区中央部北よりＨ16区において検出した。ほぼ「コ」の字状に掘削されたものである。溝の規模は、幅0.3m・深さ0.05～0.1mである。竪穴住居の壁周溝とみられる。遺物は、須恵器甕（158）が出土している。遺構の時期は、おおよそ７世紀末頃から８世紀中葉であろう。

⑦ＳＤ109　調査区中央部北よりのＨ16区において検出した。溝ＳＤ108のすぐ北側である。ほぼ直線的であるが、溝の規模は幅0.39m・深さ0.05～0.18mである。竪穴住居の壁周溝もしくは排水溝の可能性が高い。出土遺物はないため、遺構の時期の決め手に欠く。

⑧ＳＤ147　調査区中央部南よりのＣ19区において検出した。溝の規模は、幅1.86m・深さ0.15～0.2mである。竪穴住居の壁周溝もしくは排水溝の可能性が高いとみられる。遺物は、須恵器杯身（169）が出土している。遺構の時期は、おおよそ７世紀末頃から８世紀中葉であろう。

⑨ＳＤ159　調査区中央部北よりのＧ15区において検出した。溝の規模は、幅0.2m・深さ0.1mである。竪穴住居の壁周溝もしくは排水溝の可能性が高いとみられる。遺物は、須恵器杯身・甕（167・168）が出土している。遺構の時期は、おおよそ７世紀末頃から８世紀中葉であろう。

（３）平安時代

全体的に遺構として確認できるものは、少ない。集落跡とみられるが、遺物に緑釉陶器・製塩土器などが出土しており一般的な集落と異なる要素を有していたと推測されそうである。

２）土坑

①ＳＫ12　調査区西側北よりのＩ10区において検出した。ほぼ１号墓の東側の周溝上に位置している。平面形はやや不整な楕円形で、長径1.58m・短径0.98m・深さ0.08～0.36mである。遺物は灰釉陶器椀・ロクロ土師器（222～224）が出土している。遺構の時期は９世紀中葉であろう。

②ＳＫ107　調査区中央部やや東よりＥ18区において検出した。ＳＨ100の南コーナー部分に位置している。平面形は楕円形で、長径0.96m・短径0.75m・深さ0.19mである。遺物は灰釉陶器椀・皿・鉢・双耳壺（230～236）が出土している。良好な資料である。遺構の時期は９世紀中葉であろう。

３）溝

①ＳＤ129　調査区中央部北よりのＦ16区において検出した。溝の規模は幅0.3～0.86m・深さ0.1～0.2mである。遺物は灰釉陶器椀等（225～229）が出土している。遺構の時期は９世紀中葉であろう。

（４）鎌倉時代

平安時代から比べて最も遺構が少ない。確認できた遺構は、土坑ないし溝であり山村遺跡のこの時期は、完全に衰退してしまっていたとみられる。

１）土坑

①ＳＫ73　調査区中央部北よりであるＩ17区において検出した。平面形は、やや長方形に近い。長径0.8m・短径0.75m・深さ0.18mである。土坑の埋土は、炭を非常によく含でおり、遺構の底面は被熱を受けて赤く変色している。中世墓である可能性も充分ある。出土遺物はないため、遺構の時期の決め手に欠く。

②ＳＫ166　調査区東側やや北よりであるＦ21区において検出した。ＳＤ123掘削後に確認した。平面形はほぼ円形で、長径1m・短径0.84m・深さ0.23mである。この遺構の埋土中から完形の陶器椀が出土している。陶器椀（山茶椀）（249）は、藤澤良祐氏の編年で尾張型の第５形式で時期は13世紀中頃とみられる。

（５）近世以降

丘陵斜面全体に東西及び南北方向に掘削された溝が無数に存在する。昭和時代において耕作地であったことが判明しており、耕作に伴う溝であろうことは、間違いなかろう。ここでは、近世以降として扱っているが実際は、もっと新しい時代である可能性が強い。

１）溝

①ＳＤ29（ＳＤ66・ＳＤ77）　調査区の中ほどを東西方向に掘削されたものである。幅1.2m・深さ0.22mである。西側は、ＳＤ29と結合して止まる。東側は、ほぼ直角に屈折して南方向に掘削されてい

る。耕作に伴う溝であろうとみられる。遺物には、須恵器杯蓋・杯身・土師器杯（142・143・147～149）が出土しているが、他の時代の遺構を削平した際の混じりこみであろうとみられる

②ＳＤ56　Ｇ16からＧ17区にかけて検出した調査区の中ほど北よりにおいて東西方向に掘削されたものである。幅0.5m・深さ0.11mである。耕作溝であろう。遺物は須恵器甕（145）が出土しているが、他の時代の遺構を削平した際の混じりこみであろうとみられる。

③ＳＤ63　調査区の中央部中程のＥ17区からＦ18区にかけて検出した。溝の規模は、幅0.26m・深さ0.06mである。耕作溝とみられ東西方向に掘削されたものである。西側は、ＳＤ59・130と同一の溝とみられる。

遺物は、土師器杯（146）があるが他の時代の遺構からの混じりこみであろう。

⑤ＳＤ65　調査区のやや東側北よりのＨ18区からＩ18区にかけて検出した。南北方向に掘削された耕作溝とみられる。溝の規模は、幅0.96m・深さ0.08～0.2mである。遺物は、土師器甕・壺底部（165・166）が出土しているが他の時代の遺構からの混じりこみであろう。

⑥ＳＤ83　調査区中央部北よりのＦ15区において検出した。 東西方向に掘削されたものである。幅1.17m・深さ0.2mである。耕作溝であろう。遺物は、土師器杯・須恵器杯身（152・153）が出土しているが他の時代の遺構からの混じりこみであろう。

⑦ＳＤ86　調査区東側南よりのＣ20区において検出した。南北方向に掘削されたものである。幅0.42m・深さ0.07～0.1mである。耕作溝であろう。遺物は、須恵器杯身（154）が出土しているが他の時代の遺構からの混じりこみであろう。

⑧ＳＤ110　調査区中央部北よりのＧ17区において検出した。東西方向に掘削されたものである。溝の規模は、幅0.28m・深さ0.03mである。耕作溝であろう。遺物は、須恵器長頸壺・短頸壺（159・160）が出土しているが他の時代の遺構からの混じりこみであろう。

⑨ＳＤ114　調査区中央部東よりのＦ21区において検出した。東西方向に掘削されたものである。溝の規模は、幅0.38m・深さ0.04～0.1mである。耕作溝とみられる。遺物は、須恵器杯蓋（163）が出土しているが竪穴住居ＳＨ112からの混じりこみである可能性が大である。

⑩ＳＤ122　調査区東側やや北よりであるＦ21区において検出した。東西方向に掘削されたものである。溝の規模は、幅0.19～0.49m・深さ0.03～0.14mである。耕作溝とみられる。遺物は陶器椀（山茶椀）（252）が出土している。藤澤良祐氏の編年の尾張型第６形式で、時期は13世紀中頃とみられる。

⑪ＳＤ123　調査区中央部東よりのＦ20区からＧ22区にかけて検出した。東西方向に掘削されたもので、ＳＤ29に取り付く。この溝の下層から土坑ＳＫ166を確認している。溝の規模は、幅1.29～1.86m・深さ0.23～0.28mである。耕作溝とみられる。遺物は、須恵器杯身（164）が出土しているが他の時代の遺構からの混じりこみであろう。

遺構番号	地区名	遺構名	形　状	検　出　規　模	時　期	備　　考
ＳＤ１	Ｇ６他	溝	－	幅0.4～0.9m・深さ0.2～0.23m	近世以降	耕作溝・SD33と繋がる
ＳＤ２	Ｉ11他	溝	－	幅0.82～1.02m・深さ0.15～0.3m	近世以降	耕作溝・SD５と繋がる
ＳＤ３	Ｉ13他	溝	－	幅0.78m・深さ0.1～0.2m	近世以降	耕作溝・SD８と繋がる
ＳＤ４	Ｈ８他	溝	－	東側周溝幅1.16m・深さ0.2m 南側周溝幅2.72m・深さ0.75m 西側周溝幅2.14m・深さ0.4m	弥生時代中期	方形周溝墓１号墓周溝
ＳＤ５	Ｉ10他	溝	－	幅0.52～0.66m・深さ0.1m	近世以降	耕作溝・SD２と繋がる
ＳＤ６	Ｇ７他	溝	－	幅1.3m・深さ0.2m	近世以降	耕作溝・SD18・56と重複
ＳＤ７	Ｉ13他	溝	－	幅0.54～0.66m・深さ0.2～0.3m	弥生時代中期	方形周溝墓３号墓周溝
ＳＤ８	H13他	溝	－	幅0.6m・深さ0.1～0.15m	近世以降	耕作溝・SD３と繋がる
ＳＤ９	Ｉ12他	溝	－	幅１～1.38m・深さ0.1～0.27m	弥生時代中期	方形周溝墓２・３号墓周溝
ＳＤ10	Ｉ８他	溝	－	幅1.5m・深さ0.3m	近世以降	耕作溝
ＳＤ11	Ｉ13他	溝	－	幅0.61m・深さ0.32～0.5m	弥生時代中期	方形周溝墓３・４号墓周溝
ＳＫ12	Ｉ10他	土坑	不整形	長径1.58m・短径0.98m・深さ0.08～0.36m	平安時代	灰釉陶器等
ＳＤ13	Ｉ14他	溝	－	幅0.72m・深さ0.1～0.2m	近世以降	耕作溝・SD22と同一
ＳＤ14	Ｉ15他	溝	－	全長2.13m・幅0.75m・深さ0.2～0.3m	弥生時代中期	方形周溝墓４・５号墓周溝
ＳＤ15	H15他	溝	－	幅0.5m・深さ0.12m	近世以降	耕作溝・SD17・58と繋がる
ＳＤ16	H16他	溝	－	全長10.81m・幅2.06m・深さ0.48～0.6m	弥生時代中期	方形周溝墓11号墓周溝
ＳＤ17	H15他	溝	－	幅0.55m・深さ0.08m	近世以降	耕作溝・SD15・58と繋がる
ＳＤ18	Ｇ７他	溝	－	幅0.42m・深さ0.2m	近世以降	耕作溝・SD６・56と重複
ＳＤ19	Ｆ12他	溝	－	全長7.48m・幅1.9m・深さ0.09～0.37m	弥生時代中期	方形周溝墓10・11号墓周溝
ＳＤ20	G11他	溝	－	全長6.4m・幅1.63m・深さ0.19～0.46m	弥生時代中期	方形周溝墓10号墓周溝
ＳＤ21	G14他	溝	－	幅0.25m・深さ0.05～0.07m	近世以降	耕作溝
ＳＤ22	G14他	溝	－	幅１m・深さ0.03～0.2m	近世以降	耕作溝・SD13と同一
ＳＤ23	Ｇ９他	溝	－	全長7.16m・幅1.6m・深さ0.28～0.42m	弥生時代中期	方形周溝墓９・10号墓周溝
ＳＤ24	Ｈ８他	溝	－	幅0.45～0.6m・深さ0.1m	近世以降	耕作溝・SD18・56と繋がる
ＳＤ25	Ｇ８他	溝	－	全長6.68m・幅1.1m・深さ0.36～0.53m	弥生時代中期	方形周溝墓９号墓周溝
ＳＤ26	Ｇ８他	溝	－	幅0.3m・深さ0.08m	近世以降	耕作溝
ＳＤ27	Ｇ７他	溝	－	幅1.07m・深さ0.5m	近世以降	耕作溝・SD18・29と繋がる
ＳＤ28	Ｅ７他	溝	－	幅0.22m・深さ0.04m	近世以降	耕作溝
ＳＤ29	D12他	溝	－	幅1.2m・深さ0.22m	近世以降	耕作溝・SD66・77と同一
ＳＤ30	C12他	溝	－	幅1.26m・深さ0.3m	近世以降	耕作溝・SD35と同一
ＳＤ31	Ｅ７他	溝	－	全長6.12m・幅1.28m・深さ0.4～0.5m	弥生時代中期	方形周溝墓９・18号墓周溝
ＳＤ32	E11他	溝	－	全長8.38m・幅0.8～1.5m・深さ0.05～0.07m	弥生時代中期	方形周溝墓10・12号墓周溝
ＳＤ33	Ｄ６他	溝	－	幅1.48～2.12m・深さ0.3～0.66m	近世以降	耕作溝
ＳＤ34	E13他	溝	－	全長9.12m・幅0.78～１m・深さ0.1～0.2m	弥生時代中期	方形周溝墓11・13号墓周溝
ＳＤ35	D13他	溝	－	幅1.4m・深さ0.3m	近世以降	耕作溝・SD30と同一
ＳＨ36	D10他	竪穴住居	正方形？	長辺4.18m・短辺3.3m	奈良時代	
ＳＤ37	Ａ８他	溝	－	幅0.35m・深さ0.1～0.2m	近世以降	耕作溝
ＳＤ38	Ａ９他	溝	－	幅0.4～0.7m・深さ0.1～0.15m	近世以降	耕作溝・SD48と繋がる
ＳＤ39	Ａ７他	溝	－	幅0.44～1.05m・深さ0.05～0.13m	弥生時代中期？	
ＳＤ40	Ａ７他	溝	－	幅0.7～0.8m・深さ0.07～0.15m	近世以降	耕作溝
ＳＤ41	Ａ７他	溝	－	幅1.36～1.46m・深さ0.39～0.51m	近世以降	耕作溝・SD40と同一
ＳＨ42	Ｂ８他	竪穴住居	長方形？	長辺3.62m・短辺3.3m	奈良時代	
ＳＤ43	欠番					
ＳＤ44	C14他	溝	－	幅0.48m・深さ0.06m	近世以降	耕作溝
ＳＤ45	欠番					
ＳＤ46	B12他	溝	－	全長5.44m・幅2.06m・深さ0.1～0.15m	弥生時代中期	方形周溝墓12号墓周溝
ＳＤ47	D14他	溝	－	幅0.64～0.81m・深さ0.1～0.3m	時期不明	竪穴住居住居壁周溝？
ＳＤ48	A11他	溝	－	幅0.86m・深さ0.24m	近世以降	耕作溝・SD38と繋がる
ＳＤ49	C10他	溝	－	全長6.66m・幅1.4m・深さ0.12～0.3m	弥生時代中期	方形周溝墓12号墓周溝
ＳＨ50	C14他	竪穴住居	正方形	長辺6.6m・短辺6.23m	奈良時代	
ＳＤ51	A11他	溝	－	幅0.18m・深0.05m	奈良時代	竪穴住居ＳＨ149の壁周溝
ＳＨ52	F15他	竪穴住居	正方形？	長辺3.7m以上・短辺2.55m以上・深さ0.03～0.27m	奈良時代	
ＳＤ53	H17他	溝	－	幅0.24m・深さ0.06m	近世以降	耕作溝
ＳＤ54	G17他	溝	－	全長6.78m・幅1.14m・深さ0.1～0.2m	弥生時代中期？	方形周溝墓19号墓周溝
ＳＤ55	Ｉ16他	溝	－	幅0.48m・深さ0.1m	近世以降	耕作溝
ＳＤ56	H17他	溝	－	幅0.5m・深さ0.11m	近世以降	耕作溝
ＳＤ57	A12他	溝	－	幅1.16m・深さ0.46m	弥生時代中期	方形周溝墓14号墓周溝
ＳＤ58	Ｉ18他	溝	－	幅0.58m・深さ0.05～0.11m	近世以降	耕作溝
ＳＤ59	D14他	溝	－	幅0.39～0.59m・深さ0.16～0.17m	近世以降	耕作溝・SD130・63と同一
ＳＤ60	D17他	溝	－	幅0.45m・深さ0.07～0.1m	近世以降	耕作溝
ＳＤ61	A17他	溝	－	幅0.42m・深さ0.09m	近世以降	耕作溝

第２表　遺構一覧表（１）

遺構番号	地区名	遺構名	形　状	検　出　規　模	時　期	備　　考
ＳＤ61	Ａ17他	溝	－	幅0.42m・深さ0.09m	近世以降	耕作溝
ＳＤ62	Ｅ18他	溝	－	幅1.44m・深さ0.2～0.3m	近世以降	耕作溝
ＳＤ63	Ｆ18他	溝	－	幅0.26m・深さ0.06m	近世以降	耕作溝
ＳＤ64	Ｇ17他	溝	－	幅0.33m・深さ0.06m	近世以降	耕作溝
ＳＤ65	Ｈ18他	溝	－	幅0.96m・深さ0.08～0.2m	近世以降	耕作溝
ＳＤ66	Ｇ18他	溝	－	幅0.82m・深さ0.25～0.45m	近世以降	耕作溝・SD29・77と同一
ＳＤ67	Ｄ19他	溝	－	幅0.7m・深さ0.15～0.3m	近世以降	耕作溝
ＳＤ68	Ｄ16他	溝	－	幅0.62m・深さ0.04m	近世以降	耕作溝
ＳＤ69	Ｉ16他	溝	－	検出長3.4m・幅1.28m・深さ0.06～0.44m	弥生時代中期	方形周溝墓６号墓周溝
ＳＤ70	Ｂ16他	溝	－	幅0.62m・深さ0.06m	近世以降	耕作溝
ＳＤ71	Ｈ15他	溝	－	幅1.55m・深さ0.1～0.32m	弥生時代中期	方形周溝墓11・19号墓周溝
ＳＤ72	Ｉ15他	溝	－	幅0.28m・深さ0.02～0.06m	近世以降	耕作溝
ＳＫ73	Ｉ17他	土坑	楕円形	長径0.8m・短径0.75m・深さ0.18m	鎌倉時代？	焼土痕跡残る。中世墓？
ＳＤ74	Ｉ18他	溝	－	全長4.6m・幅0.78m・深さ0.12～0.18m	弥生時代中期	方形周溝墓19号墓周溝
ＳＤ75	Ａ15他	溝	－	北側周溝幅2.08m・深さ0.5m 東側周溝幅1.92m・深さ0.25～0.4m	弥生時代中期	方形周溝墓14号墓周溝
ＳＤ76	Ｃ17他	溝	－	幅0.61～1.02m・深さ0.05～0.2m	奈良時代	掘立柱建物に伴う溝？
ＳＤ77	Ｂ21他	溝	－	幅0.86m・深さ0.1m	近世以降	耕作溝
ＳＤ78	Ａ20他	溝	－	幅0.9m・深さ0.17～0.2m	近世以降	耕作溝
ＳＤ79	Ｂ22他	溝	－	幅0.63m・深さ0.1～0.2m	近世以降	耕作溝
ＳＨ80	Ａ21他	竪穴住居	長方形	長辺5.5m・短辺4.54m	奈良時代	
ＳＫ81	Ｇ19他	土坑	楕円形	長径1.91m・短径1.82m・深さ0.15m	奈良時代	
ＳＤ82	Ｉ17他	溝	－	幅0.26m・深さ0.06m	近世以降	耕作溝
ＳＤ83	Ｇ15他	溝	－	幅1.17m・深さ0.2m	奈良時代	不明
ＳＤ84	Ｅ17他	溝	－	幅0.4m・深さ0.07m	奈良時代	
ＳＨ85	Ｇ19他	竪穴住居	不明	焼土範囲長径0.57m・短径0.47m	奈良時代	
ＳＤ86	Ｃ20他	溝	－	幅0.42m・深さ0.07～0.1m	近世以降	耕作溝
ＳＨ87	Ｂ17他	竪穴住居	正方形	一辺5.4m以上	奈良時代	
ＳＤ88	Ｄ15他	溝	－	幅0.54m・深さ0.2m	弥生時代中期	方形周溝墓13号墓周溝
ＳＤ89	Ａ17他	溝	－	全長5.7m・幅0.9～2.51m・深さ0.15～0.27m	弥生時代中期	方形周溝墓14号墓周溝
ＳＫ90	Ｅ16他	土坑	－	長径１m・短径0.88m・深さ0.47m	奈良時代	
ＳＤ91	Ｂ19他	溝	－	幅0.61～1.02m・深さ0.05～0.2m	奈良時代	SD76と同一遺構
ＳＤ92	Ｃ15他	溝	－	幅0.27m・深さ0.05m	奈良時代	竪穴住居の壁周溝
ＳＨ93	Ｂ15他	竪穴住居	正方形	一辺３m以上	奈良時代	
ＳＨ94	Ｅ14他	竪穴住居	長方形？	長辺3.14m以上・短辺2.35m以上・深さ0.1～0.2m	奈良時代	
ＳＤ95	Ｄ15他	溝	－	幅0.41m・深さ0.11m	奈良時代	竪穴住居の壁周溝
ＳＤ96	Ｃ15他	溝	－	幅0.27m・深さ0.03～0.05m	奈良時代	竪穴住居の壁周溝
ＳＤ97	Ｅ６他	溝	－	長4.31m・幅0.56～0.75m・深さ0.03～0.12m	近世以降	耕作溝
ＳＤ98	Ｃ16他	溝	－	幅0.41m・深さ0.05m	奈良時代	竪穴住居ＳＨ93の壁周溝？
ＳＫ99	Ｅ15他	土坑	長方形	長径1.2m・短径0.86m・深さ0.05m	時期不明	
ＳＨ100	Ｆ18他	竪穴住居	正方形	長辺5.55m・短辺4.77m	奈良時代	
ＳＤ101	Ｇ17他	溝	－	幅0.26m・深さ0.06m	奈良時代	
ＳＤ102	Ｅ15他	溝	－	全長9.12m・幅0.78～１m・深さ0.1～0.2m	弥生時代中期	SD34と同一遺構・方形周溝墓11号墓周溝
ＳＤ103	Ｇ17他	溝	－	幅0.2m・深さ0.05m	時期不明	竪穴住居の壁周溝・排水路？
ＳＤ104	Ｆ16他	溝	－	幅0.29m・深さ0.12m	奈良時代	竪穴住居の壁周溝？
ＳＤ105	Ｇ17他	溝	－	幅0.5m・深さ0.2m	奈良時代	竪穴住居の排水路
ＳＫ106	Ｆ17他	土坑	楕円形	長径1.55m・短径0.62m・深さ0.1～0.15m	平安時代	ロクロ土師器
ＳＫ107	Ｆ18他	土坑	楕円形	長径0.96m・短径0.75m・深さ0.19m	平安時代	灰釉陶器
ＳＤ108	Ｇ16他	溝	－	幅0.3m・深さ0.05～0.1m	奈良時代	竪穴住居の壁周溝
ＳＤ109	Ｇ15他	溝	－	幅0.39m・深さ0.05～0.18m	奈良時代	竪穴住居の壁周溝
ＳＤ110	Ｇ17他	溝	－	幅0.28m・深さ0.03m	奈良時代	竪穴住居の壁周溝
ＳＤ111	Ｇ19他	溝	－	全長9.15m・幅1.36～1.66m・深さ0.2～0.3m	弥生時代中期	方形周溝墓17号墓周溝
ＳＨ112	Ｆ21他	竪穴住居	？	長辺3.2m以上・短辺2.9m以上	奈良時代	出土遺物良好
ＳＤ113	欠番					
ＳＤ114	Ｆ21他	溝	－	幅0.38m・深さ0.04～0.1m	近世以降	耕作溝
ＳＤ115	Ｃ７他	溝	－	全長4.13m・幅0.64～0.82m・深さ0.09～0.13m	弥生時代中期？	
ＳＨ116	Ｂ20他	竪穴住居	長方形	一辺4.4m以上	奈良時代	
ＳＤ117	Ｆ22他	溝	－	幅1.1m・深さ0.07m	弥生時代中期	方形周溝墓17号墓周溝
ＳＨ118	Ｄ16他	竪穴住居	長方形	長辺4.72m・短辺4.28m・深さ0.3m	奈良時代	
ＳＤ119	Ｄ20他	溝	－	全長3.6m・幅1.96m・深さ0.03～0.06m	弥生時代中期	方形周溝墓16号墓周溝
ＳＨ120	Ｄ23他	竪穴住居	長方形	長辺6.25m・短辺3.49m以上	奈良時代	

第３表　遺構一覧表（２）

遺構番号	地区名	遺構名	形　状	検　出　規　模	時　期	備　　考
ＳＨ121	Ｃ21他	竪穴住居	長方形	長辺4.58m・短辺3.98m	奈良時代	
ＳＤ122	Ｆ21他	溝	－	幅0.19～0.49m・深さ0.03～0.14m	近世以降	耕作溝
ＳＤ123	Ｅ21他	溝	－	幅1.29～1.86m・深さ0.23～0.28m	近世以降	耕作溝
ＳＤ124	Ｄ14他	溝	－	幅0.24m・深さ0.13m	奈良時代	竪穴住居の壁周溝
ＳＤ125	Ｃ13他	溝	－	幅0.18m・深さ0.03m	奈良時代	SH50内の壁周溝（別の竪穴住居？）
ＳＤ126	Ｃ14他	溝	－	幅0.13m・深さ0.05m	奈良時代	SH50内の壁周溝（別の竪穴住居？）
ＳＤ127	Ｆ22他	溝	－	幅0.2～0.26m・深さ0.05m	奈良時代	竪穴住居の排水路・SD136と同一
ＳＤ128	Ｉ20他	溝	－	全長5.28m・幅1.96m・深さ0.03～0.2m	弥生時代中期	方形周溝墓17号墓周溝
ＳＤ129	Ｆ16他	溝	－	幅0.3～0.86m・深さ0.1～0.2m	時期不明	竪穴住居の壁周溝・排水路
ＳＨ130	Ｅ17他	竪穴住居	？	長辺3.5m以上・短辺0.82m以上	奈良時代	竪穴住居SH100によって削平される
ＳＤ131	Ｆ18他	溝	－	幅0.21m・深さ0.05m	奈良時代	竪穴住居SH100の壁周溝
ＳＤ132	Ｃ20他	溝	－	幅0.18m・深さ0.05m	時期不明	
ＳＤ133	Ｇ18他	溝	－	幅0.39～１m・深さ0.09～0.25m	奈良時代	竪穴住居SH100の壁周溝
ＳＤ134	Ｅ18他	溝	－	全長3.3m・幅１～1.5m・深さ0.02m	弥生時代中期	方形周溝墓16号墓周溝
ＳＫ135	Ｅ18他	土坑	－	長径1.34m・短径1.12m・深さ0.05m	時期不明	
ＳＤ136	Ｆ20他	溝	－	幅0.2～0.26m・深さ0.05m	奈良時代	竪穴住居の排水路
ＳＫ137	Ｅ22他	土坑	楕円形	長径0.95m・短径0.89m・深さ0.04m	奈良時代	竪穴住居の貯蔵穴
ＳＫ138	Ｇ23他	土坑	円形	長径1.11m・短径1.08m・深さ0.45m	時期不明	
ＳＤ139	Ｅ16他	溝	－	幅0.16m・深さ0.03～0.1m	時期不明	竪穴住居の壁周溝・排水路
ＳＤ140	Ｄ17他	溝	－	幅0.08～0.1m・深さ0.03m	時期不明	
ＳＤ141	Ｇ18他	溝	－		時期不明	土坑か竪穴住居とみられる。
ＳＫ142	Ａ９他	土坑	楕円形	長径0.64m・短径0.52m・深さ0.18m	時期不明	
ＳＫ143	Ｂ16他	土坑	長方形	長径5.62m・短径1.73m・深さ0.33～0.47m	時期不明	
ＳＤ144	Ｆ19他	溝	－	幅0.22m・深さ0.14m	奈良時代	SH100の壁周溝
ＳＤ145	Ｅ９他	溝	－	全長1.32m・幅0.78m・深さ0.05～0.07m	弥生時代中期	方形周溝墓９号墓周溝
ＳＤ146	Ｄ19他	溝	－	幅0.55m・深さ0.03m	奈良時代	竪穴住居の壁周溝・排水路
ＳＤ147	Ｃ19他	溝	－	幅1.86m・深さ0.15～0.2m	弥生時代中期	方形周溝墓15号墓周溝
ＳＫ148	Ｉ12他	土坑	－	長径1.03m・短径0.97m・深さ0.16m	時期不明	
ＳＤ149	Ａ11他	竪穴住居		一辺3.9m	奈良時代	
ＳＫ150	Ｅ５他	土坑	－	長径0.6m・短径0.48m・深さ0.24m	弥生時代中期	方形周溝墓の残部とみられる。
ＳＤ151	Ｆ２他	溝	－	北側周溝全長6.25m・幅1.47～2.12m・深さ0.28～0.38m 東側周溝全長８m・幅2.08～2.9m・深さ0.18～0.7m	弥生時代中期	方形周溝墓８号墓周溝
ＳＤ152	Ｉ２他	溝	－	幅0.3m・深さ0.1m	近世以降	耕作溝
ＳＤ153	Ｄ５他	溝	－	幅2.7m・深さ0.5m	時期不明	
ＳＤ154	Ｃ４他	溝	－	全長2.6m・幅0.93～1.04m・深さ0.15～0.25m	時期不明	
ＳＫ155	Ｉ14他	溝	－	長径1.12m・短径0.96m・深さ0.19m	時期不明	
ＳＤ156	Ｉ２他	溝	－	北側周溝全長4.98m・幅0.86～1.38m・深さ0.07～0.15m 南側周溝全長5.06m・幅0.92～1.04m・深さ0.08～0.２m	弥生時代中期	方形周溝墓７号墓周溝
ＳＨ157	Ｇ16他	竪穴住居	－	一辺7.16m以上	奈良時代	
ＳＨ158	Ｂ19他	竪穴住居	不明	焼土範囲長径1.28m・短径0.6m	奈良時代	
ＳＨ159	－	竪穴住居	不明	焼土範囲長径0.97m・短径0.8m	奈良時代	
ＳＨ160	－	竪穴住居	不明	長辺3.74m以上・短辺1.46m以上	奈良時代	
ＳＨ161	－	竪穴住居	長方形	長辺4.41m以上・短辺1.1m以上	奈良時代	
ＳＨ162	－	竪穴住居	長方形	一辺2.8m以上	奈良時代	
ＳＢ163	－	掘立柱建物	東西棟	３間×２間	奈良時代	側柱建物
ＳＢ164	－	掘立柱建物	東西棟	３間×２間	奈良時代	総柱建物
ＳＢ165	－	掘立柱建物	南北棟	３間×２間	奈良時代	側柱建物
ＳＫ166	Ｅ21	土坑	楕円形	長径１m・短径0.84m・深さ0.23m	鎌倉時代	
ＳＢ167	－	掘立柱建物	東西棟	３間×２間	奈良時代	側柱建物
ＳＢ168	－	掘立柱建物	東西棟	３間×２間	奈良時代	側柱建物
ＳＢ169	－	掘立柱建物	東西棟	３間×２間	奈良時代	側柱建物
ＳＢ170	－	掘立柱建物	東西棟	３間×２間	奈良時代	側柱建物
ＳＢ171	－	掘立柱建物	東西棟	３間×２間	奈良時代	側柱建物
ＳＢ172	－	掘立柱建物	東西棟	３間×３間	奈良時代	側柱建物
ＳＢ173	－	掘立柱建物	東西棟	３間×３間	奈良時代	側柱建物
ＳＢ174	－	掘立柱建物	東西棟	３間×３間	奈良時代	側柱建物
ＳＢ175	－	掘立柱建物	東西棟	３間×２間	奈良時代	側柱建物
ＳＨ176	－	竪穴住居	不明	－	奈良時代	貯蔵穴？

第４表　遺構一覧表（３）

Ⅳ　遺　　物

今回の発掘調査によって出土した遺物は、コンテナ箱に整理して80箱である。遺物の時期は、おおよそ弥生時代中期中葉から後葉・奈良時代・平安時代・鎌倉時代に及ぶものである。遺物の多くは、弥生時代と奈良時代のものが主である。また、土器が中心であって金属製品・石製品を若干含む。なお、個々の遺物の詳細については、遺物観察表（第５～８表）を参照されたい。

１　弥生時代

調査での弥生時代の遺物は、方形周溝墓の周溝からの出土のものが全てである。また、出土した土器は、器種別にみると細頸壺が圧倒的に多数を占めている。甕及び高杯は、ほとんど出土していない。

（１）１号墓（１～４）

ＳＤ４出土遺物　１～４は、全て細頸壺である。１は、体部が欠損しているだけでなく全体的に風化が著しく、調整が不明瞭である。おそらく体部は球形とみられる。僅かに頸部外面にハケらしき痕跡を留める。口縁端部は、やや内傾し断面方形状である。体部下半部に一次焼成の痕跡を若干残す。２は、全体的に風化が著しい。口縁部から頸部にかけては欠損している。頸部から体部にかけ横方向を中心に櫛描文が施され、縦方向に同一の原体を用いてある程度の間隔をあけて施している。下ノ庄東方遺跡２号墓のものに似ている。３は、体部が欠損しているもののおそらく下膨れし球形状であろうとみられる。口縁端部は、やや内傾し尖り気味である。口縁部には、棒状浮文が２条、外面に３ヶ所に貼り付けられていたようである。遺存状況は僅かに良い程度である。４は、遺存状況があまり良くないが、頸部から体部にかけては、上から櫛描波状文、櫛描横線文、円形浮文、刺突文、櫛描横線文が施される。遺存状況は、これもあまり良い状況ではない。遺物の時期は、中期中葉とみられる。

（２）２号墓（５～７）

ＳＤ９出土遺物　５は、広口壺、６・７は細頸壺とみられる。５は、風化著しく調整等不明瞭である。６は、全体的に風化著しい。頸部には横方向に４条のヘラ描き沈線が巡る。７は、体部に4条のヘラ描き沈線が巡る。１条目の沈線に縦方向のハケ、沈線間に横方向のミガキが施されている。遺物の時期は、中期中葉とみられる。

（３）３号墓（８・９）

ＳＤ11出土遺物　８は太頸壺、９は細頸壺である。８は、全体的に風化が著しく調整が不明瞭である。口縁部の瘤状突起が２個だけ残る。頸部にヘラ描き沈線が５条巡る。９は、全体的に調整が不明瞭である。頸部にはヘラ描き沈線が３条巡る。遺物の時期は、中期中葉から後葉とみられる。

（４）４号墓（10）

ＳＤ14出土遺物　10は、小型の壺とみられる。全体的に風化著しく調整が不明瞭である。口縁部から頸部にかけての形状は、全く不明である。遺物の時期は、中期中葉とみられる。

（５）７号墓（11）

ＳＤ156出土遺物　11は、細頸壺とみられる。体部には細かいハケが縦方向に施される。遺物の時期は、中期中葉のものとみられる。

（６）８号墓（12～14）

ＳＤ151出土遺物　12は、壺肩部である。13・14は壺底部である。全て細頸壺で有る可能性が高い。遺物の時期は、中期後葉のものとみられる。

（７）９号墓（15～27）

ＳＤ25出土遺物　20は、細頸壺口縁部である。凹線文が３条巡る。遺物の時期は、中期後葉のものとみられる。

ＳＤ31出土遺物　22・23は広口壺、24は細頸壺、25は壺体部、27は壺底部である。全て全体的に風化著しく調整不明瞭な部分も認められる。22は、肩部に円形浮文、沈線が７条施される。25は、沈線が体部を巡る。しかしながら体部下半については、接合できたがやや難点があり、体部上半部という可能性も残している。遺物の時期は、中期中葉とみられる。

ＳＤ28出土遺物　26は、中期中葉のものであろう。壺の底部とみられる。ＳＤ31からの流れ込みとみられる。

ＳＤ23出土遺物　15は広口壺で、瘤状突起を口縁部内面に２個一対である。口縁部は上下にがっていない。16は壺の底部で、細頸壺の可能性が高い。17は甕底部の可能性が高い。遺物の時期は、中期中葉とみられる。

ＳＤ145出土遺物　18～19・21はいずれも壺底部である。なかでも18は壺底部で穿孔されている。遺物の時期は、中期中葉とみられる。

（８）10号墓（28～32）

ＳＤ19出土遺物　28は細頸壺である。口縁部に凹線文はない。頸部に沈線巡る。中期中葉のものであろう。

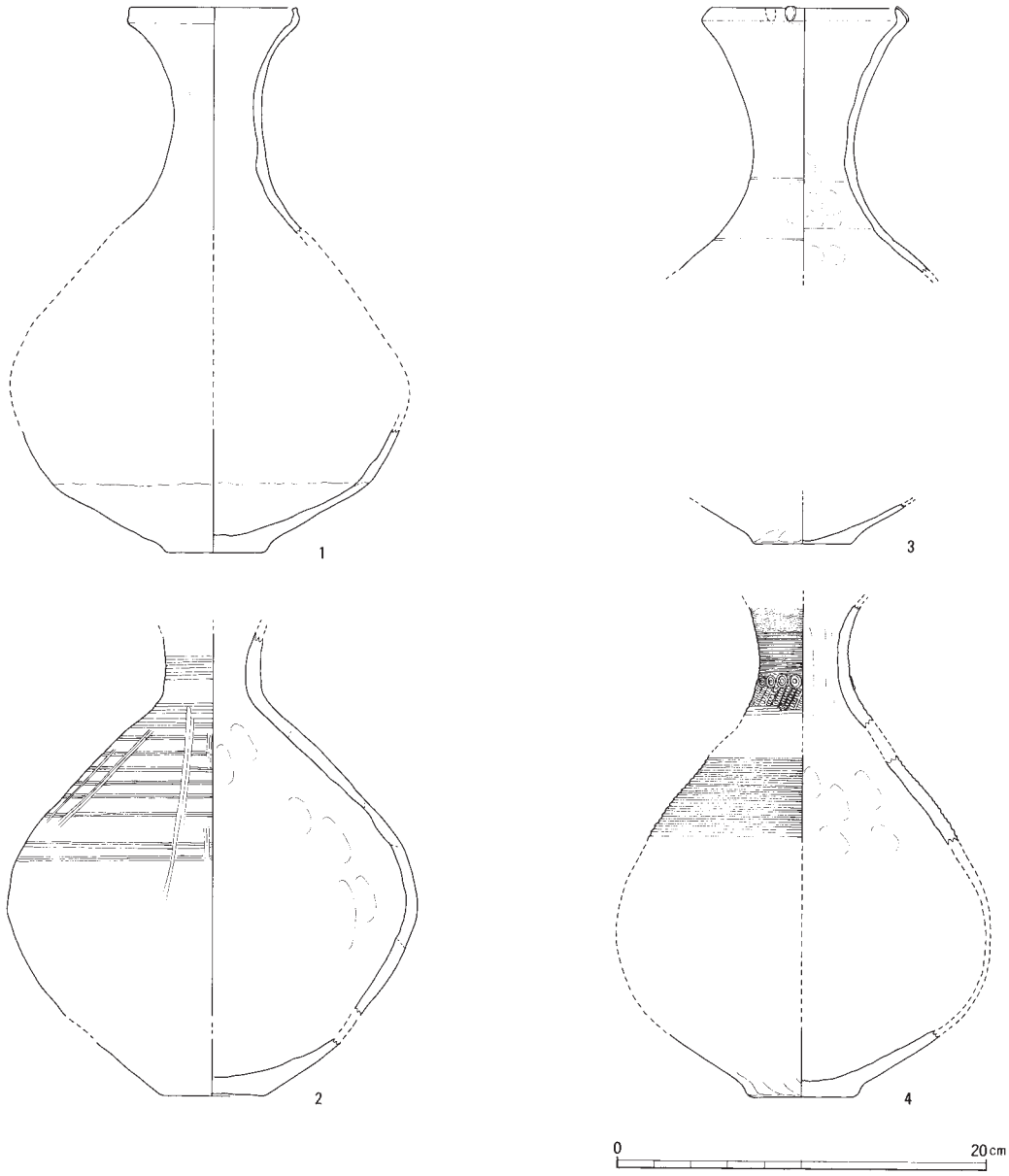
ＳＤ20出土遺物　29・30は広口壺である。全体的に風化著しい。

ＳＤ32出土遺物　32は太頸壺である。全体的に風化著しい。頸部から口縁部にかけて器壁は厚い。口縁部内面に瘤状突起が５個一対であろう。中期中葉のものとみられる。

（９）11号墓（33～37）

ＳＤ16出土遺物　35は、細頸壺である。口縁部から頸部にかけて刺突が施された上に沈線が１条巡る。体部には、櫛描横線文の上に棒状浮文が縦方向に貼り付けられる。頸部付近に貼り付けられる類例があるものの体部に至るまでのものはなく、初出のもの

１号墓



第54図　出土遺物実測図（１）

と言える。

ＳＤ34出土遺物　34は細頸壺、36は34と同一個体であろうか。37は、体部下半において最大径で下膨れの器形とみられる。細頸壺の底部であろうか。遺物の時期は、中期中葉から後葉のものであろう。

ＳＤ71出土遺物　33は、太頸壺である。４条の沈線が頸部を巡る。体部下半において最大径で下膨れの器形であろう。中期中葉のものであろう。

（10）12号墓（38・39）

ＳＤ46出土遺物　38は細頸壺、39は壺底部である。同一個体の可能性が高い。38の口縁部には凹線文が２条巡る。遺物の時期は、中期後葉のものである。

（11）13号墓（40）

ＳＤ88出土遺物　40は、細頸壺の頸部とみられる。全体的に風化著しく調整等不明瞭である。

（12）14号墓（45・46）

ＳＤ75出土遺物　45・46は、細頸壺である。同一個体の可能性が高い。全体的に風化著しく、調整等不明瞭である。底部が穿孔されているように見えるが、器壁が薄いことで剥落したとみられる。遺物の時期は、中期中葉から後葉のものである。

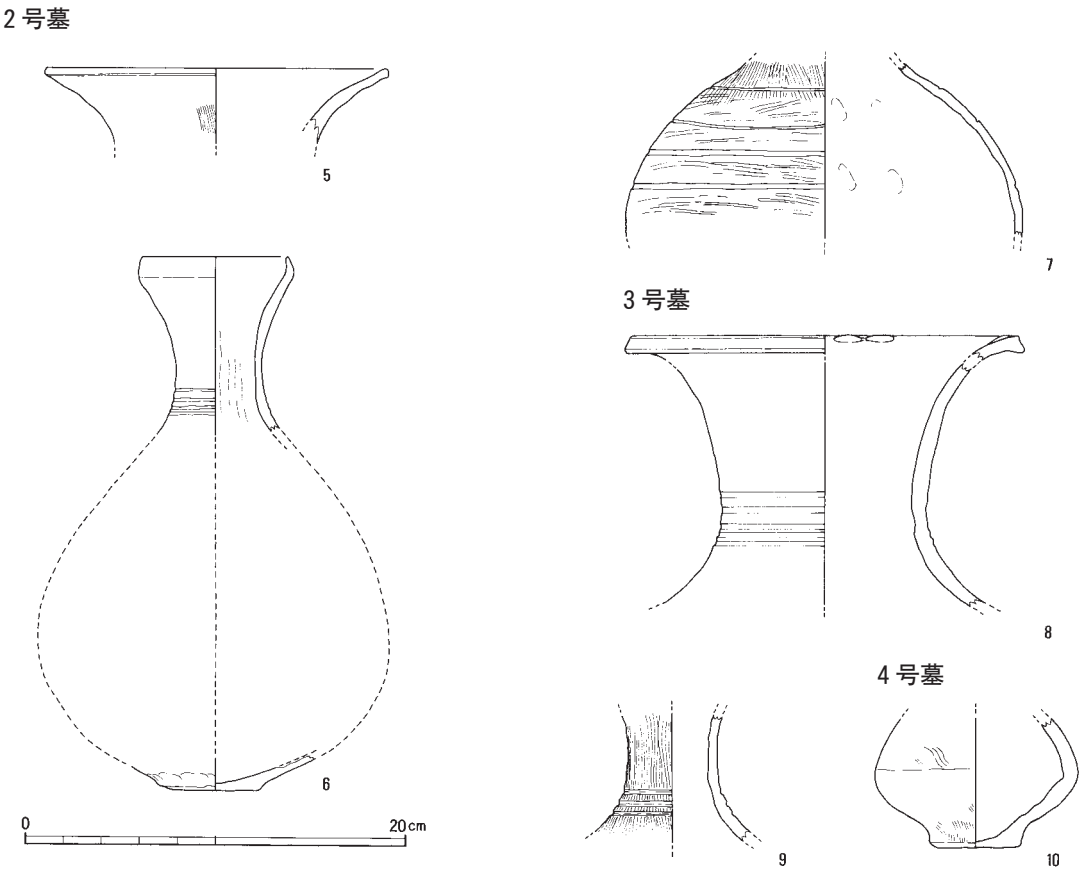
（13）15号墓（41～44）

ＳＤ89出土遺物　42・43は、細頸壺である。42は、口縁部から体部にかけての部分と底部は、同一個体と考える。異なる個体であるかもしれない。口縁部に凹線文は、ない。43は、同一個体とみられる。同じく口縁部に凹線文は、見られない。遺物の時期は、中期中葉から後葉にかけてのものであろう。

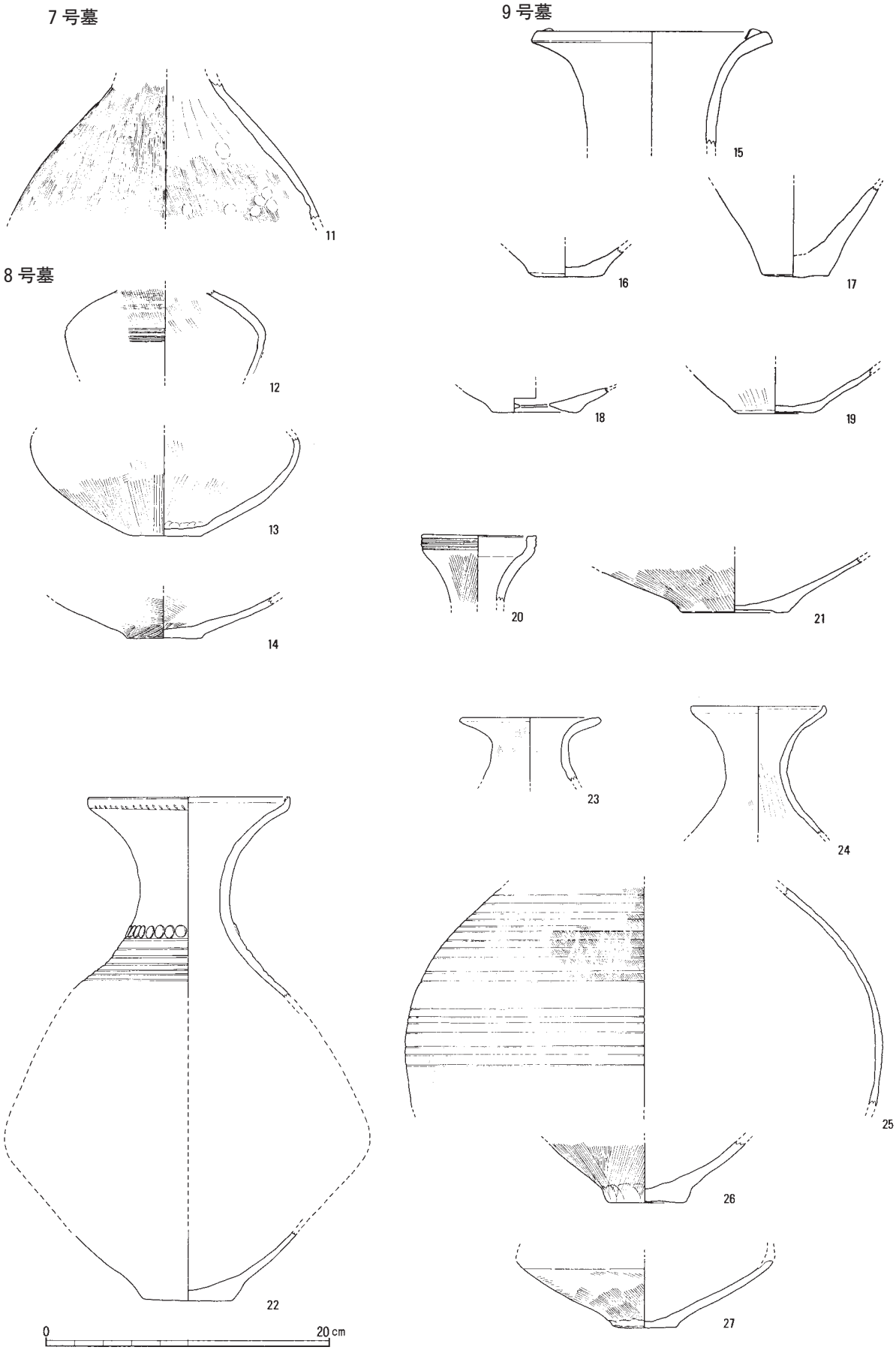
ＳＤ158出土遺物　土器は、全て細頸壺である。44は、口縁部に凹線文が入り始めるものとみられる。広めで浅い凹線文状のものが１条巡る。41は、口縁部から頚部にかけてのものである。全体的に風化著しいために調整は不明である。竪穴住居から出土しており方形周溝墓から混じり込んだものとみられる。遺物の時期は、中期中葉である。

（14）17号墓（50～52）

ＳＤ111出土遺物　50は、大型で広口壺である。全体的に風化著しく調整等不明瞭である。体部の一部に一次焼成の痕跡を留める。51・52は、壺底部である。共に細頸壺の可能性が高い。52も底部がないた

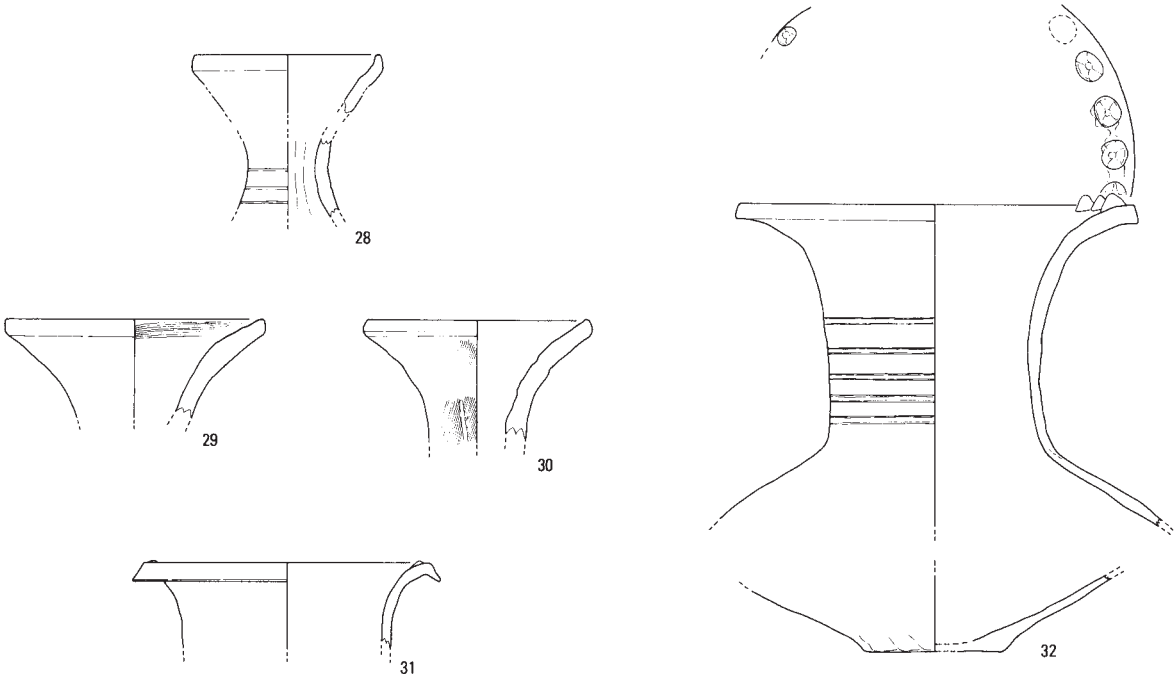


第55図　出土遺物実測図（２）

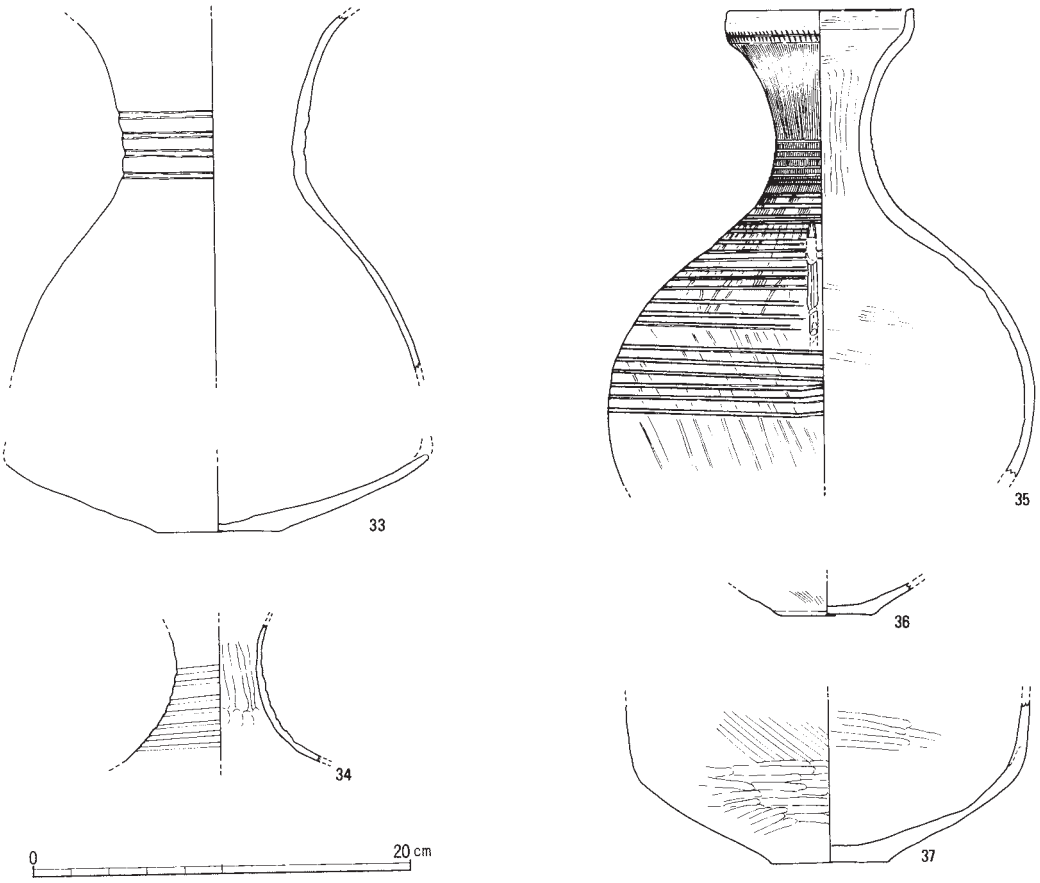


第56図　出土遺物実測図（3）

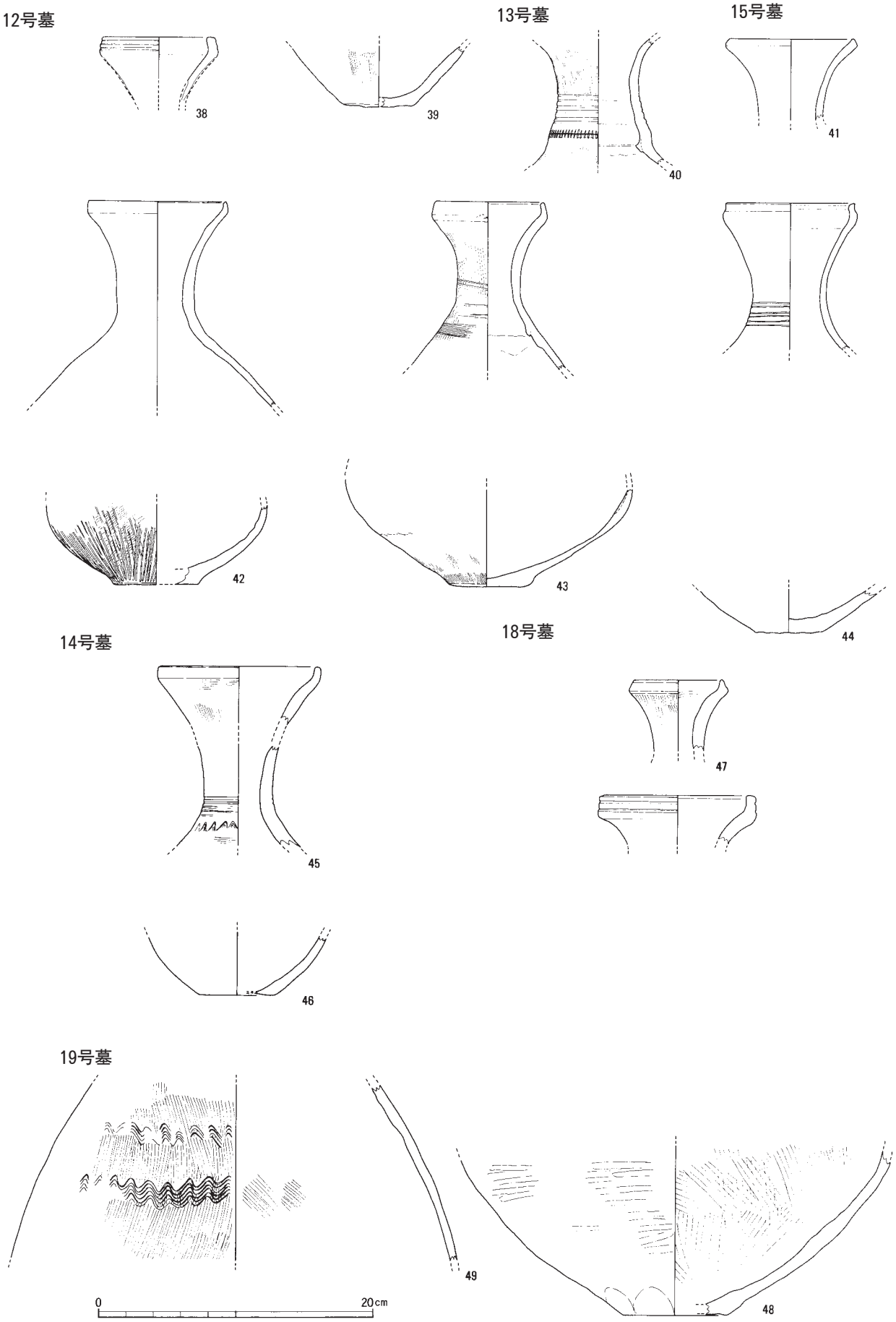
10号墓



11号墓

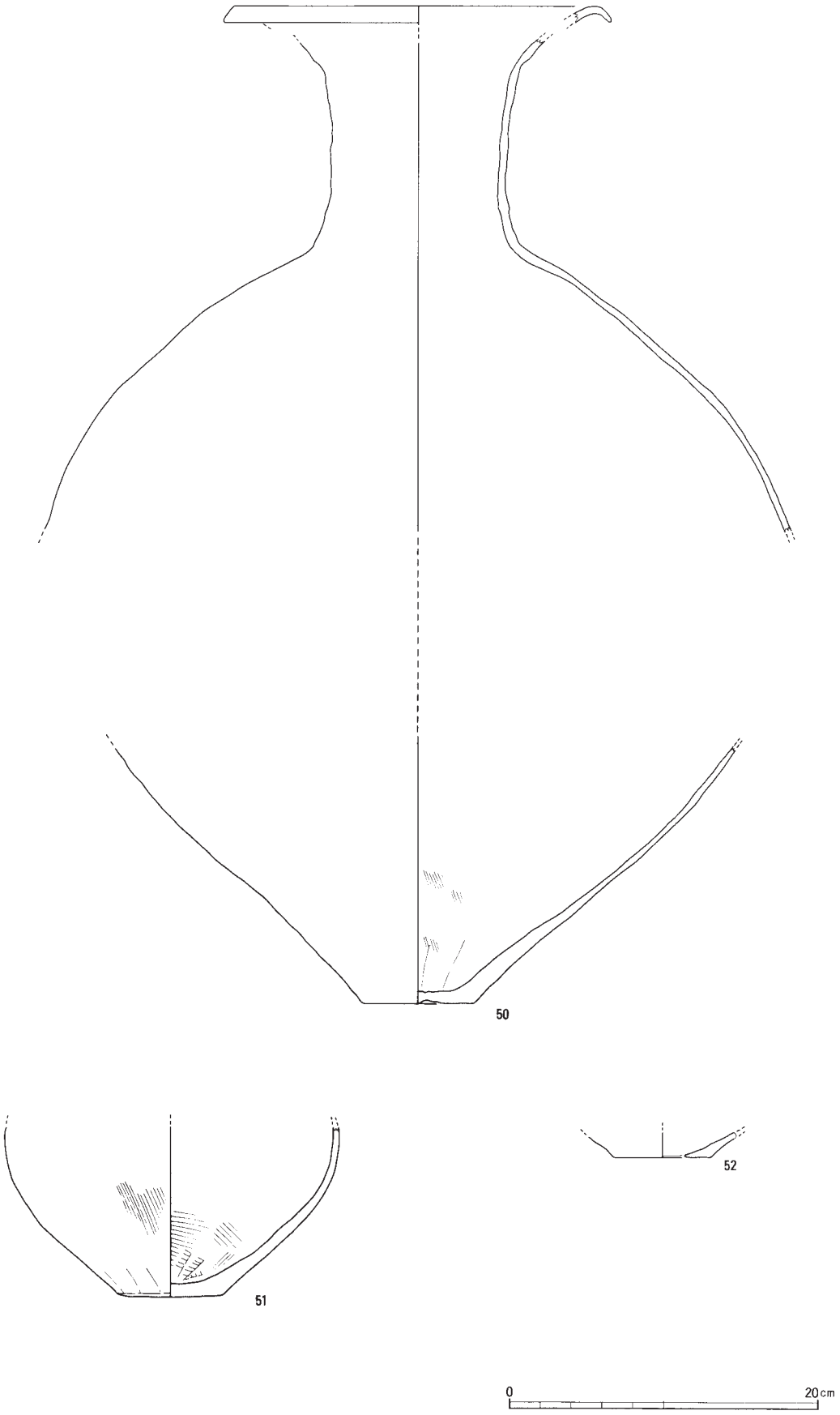


第57図　出土遺物実測図（4）



第58図　出土遺物実測図（５）

17号墓



第59図　出土遺物実測図（６）

め底部穿孔の可能性が高い。遺物の時期は中期後葉であろう。

（15）18号墓（47・48）

ＳＫ150出土遺物　47・48は、細頸壺である。全体的に遺存状況は良くない。47では、口縁端部の断面形が三角形を呈しながら斜め上方に立ち上がる。48の口縁部には凹線文が２条巡る。遺物の時期は、中期後葉のものとみられる。

（16）19号墓（49）

ＳＤ74出土遺物　49は、壺か甕の体部であろう。甕の体部とするともう少し亀井遺跡出土のものに似ている。遺物の時期は、中期中葉のものであろう。

（17）包含層出土遺物（53～56）

53は、広口壺の口縁部である。口縁端部内面には円形浮文及び扇形文で飾られている。54は、細頸壺の体部である。体部に縦方向のヘラ描き沈線が認められる。55・56は、壺底部である。おそらく細頸壺であろうとみられる。遺物の時期は、中期後葉を主体としている。

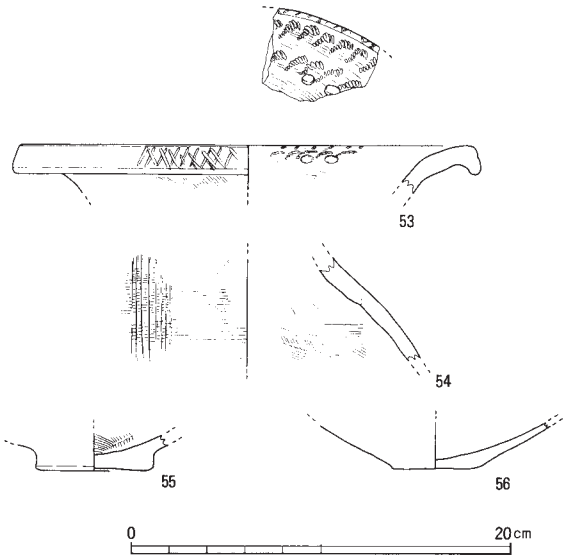
２　奈良時代

１）竪穴住居

①ＳＨ36出土遺物（57）

57は、土師器椀である。全体的に作りの粗いものであり、磨滅著しい。遺物の時期は、７世紀後半とみられる。

包含層



第60図　出土遺物実測図（７）

②ＳＨ42出土遺物（58・59）

58は、須恵器杯蓋である。天井部から緩やかに広がる。口縁部付近で稜を有している。口縁端部は、やや丸みを帯びてまとまる。59は、須恵器杯身である。底部は、欠損しているもののケズリによって、途中から回転ナデによって調整されている。立ちあがりは、やや内傾している。受部は、体部外面に沈線をめぐらした後にやや斜め上方に延びて丸くまとまる。遺物の時期は、７世紀末から８世紀初頭とみられる。

③ＳＨ50出土遺物（60～65）

遺物には、土師器杯・高杯・甕・須恵器杯蓋・杯身がある。60は、土師器杯であろう。底部・口縁部が欠損し、調整も磨滅によって不明瞭である。やや器壁は厚い。62は、土師器甕である。体部以下は、欠損してない。頚部は強く屈曲して外方に開き、口縁端部は、外面に面を持つようにつまみあげられている。体部外面は縦方向のハケで調整される。65は、土師器高杯である。接合部以下の脚部は、欠損している。器壁はやや一定し、口縁端部は、やや尖り気味にまとまる。61は、須恵器杯身であろう。底部から柔らかい曲線で開き器壁は、底部を除き一定である。口縁部内面に沈線が巡る。底部外面はヘラ切後ナデられている。63は、須恵器杯蓋である。宝珠つまみは欠けてない。かえりは、短く厚い。64は、須恵器杯身である。高台部分が接地面側から押し潰され、左右に間延びした様な断面形をしている。体部は、腰部において強く屈曲して垂直に上へ伸びる。遺物の時期は、７世紀後葉とみられる。

④ＳＨ80出土遺物（66～72）

遺物は、土師器皿・甕・製塩土器・須恵器杯蓋・鉢がある。66・67は、土師器皿である。66は小型、67は大型品で内面にミガキとみられる痕跡を留める。69・70は須恵器杯蓋で69は、体部が著しく歪んでいる。70は口縁端部外面に浅い沈線が巡る。71は、須恵器鉢で緩やかな体部と外反する口縁部を有している。やや口縁部にかけて歪みが著しい。72は、志摩式製塩土器で底部から体部にかけてのものである。遺物の時期は、８世紀初頭とみられる。

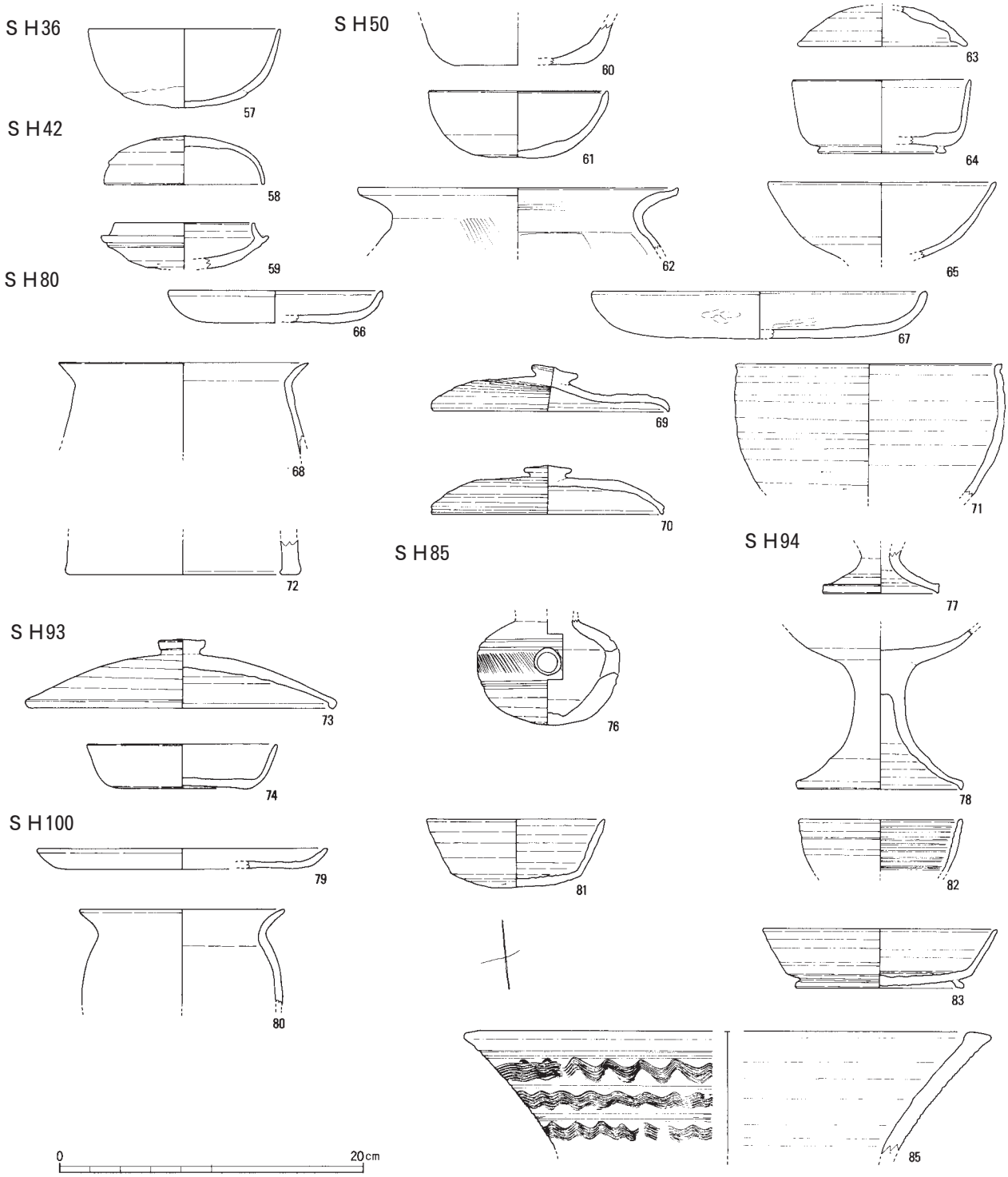
⑤ＳＨ85出土遺物（76）

遺物は、須恵器瑳がある。76は、須恵器瑳である。

体部中ほどに孔が穿たれており、斜め線状に刺突文が巡る。上下に２条の沈線が巡る。遺物の時期は、８世紀初頭とみられる。

⑥ＳＨ93出土遺物（73・74）

遺物は、須恵器杯蓋・杯身がある。73は器形がやや大きめで、宝珠つまみはやや扁平である。体部は、やや緩やかに開く。口縁端部は、ほぼ垂直に下りて丸みを帯びてまとまる。口径は、かなり大きい。74は、色調が明るい灰色で、胎土がオレンジ色である。須恵器の産地を特定できそうである。遺物の時期は、８世紀前葉から中葉にかけてみられる。



第61図　出土遺物実測図（８）

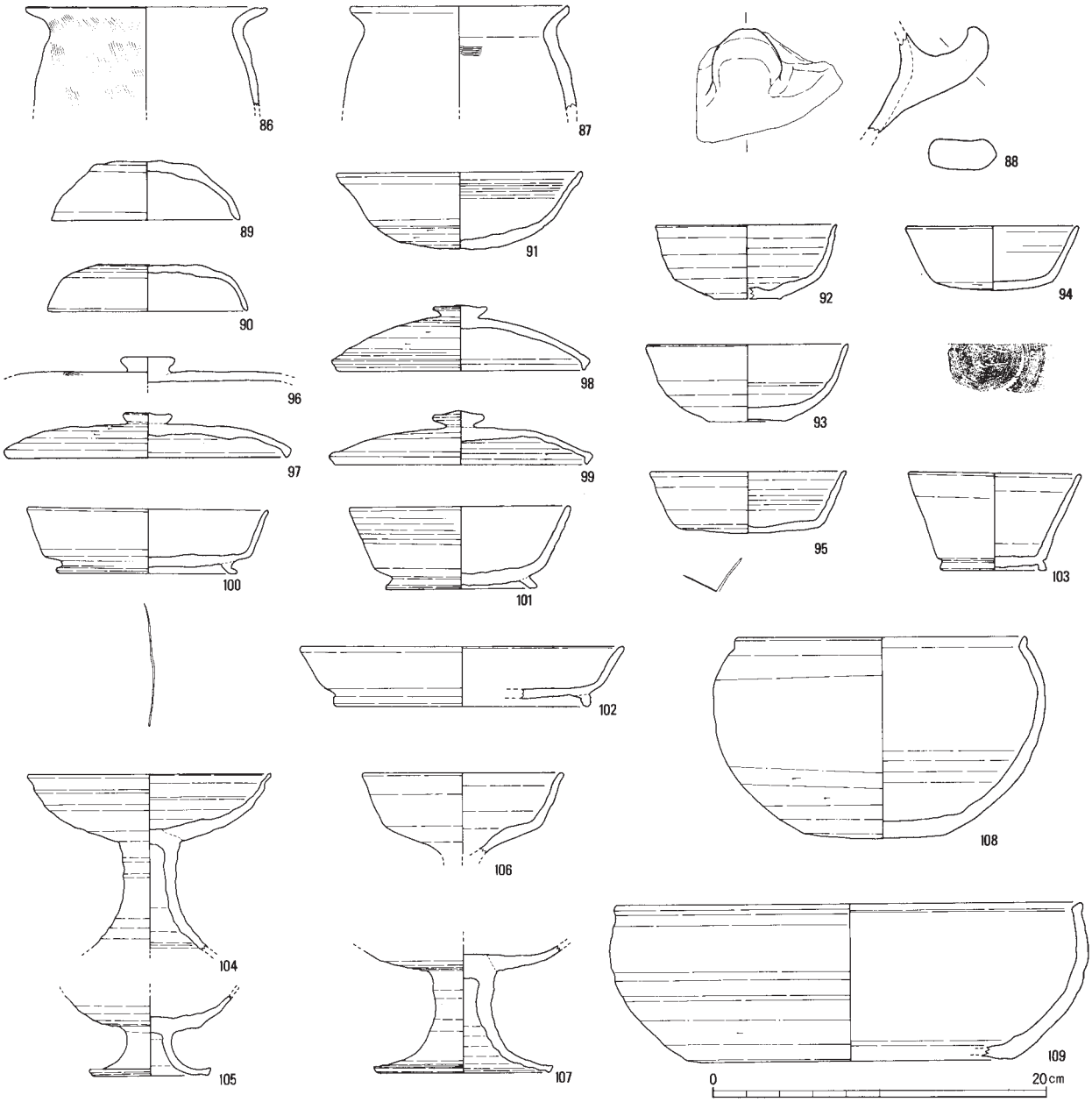
⑦ＳＨ94出土遺物（77・78）

77・78は、須恵器高杯である。77は、脚部が柔らかな曲線を描いて開くものの稜を有する。接地部分は、脚部の先端を垂下させ、断面逆三角形状になるように成形される。78は、杯部接合部から欠ける。脚部接地面は、外面に面が有る様に成形される。遺物の時期は、８世紀中葉から後葉にかけてみられる。

⑧ＳＨ100出土遺物（79～83・85）

遺物は、土師器皿・甕・須恵器杯身・甕がある。79は、表面剥離が著しいため調整不明である。口径は20cmとやや大きい。80は、表面剥離や磨滅のため調整不明である。81は、須恵器杯身である。底部はやや丸みを帯びており、「×」「＋」とみられるヘラ記号がみとめられる。腰部で屈曲し立ちあがり口縁端部は、やや尖り気味にまとまる。器壁は口縁部付近で厚みを増している。82は、須恵器杯身であろう。器表面は、調整によるものとみられる。段差が著しくみとめられる。また、色調は74と同じオレンジ色で他の須恵器に比べて異なるものである。83は、高台部が押し潰され外方に拉げている。体部は腰部においてやや弱く屈曲し、斜め外上方に伸びる。口縁端部は、丸みを帯びてまとまる。

ＳＨ112



第62図　出土遺物実測図（９）

85は、口径が不確定である。口縁端部は、上面に面があるようにやや平坦である。上から沈線が2条、波状文、沈線、波状文、沈線が2条、波状文がめぐる。遺物の時期は、7世紀後葉から8世紀前葉にかけてみられる。

⑨ＳＨ112出土遺物（86～109）

遺物には、土師器鍋把手部分・甕・須恵器杯蓋・杯身・鉢・高杯・椀がある。86は、体部下半は欠損してない。体部の外面の調整が磨滅著しい。87は、磨滅著しく調整不明である。ハケで調整されていたとみられる。88は、土師器鍋か甑の把手部分である。89は、天井部がヘラ切りによって調整される。体部外面から内面にかけて回転ナデによって調整されている。90は、天井部がヘラ切後未調整である。全体的にやや粗雑な作りである。91は、底部から緩やかに立ちあがり、外方に開く。口縁端部は、丸くまとまる。杯身の器形としては、異色のものである。本来は、高杯の杯部を考えるべきであろうか。類例は、なく珍しいものである。92は、底部がやや厚みがあり腰部においてやや強めに屈曲する。底部外面は、ヘラ切りによって平らに成形される。93は、底部外面が丁寧にナデによって調整されて、やや斜め外方に開く。口縁端部は、丸みを帯びてまとまる。94は、須恵器杯身である。底部外面にヘラ書きある。全体的に器壁が一定で丁寧な作りをしている。また、色調は、明るい灰色であり、胎土は、オレンジ色に近い。95は、高台がない。底部外面は、丁寧に調整されている上にヘラ記号がある。おそらく「×」「＋」であろう。底部から体部の腰部において強く屈曲し、やや外方に直線的に開く。口縁端部は、やや丸みを帯びてまとまる。96・97・98・99は宝珠つまみがやや扁平で、体部もやや直線的ないし緩やかに開く。口縁部は、ほぼ垂直に下り、断面形が三角である。100は、底部外面にヘラ描沈線が1条直線状に走る。高台部が外方に屈曲している。体部は丁寧に回転ナデによって調整され、口縁端部は、丸くまとまる。101は高台を持ち、体部外面は丁寧に調整され仕上げられる。腰部において強く屈曲してやや外方に直線的に伸びる。器壁の厚みはやや厚い。高台部分は、貼り付け後やや丸みを帯びてまとめられている。102は、全体的に磨滅著しい。103は底部から体部にかけて強く屈曲し、直線的に斜め外方に開き、口縁端部において丸くまとまる。外面上では灰色であるが、胎土は赤色である。104は、杯部が口縁部にかけて順次器壁が薄くなり、口縁部付近で段を持つように屈曲している。105は、やや短めの脚部を持ち脚部の端部において厚みをます。106は杯部が器壁が一定で、口縁端部は丸みをおびてまとまる。口縁部内面に使用したとみられる痕跡のこる。107は脚部が全体的に丁寧に仕上げられる。108は、底部外面は糸切り痕残る。体部は、全体的に球形である。口縁部は、やや上方にのび丸くまとまる。109はやや大型な物で底部はやや平らである。体部はやや弱く立ちあがり口縁部においてやや外方に屈曲する。108と同様の器形になる可能性が高い。遺物の時期は、7世紀後葉から8世紀前葉にかけてとみられる。

２）掘立柱建物

遺物は、全て柱掘形から出土したものである。

①ＳＢ164出土遺物（110）

110は、土師器甕である。全体的に遺存状況は、良くないが体部外面にハケの調整が僅かに残る。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

②ＳＢ165出土遺物（111）

111は須恵器壺蓋であろうか。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

③ＳＢ167出土遺物（112）

112は須恵器鉢である。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

④ＳＢ170出土遺物（113～115）

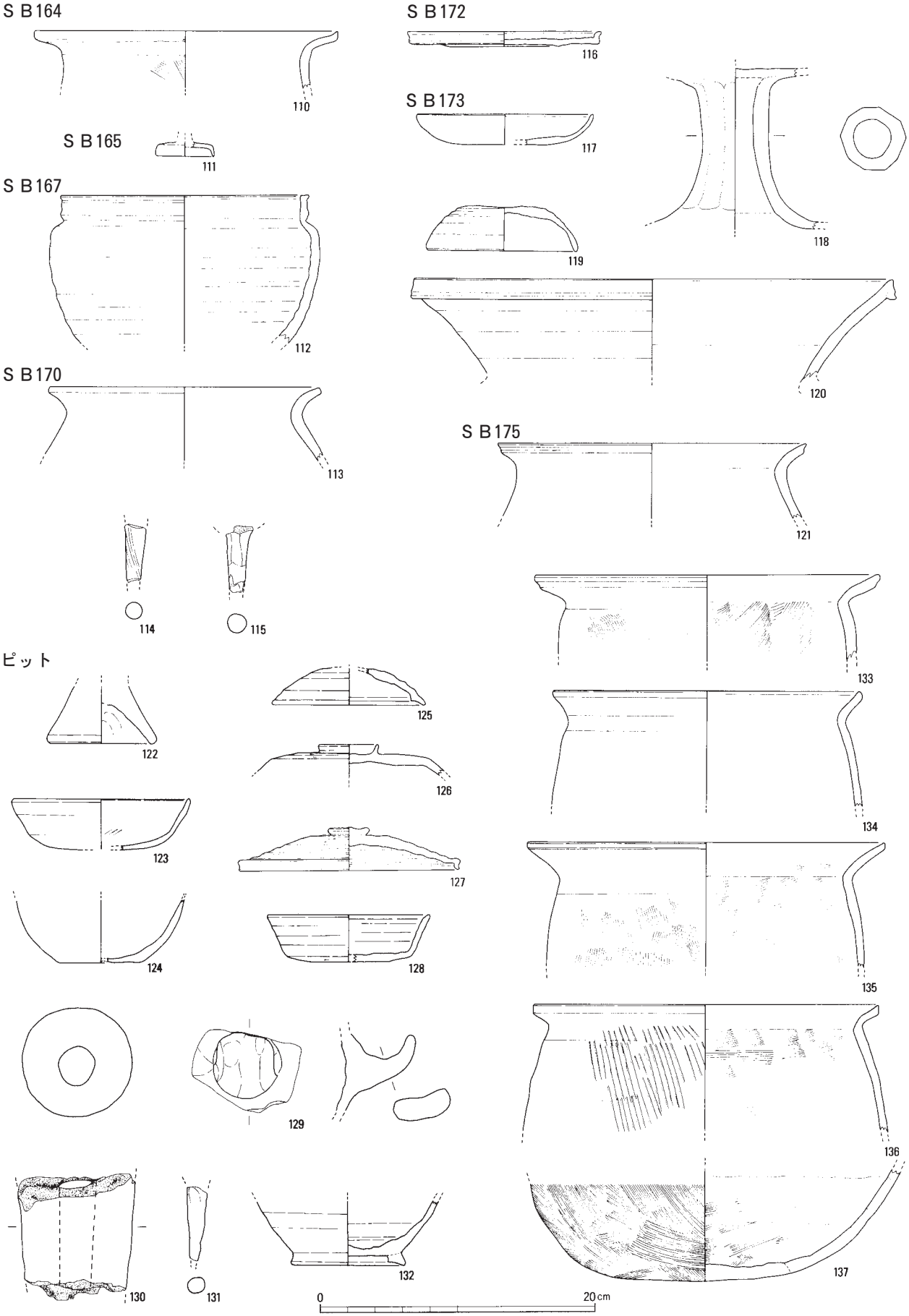
113は、土師器甕である。全体的に遺存状況は、良くない。114・115は、知多式製塩土器である。杯部及び脚の先端部がないが４Ａ２類から４Ａ３類とみられる。遺物の時期は、8世紀中頃とみられる。

⑤ＳＢ172出土遺物（116）

116は、須恵器無台盤であろう。口縁部の立ち上がりや底部がヘラ削りによって丁寧に仕上げられる。岡山古窯跡2号窯の出土遺物と非常に似ている。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

⑥ＳＢ173出土遺物（117～120）

遺物には、土師器杯・高杯・須恵器杯蓋・甕がある。117は、風化著しい。118は土師器高杯である。脚部外面は、削りによって丁寧に調整されている。



第63図　出土遺物実測図（10）

119は天井部が未調整である。120は、広口甕であろう。遺物の時期は、8世紀代とみられる。

⑦ＳＢ175出土遺物（121）

121は、土師器甕である。風化著しく調整等不明瞭である。遺物の時期は、8世紀代であろう。

⑧ピット出土遺物（122～137）

遺物には、台付甕・土師器杯・甕・鍋か甑の把手部分・須恵器杯蓋・杯身・壺底部・鞴羽口がある。122は、台付甕の台部、131は、知多式製塩土器がある。遺物の時期は、7世紀から8世紀にかけてのものである。

３）土坑

①ＳＫ81出土遺物（138～140）

138は、須恵器杯身であろうか。底部には、糸切り痕跡が残る。139は、須恵器杯身である。高台部は押し潰され左右に開き断面台形状である。140は、須恵器杯身である。高台はない。底部は、ほぼ平らで腰部において強く屈曲する。口縁端部は尖り気味にまとまる。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

②ＳＫ142出土遺物（141）

141は、土師器甕である。器表面の剥離や磨滅著しいため、調整不明な箇所が多いが内面は横方向のハケ、外面は縦方向のハケとみられる。口縁端部は、外面に面を持つように上方につまみあげられている。遺物の時期は、8世紀代であろう。

４）溝

ＳＤ29出土遺物（142・143）

142は、須恵器杯身である。高台部は、押し潰されて外側にはみ出すような形状である。体部は、腰部において強く屈曲して斜め外上方に開く。器壁は、口縁部に近づくにつれて先細りになり、口縁端部で尖り気味にまとまる。143は、須恵器杯身あろう。ヘラ記号が残る。「×」か「＋」とみられる。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

ＳＤ47出土遺物（144）

144は、知多式製塩土器の脚部である。４Ａ２類か４Ａ３類であろう。先端部近くで削りこまれて細身になる部分がある。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉のものである。

ＳＤ56出土遺物（145）

145は、須恵器甕である。口縁端部は、外面に面を持つように一部を垂下させている。口縁部には、上から沈線が2条、刺突文、沈線が2条、刺突文が施される。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

ＳＤ63出土遺物（146）

146は、土師器杯である。全体的に作りが粗いものである。器表面は、磨滅著しく調整が不明瞭である。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

ＳＤ66出土遺物（147・148）

遺物には、須恵器杯蓋・杯身がある。147は宝珠つまみが中央部でやや盛り上がる。体部は傘状に緩やかに広がる。口縁端部は、内側に折り込まれ、やや尖った様に見える。148は底部が曲線を描き高台部の接地面と同じ高さになるようである。高台部は、貼り付け後のナデによって断面形が平行四辺形状である。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

ＳＤ77出土遺物（149）

149は、土師器杯である。底部は、ユビオサエによって調整され、痕跡残る。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

ＳＤ76出土遺物（150・151）

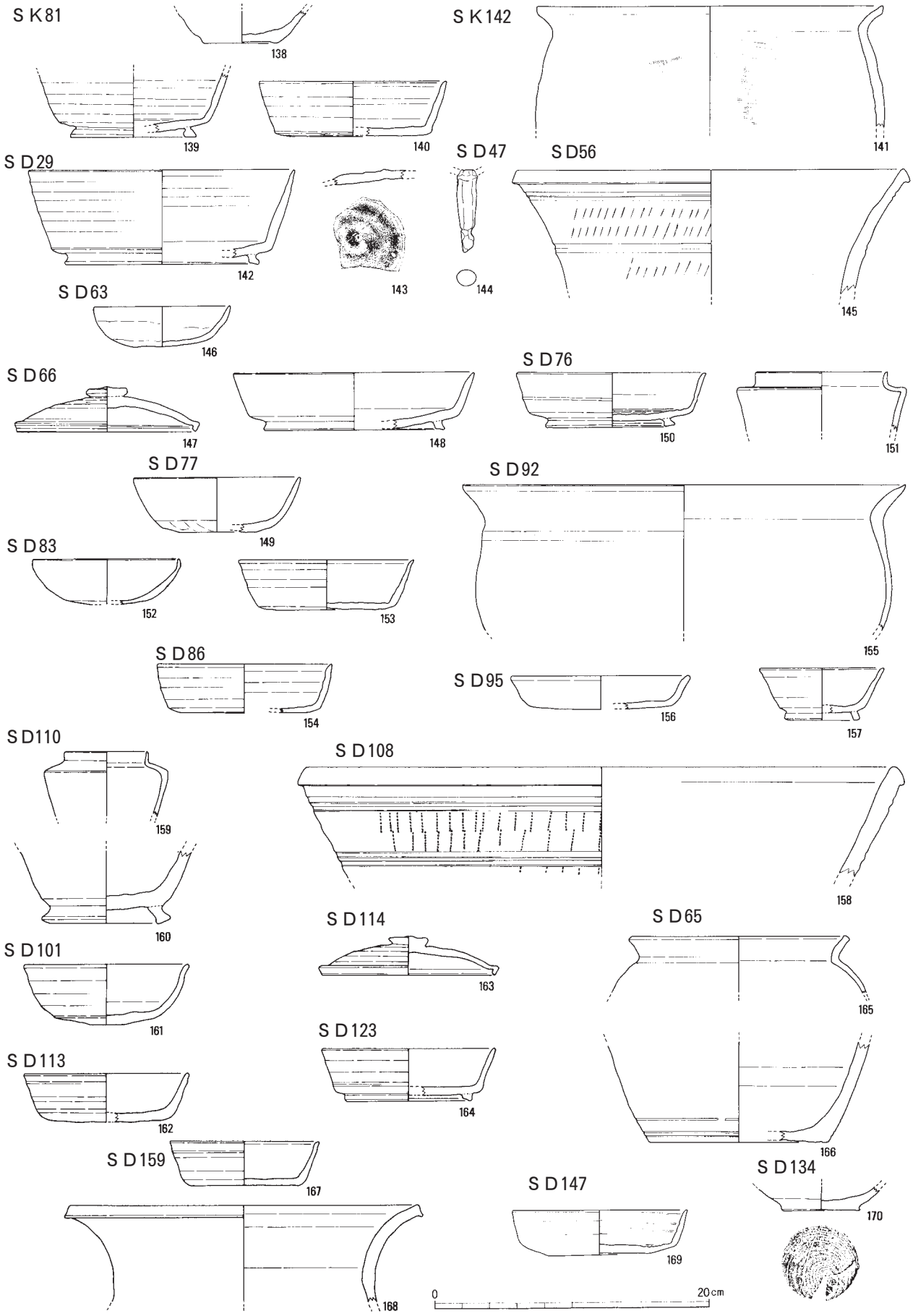
150は、須恵器杯身である。腰部から強く屈曲して口縁部にかけて丸みを帯びてまとまる高台部は、押し潰されたように断面形が台形状である。器壁は、体部下半が一番薄い。151は、須恵器短頸壺である。肩部で鋭角に内傾し、柔らかく直上する。口縁端部は、先細り気味にまとまる。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

ＳＤ83出土遺物（152・153）

153は、高台を有しない。口縁端部は、やや外傾し先細り気味である。152は、土師器杯である。器全体は、ナデによって調整されている。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

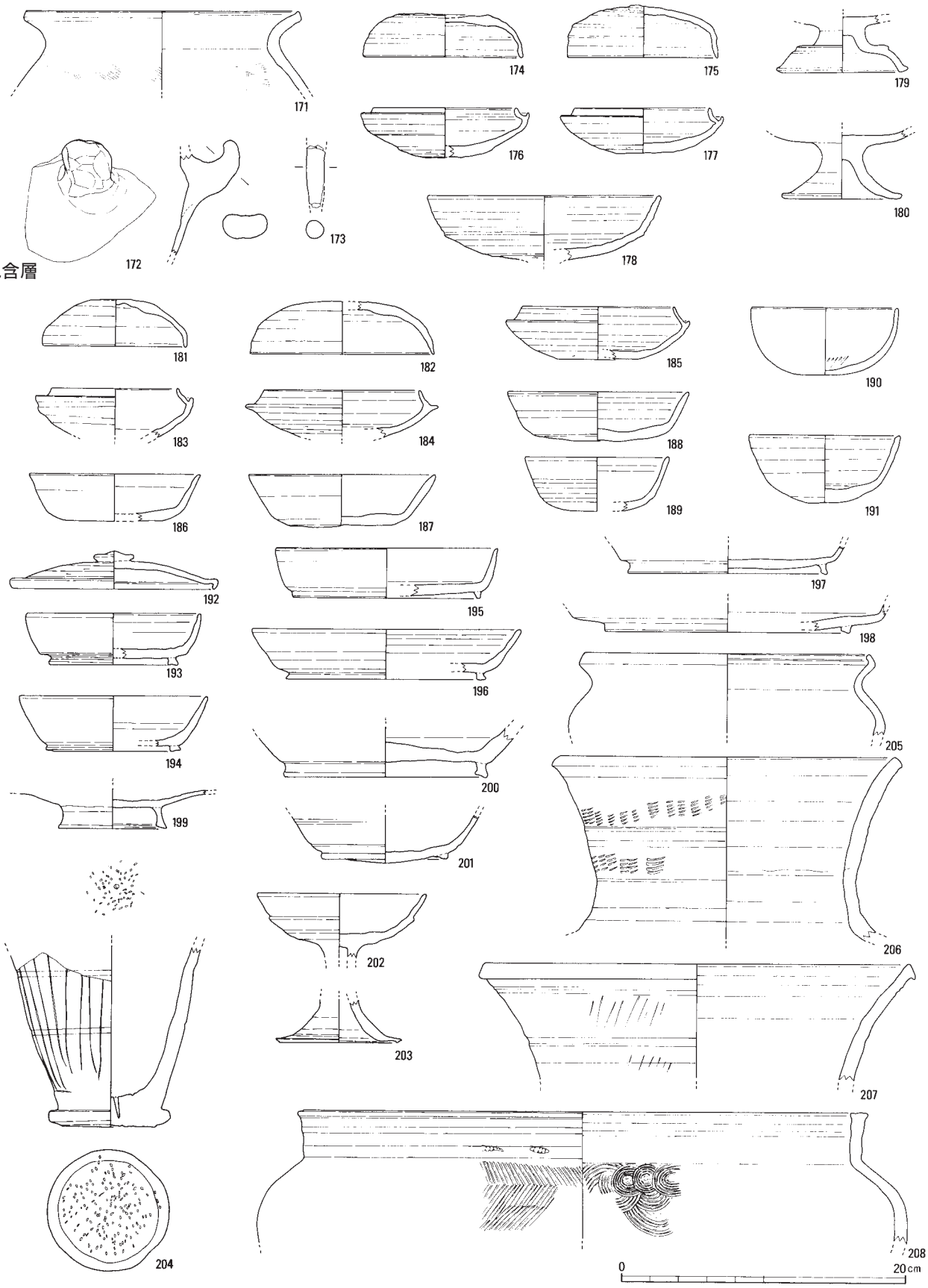
ＳＤ86出土遺物（154）

154は、須恵器杯身である。高台は、ない。口縁部は、やや直線的に立ちあがり端部においてナデによってやや尖り気味まとまる。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。



第64図　出土遺物実測図（11）

ＳＤ４上層



第65図　出土遺物実測図（12）

ＳＤ92出土遺物（155）

155は、土師器甕である。口縁端部は、外面に面を持つようにややつまみあげられる。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

ＳＤ95出土遺物（156・157）

156は、土師器杯である。かなり磨滅によって調整が不明瞭である。底部～体部にかけての調整はヘラケズリの可能性が高い。157は、須恵器杯身であろうか椀かもしれない。高台部分は、断面形が方形である。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

ＳＤ108出土遺物（158）

158は、須恵器甕の口縁部である。上から沈線2条、刺突文、沈線2条、刺突文が施される。遺物の時期は、8世紀中葉頃にかけてみられる。

ＳＤ110出土遺物（159・160）

159は、須恵器短頸壺の上半部である。160は、須恵器長頸壺の体部下半であろう。遺物の時期は、8世紀中葉頃にかけてみられる。

ＳＤ101出土遺物（161）

161は須恵器椀であろうか杯身かもしれない。底部は丁寧にケズリによって調整される。胎土は、全体的に焼成不良であろうかにぶい黄橙色である。口縁部は、やや外反して丸みを帯びてまとまる。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

ＳＤ113出土遺物（162）

162は、須恵器杯身である。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

ＳＤ114出土遺物（163）

163は、須恵器杯蓋である。宝珠つまみの中央部は、やや盛り上がる。体部から口縁部にかけて僅かながら撓み、端部において内傾し、丸みを帯びてまとまる。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

ＳＤ123出土遺物（164）

164は、須恵器杯身である。高台は内面側がナデによって丸みを帯びた曲線で断面形が歪な形である。腰部から強く屈曲して立ちあがり口縁部において丸みを帯びてまとまる。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

ＳＤ65出土遺物（165・166）

165は、土師器甕である。器壁は頚部から口縁部にかけて厚い、器表面は磨滅著しく調整が不明瞭である。166は、須恵器壺底部である。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

ＳＤ159出土遺物（167・168）

遺物には、須恵器杯身・甕がある。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

ＳＤ147出土遺物（169）

169は須恵器杯である。底部からの立ち上がりは、強い。内面に強い稜線が生じた痕跡があるが調整によるものとみられる。底部は、ロクロケズリによって丁寧に成形される。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

ＳＤ134出土遺物（170）

170は、須恵器杯身である。底部は、糸切り痕跡が残る。また、沈線が1条走る。「－」「｜」であろう。もはや高台の無い時期に相当する。遺物の時期は、8世紀中葉から後葉にかけてみられる。

ＳＤ４上層出土遺物（171～180）

遺物には、土師器甕（171）・鍋か甑の把手部分（172）・知多式製塩土器（173）・須恵器杯蓋（174・175）・杯身（176・177）・高杯（179・180）・無蓋高杯（178）がある。171は、風化著しいものの僅かに内外面にハケ調整の痕跡を留める。172は、ソケット状に差込によって成形される。173は、知多式製塩土器の脚部である。杯部及び脚部先端部分は、欠損してない。立松氏の分類で４Ａ３類であろう。遺物の時期は、凡そ7世紀から8世紀にかけてのものとみられる。

５）　包含層出土遺物（181～221）

遺物には、土師器台付甕（209）・杯（210～212）・皿（213）・甕（214～217）・甑（218）・鍋か甑の把手部分（219）・知多式製塩土器（220）・志摩式製塩土器（221）・須恵器杯蓋（181～182・192）・杯身（183～191・193～200）・壺（201）・高杯（202～203）・練鉢（204）・甕（205～208）がある。

181・182は、共に天井部がヘラ切後未調整である。183・184・185は、内面にかえりを持つ杯身で183は、やや歪で口径が不確かである。186～189は、高台を持たない杯身、190・191は、椀とみられる。共に器壁全体を回転ナデによって調整される。190はやや

歪みがある。192は宝珠つまみの有る杯蓋、193～200は、高台を持つ杯身。198は、高台部がやや内側に貼り付けられ他の杯身と比較して異なる。199は、高台部がかなり高い。杯身と異なる器種かも知れない。201は壺底部で長頸壺であろうか。底部は器壁が丸みを帯び下方に張り出しており安定性に欠ける。202は無蓋高杯、203とは別個体とみられる。204は、非常に珍しい。体部外面に沈線が２条巡り、底部内面と外面に刺突が施されている。また、体部外面には縦方向に粗雑であるがヘラ描き沈線が施されている。県内に類例がない。金属器を模倣しようと表現したものであろうか。205は頸部から口縁部が短く、口縁部が内側に傾斜している。206は口縁部から頸部にかけては長い。208は、広口甕で頸部から口縁部にかけて直立する。体部内外面は非常に明瞭なタタキの痕跡を残している。218は甑、孔は半楕円形のものが２箇ある。219は、ソケット状の差込になっている。220は知多式製塩土器、杯部及び脚部先端部分は、欠損してない。４Ａ３類であろう。221は、志摩式製塩土器、遺物の時期は、おおよそ８世紀代にかけてのものとみられる。

3　平安時代

1）土坑

①ＳＫ12出土遺物（222～224）

222は、ロクロ土師器皿であろうか。底部に糸切り痕跡をとどめる。底部から口縁部にかけて直線的に開くとみられる。全体的に遺存状況は良いほうでない。223・224は、灰釉陶器椀とみられる。223は深椀かもしれない。高台部の断面形は223でやや長方形状で、224で台形状である。遺物の時期は、折戸53号窯と併行するもので10世紀前半とみられる。

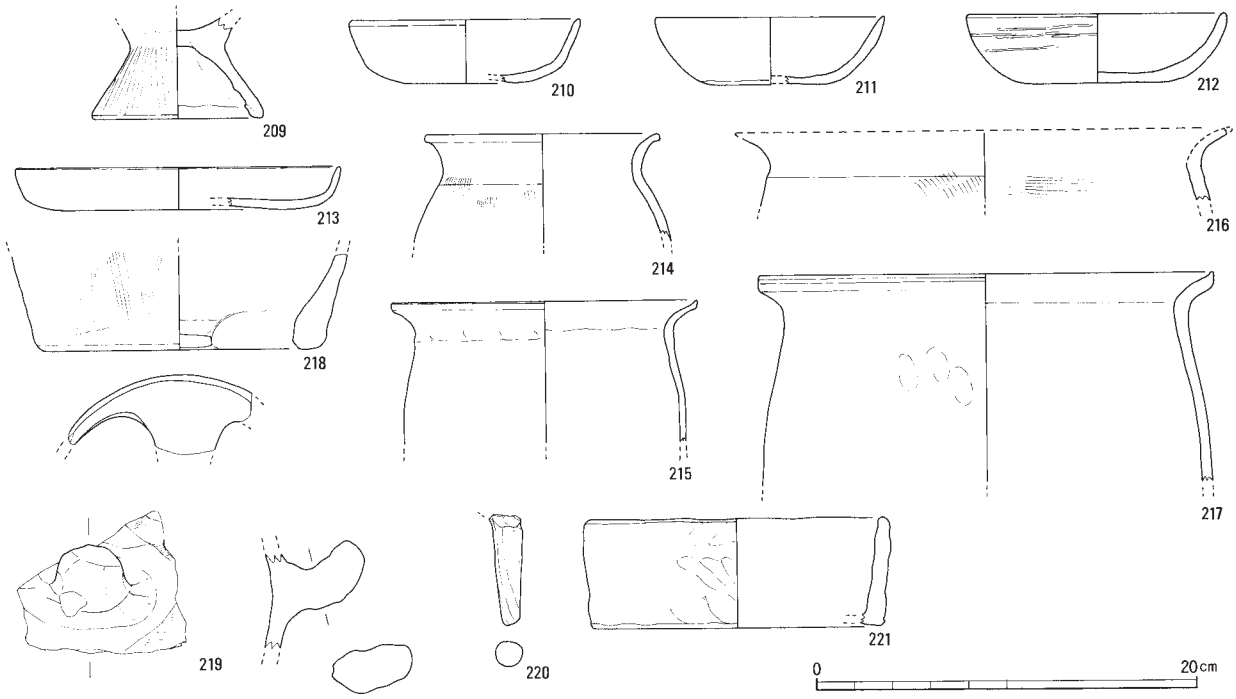
②ＳＫ107出土遺物（230～236）

遺物には、灰釉陶器椀・皿・鉢・双耳壺がある。230は施釉方法がツケガケ、高台部が断面三角形状である。231～233は、灰釉陶器椀か皿の底部片、高台部断面形は、三角形状か三日月形状である。234は、高台部が三日月形である。235は高台部に工具の当り痕跡を残す。胎土は精緻なものである。236は、口縁部や体部が欠損している。残存部分からおそらく双耳壺とみられるが１ヶ所だけ貼り付けられた痕跡を残す。遺物の時期は、黒笹90号窯から折戸53号窯にかけてのもので９世紀後半から10世紀前半とみられる。

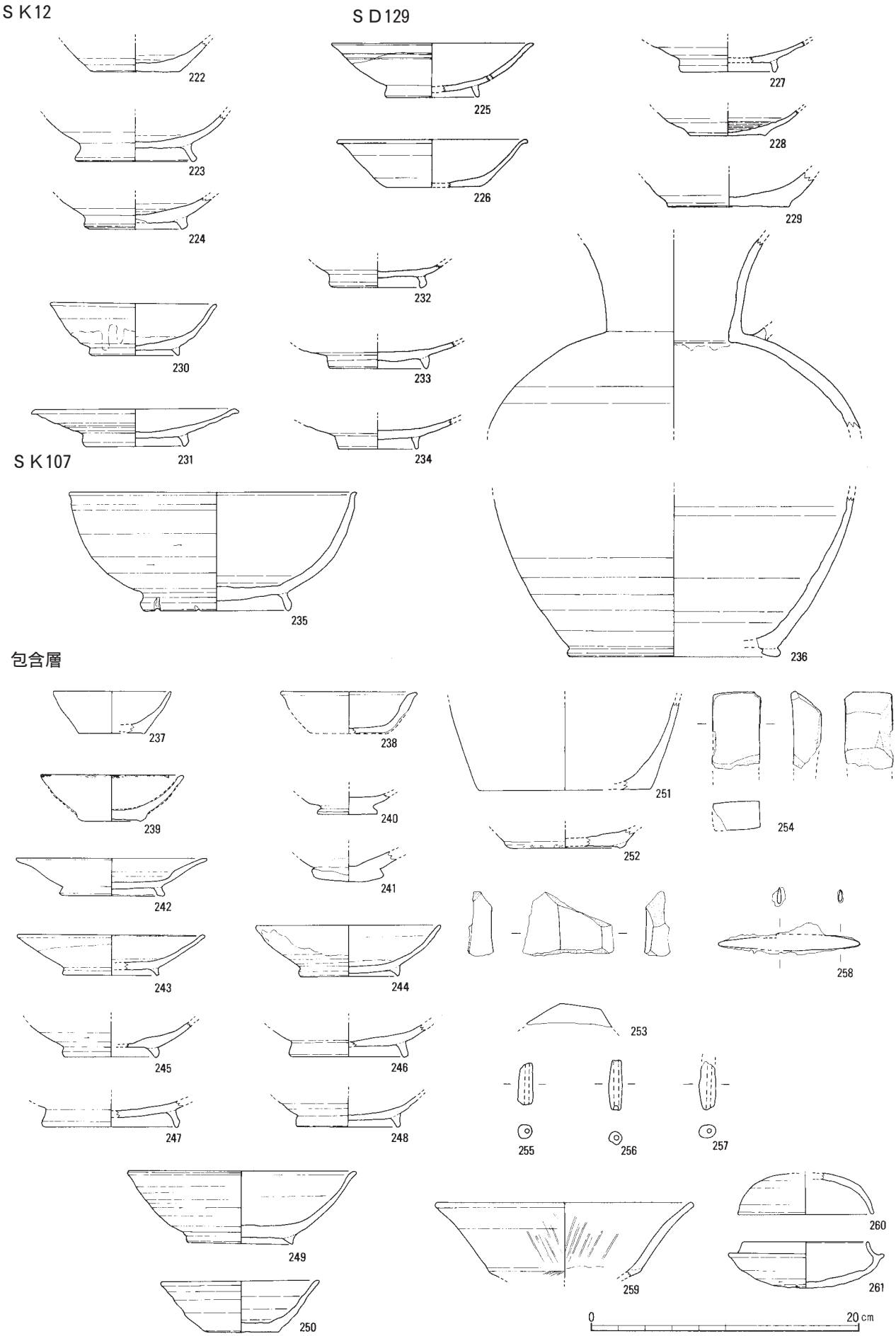
2）溝

ＳＤ129出土遺物（225～229）

225・226は、灰釉陶器椀、227～229は、土師質土師器椀及び皿であろう。底部に糸切痕跡を留める。



第66図　出土遺物実測図（13）



第67図　出土遺物実測図（14）

遺物の時期は、黒笹90号窯から折戸53号窯にかけてのもので９世紀後半から10世紀前半とみられる。

３）包含層出土遺物（237～248）

遺物には、土師器椀（237～239）・緑釉陶器皿（242）・灰釉陶器椀ないし皿（243～248）・土師質土師器（240・241）がある。237・238は、風化著しく器表面の調整は不明瞭である。239も器表面が風化著しいものであるが、口縁端部に黒く煤けた油煙の痕跡があり灯明皿の役割を持っていたとみられる。240・241は、底部に糸きり痕跡を留める。242～248は、灰釉陶器皿が多数を占めているが底部のみ残るものには椀も含まれる。黒笹90号窯から折戸53号窯にかけてのものであろう。遺物の時期は、凡そ９世紀後半から10世紀前半にかけてのものであろう。

４　鎌倉時代

１）土坑

ＳＫ166出土遺物（249）

249は、陶器椀（山茶椀）である。藤澤良祐氏編年の６型式に相当しよう。時期は、13世紀中葉とみられる。

２）ピット出土遺物（250～251）

250は、陶器椀で藤澤氏編年の６型式に相当しよう。時期は、13世紀中葉である。251は陶器壺の底部である。

３）溝

ＳＤ122出土遺物（252）

252は、陶器椀で藤澤氏編年の６型式に相当しよう。遺物の時期は、13世紀中葉である。

５　時期不明

包含層出土遺物（253～258）

253・254は、砥石。砥面は253が３面、254が４面である。255～257は土錘、258は刀子とみられる。

259～261は試掘に伴う遺物である。259は土師器高杯である。260・261は須恵器杯身・杯蓋である。遺物の時期はおおよそ古墳時代後期である。なおこれら遺物は、山村遺跡と菟上遺跡の間の谷において実施した試掘遺物である。おそらく谷上流に位置する六谷遺跡からのものと考えられる。

≪参考文献≫

［弥生土器］

鈴木克彦・伊藤裕偉・伊勢野久好・岩中淳之「伊勢・志摩」『伊勢湾岸の弥生時代中期をめぐる諸問題　－土器・墓・ムラにみる画期と地域間交流』（第７回東海埋蔵文化財研究会　1990年）

上村安生「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年　東海編』（木耳社　2002年）

［須恵器］

田辺昭三『陶邑古窯址Ⅰ』（平安学園考古学クラブ　1966年）

斎藤孝正「猿投・美濃須衛」『季刊　考古学　第42号』（雄山閣　1993年）

斎藤孝正・後藤健一編『須恵器集成図録　第３巻東日本編Ⅰ』（雄山閣　1995年）

［製塩土器］

新田洋「三重県における製塩に関する予察」『三重考古３』（三重考古学研究会　1980年）

山本雅靖「三重県」(近藤義郎編『日本土器製塩研究』　1994年)

立松彰「愛知県」(近藤義郎編『日本土器製塩研究』　1994年)

西村美幸「伊勢湾西岸の製塩土器ー研究の現状と課題ー」『製塩土器の諸問題―古代における塩の生産と流通―』（塩の会シンポジウム実行委員会　1997年）

森泰通「東海地方における消費地出土の製塩土器ー特に固形塩の問題をめぐってー」『製塩土器の諸問題―古代における塩の生産と流通―』（塩の会シンポジウム実行委員会　1997年）

［灰釉陶器・緑釉陶器］

斎藤孝正「猿投窯における灰釉陶器の展開」『考古学ジャーナル№211』（ニューサイエンス社　1982年）

齋藤孝正「東海地方の施釉陶器生産」（『古代の土器研究‐律令的土器様式の西・東　施釉陶器‐』　古代の土器研究会　1994年）

陶器椀（山茶椀）

藤澤良祐「山茶椀研究の現状と課題」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要　第３号』（三重県埋蔵文化財センター　1994年）

No.	登録番号	器種	出土遺構	計測値 口径(cm)	計測値 器高(cm)	計測値 その他(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	046-04	弥生土器 細頸壺	H 8 SX 4	9.4	口～体：残高11.7 底：残高6.5	底径5.5	底部～体部内面ナデ？、頚部内面～底部外面風化著しく調整不明	やや粗	並	橙色 7.5YR7/6　橙色 5YR7/8	約10%	
2	050-01	弥生土器 細頸壺	H 8 SX 4	–	残高23.4	底径5.4	底部～頚部内面ナデ・オサエ、頚部～底部外面ナデ、頚部～体部外面櫛描横線文	粗（～5㎜以下の小石含む）	並	橙色 7.5YR7/6　にぶい黄橙色 10YR7/4	約30%	
3	046-01	弥生土器 細頸壺	H 8 SX 4	約11	残高14.2	底径5.2	底部内面ナデ、体部～頚部内面オサエ、頚部～体部外面ハケ、底部外面ナデ	やや粗	並	橙色 7.5YR6/6　黄灰色 2.5Y4/1	約20%	
4	049-01	弥生土器 細頸壺	H 8 SX 4	–	残高10.6	–	体部内面ナデ・オサエ、頚部内面ナデ、頚部～体部外面波状文・横線文・円形浮文・横線文	やや粗（～2㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/4　浅黄橙色 10YR8/4	約15%	
4	049-02	弥生土器 壺	H 8 SX 4	–	残高3.4	底径5.8	風化著しく調整不明	やや粗（～5㎜以下の砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/4　浅黄色 2.5Y7/3	底部のみ	
5	055-03	弥生土器 壺	I 13 SD 9	約18	残高4	–	口縁部内外面風化著しく調整不明、口縁部外面ハケ	やや粗	並	にぶい黄橙色 10YR7/3　浅黄橙色 10YR8/4	口縁部約10%	
6	053-01	弥生土器 細頸壺	I 12 SD 9	7.6	残高10.5	底径5.3	底部内面風化著しく調整不明、頚部内面シボリ、口縁部～頚部及び底部外面風化著しく調整不明、ヘラ描沈線	粗（～4㎜以下の砂粒含む）	並	にぶい橙色 7.5YR7/4,6/4　にぶい黄橙色 10YR7/4	約20%	
7	042-02	弥生土器 壺	I 12 SD 9	–	残高8.9	–	体部内面オサエ・ナデ、体部外面ハケ・ミガキ、ヘラ描沈線	やや密	並	にぶい黄橙色 10YR7/3　黄灰色 2.5Y6/1	体部約20%	
8	054-01	弥生土器 壺	I 13 SD11	約20	残高14	–	内外面風化著しく調整不明、ヘラ描沈線	粗（～5㎜以下の小石・砂粒含む）	並	橙色 7.5YR7/6	約10%	
9	053-03	弥生土器 細頸壺	I 13 SD11	–	残高6.1	–	頚部内面風化著しく調整不明、頚部外面ハケ、ヘラ描沈線	やや粗（～2㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/4	頚部のみ	
10	015-05	弥生土器 壺	I 15 SD14	–	残高6.8	底径4.8	風化著しく調整不明	粗（～5㎜前後の砂粒含む）	並	黄灰色 2.5Y6/1～4/1　浅黄色 2.5Y7/3	約70%	
11	054-02	弥生土器 細頸壺	I 2 SD156	–	残高9.2	–	頚部～体部内面ナデ・ハケ、頚部～体部外面ハケ	やや粗（～1.5㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/4　黄灰色 2.5Y6/1,5/1	約20%	
12	023-06	弥生土器 壺	F 1 SD151	–	残高5.9	–	体部内面ハケ、体部外面ハケ	やや密	並	にぶい黄橙色 10YR7/4	約10%	体部径不定
13	041-02	弥生土器 壺	F 2 SD151	–	残高7	底径5	底部内面オサエ、体部内面ハケ、体部外面ハケ、底部外面ナデ	やや粗（～3㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/4　にぶい黄橙色 10YR7/4	約20%	
14	041-03	弥生土器 壺	F 2 SD151	–	残高2.5	底径5.2	底部～体部内面ハケ、体部外面ハケ、底部外面ナデ	やや粗（～3㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/4　にぶい黄橙色 10YR6/4	約10%	
15	057-01	弥生土器 壺	F 9 SD23	16	残高8.2	–	内外面風化著しく調整不明、つづれ突起	粗（～3㎜以下の砂粒含む）	並	橙色 7.5YR6/6	口縁部約10%	
16	050-02	弥生土器 壺	G 9 SD23	–	残高1.7	底径5.6	底部～体部内面ナデ、体部～底部ナデ	粗（～2㎜前後の砂粒含む）	並	黒褐色 10YR3/1　灰黄褐色 10YR5/2	底部のみ	
17	057-04	弥生土器 壺	F 9 SD23	–	残高6.1	底径4.2	底部～体部内面ナデ、体部～底部外面ナデ	粗（～5㎜以下の小石含む）	並	にぶい橙色 7.5YR7/4　橙色 7.5YR7/6	底部約20%	
18	023-05	弥生土器 壺	E9 SD145	–	残高1.8	底径6.1	風化著しく調整不明	粗（～4㎜前後の砂粒含む）	並	橙色 7.5YR7/6　にぶい黄橙色 10YR7/4	約10%	底部穿孔
19	059-01	弥生土器 壺	D 8 Pit 1	–	残高2.7	底径5.9	底部～体部内面剥離著しく調整不明、体部外面ハケ、底部外面剥離著しく調整不明	粗（～3㎜以下の砂粒・～5.5㎜以下の小石含む）	並	にぶい橙色 7.5YR7/4	底部約20%	
20	045-02	弥生土器 細頸壺	G 8 SD25	8	残高4.8	–	口縁部内面ナデ、口縁端部ヨコナデ、口縁部外面ハケ、口縁部外面沈線	密	並	橙色 7.5YR7/6　にぶい橙色 7.5YR6/4	口縁部約10%	
21	055-02	弥生土器 壺	D 8 Pit 1	–	残高2.8	底径7.5	底部～体部内面風化著しく調整不明、体部外面ハケ、底部外面ナデ	粗（～2㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/4　黄灰色 2.5Y6/1	底部のみ	
22	044-01	弥生土器 壺	E 9 SD31	14	残高13.5	底径6	底部～体部内面ナデ？、頚部内面～底部外面風化著しく調整不明、頚部円形浮文・櫛描横線文	粗（～5.3㎜以下の小石含む）	並	橙色 7.5YR7/6	約20%	
23	044-03	弥生土器 壺	E 7 SD31	9.6	残高4.3	–	頚部～口縁部内面風化著しく調整不明、口縁部～頚部ハケ？	粗（～2.2㎜以下の砂粒含む）	並	橙色 7.5YR7/6	口縁部約70%	
24	045-01	弥生土器 細頸壺	E 9 SD31	9.4	残高8.9	–	頚部～口縁部内面風化著しく調整不明、口縁部～頚部ハケ？	粗（～4㎜以下の小石含む）	並	橙色 7.5YR6/6　にぶい橙色 7.5YR7/4　暗灰黄色 2.5Y5/2	口縁部約40%	
25	058-01	弥生土器 壺	E 9 SD31	–	残高15.3	–	体部内面ナデ、体部外面ハケ、ヘラ描沈線	粗（～5.5㎜以下の小石含む）	並	にぶい褐色 7.5YR5/3　にぶい橙色 7.5YR6/4	約20%	
26	044-02	弥生土器 壺	E 7 SD28	–	残高4.2	底径5.5	底部～体部内面風化著しく調整不明、体部外面ハケ、底部外面ナデ	粗（～3.8㎜以下の小石含む）	並	橙色 7.5YR6/6　明褐色 7.5YR5/6　浅黄橙色 7.5YR8/4	底部約10%	
27	057-06	弥生土器 壺	E 9 SD31	–	残高4.7	底径4.5	底部～体部内面剥離著しく調整不明、体部外面ハケ、底部外面ナデ	粗（～2.7㎜以下の砂粒含む）	並	明褐色 7.5YR5/6　灰黄褐色 10YR5/2	底部約20%	
28	055-04	弥生土器 細頸壺	E12 SD19	約10	残高6.7	–	頚部内面シボリ、口縁部内面～頚部外面風化著しく調整不明、ヘラ描沈線	粗	並	灰黄褐色 10YR6/2　灰白色 2.5Y8/1	口縁部約10%	
29	049-03	弥生土器 壺	G11 SD20	13.6	残高5.2	–	口縁部内面ナデ？・ハケ、口縁部外面磨滅著しく調整不明	粗（～7㎜以下の小石含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/4	口縁部約30%	
30	058-02	弥生土器 細頸壺	G11 SD20	11.6	残高6.4	–	頚部～口縁部内面剥離著しく調整不明、口縁端部風化著しく調整不明、頚部外面ハケ、櫛描文	粗（～2.5㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい黄褐色 10YR5/3	口縁部約10%	
31	057-02	弥生土器 壺	E11 SD32	15	残高4.7	–	内外面風化著しく調整不明、つづれ突起	粗（～3㎜前後の砂粒含む）	並	橙色 7.5YR7/6	口縁部約20%	
32	055-01	弥生土器 壺	E 9 Pit 4	約21	残高20.3	底径7	内外面風化著しく調整不明、ヘラ描沈線	粗（～4㎜以下の小石・砂粒含む）	並	橙色 7.5YR6/6　にぶい黄橙色 10YR6/4	約20%	
33	056-01	弥生土器 壺	G15 SD71	–	残高21.9	底径6.5	内外面風化著しく調整不明、ヘラ描沈線	やや粗（～1.5㎜前後の砂粒含む）	並	浅黄橙色 7.5YR8/6　浅黄橙色 10YR8/4	約20%	
34	047-04	弥生土器 細頸壺	E13 SD34	–	残高6.9	–	頚部内面ナデ・シボリ、頚部外面磨滅著しく調整不明、ヘラ描沈線	やや粗（～3.5㎜前後の小石含む）	並	橙色 7.5YR6/6	頚部のみ	
35	041-01	弥生土器 細頸壺	H14 SD16	9.8	残高24.8	–	体部内面ハケ、頚部内面シボリ、口縁部内面ヨコナデ、口縁部～頚部外面ハケ、体部外面ミガキ、ヘラ描横線文・櫛描横線文	やや粗（～5㎜以下の小石・砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/4　暗灰黄色 2.5Y5/2	約70%	
36	047-03	弥生土器 壺	E13 SD34	–	残高1.3	底径5	底部～体部内面ナデ、体部外面ハケ、底部外面ナデ	やや粗（～2㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/3　灰白色 10YR7/1	底部約10%	
37	047-01	弥生土器 壺	D15 SD34	–	残高8.4	底径6	底部～体部内面ミガキ、体部外面ハケ・ミガキ、底部外面ナデ	粗（～2.5㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/4	約20%	
38	057-03	弥生土器 細頸壺	A11 SD46	8	残高4.6	–	口縁部内面ナデ、口縁端部内外面ヨコナデ、口縁部外面剥離著しく調整不明、凹線文	粗（～2.5㎜前後の砂粒含む）	並	浅黄橙色 7.5YR8/4　にぶい橙色 7.5YR7/4	口縁部約10%	
39	057-05	弥生土器 壺	B11 SD46	–	残高4.2	底径5	底部～体部内面ナデ、体部外面ハケ、底部外面ナデ	粗（～9.5㎜以下の小石含む）	並	にぶい橙色 7.5YR7/4	底部約20%	
40	047-02	弥生土器 細頸壺	D15 SD34	–	残高8.6	–	頚部内面ナデ、頚部外面ハケ・ナデ、頚部外面半裁竹管文・刺突文・沈線	やや粗（～3㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい橙色 7.5YR7/4	頚部約20%	
41	001-05	弥生土器 細頸壺	B20 SH80	約9	残高5.6	–	内外面風化著しく調整不明	粗（～3㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/4	底部のみ	
42	052-01	弥生土器 壺	B18 SD89	–	残高5.8	底径6	体部内面ナデ？ミガキ？、体部外面ハケ後ミガキ、底部外面ナデ	やや粗（～2㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい橙色 7.5YR7/4　にぶい黄橙色 10YR7/3	約10%	
42	052-03	弥生土器 細頸壺	B18 SD89	10	残高14.6	–	風化著しく調整不明	粗（～5㎜以下の小石含む）	並	橙色 7.5YR7/6	約20%	
43	051-01	弥生土器 細頸壺	B18 SD89	8	残高18.9	底径6	底部～口縁部内面ナデ、口縁部～底部外面ハケ・櫛描横線文	粗（～4.5㎜以下の小石含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/3　黄灰色 2.5Y5/1	約30%	
44	053-02	弥生土器 細頸壺	B20 SD158	9.4	残高13.5	底径約5	底部内面風化著しく調整不明、口縁部内外面ヨコナデ、頚部～底部外面風化著しく調整不明、半裁竹管文	粗（～4㎜以下の砂粒含む）	並	にぶい橙色 7.5YR7/4　にぶい黄橙色 10YR7/3　褐灰色 10YR5/1	約20%	
45	051-02	弥生土器 細頸壺	A15 SD75	12	残高11.5	–	頚部～口縁部内面ナデ、口縁端部ナデ、口縁部～頚部ハケ？・櫛描波状文・櫛描横線文	粗（～3㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/2	約10%	
46	052-02	弥生土器 壺	A15 SD75	–	残高4.1	底径5.6	風化著しく調整不明	粗（～3㎜前後の砂粒含む）	並	橙色 7.5YR7/6	約10%	
47	049-04	弥生土器 細頸壺	E 5 Pit 1	7.2	残高5.2	–	口縁部内面ナデ、口縁端部ヨコナデ、口縁部外面ハケ？	やや粗（～2㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/4	口縁部約40%	
48	060-01	弥生土器 細頸壺	E 5 SK150	約11.5	残高14.8	底径7.2	底部～体部内面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ミガキ、凹線文	粗（～5㎜以下の砂粒・小石含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/4	約30%	
49	042-01	弥生土器 壺	I 18 SD74	–	残高12.7	–	体部内面ハケ、体部外面ハケ・櫛描波状文2条	やや密（～3㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/4　浅黄橙色 10YR8/4	体部約20%	
50	043-01	弥生土器 壺	F20 SD111	25	頸部径約11.5	底径7.6	内外面共に風化著しく調整不明	粗（～3㎜の砂多い、6㎜の小石含む）	並	にぶい橙色 7.5YR7/4	70%	

第5表　出土遺物観察表（1）

No.	登録番号	器種	出土遺構	計測値 口径(cm)	器高(cm)	その他(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
51	046-02	弥生土器 細頸壺	H20 SD110	—	残高 10.9	底径 6.8	底部～体部内面ハケ、体部外面ハケ？、底部外面ナデ	やや粗（～２㎜前後の砂粒含む）	並	橙色 7.5YR7/6　灰オリーブ色 5Y5/2	約30%	
52	046-03	弥生土器 細頸壺	H19 SD111	—	残高 1.3	底径 約6.5	底部内面ナデ、外面風化著しく調整不明	やや粗（～２㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい橙色 7.5YR7/4　褐灰色 10YR5/1	底部 約10%	
53	036-04	弥生土器 壺	E３ 表土	約24	残高 2.5	—	口縁部内面ハケ・浮文・扇状文、口縁端部刺突文・ナデ、口縁部外面ハケ	やや粗（～1.5㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 7.5YR6/4～7/4	口縁部 約10%	
54	059-04	弥生土器 細頸壺	E４ 包含層	—	残高 5	—	体部内面ナデ・ハケ、体部外面ハケ・櫛描文	粗（～２㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 10YR6/4	—	
55	059-03	弥生土器 壺	F４ 包含層	—	残高 1.3	底径 6.2	底部～体部内面ハケ、体部～底部外面風化著しく調整不明	粗（～2.5㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 10YR6/4	底部 約20%	
56	025-04	弥生土器 壺	E11 包含層	—	残高 2.2	底径 4	風化著しく調整不明	粗（～４㎜前後の砂粒含む）	並	橙色 7.5YR7/6　浅黄橙色 10YR8/4　暗灰色 N3/0	底部 約20%	
57	019-02	土師器 椀	D9 SH36	12.5	5.2	—	磨滅著しく調整不明	やや粗（～3.5㎜前後の小石含む）	並	浅黄橙色 10YR8/3	約20%	
58	007-03	須恵器 杯蓋	B8 SH42	約10.5	3.2	—	内外面回転ナデ	やや密	並	灰黄色 2.5Y7/2　灰色 7.5Y6/1	約30%	
59	007-05	須恵器 杯身	B8 SH42	約9.2	残高 3	受部径 約11	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面上半回転ナデ、底部外面回転ケズリ	やや粗（～1.5㎜前後の砂粒含む）	並	灰色 10Y6/1　灰白色 10Y7/1	約50%	
60	017-06	土師器 杯	C14 SH50	—	残高 2.9	—	磨滅著しく調整不明	やや粗	並	浅黄橙色 10YR8/3　にぶい黄橙色 10YR6/3	約10%	
61	007-07	須恵器 杯身	D13 SH50	約11.8	4.4	—	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ	やや密	並	灰白色 2.5Y7/1　灰黄色 2.5Y7/2	約50%	
62	008-03	土師器 甕	C13 SH50	約21	残高 4.1	—	頚部内面ハケ、口縁部内面ハケ・ヨコナデ、口縁部外面ヨコナデ、体部外面ハケ	やや粗（～1.5㎜前後の砂粒含む）	並	灰白色 10YR8/2　にぶい黄橙色 10YR7/3	約10%	
63	007-06	須恵器 杯身	D13 SH50	約10.5	残高 2.3	受部径 約8.5	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面上半回転ナデ、底部外面回転ケズリ	やや密	並	灰白色 5Y7/1	約30%	
64	017-03	須恵器 杯身	C14 SH50	約11.5	4.8	高台径 8.5	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面ナデ	やや密	並	灰白色 10Y7/1	約10%	
65	008-01	土師器 椀	C13 SH50	約15	残高 5	—	内外面回転ナデ	やや密	不良	橙色 7.5YR7/6　にぶい橙色 7.5YR6/4	約10%	
66	001-02	土師器 皿	B20 SH80	約14	2.1	—	内外面ナデ	やや粗（～１㎜前後の砂粒含む）	並	橙色 7.5YR7/6	約20%	
67	001-01	土師器 皿	B20 SH80	約22	3.1	—	底部～口縁部内面ミガキ、口縁部～底部外面ケズリ	やや粗（～1.5㎜前後の砂粒、4㎜前後の小石含む）	並	橙色 5YR6/6	約40%	
68	001-04	土師器 甕	A20 SH80	約16.5	4.9	—	内外面磨滅著しく調整不明	粗（～2.5㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい橙色 5YR7/4	約20%	
69	002-02	須恵器 杯蓋	A20 SH80	約15.5	3.1	つまみ径 約3.1	天井部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、体部外面回転ケズリ、つまみ貼り付け後ナデ	やや粗（～４㎜前後の小石含む）	良	灰白色 N7/0	完形	
70	002-03	須恵器 杯蓋	A20 SH80	約15	3.2	つまみ径 約3	天井部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、体部外面回転ケズリ、つまみ貼り付け後ナデ	やや密（～１㎜前後の砂粒含む）	良	灰白色 N6/0	約50%	
71	002-01	須恵器 鉢	B20 SH80	約17.5	残高 8.8	—	体部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、体部外面下半回転ケズリ	やや粗（～４㎜前後の小石含む）	良	灰色 7.5Y6/１	約40%	
72	001-06	製塩土器	B20 SH80	—	残高 2.3	底径 15.5	内外面ナデ	やや粗（～４㎜前後の小石含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/4	—	志摩式製塩土器
73	007-01	須恵器 杯蓋	B16 SH93	約20.5	4.6	つまみ径 約3.1	天井部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、つまみ貼り付け後ナデ	やや密	並	浅黄色 2.5Y7/3　灰白色 2.5Y7/1	約70%	
74	007-04	須恵器 杯身	B16 SH93	約12.5	2.9	—	内外面回転ナデ	やや密	並	灰白色 N7/0　灰黄色 2.5Y6/2	約10%	
76	007-08	須恵器 瓶	G19 SH85	—	残高 7	—	底部～頚部内面回転ナデ、頚部～体部外面上半回転ナデ、体部下半～底部外面回転ケズリ	やや密（～1.5㎜前後の砂粒含む）	並	灰色 7.5Y6/1	約90%	孔径1.7cm
77	010-05	須恵器 高杯	E15 SH94	—	残高 2.9	脚径 7.5	脚部内面回転ナデ、脚部外面回転ナデ	やや密（～１㎜の砂粒含む）	不良	橙色 7.5YR7/6	約10%	
78	010-04	須恵器 高杯	E15 SH94	—	残高 10.3	脚径 11	杯部内内面回転ナデ、杯部外面回転ナデ、脚部内面回転ナデ、脚部外面回転ナデ	やや粗（～1.5㎜の砂粒含む）	不良	灰白色 10YR8/2	約20%	
79	010-01	土師器 皿	F18 SH100	約19	約1.4	—	内外面剥離著しく調整不明	やや密（～１㎜前後の砂粒含む）	並	橙色 5YR7/6	約20%	
80	010-03	土師器 甕	F18 SH100	約13.5	残高 6.2	—	磨滅著しく調整不明	粗（～２㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい橙色 7.5YR7/3	約20%	
81	011-05	須恵器 杯身	F18 SH100	約11.5	4.5	底径 8.5	底部～体部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、底部外面回転ケズリ	やや密（～1.5㎜前後の砂粒含む）	不良	にぶい橙色 5YR6/4	約50%	底部にヘラ記号有り
82	011-03	須恵器 杯身	F18 SH100	約11	残高 3.4	—	口縁部～体部回転ナデ	密	不良	橙色 7.5YR7/6	約10%	内面調整により沈線状に巡る
83	011-04	須恵器 杯身	F18 SH100	約15.5	3.9	高台径 11	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面回転ケズリ	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/3	約30%	
85	009-01	須恵器 甕	F18 SH100	—	残高 8.1	—	内外面回転ナデ	やや粗（～２㎜前後の砂粒含む）	並	灰白色 10YR8/1	—	にぶい黄橙色の釉かかる
86	006-01	土師器 甕	F21 SH112	約14.5	残高 5.9	—	体部～口縁部内外面磨滅著しく調整不明	やや粗（～1.5㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい橙色 7.5YR6/4　浅黄橙色 10YR8/3	約10%	
87	008-02	土師器 甕	F21 SH112	約13.2	残高 6.2	—	体部内面ハケ、頚部～口縁部内面ヨコナデ、口縁部外面ヨコナデ、頚部～体部外面磨滅著しく調整不明	やや粗（～２㎜前後の砂粒含む）	並	橙色 5YR6/6　2.5YR6/6	約30%	
88	006-03	土師器 把手	F21 SH112	—	—	—	体部内外面ナデ	やや粗（～５㎜前後の砂粒含む）	並	浅黄橙色 10YR8/3	—	須恵器鍋の把手部分
89	004-02	須恵器 杯蓋	F21 SH112	11.2	3.5	—	天井部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、天井部外面ヘラ切り	やや粗（～３㎜前後の砂粒含む）	並	灰色 N6/0　N5/0　灰白色 N7/0	約30%	
90	007-02	須恵器 杯蓋	F21 SH112	約12	2.8	—	天井部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、底部外面ヘラ切り	やや粗（～２㎜前後の砂粒含む）	並	灰白色 10Y7/1　灰色 10Y6/1	約10%	
91	003-02	須恵器 杯身	F21 SH112	14.7	4.6	—	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、底部外面回転ケズリ	やや密（～3㎜以下の砂粒含む）	並	灰白色 N7/0	約90%	類似するものなし
92	002-04	須恵器 杯身	F21 SH112	約11	4.5	底径 4	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、底部外面回転ケズリ	密	良	灰色 5Y6/1	約40%	
93	005-04	須恵器 杯身	F21 SH112	約12	4.6	—	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、底部外面ナデ	やや密（～2.5㎜前後の砂粒含む）	並	灰黄色 2.5Y6/2	約50%	
94	040-02	須恵器 杯身	F21 SH112	10	3.9	—	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、底部外面回転ケズリ	密（～1.7㎜前後の砂粒含む）	良	にぶい黄褐色 10YR4/3　褐灰色 10YR5/1　灰色 N6/0　明褐灰色 7.5YR7/2	約10%	
95	003-03	須恵器 杯身	F21 SH112	11.8	3.7	底径 8.4	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、底部外面糸切り後ナデ	やや粗（～２㎜前後の砂粒含む）	並	灰白色 N6/0	約30%	底部にヘラ記号有り
96	001-03	須恵器 杯蓋	F21 SH112	—	残高 1.6	つまみ径 約3.3	天井部～体部内面回転ナデ、体部外面回転ナデ、つまみ貼り付け後ナデ	やや粗（～1.5㎜前後の砂粒含む）	並	橙色 5YR7/6	—	
97	005-01	須恵器 杯蓋	F21 SH112	約17	2.7	—	天井部～口縁部内面回転ナデ、口縁部外面回転ナデ、体部外面回転ケズリ・ナデ、つまみ貼り付け後ナデ	やや密（～３㎜前後の砂粒含む）	並	灰色 5Y6/１	約30%	
98	004-04	須恵器 杯蓋	F21 SH112	15.4	3.9	つまみ径 3.2	天井部～口縁部内面回転ナデ、口縁部外面回転ナデ、体部外面回転ケズリ、つまみ貼り付け後ナデ	やや密	並	灰色 N8/0　灰白色 N6/0	約30%	
99	005-02	須恵器 杯蓋	F21 SH112	約15	3.2	—	天井部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、つまみ貼り付け後ナデ	やや粗（～2.5㎜前後の砂粒含む）	並	灰黄色 2.5Y7/2	約50%	
100	005-03	須恵器 杯身	F21 SH112	約14.5	3.9	—	底部～体部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面ヘラ切り	やや密（～２㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/3	完形	底部にヘラ記号有り

第６表　出土遺物観察表（２）

No.	登録番号	器種	出土遺構	計測値 口径(cm)	器高(cm)	その他(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
101	003-05	須恵器 杯身	F21 SH112	13.3	4.9	高台径 9.1	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面糸切り	やや粗（～2㎜前後の砂粒含む）	並	灰色 5Y7/1	約30%	
102	006-02	須恵器 杯身	F21 SH112	約19.5	3.6	底径 15.5	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面ナデ	やや密	並	橙色 5YR6/6　浅黄橙色 10YR8/3	約30%	
103	004-03	須恵器 椀	F21 SH112	10.3	5.7～5.9	高台径 6.4	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面ナデ	やや密（～2㎜前後の砂粒含む）	並	褐灰色 7.5YR5/1　灰色 N6/0	約50%	
104	005-06	須恵器 高杯	F21 SH112	約14.5	残高 10.5	—	杯部内面回転ナデ、杯部外面回転ナデ、脚部内外面回転ナデ・ナデ	やや粗（～2㎜前後の砂粒含む）	並	灰黄色 2.5Y7/1　黄灰色 2.5Y6/1	約30%	
105	003-04	須恵器 高杯	F21 SH112	—	残高 4.8	底径 7.2	内外面回転ナデ	やや粗（～2㎜前後の砂粒含む）	並	灰白色 2.5Y8/1　灰白色 N7/0	約30%	
106	039-03	須恵器 高杯	F21 SH112	12	残高 4.8	—	杯部内面回転ナデ、杯部外面回転ナデ、接合部外面ナデ	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4　褐灰色 7.5YR5/1	杯部 約20%	
107	005-05	須恵器 高杯	F21 SH112	—	残高 7.6	底径 10.5	杯部内面回転ナデ、杯部外面回転ケズリ・ナデ、脚部内外面回転ナデ・ナデ	やや粗（～2.5㎜前後の砂粒含む）	並	黄灰色 2.5Y6/1　灰黄褐色 10YR6/2	約30%	
108	004-01	須恵器 鉢	F21 SH112	17.5	12	底径 8.4	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面上半回転ナデ、体部外面下半回転ケズリ、底部外面糸切り	やや密（～2㎜前後の砂粒含む）	並	灰白色 N6/0　青灰色 10BG6/1　5/1	約60%	
109	003-01	須恵器 鉢	F21 SH112	—	—	—	体部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、体部外面下半回転ケズリ、底部外面ナデ	やや粗（～4㎜以下の砂粒含む）	並	灰白色 N7/0	約30%	
110	032-01	土師器 甕	F6 Pit 4	22	残高 4	—	体部内面～口縁部内面磨滅著しく調整不明、口縁部外面ヨコナデ、頸部外面ハケ	やや粗（～2㎜前後の砂粒含む）	並	灰褐色 7.5YR5/2　浅黄橙色 10YR8/3	口縁部 約20%	
111	034-04	須恵器 壺蓋	B16 Pit 1	4	残高 1	—	体部内面回転ナデ、体部外面回転ナデ	やや密	並	灰白色 5Y7/1	—	
112	038-01	須恵器 鉢	E15 Pit 5	18	残高 10.7	—	体部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ	密（～1㎜前後の砂粒含む）	良	灰白色 N7/0	約20%	
113	037-01	土師器 甕	D15 Pit 3	約19.5	残高 5	—	磨滅著しく調整不明	やや粗（～2㎜前後の砂粒含む）	並	灰白色 10YR8/2　にぶい黄橙色 10YR7/3～6/3	口縁部 約10%	
114	031-06	製塩土器	D14 Pit 3	—	残高 4.2	—	—	やや密	並	浅黄橙色 10YR8/4　灰色 N5/0	—	知多式製塩土器
115	031-05	製塩土器	D15 Pit 8	—	残高 4.8	—	—	やや密	並	浅黄橙色 10YR8/3　橙色 7.5YR7/6	—	知多式製塩土器
116	032-04	須恵器 無台盤	C18 Pit13	14.2	1.1	—	天井部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～天井部外面回転ナデ	やや密	並	灰色 N6/0　灰色 N5/0	約20%	天井部つまみなし
117	034-06	土師器 杯	E17 Pit 1	約14	残高 2.2	—	内面磨滅著しく調整不明、体部外面ナデ	やや粗（～2.5㎜前後の砂粒含む）	並	橙色 7.5YR7/6	約10%	
118	036-03	土師器 高杯	D19 Pit 9	—	残高 11.2	—	脚部と杯部の接合部オサエ、脚部内面ナデ、脚部外面ケズリ	粗（～2.5㎜前後の砂粒含む）	並	橙色 5YR7/6	脚部 完形	
119	039-02	須恵器 杯蓋	D18 Pit11	10.5	3.2	—	天井部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、天井部外面ヘラ切り	粗（～2㎜前後の砂粒含む）	並	灰白色 5Y7/1	約40%	
120	039-01	須恵器 甕	D19 Pit 9	34.8	残高 6.9	—	口縁部内面回転ナデ、口縁部外面回転ナデ	粗（～2㎜前後の砂粒含む）	良	灰色 N7/0　にぶい黄橙色 5YR6/3	口縁部 約20%	
121	036-02	土師器 甕	B18 Pit 5	22.4	残高 5.3	—	磨滅著しく調整不明	やや粗（～2㎜前後の砂粒含む）	並	灰白色 10YR8/2　にぶい黄橙色 10YR7/3	口縁部 約10%	
122	050-03	土師器 台付甕	F9 Pit 1	—	残高 4.1	台径 8	台部内面ナデ・オサエ、台部外面ナデ	やや粗（～4㎜以下の小石・砂粒含む）	並	橙色 5YR7/6　にぶい黄橙色 10YR7/4　灰色 N4/0,6/0	台部 約20%	
123	034-05	土師器 杯	C18 Pit 9	13	残高 3.7	—	底部～口縁部内面ナデ・オサエ、口縁部～底部外面ナデ・オサエ	やや粗（～3㎜前後の砂粒含む）	並	浅黄橙色 10YR8/3	約30%	
124	031-02	土師器 椀	D18 Pit 8	—	残高 4.5	底径 6	体部内面ナデ、磨滅著しく調整不明	粗（～3㎜前後の砂粒含む）	並	灰白色 10YR8/2　黄灰色 2.5Y6/1　灰色 5Y5/1	約20%	
125	038-03	須恵器 杯蓋	D18 Pit10	11.2	残高 2.7	—	天井部内面ナデ、体部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部下半外面回転ナデ、天井部外面回転ケズリ	やや粗（～1㎜前後の砂粒含む）	良	灰白色 N7/0　灰色 N6/0	約20%	
126	037-04	須恵器 杯蓋	C16 Pit 4	—	残高 1.9	4.2	天井部内面ナデ、体部内面回転ナデ、体部外面回転ナデ、天井部外面回転ケズリ、つまみ貼り付け後ナデ	粗（～1㎜前後の小石・砂粒含む）	良	灰褐色 5YR5/2,4/2　褐灰色 7.5YR5/1　灰色 N5/0	約30%	
127	034-01	須恵器 杯蓋	B18 Pit 7	16	3.15	つまみ径 3	天井部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部下半外面回転ナデ、体部上半外面回転ケズリ、つまみ貼付後ナデ	やや密（～2㎜前後の砂粒含む）	並	灰白色 10Y7/1	約30%	
128	038-02	須恵器 杯身	A22 Pit 1	12.8	3.4	—	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、底部外面ケズリ	密（～1㎜前後の砂粒含む）	良	褐灰色 10YR5/1	約20%	
129	031-04	土師器	C17 Pit 2	—	—	—	体部内面ナデ、体部外面ナデ	やや粗（～5㎜以下の砂粒含む）	並	灰白色 10YR8/2　灰白色 N7/0	—	鍋・甑等の把手部分
130	037-02	鞴羽口	H11 Pit 1	残長9.3	—	最大径 8.4	—	やや粗（～3㎜前後の砂粒含む）	並	浅黄色 2.5Y7/3　明黄褐色 10YR7/6　にぶい橙色 7.5YR6/4	—	
131	040-03	製塩土器	C18 Pit 4	残長5.5	—	—		やや粗（～8㎜以下の小石含む）	並	にぶい橙色 7.5YR7/4　橙色 7.5YR7/6	—	
132	034-03	須恵器 長頸壺	F17 Pit 1	—	残高 4.6	高台径 8.2	底部～体部内面回転ナデ、体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面糸切り	やや密（～2㎜前後の砂粒含む）	並	灰白色 5Y8/1	約10%	
133	035-03	土師器 甕	D17 Pit 8	約25	残高 5.7	—	体部内面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケ	やや粗（～2㎜前後の砂粒含む）	並	橙色 7.5YR7/6　にぶい黄橙色 10YR7/4	口縁部 約20%	
134	036-01	土師器 甕	C19 Pit 3	22.5	残高 8.3	—	磨滅著しく調整不明	粗（～2.5㎜前後の砂粒含む）	並	灰白色 7.5YR8/2　浅黄橙色 7.5YR8/6～8/4	口縁部 約20%	
135	035-01	土師器 甕	F10 Pit 2	約26	残高 9	—	体部内面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケ	やや粗（～5㎜以下の小石含む）	並	橙色 5YR7/6　浅黄橙色 7.5YR8/3	口縁部 約40%	
136	035-02	土師器 甕	C17 Pit 3	約25	残高 9	—	体部内面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケ	やや粗（～3.5㎜前後の小石含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/4	口縁部 約30%	
137	048-01	土師器 甕	C15 Pit 4	—	残高 8	—	底部～体部内面ハケ、体部～底部外面ハケ	やや粗（～1cm前後の小石含む）	並	浅黄橙色 10YR8/3　灰黄褐色 10YR5/2	底部のみ	
138	009-03	須恵器 杯	G20 SK81	—	残高 2.3	底径 5.4	底部～体部内面回転ナデ、体部外面回転ナデ、底部外面糸切り	密	良	褐灰色 7.5YR5/1	約30%	
139	011-01	須恵器 杯身	G19 SK81	—	残高 4.6	高台径 9	底部～体部内面回転ナデ、体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面糸切り	密	良	暗灰黄色 2.5Y5/2	約10%	
140	011-02	須恵器 杯身	G19 SK81	約13.5	4	底径 11.5	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部回転ナデ、底部外面回転ケズリ	密	良	褐灰色 10YR5/1	約20%	
141	009-02	土師器 甕	A9 SK142	約25	残高 8.7	—	体部内面ハケ、頸部～口縁部内面剥離著しく調整不明、口縁部外面ヨコナデ、頸部～体部外面ハケ	粗（～2㎜前後の砂粒含む）	並	橙色 7.5YR6/6	約10%	
142	017-01	須恵器 杯身	E14 SD29	約19	6.9	高台径 14	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ	やや密	良	灰色 N5/0　灰白色 N7/0	約10%	
143	040-01	須恵器 杯身	D12 SD29	—	—	—	—	密（～1㎜前後の砂粒含む）	良	灰色 10Y6/1	—	
144	017-07	製塩土器	D14 SD47	—	残高 6	脚径 1.5	—	やや密	並	橙色 2.5YR7/6～6/6	—	知多式製塩土器
145	016-02	須恵器 甕	G15 SD56	約29	残高 9	—	口縁部内外面回転ナデ	やや密	並	灰色 N5/0　7.5Y6/1	—	
146	017-05	土師器 杯	F18 SD63	10	2.9	—	磨滅著しく調整不明	粗	並	淡黄色 2.5Y8/3	約50%	
147	015-04	須恵器 杯蓋	F18 SD66	13	3.3	つまみ径 3	天井部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部下半外面回転ナデ、体部上半外面回転ケズリ、つまみ貼付後ナデ	やや密（～1.5㎜前後の砂粒含む）	良	灰色 N6/0　N5/0	約20%	
148	017-02	須恵器 杯身	G19 SD66	約17.5	4.2	高台径 13	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部回転ナデ	やや密	並	灰色 N6/0　灰白色 N7/0	約20%	
149	016-04	土師器 杯	C21 SD77	約12	4	—	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、底部外面ナデ	やや密	並	橙色 2.5YR7/6　にぶい褐色 7.5YR6/3	約40%	
150	018-01	須恵器 杯身	C18 SD76	14	4	高台径 9.4	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面ナデ	やや密（～3㎜前後の砂粒含む）	並	灰色 5Y6/1　にぶい黄橙色 10YR7/3	完形	

第7表　出土遺物観察表（3）

No.	登録番号	器種	出土遺構	計測値 口径(cm)	器高(cm)	その他(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
151	018-08	須恵器壺	B19 SD76	9.5	残高 4.3	—	体部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜体部上半外面回転ナデ	やや粗（〜1.5㎜前後の砂粒含む）	並	灰白色 N7/0	約20%	
152	019-03	土師器杯	G15 SD83	10.5	3.3	—	磨滅著しく調整不明	やや粗（〜2.5㎜前後の砂粒含む）	並	浅黄橙色 10YR8/4	約20%	
153	018-03	須恵器杯身	G15 SD83	12.5	3.6	—	底部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜体部外面回転ナデ、底部外面ヘラ切り	やや密（〜2.5㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい褐色 7.5YR5/3	約30%	
154	018-04	須恵器杯身	C20 SD86	12.5	3.5	—	底部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜体部外面回転ナデ、底部外面ヘラ切り	やや密（〜1㎜前後の砂粒含む）	並	暗灰黄色　灰白色 2.5Y5/2　2.5Y8/2	約20%	
155	019-01	土師器甕	C12 SD92	約32	残高 10.5	—	磨滅著しく調整不明	やや粗（〜3㎜前後の砂粒含む）	並	浅黄橙色 10YR8/3	約20%	
156	019-04	土師器杯	E15 SD95	13	2.4	—	磨滅著しく調整不明	やや密（〜1.5㎜前後の砂粒含む）	並	橙色 5YR6/8	約20%	
157	018-06	須恵器椀	E15 SD95	9	3.8	高台径 5.5	底部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面ナデ	やや密	並	暗灰黄色 2.5Y5/2	約20%	
158	020-01	須恵器甕	G16 SD108	約42.8	残高 8	—	口縁部内外面回転ナデ	やや密（〜1.5㎜前後の砂粒含む）	良	灰黄色 2.5Y7/2		
159	022-08	須恵器短頸壺	G17 SD110	6	残高 5.7	—	体部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜体部外面回転ナデ	やや密	並	灰色　灰白色 N7/0　5Y7/1	約10%	
160	022-06	須恵器長頸壺	G17 SD110	—	残高 5.2	高台径 9.4	底部〜体部内面回転ナデ、体部外面ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面ナデ	やや密	並	灰色　灰白色 N5/0　N7/0	約10%	
161	018-05	須恵器杯身	G17 SD101	12	4.4	—	底部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜体部外面回転ナデ、底部外面ナデ	やや密（〜1.5㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい黄橙色　にぶい褐色 10YR6/3　7.5YR5/3	約20%	
162	020-06	須恵器杯身	D16 SD113	12	3.5	—	底部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜体部外面回転ナデ、底部外面ナデ	やや粗（〜2.5㎜前後の砂粒含む）	良	灰白色 5Y7/1	約30%	
163	021-03	須恵器杯蓋	F21 SD114	12.5	2.8	つまみ径 2.9	天井部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜体部外面回転ナデ、つまみ貼り付け後ナデ	密	良	灰色 N5/0　N4/0	約50%	転用硯
164	021-02	須恵器杯身	E21 SD123	12.2	3.8	高台径 8.9	底部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面ナデ	密（〜1㎜前後の砂粒含む）	良	橙色　にぶい赤褐色　褐灰色 5YR6/6　5YR5/3　5YR4/1	約30%	
165	017-04	土師器甕	G18 SD65	約16	残高 4.2	—	磨滅著しく調整不明	やや粗（〜1㎜前後の砂粒含む）	並	灰黄色　淡赤橙色　灰褐色 2.5Y6/3　2.5YR　10YR	約10%	
166	016-03	灰釉陶器壺	G18 SD65	—	残高 7.3	底径 13	底部〜体部内面回転ナデ、体部外面回転ナデ、底部外面ナデ	やや密	並	灰白色 5Y7/1	約10%	底部に沈線3条巡る
167	022-05	須恵器杯身	G15 SD159	11	3.2	—	底部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜体部外面回転ナデ、底部外面回転ケズリ	やや密	並	灰色　黄灰色 N5/0　2.5Y6/1	約50%	
168	022-01	須恵器甕	G15 SD159	約26	残高 7.1	—	口縁部内外面ナデ	やや密	並	灰色　灰白色 N4/0　7.5Y7/1	—	
169	020-03	須恵器杯身	C19 SD147	12.5	3.2	—	底部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜体部回転ナデ、底部外面回転ケズリ	やや密（〜1.5㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい橙色　褐灰色 7.5YR7/4〜7/3　7.5YR6/1	約30%	内面調整により沈線巡る
170	021-01	須恵器杯身	F18 SD134	—	残高 1.7	底径 5.5	底部〜体部内面回転ナデ、体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面糸切り	密（〜1㎜前後の砂粒含む）	並	灰色 7.5Y6/1	約10%	
171	014-01	土師器甕	H8 SX4	19	残高 5.5	—	体部〜頚部内面ハケ、口縁部内面ヨコナデ、口縁部外面ヨコナデ、頚部〜体部外面ハケ	やや密（〜1㎜前後の砂粒含む）	並	浅黄橙色 10YR8/4	約10%	
172	014-02	土師器	H8 SX4	—	—	—	体部内外面ナデ	やや密（〜1.5㎜前後の砂粒含む）	並	浅黄橙色　明黄褐色 10YR8/3　10YR7/6	—	土師器鍋・甑等の把手部分
173	015-06	製塩土器	H9 SX4	—	残高 4.5	脚径 1.2	—	やや密（微砂粒含む）	並	にぶい橙色 5YR6/4	—	知多式製塩土器
174	015-01	須恵器杯身	H8 SX4	約11.2	3.1	—	底部外面無調整、底部ナデ、体部外面〜体部内面回転ナデ、底部内面ナデ	密（〜1㎜前後の砂粒含む）	並	灰白色 N8/0	約30%	
175	014-04	須恵器杯蓋	H8 SX4	10.5	3.7	—	天井部内面ナデ、体部〜口縁部内面ナデ、口縁部〜体部回転ナデ、天井部外面回転ケズリ	やや粗（〜2㎜前後の砂粒含む）	良	灰色 N6/0　7.5Y6/1　7.5Y4/1	約30%	
176	015-02	須恵器杯身	H9 SX4	10	3.4	受部径 11.8	底部内面未調整、体部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜体部外面回転ナデ、底部外面回転ケズリ	やや密（〜1㎜前後の砂粒含む）	良	灰色 7.5Y6/1	約20%	
177	014-05	須恵器杯身	H8 SX4	9.5	3.2	受部径 11.5	底部内面ナデ、体部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜体部外面回転ナデ、底部外面回転ケズリ	やや粗（〜2㎜前後の砂粒含む）	良	灰白色 N6/0	完形	
178	014-06	須恵器杯蓋	H8 SX4	16.4	残高 3.5	—	天井部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜体部外面回転ナデ、天井部外面回転ケズリ	やや粗（〜1.5㎜の砂粒・〜3.5㎜前後の小石含む）	良	灰色 10Y6/1	約30%	
179	014-03	須恵器高杯	H8 SX4	—	残高 4	底径 9.3	杯部内内面回転ナデ、杯部外面回転ナデ、脚部内面回転ナデ、脚部外面回転ナデ	やや密（〜1㎜前後の砂粒含む）	良	灰色 10Y5/1	約10%	
180	015-03	須恵器高杯	H9 SX4	—	残高 4.8	底径 8.5	杯部内内面回転ナデ、杯部外面回転ナデ、脚部内面回転ナデ、脚部外面回転ナデ	やや粗（〜1㎜前後の砂粒含む）	並	灰色 10Y6/1	約20%	
181	026-04	須恵器杯蓋	H8 包含層	10	3.3	—	底部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜底部外面回転ナデ、天井部外面未調整	やや密（〜2㎜前後の砂粒含む）	並	灰色　灰色 10Y6/1　10Y5/1	約30%	
182	030-02	須恵器杯蓋	H19 包含層	約13	残高 3.7	—	天井部内面〜口縁部外内面回転ナデ、口縁部〜体部下半外面回転ナデ、天井部外面ヘラ切り	密	良	灰白色 N7/0	約30%	
183	026-05	須恵器杯身	H8 包含層	約9	残高 3.4	受部径 10.8	底部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜底部外面回転ナデ	やや密（〜3㎜前後の砂粒含む）	並	灰色 10Y6/1	約50%	
184	029-06	須恵器杯身	H14 包含層	約11	残高 3.3	受部径 13.5	体部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜体部上半外面回転ナデ、体部下半外面回転ケズリ	密	良	灰色 N6/0	約25%	
185	030-03	須恵器杯身	H19 包含層	約10.5	残高 3.7	受部径 約13	底部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜体部外面回転ナデ、底部外面回転ケズリ	密	良	灰色 N6/0	約20%	
186	026-02	須恵器杯身	E15 包含層	12	3.3	—	底部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜底部外面回転ナデ	やや密（〜2.5㎜前後の砂粒含む）	不良	灰白色 2.5Y8/2	約30%	
187	026-03	須恵器杯身	E15 包含層	13	3.6	—	底部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜底部外面回転ナデ	やや密（〜3㎜前後の砂粒含む）	不良	にぶい黄橙色　灰黄色 10YR7/4　2.5Y7/2	約70%	
188	032-05	須恵器杯身	F16 包含層	12.8	3.5	—	底部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜体部外面回転ナデ、底部外面糸切り	やや密（〜2㎜以下の砂粒含む）	並	灰白色 N8/0	約40%	
189	024-05	須恵器杯身	D15 包含層	10.2	3.8	—	底部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜底部外面回転ナデ	やや密	並	灰色　にぶい橙色 N5/0　5YR7/4	約40%	
190	022-07	須恵器杯身	C16 包含層	約10.5	4.7	—	底部内面ナデ、底部〜体部内面回転ナデ、口縁部〜体部外面回転ナデ、底部外面回転ケズリ	やや密	並	褐灰色　橙色　灰色 10YR5/1　2.5YR6/6　N5/0	約30%	
191	029-03	須恵器杯身	H19 包含層	約10.5	4.8	—	底部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜底部外面回転ナデ	密	不良	橙色 5YR7/6	約50%	
192	026-01	須恵器杯蓋	E19 包含層	14	2.6	つまみ径 2.7	天井部内面〜口縁部外面回転ナデ、体部外面回転ケズリ、つまみ貼り付け後ナデ	やや密（〜1㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい橙色　灰褐色 7.5YR7/4　7.5YR5/2	約30%	
193	033-02	須恵器杯身	F17 包含層	12.3	3.6	高台径 9	底部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面糸切り	やや密（〜2㎜前後の砂粒含む）	並	黄灰色　黄灰色　にぶい黄褐色 2.5Y4/1　2.5Y5/1　10YR6/4	約30%	内面使用痕
194	032-06	須恵器杯身	F16 包含層	13.2	3.9	高台径 9.5	底部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ	やや密（〜2㎜前後の砂粒含む）	並	青灰色　青灰色 5B6/1　5B5/1	約30%	
195	022-03	須恵器杯身	B15 包含層	約15.5	3.5	高台径 13	底部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面糸切り後ナデ	やや密	並	灰黄色 2.5Y7/2　2.5Y6/2	約30%	
196	024-03	須恵器杯身	D15 包含層	18.8	3.5	高台径 14	底部〜口縁部内面回転ナデ、口縁部〜体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ	やや粗（〜4㎜以下の砂粒含む）	並	灰白色 N7/0	約30%	
197	022-04	須恵器杯身	B24 包含層	—	残高 2	高台径 14	底部〜体部内面回転ナデ、体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面糸切り	やや密	並	灰色 5Y5/1	約30%	
198	023-01	須恵器杯身	B18 包含層	—	残高 2	高台径 17.2	底部〜体部内面回転ナデ、体部〜底部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面ナデ	やや密	並	灰色 5Y5/1	約10%	
199	033-01	須恵器杯身	F19 包含層	—	残高 2.7	高台径 7.6	底部〜体部内面回転ナデ、体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面糸切り	やや密	並	灰黄色　黄灰色　にぶい黄橙色 2.5Y6/2　2.5Y6/1　10YR6/3	約30%	内面使用痕
200	024-02	須恵器壺	D17 包含層	—	残高 3.4	高台径 14.4	底部内面ナデ・オサエ、体部内面回転ナデ、体部外面回転ケズリ、高台部貼付後ナデ、底部外面ナデ・オサエ	やや密（〜2㎜以下の砂粒含む）	並	灰白色 N8/0　N7/0	約10%	

第8表　出土遺物観察表（4）

No.	登録番号	器種	出土遺構	計測値 口径(cm)	器高(cm)	その他(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
201	022-02	須恵器 杯身	A5 包含層	—	残高 3.3	高台径 9	底部～体部内面回転ナデ、体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面糸切り	やや密	並	灰白色 7.5Y7/1	約10%	
202	024-04	須恵器 高杯	E13 包含層	11.9	残高 4.5	—	杯部内面回転ナデ、杯部外面回転ナデ	やや密（～1㎜前後の砂粒含む）	並	灰色 N6/0　灰白色 N7/0	約10%	
203	028-04	須恵器 高杯	H 9 包含層	—	残高 2.9	脚径 8.8	脚部内面回転ナデ、脚部外面回転ナデ	やや粗（～1.5㎜前後の砂粒含む）	良	明オリーブ灰色 5GY7/1	脚部 約50%	
204	016-01	須恵器 練鉢	E3 包含層	—	残高 12.7	底径 8.5	底部～体部内面回転ナデ、体部～底部外面回転ナデ	やや密	並	灰色 10Y6/1～5/1	約40%	底部内外面に穿孔、外面に縦方向のヘラ描き沈線
205	023-04	須恵器 甕	B11 包含層	約21	残高 5.7	—	磨滅著しく調整不明	やや密	並	淡黄色 2.5Y8/3	約10%	
206	028-01	須恵器 甕	G15 包含層	約24.5	残高 12.9	頚部径 約18	口縁部内外面回転ナデ	密	良	灰色 N5/0　灰色 10Y5/1	口縁部 約40%	
207	028-02	須恵器 甕	G15 包含層	約30	残高 8.2	—	口縁部内外面回転ナデ	密	良	黄灰色 2.5Y6/1	口縁部 約30%	
208	024-01	須恵器 甕	C17 包含層	約40	残高 9.3	—	体部内面同心円文、頚部～口縁部回転ナデ、口縁部外面回転ナデ、体部外面タタキ	やや密	並	灰白色 N7/0　灰色 N5/0	—	
209	031-03	土師器 台付甕	F 1 包含層	—	残高 5.2	台径 9.1	台部内面ナデ、台部外面ハケ、体部内面ハケ、体部外面ハケ	やや粗（～5㎜以下の砂粒含む）	並	橙色 5YR7/6	台部 約20%	
210	025-05	土師器 杯	D17 包含層	12.2	3.3	—	底部内面ナデ、口縁部内面ヨコナデ、体部外面ナデ・オサエ、底部外面磨滅著しい	やや密（～1㎜前後の砂粒含む）	並	橙色 2.5YR6/8　橙色 7.5YR7/6	約40%	
211	032-02	土師器 杯	F18 包含層	11.8	残高 3.5	—	磨滅著しく調整不明	粗（～3㎜前後の砂粒含む）	並	浅黄橙色 10YR8/3　橙色 5YR7/6	約30%	
212	025-03	土師器 杯	D15 包含層	13.6	3.6	—	底部内面ナデ、口縁部内面ヨコナデ、口縁部外面ミガキ、体部外面ナデ・オサエ	やや粗（～3㎜前後の砂粒含む）	並	浅黄橙色 10YR8/3　褐灰色 10YR6/1	約30%	
213	027-02	土師器 杯	E15 包含層	16.8	2.2	—	底部内面磨滅著しい、底部外面ナデ	やや密	並	橙色 7.5YR7/6	約20%	
214	029-02	土師器 甕	G15 包含層	約12.5	残高 5.5	—	体部内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケ	粗（～4㎜以下の小石・砂粒含む）	並	橙色 7.5YR7/6	口縁部 約20%	
215	027-01	土師器 甕	E17 包含層	16	残高 7.3	—	磨滅著しく調整不明	やや粗（～1.5㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/3	約20%	
216	029-01	土師器 甕	G17 包含層	約22.5	残高 3.7	—	体部内面ハケ、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケ	粗（～3㎜前後の砂粒・～5㎜以下の小石含む	並	にぶい黄橙色 10YR7/3	口縁部 約20%	
217	025-01	土師器 甕	D17 包含層	24	残高 11	—	体部内面オサエ・ナデ、口縁部内面ヨコナデ、口縁部外面ヨコナデ、体部外面オサエ	やや粗（～2㎜前後の砂粒含む）	並	浅黄橙色 10YR8/3　灰褐色 7.5YR4/2	約20%	
218	023-07	土師器 甑	B 4 包含層	—	残高 4.9	底径 約15	底部～体部内面ナデ、体部外面ハケ、円孔部ケズリ	やや粗	並	灰色 5Y5/1　浅黄橙色 10YR8/4	約10%	楕円形の２孔
219	025-02	土師器	D16 包含層	—	—	—	体部内面同心円文、体部外面ハケ	やや粗（～2㎜前後の砂粒含む）	並	灰白色 2.5Y8/1	—	鍋・甑等の把手部分
220	023-08	製塩土器	B18 包含層	—	残高 5.8	脚径 1.5	—	やや密	並	橙色 2.5YR6/6　にぶい橙色 7.5YR7/4	—	知多式製塩土器
221	027-03	製塩土器	E18 包含層	18	5.7	底径 15	磨滅著しい、体部外面ナデ	やや粗（～4㎜前後の小石含む）	並	橙色 7.5YR7/6	約10%	志摩式製塩土器
222	010-02	ロクロ土師器 椀	I 10 SK12	—	残高 2.3	底径 6.5	底部～体部内面回転ナデ、体部外面回転ナデ、底部外面糸切り	やや粗（～1.5㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 10YR6/3　にぶい黄橙色 10YR7/4	約20%	
223	009-05	灰釉陶器 椀	I 10 SK12	—	残高 3.4	高台径 9	底部～体部内面回転ナデ、体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面糸切り	やや密（～1.5㎜前後の砂粒含む）	良	灰白色 10YR8/2	約10%	オリーブ黄色の釉かかる
224	009-04	灰釉陶器 椀	I 10 SK12	—	残高 2.3	高台径 7.5	底部～体部内面回転ナデ、体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面ナデ	密	良	灰白色 2.5Y8/2	約10%	
225	021-04	灰釉陶器 皿	F16 SD129	15	4	高台径 7	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面ナデ	やや粗（微砂粒含む）	良	灰黄色 2.5Y7/2　浅黄色 2.5Y7/3	約40%	
226	021-05	須恵器 杯身	F16 SD129	14	3.5	底径 6.8	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、底部外面糸切り	密	良	黄灰色 2.5Y6/1	約30%	
227	020-05	灰釉陶器 皿	F16 SD129	—	残高 2.2	高台径 7	底部～体部内面回転ナデ、体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面ナデ	密（～1.5㎜前後の砂粒含む）	良	灰白色 5Y7/1	約10%	
228	020-04	須恵器 杯身	F16 SD129	—	残高 2.8	底径 5.6	底部～体部内面回転ナデ、体部外面回転ナデ、底部外面糸切り	やや密（～1㎜前後の砂粒含む）	良	灰白色 N7/0　灰色 N6/0	約10%	
229	020-02	須恵器 壺	F16 SD129	—	残高 2.6	底径 9	底部～体部内面回転ナデ、体部外面回転ナデ、底部外面糸切り	やや密（～1.2㎜前後の砂粒含む）	良	灰褐色 7.5YR6/2～5/2　浅黄橙色 10YR8/3	—	
230	013-02	灰釉陶器 椀	E18 SK107	12.4	3.8～3.9	高台径 6.7	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面糸切り	やや密	並	灰白色 2.5Y8/1	約30%	浅黄色の釉かかる
231	013-03	灰釉陶器 皿	E18 SK107	15.3	2.8	高台径 8	底部～体部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面ケズリ	やや密	並	灰白色 2.5Y8/1	約30%	
232	012-02	灰釉陶器 椀	E18 SK107	—	残高 1.7	高台径 7.2	底部～体部内面回転ナデ、体部外面下半回転ケズリ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面ケズリ	やや密	並	灰白色 2.5Y8/1	約30%	
233	013-04	灰釉陶器 皿	E18 SK107	—	残高 2	高台径 7.6	底部～体部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面糸切り	やや密	並	灰白色 2.5Y8/1	約20%	
234	013-05	灰釉陶器 皿	E18 SK107	—	残高 1.8	高台径 6	底部～体部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面ケズリ	やや密	並	灰白色 2.5Y8/1	約20%	オリーブ灰色の釉かかる
235	013-01	灰釉陶器 鉢	E18 SK107	21.3	8.8	高台径 11.2	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部上半外面回転ナデ、体部下半外面回転ケズリ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面糸切り	やや密（～1㎜前後の砂粒含む）	並	灰白色 2.5Y8/2	約30%	オリーブ黄色の釉かかる
236	012-01	灰釉陶器 双耳壺	E18 SK107	—	—	底径 15.8	体部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部上半外面回転ナデ、体部下半外面回転ケズリ、高台部貼り付け後ナデ	やや密	並	灰白色 N8/0N7/0	約30%	浅黄色の釉かかる
237	029-05	土師器 椀	G19 包含層	8.6	3.1	底径 4.8	磨滅著しく調整不明	密	並	浅黄橙色 7.5YR8/4	約30%	
238	028-03	土師器 杯	G15 包含層	—	3.1	—	底部内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面剥離著しい、底部外面ナデ	粗（～1.5㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/3	約30%	油煙付着
239	029-04	土師器 椀	G17 包含層	約10.5	3.4	底径 4.2	剥離著しく調整不明	やや粗（～2㎜の砂粒含む）	並	橙色 5YR7/6	約40%	油煙付着
240	039-04	陶器 椀	E・F 2表土	—	残高 1.2	底径 4.2	底部～体部内面ナデ、体部外面ナデ、底部外面糸切り	粗（～1.5㎜前後の砂粒含む）	並	灰黄色 2.5Y7/2	約10%	
241	059-02	土師器	F 4 包含層	—	残高 1.7	底径 5.2	底部～体部内面ハケ、体部外面ハケ、底部外面未調整	粗（～2㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 7.5YR6/4	底部 約20%	
242	023-02 023-03	緑釉陶器 皿	C16 包含層	約14	2.8	高台径 7.7	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面ナデ	やや密	良	灰色 5Y5/1	約30%	
243	033-04	灰釉陶器 段皿	F19 包含層	14	3	高台径 7.2	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面糸切り	密	並	灰白色 N8/0	約20%	釉：明オリーブ灰色（10Y7/2）
244	030-01	灰釉陶器 椀	H 8 包含層	13.8	3.8	高台径 7.6	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、高台貼り付け後ナデ、底部回転ケズリ	密	良	灰白色 N8/1	約50%	釉：明オリーブ灰色（2.5GY7/1）
245	033-05	灰釉陶器 椀	F15 包含層	—	残高 2.3	高台径 6.8	底部～体部内面回転ナデ、体部外面回転ケズリ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面糸切り	密	並	灰白色 2.5Y8/1	約10%	釉：オリーブ色（5Y 5/4）
246	026-07	灰釉陶器 椀	E15 包含層	—	残高 2.4	高台径 9	底部～体部内面回転ナデ、体部外面回転ナデ、高台貼り付け後ナデ、底部外面糸切り	やや密（～2.5㎜前後の砂粒含む）	並	灰白色 2.5Y8/1	約10%	
247	033-06	灰釉陶器 椀	F 6 包含層	—	残高 1.5	高台径 10.2	底部～体部内面回転ナデ、体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面糸切り	密	並	灰白色 2.5Y8/2	約10%	
248	026-06	灰釉陶器 椀	H14 包含層	—	残高 2.3	高台径 8	底部～体部内面回転ナデ、体部外面回転ナデ、高台貼り付け後ナデ、底部外面糸切り	やや密	並	灰黄色 2.5Y7/2	約30%	
249	038-04	陶器 椀	E21 Pit 1	17	5.4	高台径 7.9	底部内面ナデ、体部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、高台部貼付後ナデ、底部外面糸切り	やや密（～4㎜前後の小石・砂粒含む）	良	灰白色 N8/0	約90%	
250	034-02	陶器 椀	D19 Pit 8	12	3.8	底径 5.6～6	底部内面ナデ、体部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ナデ、高台部貼付後ナデ、底部外面糸切り	やや密	並	灰黄色 2.5Y6/2　灰黄褐色 10YR5/2	底部 完形	

第９表　出土遺物観察表（５）

No.	登録番号	器種	出土遺構	計測値			調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
				口径(cm)	器高(cm)	その他(cm)						
251	031-01	陶器壺	D17 Pit 2	−	残高 6.4	底径 12.8	磨滅著しく調整不明	粗（～2㎜前後の砂粒含む）	並	橙色 5YR7/6　浅黄橙色 10YR8/4	底部約20%	
252	020-07	陶器椀	F21 SD122	−	残高 1.3	高台径 8	底部～体部内面回転ナデ、体部外面回転ナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部外面ナデ	やや粗（～1.5㎜前後の砂粒含む）	並	灰白色 2.5Y8/1　灰黄色 2.5Y7/2	約10%	底部にモミガラ痕残る
253	027-06	砥石	E18 包含層	−	−	−	−	−	−	−	−	砂岩
254	032-03	砥石	I20 包含層	−	−	−	−	−	−	−	−	砂岩
255	027-04	土錘	E17 包含層	長さ 3.1	幅 1.1	重さ 3.15	−	やや密（～2.5㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい黄褐色 10YR5/3	約90%	
256	050-04	土錘	E17 包含層	長さ 3.8	幅 1	重さ 2.56	−	やや密（～2㎜以下の砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 7.5YR7/4　灰白色 N8/0	完形	
257	027-05	土錘	E17 包含層	長さ 3.5	幅 1.3	重さ 3.31	−	やや粗（～3㎜前後の砂粒含む）	並	にぶい黄褐色 10YR7/4　黄灰色 2.5Y4/1	約70%	
258	034-07	刀子	F4 表土	残長 10.4	−	−	−	−	−	−	−	
259	061-01	土師器高杯	試掘 No.3	19.3	残高 5.6	−	口縁部内外面ミガキ	やや粗（～2㎜の砂粒，微砂粒含む）	並	にぶい黄橙色 10YR7/3　にぶい黄橙色 10YR6/4	口縁部約20%	
260	061-02	須恵器杯蓋	試掘 No.1	10.2	残高 3.1	−	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部上半外面回転ナデ、体部下半～底部外面回転ケズリ後ナデ	やや密	並	灰白色 5Y7/1　灰黄褐色 10YR5/2	約30%	
261	061-03	須恵器杯身	試掘 No.1	9.1～9.4	3.4	−	底部～口縁部内面回転ナデ、口縁部～体部上半外面回転ナデ、体部下半～底部外面回転ケズリ後ナデ	やや密（～4㎜の小石・砂粒含む）	並	灰色 N6/0　灰色 N5/0　灰色 5Y4/1	ほぼ完形	

第10表　出土遺物観察表（6）

［遺物観察表註］

報告書に掲載した遺物の観察表は、以下の規則によって作成した。

1　観察表左端の番号は、各遺物実測図の番号に対応する。これは器種・材質如何を問わず通し番号である。ただし、これは掲載した実測個体のみであり、実測図を作成できない破片には、番号をふっていない。したがってこの番号が遺物の全てでない。

2　実測番号は、実測を行った際の番号である。出だしの3桁は用紙の番号で、後側の2桁は用紙内での実測した順序の番号である。

3　出土遺構は上段に地区番号を表し、下段に遺構番号を示している。地区・遺構番号は、遺構平面図及び遺構一覧表を参考にされたい。

4　器種については、判明しているものについて記載した。

5　計測値について記載した口径・器高・その他は、それぞれ最大値をとっている。また、「－」は、計測できないものを表している。単位は、記載のとおりcmである。さらに遺物によっては、長・幅・厚・重・高台径・底径・つまみ径などを表すこともある。

6　調整技法の特徴については、あくまでも成されている調整について記述しており調整順序によるものでない。

7　胎土については、粗密を記し、括弧内に小石・砂粒の有無や大小について記述する。

8　焼成については、良・並・不良の3段階に分けて、その中間に位置する場合はややを付記している。

9　色調については、『新版　標準土色帖』（小山・竹原編19版　1997年）に基づいて表記した。

10　残存については、遺物の残りの割合で表記している。「－」は、表しきれないものである。

11　備考は、その遺物における特徴的な事柄を記載しているか、遺物取り上げの際の番号などを表記している。

12　遺物番号75・84は、欠番である。

Ⅳ　まとめ

1　弥生時代

1）方形周溝墓について

繰り返しになるが調査区内において確認できた方形周溝墓は計19基である。弥生時代における山村遺跡は、中期の墓域として認識してよいであろう。

まず、最初に方形周溝墓の群単位についてみておきたい。１号墓から７号墓にかけては、ほぼ一列に並び周溝外縁部を揃えて造墓している（Ａグループ）。１号墓の規模を考慮すると７号墓を除いて２号墓以降は、２列に並んで存在した可能性が高い。８～11号墓と16～19号墓（Ｂグループ）はほぼ北側の周溝外縁部を直線的に揃えられている。南側には12号墓及び13号墓があり、８号墓からのものと並列しており２列の群単位を示す。その他の14・15号墓は、それぞれ並びが不揃いである。

次にそれぞれの方形周溝墓の平面形について見ておきたい。調査で検出した方形周溝墓は、以下のいずれかに属する。

①溝が全周するもの

②溝がコーナー部分において１～４箇所切れるもの

おおよそつの形状に分けられる。まず、①である可能性が高いものは、１・３・８・14号墓がある。しかしながら周溝のコーナー部は非常に狭くて浅くなっている。

②のものは、その他が全て当てはまる。なかでも15号墓は、調査区範囲外で全て検出できていないがやや陸橋部分が中央に寄りはじめている。周溝の中央に陸橋部を持つもので県内では、の最も古い類例の中には、中期中葉に造墓される納所遺跡の１例がある。その他では、弥生時代後期から欠山様式段階で一般的にみられるようになるが、それに至る前段階として考えてもよいのではなかろうか。

方形周溝墓の造墓のあり方に変化があったのは、中期中葉から後葉にかけての時期であろう。

ここで述べられる重要な点は、弥生時代後期以降においてみられる普遍的な方形周溝墓の形態の前段階を含んでいたことであろう。付け加えるならば弥生時代中期中葉以降においての社会変化が方形周溝墓の造営のあり方に表れているとみられる。

次に墓道は、一般的に墓域と居住域が往来できるように存在していたと推測される。ＡグループとＢグループ間に設けられたとみられる墓道は、互いの周溝の外縁部からの幅で約２～3.5ｍである。東側は調査区外に延びるており、西側は丘陵の急斜面にあたる。また、南側の14号墓と15号墓の間においても墓道と呼べそうな僅かな空間地があり、その先は11・13・16・19号墓に当って止まっている。

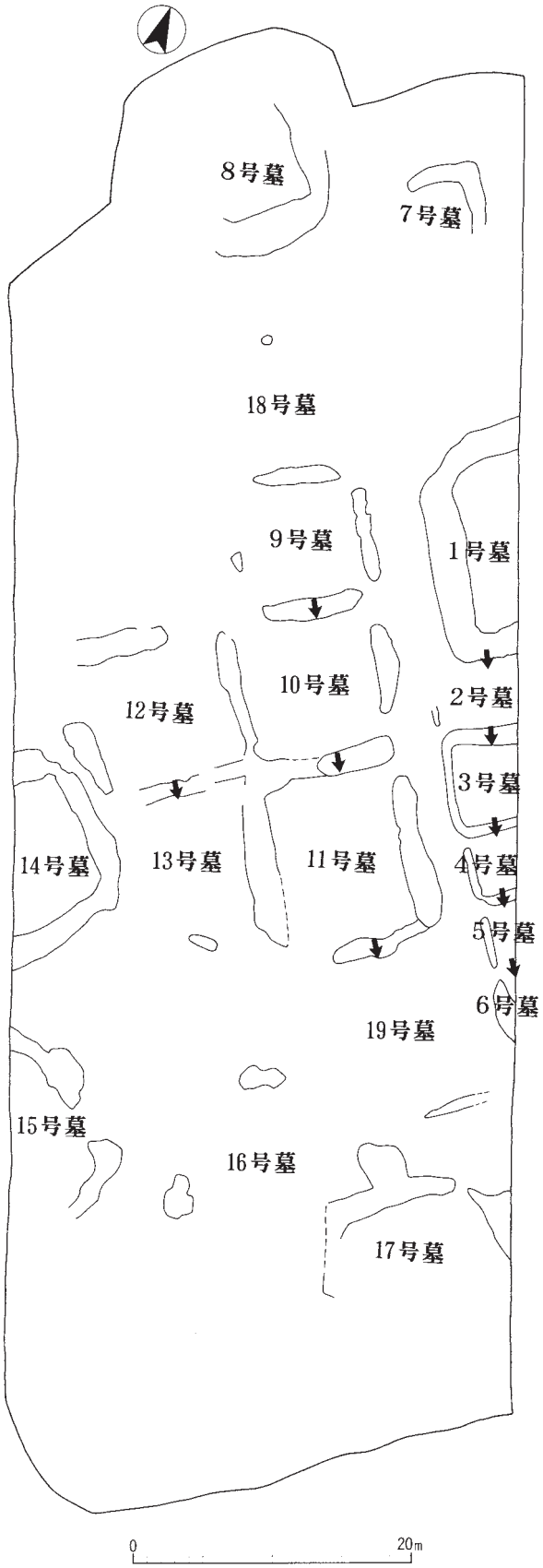
一方、居住域は調査地から西側の一つ谷を挟んだ丘陵上において菟上遺跡があり、発掘調査によって竪穴住居と掘立柱建物が検出されている。その居住域との往来については、どのようになされていたのであろか。菟上遺跡と山村遺跡の丘陵尾根伝いにぐるりと迂回するルート、谷の斜面を登り下りする直線的なルートを想定できそうである。尾根伝いのルートよりも直線的に繋ぐルートの方が妥当ではなかろうか。なかでも現状は急斜面であるが７号墓と８号墓間が一つの有力な候補とも考えられるのではなかろうか。

次に、方形周溝墓の造営順としては周溝の平面形からある程度予測できそうである。Ａグループは、１号墓→２号墓→３号墓→４号墓→５号墓→６号墓とみられる。また、７号墓について同群として扱ったものの周溝からでは前後関係は判断できない。規模的な要素や遺物の新旧から考えると１号墓→２号墓→３号墓→４号墓→５号墓→６号墓→７号墓と考えられそうである。とりわけ１号墓は、全体の中で最も大きい規模を有している。

同様にＢグループは９号墓→10号墓→11号墓→19号墓→17号墓→８号墓→18号墓であろう。Ｂグループ南群は12号墓→13号墓と考えられそうである。

他のもの（14・15号墓）については、周溝の接点がなく前後関係を判断し難い。

また、山村遺跡ほぼ全域に渡って方形周溝墓が存在したであろうことは、ほぼ間違いないとみられる。第１次調査での方形周溝墓は、現状でこそ奥まった



第68図　方形周溝墓略図（1／500）

位置であろうが丘陵全体が方形周溝墓によって埋め尽くされる一角を占めるとみられる。山村遺跡は総面積約30,000㎡であり、方形周溝墓の1基あたりを仮に8m四方クラスとするならば、ざっと約300基以上存在したとみられる。最後に、今後の課題としては、埋葬主体を含めた上で方形周溝墓を考えなければならない。それらの確認によって方形周溝墓のあり方を理解することができるのでは、なかろうか。

2）凹線文出現前後について

方形周溝墓から出土した土器の大多数が細頸壺とみられる。その中で口縁部における凹線文を見い出せるものがある（20・38・48）。9・18号墓出土の20は、他のものと比べて新しい様相を示す。18号墓出土の48についても同様である。しかしながら遺物のほとんどは凹線文系でないがとりわけ15号墓出土の44は、口縁部緩い傾斜をもって立ち上がっており凹線文の出現の前段階かもしれない。

3）底部穿孔土器について

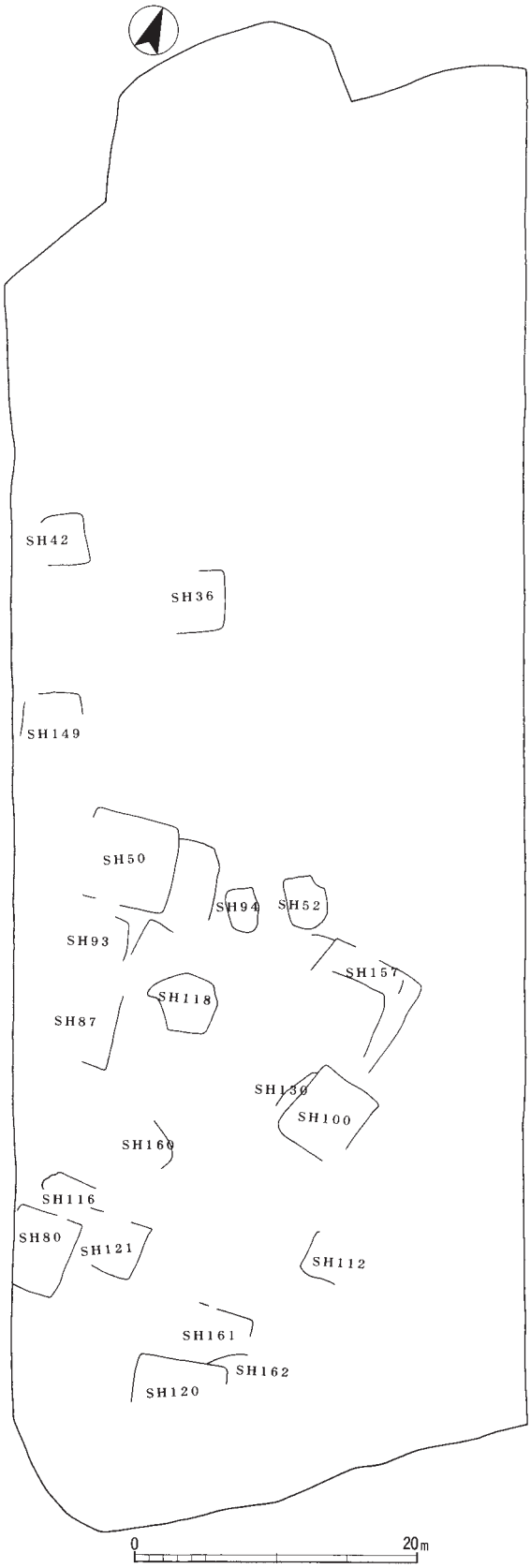
調査によって周溝から出土した弥生土器のなかには、底部に円形とみられる穿孔を有したものがある(18)。過去の発掘調査例には、弥生時代中期において方形周溝墓から体部を焼成後に穿孔したものがある。また、集落から出土した例も認められる。現段階では、底部に穿孔する土器と体部に穿孔する土器は同時に進行していると考えられよう。従って前者と後者には、それぞれ異なる意味を有したものとして捉えることができるのではなかろうか。

2　奈良時代以降について

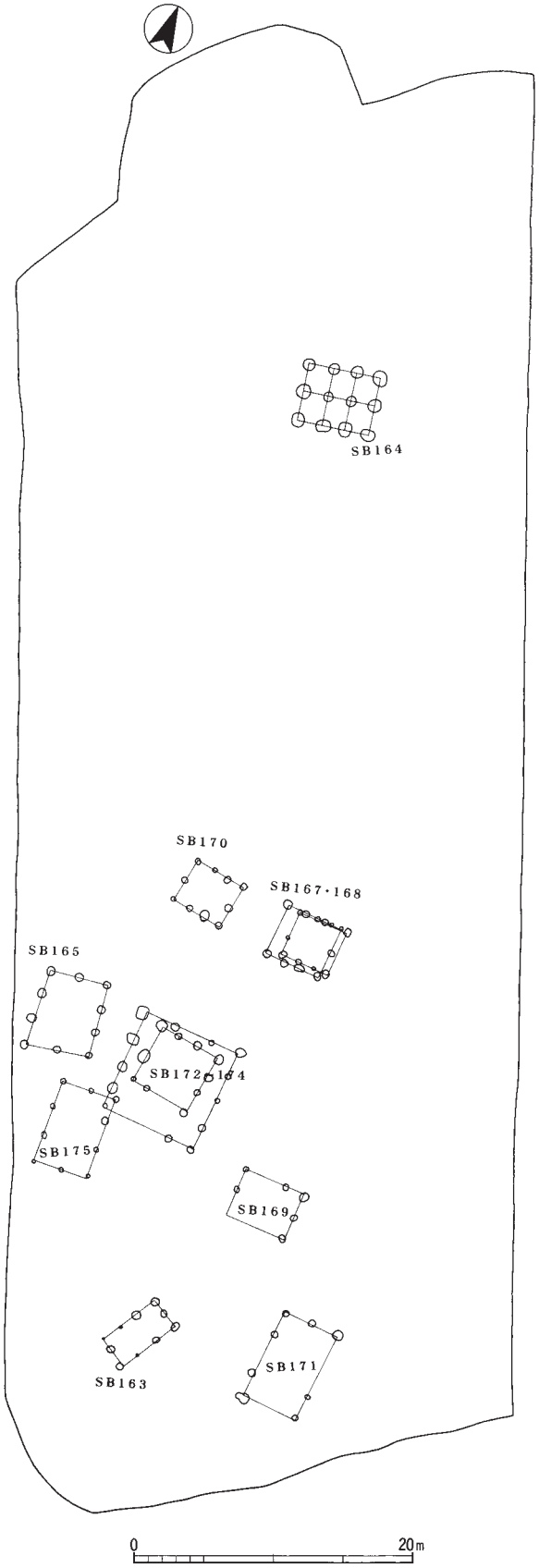
1）集落について

山村遺跡において集落を形成したのは、7世紀末から9世紀頃までとみられる。竪穴住居を主体とした7世紀末から8世紀中頃、掘立柱建物を主体とした8世紀中頃以降は掘立柱建物によって構成されていたとみられる。

竪穴住居は、全体で20棟を以上存在したとみられる。しかし、重複して建て直されているものが多く調査区内でとりわけ顕著に判断しやすいＳＨ120・161・162から少なくとも3回以上の建て替えが行わ



第69図　竪穴住居略図（1／500）



第69図　掘立柱建物略図（1／500）

れたとみられる。また、同時期とみられる掘立柱建物は、確認できず竪穴住居が主体とである集落であろうとみられる。

8世紀中頃以降になると急速にこの集落は、変化する。全て掘立柱建物によって構成され3間×2間の倉庫として判断されるものが丘陵の一番トップに位置するようになる。掘立柱建物群も少なくとも2回以上の建て替えが認められる。柱穴は、かなりの数が存在している一方で、遺物においても灰釉陶器や緑釉陶器などが出土しており平安時代に入る時期までこの集落が存在していたとみられる。この集落は、同じ係累的な集団によって成りたっていたのであればかなり永続的であったとみられる。

2）ＳＨ112出土遺物について

この竪穴住居は、7世紀末から8世紀初頭とみられる。出土した遺物は、多種にわたり非常に良好な資料である。86～109は、須恵器杯蓋・杯身・高杯・鉢・土師器甕が含まれている。とりわけ県内の北勢地域で数少ない資料であろう。103は、胎土からみると器壁外面は暗青灰色、胎土内は、暗赤褐色状であり四日市市内の岡山古窯址出土須恵器と似通っており、そこから運ばれてきた可能性があるかも知れない。また、他の当遺跡から出土した須恵器には、四日市市域に所在する窯から運ばれたものもあるかもしれない。

3）製塩土器について

今回出土した製塩土器は、総数8点にのぼる。その内訳は、志摩式製塩土器2点（72・221）、知多式製塩土器6点（114・115・131・144・173・220）である。三重県内において知多式製塩土器が出土した遺跡は、四日市市中村遺跡、鈴鹿市天王遺跡、鳥羽市白浜・贄・乾・奈佐遺跡の県内の北勢地域及び志摩半島先及び離島といったやや偏っている。志摩式製塩土器自体は、県内各所において出土している。

しかしながら、志摩式と併せて出土した例は当遺跡に限られており、このことだけでも非常に重要である。また、このことはこの時期の製塩の流通に関わる問題の一端を示している可能性もあろう。

それぞれの遺物の出土状況をみてみると知多式のものは柱掘形出土（3点）のものが多く、志摩式は竪穴住居から出土している（1点）。残りは包含層からの出土である。また、知多式は脚部のみの出土で、杯部は確認できなかった。なかでも志摩式・知多式と共伴して出土してはいない。よって遺物自体の時期差及び志摩式から知多式の使用の変化を窺えよう。

志摩式製塩土器は、先達の研究から固形塩製作用とされ、成形技法及びおおよその時期区分がなされている。しかしながら、約200年間以上にわたって存続している一方で形態変化に乏しく、志摩式製塩土器自体脆く完形のものはほとんどなく、編年に著しく困難を極める。過去の調査例から斎宮出土のものが最古とされ、8世紀第3四半期から第4四半期に属するものが存在している。竪穴住居（ＳＨ80）から出土したもの（72）は、他の遺跡から出土しているものと同様破損しているが、8世紀前葉から8世紀中葉にかけての土器（68～71）が出土していることから同時期とみてよいのではなかろうか。また、他のものもおおよそ同時期とみてよかろう。つまり志摩式製塩土器の成立は、若干遡り得ると考えられるのではなかろうか。

さらに、柱穴から出土している知多式製塩土器は、４ＡⅢ類とみられ8世紀中葉以降のものとみられ掘立柱建物の時期とほぼ違えない。よってこの集落では8世紀中葉の段階で志摩式製塩土器から知多式製塩土器へと何らかの理由によって転換したと見られる。

4）緑釉陶器について

出土したなかでは、実測に堪えられないものが数点あり、実測図にのせられたものは1点（242）だけである。周辺域の久留倍遺跡、大矢知山畑遺跡、永井遺跡、宮の西遺跡等出土している遺跡は、限られている。1点程度で当遺跡を判断するのは、難しいが朝明郡衙に付する官人層か在地有力者層の集落である可能性が高いのではなかろうか。

3　小結

弥生時代中期においては、墓域の一端を確認した。このことは、北側で確認された集落域（菟上遺跡）及びさらに銅鐸が出土した地点（重地山）と繋がっ

ていき大きな集団を形成し、この地域の一つのモデルケース的な要素を持っているとして捉えられるのではなかろうか。また、遺物についても方形周溝墓の周溝からであるが良好な資料が出土した。

奈良時代以降については、山村遺跡は、周辺に所在する西ヶ広遺跡・中村遺跡・貝野遺跡等を含め朝明川流域に点在し、朝明郡衙に関わる遺跡か郡衙に関わる官人層の集落であろうとみられ、当遺跡から出土した遺物には豊富な資料を含んでいることからも窺えよう。

最後に報告書をまとめるにあたって筆者の能力不足、知識不足等があり整理作業にかなりの時間を費やすこととなった。しかしながら、関係者一同の叱咤激励のもと刊行することができた。ここに記して感謝したい。なるだけ簡潔かつ要点をまとめたつもりであるが欠けた事柄については筆者の力不足によるものである。

［参考文献］

山田猛「方形周溝墓の型式」『大鼻遺跡』（三重県埋蔵文化財センター　1994年）

鈴木克彦・伊藤裕偉・伊勢野久好・岩中淳之「伊勢・志摩」『伊勢湾岸の弥生時代中期をめぐる諸問題』（第７回東海埋蔵文化財研究会　1990年）

伊藤久嗣『納所遺跡　－遺構と遺物－』（三重県教育委員会　1980年）

船越重伸・水橋公恵・水谷裕康・赤松一秀・穂積裕昌・田中美穂「菟上遺跡」『近畿自動車道名古屋神戸線埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』（三重県埋蔵文化財センター　2001年）

角正芳浩「Ⅳ　山村遺跡」『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　2002年）

鈴木克彦・伊藤裕偉・伊勢野久好・岩中淳之「伊勢・志摩」『伊勢湾岸の弥生時代中期をめぐる諸問題』（第７回東海埋蔵文化財研究会　1990年）

森岡秀人「弥生土器畿内様式の東方波及－正統凹線文系土器文化の伊賀・伊勢への伝播と定着について（予察）－」『紀伊半島の文化史的研究（考古学編）』（関西大学文学部考古学研究室　1992年）

上村安生「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年ー東海編ー』（木耳社　2002年）

斎藤孝正「猿投・美濃須衛」『季刊考古学　第42号』（雄山閣　1993年）

斎藤孝正・後藤健一編『須恵器集成図録　第３巻東日本編Ⅰ』（雄山閣　1995年）

中村浩編『古墳出土須恵器集成　第一巻近畿編Ⅰ』（雄山閣　1998年）

新田洋「三重県における製塩に関する予察」『三重考古３』（三重考古学研究会　1980年）

山本雅靖「三重県」『日本土器製塩研究』（青木書店　1994年）

立松彰「愛知県」『日本土器製塩研究』（青木書店　1994年）

西村美幸「伊勢湾西岸の製塩土器ー研究の現状と課題－」『製塩土器の諸問題ー古代における塩の生産と流通ー』（塩の会シンポジウム実行委員会　1997年）

森泰通「東海地方における消費地出土の製塩土器ー特に固形塩の問題をめぐってー」『製塩土器の諸問題ー古代における塩の生産と流通ー』（塩の会シンポジウム実行委員会　1997年）

高橋照彦「三彩・緑釉陶器と地方官衙」『月刊考古学ジャーナル７　№475』（ニューサイエンス社　2001年）

	遺　跡　名	調査面積(㎡)	所　在　地	基　数	規　模	時　期	文　献　資　料
1	宮山遺跡（第１次）	12,260	員弁郡大安町片樋字宮山	2基(内１基前方後方形墳丘墓)	１辺約９ｍ（１基）、全長30ｍ以上（１基）	弥生時代後期末～古墳時代初頭	『宮山遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1999年）
2	広永遺跡・広永古墳群・広永横穴墓群	970	四日市市広永町・三重郡朝日町埋縄	１基	一辺９ｍ（１基）	弥生時代後期	『近畿自動車道名古屋神戸線（第２名神）愛知県境～四日市ＪＣＴ埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』（三重県埋蔵文化財センター　1999年）
3	菟上遺跡（第２次公団）	約30,000	四日市市伊坂町字菟上・牛谷	３基	１辺約12、15、19ｍ（陸橋部有）	弥生時代中期後葉	『近畿自動車道名古屋神戸線（第２名神）愛知県境～四日市ＪＣＴ埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』（三重県埋蔵文化財センター　2001年）
4	山村遺跡（第１次）	1,071	四日市市山村町字西谷・西平古	１基	１辺約7.8m	弥生時代中期	『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　2002年）
5	永井遺跡	約4,000	四日市市尾平町井上・石塚	２基	１辺20ｍ、規模不明１基	弥生時代中期後葉	『永井遺跡発掘調査報告』（四日市市教育委員会　1973年）
6	大谷遺跡（Ａ地区）	1,400	四日市市生桑町字大谷	２基	14×15ｍ、16×20ｍ	前？後？	『大谷遺跡発掘調査報告　－Ａ・Ｂ地区－』『大谷遺跡発掘調査報告』（四日市市教育委員会　1966・1976・1977年）
7	上野遺跡	約2,200	四日市市大字西阿倉川字上野	１基	１辺17ｍ（１基）	弥生時代中期後葉	『上野遺跡２』（四日市市遺跡調査会　1992年）
8	大矢知山畑遺跡	725	四日市市大矢知町字山畑	３基	９ｍ以上×9.2ｍ、１辺8.7ｍ、１辺７ｍ？	弥生時代中期	『大矢知山畑遺跡』（四日市市教育委員会　2002年）
9	地蔵僧遺跡	10,000	亀山市	３基	１辺約７ｍ（１基）、約８ｍ（１基）、約９ｍ（１基）	弥生時代中期中葉	『地蔵僧遺跡発掘調査報告』（亀山市教育委員会　1978年）
10	大鼻遺跡	27,500	亀山市太岡寺	11基	１辺約8.5ｍ（３基）、約10ｍ（２基）、約11ｍ（１基）、約12ｍ（２基）、約15ｍ（１基）、規模不明（１基）	弥生時代中期	『大鼻遺跡』（三重県埋蔵文化財センター　1994年）
11	西ノ岡Ｂ遺跡	1,200	鈴鹿市高岡町西ノ岡	５～６基	－	－	『三重県埋蔵文化財年報　－平成２年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1991年）
12	上箕田遺跡	3,000	鈴鹿市中箕田町字上月	２基	１辺５ｍ（１基）、６ｍ（１基）	弥生時代中期前葉	『上箕田』（鈴鹿市教育委員会・上箕田遺跡調査会　1970年）『上箕田遺跡』（鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会　1993年）
13	神戸中学校遺跡	1,600	鈴鹿市十宮４丁目	３基	１辺12ｍ（最大）	弥生時代後期	『第４回鈴鹿市埋蔵文化財展～最近の調査～』（鈴鹿市教育委員会　1994年）
14	南山遺跡	約340	鈴鹿市河田町字南山1０６５－１	３基	規模不明（１基）	弥生時代後期	『南山遺跡・南山６号墳』（鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会　1991年）『三重県埋蔵文化財年報　－平成７年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1996年）
15	富士遺跡	112.8	鈴鹿市平野町字尼の橋1151－４	１基	１辺約11ｍ（幅2.8ｍ,深さ25cm）	弥生時代中期後葉	『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅳ　－平成８年度－』（鈴鹿市教育委員会　1996年）
16	羽舞場遺跡	780	鈴鹿市小田町字羽舞場1174－119・120	４基	１辺８ｍ（３基）、12ｍ（１基）	弥生時代中期後葉	『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅳ　－平成８年度－』（鈴鹿市教育委員会　1996年）
17	塚腰遺跡	300	鈴鹿市郡山町塚腰	２基	－	古墳時代初頭	『三重県埋蔵文化財年報11　－昭和55年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1981年）
18	保子里遺跡（第２次）	2,400	鈴鹿市国府町保子里112・128・176	４基	１辺７ｍ（１基）、９ｍ（１基）、11ｍ（１基）、13ｍ（１基）	弥生時代中期	『鈴鹿市考古博物館年報　第１号－平成10年度版－』（鈴鹿市考古博物館　2000年）
19	扇広遺跡	3,000	鈴鹿市高岡町扇広	５基	－	弥生時代中期後葉～後期前葉	『三重県埋蔵文化財年報　－平成２年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1991年）
20	東庄内Ｂ遺跡	－	鈴鹿市東庄内町石亀	５基	１辺約10・11・14・18（２基）ｍ	中期前葉～中期中葉	「東庄内Ｂ遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』（三重県教育委員会　1970年）
21	中尾山遺跡	約3,000	鈴鹿市国分町字中尾山	32基（平成元年度分含む）	－	２２基は弥生時代中期後葉・時期不明１０基	『三重県埋蔵文化財年報　－平成元年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1990年）
		2,500					『三重県埋蔵文化財年報　－平成２年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1991年）
22	双児塚遺跡	1,300	鈴鹿市伊船町字鈴木田	７基	1辺５ｍ（１基）、６ｍ（２基）、７ｍ（２基）、８ｍ（１基）、規模不明（１基）	弥生時代中期前葉	『鈴鹿市考古博物館年報　第２号－平成11年度版－』（鈴鹿市考古博物館　2001年）
23	長法寺遺跡	535	鈴鹿市長法寺町字権現	５基	１辺３ｍ（１基）、５ｍ（１基）、８ｍ（１基）、10ｍ（１基）、規模不明（１基）	弥生時代中期後葉	『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅴ　－平成９年度－』（鈴鹿市教育委員会　1998年）
24	南谷遺跡	約200	鈴鹿市稲生町字稲生山	２基？	－	弥生時代後期前葉	『三重県埋蔵文化財年報　－平成３年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1992年）
25	寺山遺跡	2,400	鈴鹿市高岡町寺山	１基？	－	弥生時代中期～後期	『三重県埋蔵文化財年報　－平成２年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1991年）
26	倉谷方形台状墓	620	安芸郡安濃町大字連部字ゆふけ	方形台状墓１基	－	弥生時代中期中葉	『三重県埋蔵文化財年報　－平成７年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1996年）
27	前田遺跡	900	安芸郡安濃町中川	１基（方形台状墓）	－	弥生時代後期前葉	『三重県埋蔵文化財年報　－昭和57年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1983年）
28	位田遺跡	4,600	津市北河路町出口・垣内	10基	１辺約４ｍ（１基）、約５ｍ（３基）、約６ｍ（３基）、約７ｍ（１基）、約９ｍ（１基）、規模不明（１基）	弥生時代後期（欠山）	『位田遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1999年）
29	橋垣内遺跡	6,540	津市大里窪田町字橋垣内	２基	８×9.5ｍ（１基）、一辺約11ｍ（１基）	弥生時代中期	『橋垣内遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1997年）
30	松ノ木遺跡	7,800	津市安東町字樫ノ木	４基	１辺５ｍ（１基）、９ｍ（１基）、18ｍ（１基）、規模不明（１基）	弥生時代中期	「松ノ木遺跡」『松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1993年）
31	納所遺跡	－	津市納所	５基	１辺約５ｍ（２基）、約６ｍ（２基）、約８ｍ（１基）	弥生時代中期	『納所遺跡－遺構と遺物－』（三重県埋蔵文化財センター　1980年）
32	大ケ瀬弥生墳墓	約200	津市野田	１基	南北19.2ｍ×東西11.5ｍ、高さ２ｍ	弥生時代後期前葉	「大ヶ瀬遺跡」『埋蔵文化財調査報告Ⅰ』（三重県教育委員会　1973年）
33	前田遺跡	－	津市野田	２基	６ｍ×10ｍ	弥生時代後期～古墳時代初頭	「前田遺跡」『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』（三重県教育委員会　1983年）
34	高松弥生墳墓	－	津市半田字高松	１基	６ｍ×８ｍ（１基）、１辺７ｍ（１基）	弥生時代後期	『高松弥生墳墓発掘調査報告』（津市教育委員会　1970年）
35	高松Ｃ遺跡	－	津市半田字高松	１基	１辺12ｍ	古墳時代前期	『三重県埋蔵文化財年報　－昭和50年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1976年）
36	川北城跡・川北遺跡	12,000	津市川北	７基	－	古墳時代前期	『三重県埋蔵文化財年報　－昭和58年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1984年）
37	惣作遺跡	1,300	津市殿村字惣作	２基	６×９ｍ（１基）、規模不明（１基）	弥生時代中期	『三重県埋蔵文化財年報　－平成12年度－』（三重県埋蔵文化財センター　2001年）
38	雲出島貫遺跡（第３次）	2,750	津市雲出島貫町字町中	18基	１辺６～８ｍが中心	古墳時代前期	『嶋抜』第１次調査　（三重県埋蔵文化財センター　2000年）
39	赤坂遺跡	1,800	久居市木造町字赤阪	－	規模不明	弥生時代中期	『三重県埋蔵文化財年報　－平成４年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1993年）
40	田村西瀬古遺跡	2,500	一志郡嬉野町田村字西瀬古	２基	７×８ｍ（１基）、１辺10ｍ（１基）	弥生時代後期（欠山）	坂倉一光・萩原義彦『田村西瀬古遺跡』（三重県埋蔵文化財センター　1990年）
41	下ノ庄東方遺跡（前山地区）	4,540	一志郡嬉野町中川	９基	－	弥生時代後期（山中）	『三重県埋蔵文化財年報　－平成８年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1997年）
	下ノ庄東方遺跡	5,700	一志郡嬉野町中川	35基	１辺約６ｍ（２基）、約７ｍ（３基）、約８ｍ（６基）、約９ｍ（４基）、約10ｍ（４基）、約11ｍ（３基）、約12ｍ（２基）、約13ｍ（１基）、約14ｍ（２基）、規模不明（８基）	弥生時代中期前葉～後期	「下ノ庄東方遺跡」『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概要Ⅰ』（三重県教育委員会　1987年）　『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概要Ⅱ』（三重県教育委員会　1988年）
	下ノ庄東方遺跡	8,650	一志郡嬉野町中川字小野・四反畑下之庄字夜ノ堀				
42	四反畑遺跡	6,000	一志郡嬉野町中川・下ノ庄	－	－	－	『三重県埋蔵文化財年報　－昭和61年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1987年）
43	天白遺跡	2,260	一志郡嬉野町釜生田	２基	１辺約9．5ｍ、約12.5ｍ	弥生時代中期後葉	『天白遺跡』（三重県埋蔵文化財センター　1995年）
44	中野山古墳群（第２次）	4,400	一志郡一志町八太字中野山	３基	－	弥生時代中期～後期	『三重県埋蔵文化財年報　－平成10年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1999年）
45	片野遺跡	4,250	一志郡一志町片野	１基	4.2×5.6ｍ	弥生時代中期(Ⅱ)	『片野遺跡発掘調査報告』（三重県教育委員会　1985年）
	片野遺跡（第７次）	約900	一志郡一志町大字片野字北浦491－１他	４基			『三重県埋蔵文化財年報　－平成６年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1995年）
	片野遺跡（第５次）	520	一志郡一志町片野	５基以上		弥生時代（Ⅱ～Ⅲ）	『三重県埋蔵文化財年報　－平成４年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1993年）
	片野遺跡（第４次）	約800	一志郡一志町大字片野字北浦	４基		弥生時代中期（Ⅲ～Ⅳ）	『三重県埋蔵文化財年報　－平成３年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1992年）

第11表　県内方形周溝墓一覧表（１）

	遺　跡　名	調査面積(㎡)	所　在　地	基　数	規　模	時　期	文　献　資　料
46	高畑遺跡（第３次）	1,200	一志郡一志町大字井生字高畑	4基	－	－	『三重県埋蔵文化財年報　－平成７年度－』（三重県埋蔵文化財センター 1996年）
47	鳥居本遺跡	800	一志郡一志町小山	1基	1辺約6.5m	弥生時代中期中葉	『鳥居本遺跡発掘調査報告』（一志町教育委員会　1975年）
48	鳥居本遺跡	6,400	一志郡一志町小山字鳥居ノ本	2基	約10×約13m（１基）、一辺約14m（１基）	弥生時代中期	「鳥居本遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1991年）
49	中ノ庄遺跡		一志郡三雲町	4基？	1辺約６m（１基）、約８m（２基）、約11m（１基）	弥生時代中期前葉	『中ノ庄遺跡発掘調査報告』（三重県教育委員会 1972年）
50	舞出北遺跡	3,380	一志郡三雲町字西沖	2基（円形周溝墓1基）	1辺9.5m、21m、径17m	弥生時代後期	『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報ⅩⅢ』（三重県埋蔵文化財センター 2001年）
51	草山遺跡	20,000	松阪市久保町草山・下村町草山	28基	－	弥生時代後期～古墳時代初頭	『三重県埋蔵文化財年報　－昭和58年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1984年）
52	鴻ノ木遺跡（第５次）	2,200（下層1,800）	松阪市中万町字水引揚	1基	8.4×9.4m	弥生時代中期	『鴻ノ木遺跡』（三重県埋蔵文化財センター　1998年）
53	瀬干遺跡（第１次）	580	松阪市櫛田町瀬干・一ノ坪	8基	１辺７m（１基）、９m（１基）、11m（２基）、規模不明（４基）	廻間Ⅰ式前半期	『瀬干遺跡（第１次）』（三重県埋蔵文化財センター 1996年）
	瀬干遺跡（第２次）	1,900				古墳時代初頭	『瀬干遺跡（第２次）』（三重県埋蔵文化財センター 2000年）
54	馬渡遺跡	1,435	多気郡明和町大字竹川字馬渡	3基	規模不明	弥生時代中期	『三重県埋蔵文化財年報　－平成４年度－』（三重県埋蔵文化財センター 1993年）
55	北野遺跡（第５次）	5,750	多気郡明和町蓑村字東へべら	3基	約５m（２基）、14.5×16m（１基）	弥生時代後期	『北野遺跡（第５次）発掘調査概報』（三重県埋蔵文化財センター 1996年）
	北野遺跡（第２次）	8,300	多気郡明和町明星・蓑村	4基	－	弥生時代後期	『三重県埋蔵文化財年報　－平成４年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1993年）
56	城堀遺跡	2,000	多気郡明和町上村	3基	１辺約８m（１基）、約９m（１基）、約11m（１基）	古墳時代前期	『城堀遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　2003年）
57	コドノＢ遺跡（第１次）	700	多気郡明和町上村字コドノ	11基	１辺６m（２基）、７m（３基）、８m（３基）、９m（１基）、12m（１基）	弥生時代前期～古墳時代初頭	『コドノＡ・コドノＢ遺跡（第１次）』（三重県埋蔵文化財センター　1998年）
	コドノＢ遺跡（第２次）	1,900	多気郡明和町上村字コドノ				『コドノＢ遺跡（第２次）』（三重県埋蔵文化財センター　1999年）
	コドノＢ遺跡（第３次）	300	多気郡明和町上村字コドノ				『コドノＢ遺跡（第３次）』（三重県埋蔵文化財センター　200年）
58	金剛坂遺跡（第５次）	350	多気郡明和町金剛坂字辰ノ口	3基（円形周溝墓1基）	規模不明（３基）、径約８m	弥生時代前期	『金剛坂遺跡（第５次）・辰ノ口古墳群（第３次）』（三重県埋蔵文化財センター　2000年）
	金剛坂遺跡	5,050（１～３次）	多気郡明和町金剛坂字垣内・辰ノ口	14基	１辺５m（１基）、10m（２基）、11m（２基）、12m（４基）、13m（２基）、15m（１基）、規模不明（２基）	弥生時代後期	「金剛坂遺跡」『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1988年）
						弥生時代後期	『金剛坂遺跡発掘調査報告』（明和町教育委員会　1971年）
				1基	１辺８m以上	弥生時代	『三重県埋蔵文化財年報　－平成５年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1994年）
59	寺垣内遺跡	3,600	多気郡明和町金剛坂字寺垣内	25基	－	弥生時代後期～古墳時代初頭	『三重県埋蔵文化財年報　－昭和60年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1986年）
	寺垣内遺跡（第２次）	7,600					『三重県埋蔵文化財年報　－昭和61年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1987年）
60	古里遺跡	－	多気郡明和町竹川	18基	１辺約７m（２基）、９m（２基）、11m（２基）、12m（２基）、13m（１基）、14m（１基）、規模不明（７基）	弥生時代中期前葉から中葉、後期	『古里遺跡発掘調査報告-Ｃ・Ｄ地区-』（三重県教育委員会　1974年）『史跡斎宮跡発掘調査年報』（三重県教育委員会 1980・1981・1985・1986・1987・1988年）
61	曽祢崎古墳群・曽祢崎遺跡（第２次）	1,200	多気郡明和町上野字曽祢崎	2基	１辺９m（１基）、12m（１基）	弥生時代後期	『曽祢崎遺跡（第２次）・曽祢崎古墳群』（三重県埋蔵文化財センター　1997年）
62	斎宮跡（第１０７次）	530	多気郡明和町竹川字中垣内414他	2基	－	弥生時代中期	『三重県埋蔵文化財年報　－平成６年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1995年）
63	巣護遺跡	2,300	多気郡多気町荒蒔	前方後方型周溝墓1基	－	欠山新	「巣護遺跡」『一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告Ⅰ』（三重県埋蔵文化財センター　1995年）
64	花ノ木（山崎）遺跡	5,800	多気郡多気町牧	1基	１辺６m	弥生時代中期中葉	「花ノ木遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告』（三重県教育委員会　1989年）
65	上の山遺跡	1,600	度会郡玉城町勝田字上ノ山	2基	規模不明	弥生時代中期（Ⅲ）	『上の山遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1992年）
66	波瀬Ｂ遺跡	1,800	度会郡玉城町下田辺	3基	12.5×14m、９～12m（２基）	弥生時代中期	『波瀬Ｂ遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1992年）
67	月よべ遺跡	400	度会郡玉城町野篠	3基	１辺約８m（１基）、約10m（１基）、規模不明（１基）	弥生時代後期	「月よべ遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』（三重県教育委員会　1979年）
68	野垣内遺跡	－	伊勢市上地町野垣内	4基	１辺約７m（1基）、約９m（１基）、約11m（１基）、約18m（1基）	弥生時代後期	「野垣内遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』（三重県教育委員会　1979年）
69	中楽山遺跡	－	伊勢市上地町	4基	１辺約７m（１基）、約８m（１基）、約９m（１基）、約11m（1基）	弥生時代後期末	「中楽山遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』（三重県教育委員会　1973年）
70	大藪遺跡	800	伊勢市磯町	3基	７×8.5m、１辺9.2m、8.1×8.4m	弥生時代後期	「大藪遺跡」『南勢バイパス埋蔵文化財調査報告』（三重県教育委員会　1973年）
71	掛橋遺跡（Ｋ地点）	1,920	度会郡小俣町本町1122、1122―1	－	－	－	『三重県埋蔵文化財年報　－平成２年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1991年）
72	北切遺跡	3,500	阿山郡大山田村北切	2基	18m×16m、20m×19m	弥生時代中期	「北切遺跡」『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告』（三重県教育委員会　1984年）
73	山の川遺跡	－	上野市上ノ庄	1基	１辺5.5m	弥生時代後期	『三重県埋蔵文化財年報　－昭和47年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1973年）
74	浮田遺跡	1,600	上野市上神戸	3基	１辺約８m（１基）、約９m（１基）、約10m（１基）、約14m（1基）	弥生時代後期	「浮田遺跡」『平成２年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1991年）
75	伊賀国府跡	5,000	上野市坂之下字国町・前田・追越・岩坂	1基	約７m	弥生時代後期	『伊賀国府跡（第４次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1992年）
76	黒石遺跡	5,000	名張市瀬古口字黒石・中村字浦	5基	－	弥生時代中期～後期	『三重県埋蔵文化財年報　－平成12年度－』（三重県埋蔵文化財センター　2001年）
							『黒石遺跡』（名張市教育委員会　2000年）
77	下川原遺跡（第５次）	3,000	名張市夏見字下川原	1基	１辺10m	弥生時代中期	『下川原遺跡５次調査概要』（名張市遺跡調査会　1997年）
	下川原遺跡（第３次）	1,400	名張市夏見字浅尾102番地の３他	6基	－	弥生時代中期～後期前葉	『三重県埋蔵文化財年報　－平成２年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1991年）『下川原遺跡５次調査概要』（名張市遺跡調査会 1997年）
78	観音寺遺跡	6,000	名張市中村観音寺	1基	１辺13m	弥生時代後期	「観音寺遺跡」『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告』（三重県教育委員会　1985年）
79	中戸遺跡	1,600	名張市赤目町大字柱楽字中戸	4基	１辺５m（２基）、11m（１基）、15×16m（１基）	弥生時代中期	「中戸遺跡」『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』（三重県教育委員会　1989年）
80	杉垣内遺跡	4,330	松阪市深長町字杉垣内	1基？	6.8×８m	古墳時代	「杉垣内遺跡」『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』（三重県教育委員会　1989年）
81	須賀遺跡	45.7	鈴鹿市須賀１丁目16－３	1基	－	弥生時代中期後葉	『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅳ　－平成８年度－』（鈴鹿市教育委員会 1996年）
82	松山遺跡	800	鈴鹿市中瀬古町松山	1基？	？	？	『三重県埋蔵文化財年報10　－昭和54年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1980年）
83	寺山遺跡	2,400	鈴鹿市高岡町寺山	1基？	？	弥生時代中期～後期前葉	『三重県埋蔵文化財年報　－平成２年度－』（三重県埋蔵文化財センター　1991年）

第12表　県内方形周溝墓一覧表（２）

写　真　図　版

図版 1

山村遺跡遠景（南西から）

山村遺跡遠景（南から）

山村遺跡、菟上遺跡、伊坂遺跡遠景（南西から）

菟上遺跡から山村遺跡を望む（北西から）

図版 3

調査前風景（北から）

調査前風景（北から）

調査風景（北から）

調査風景（北から）

図版 5

完掘状況（北西から）

完掘状況（南東から）

1 号墓完掘状況（南西から）

方形周溝墓群完掘状況（北西から）

図版7

1号墓遺物出土状況（西から）

1号墓遺物出土状況（北から）

1 号墓遺物出土状況（東から）

1 号墓遺物出土状況（西から）

図版 9

3 号墓完掘状況（西から）

3 号墓完掘状況（北から）

3 号墓遺物出土状況（北から）

4 号墓完掘状況（西から）

図版11

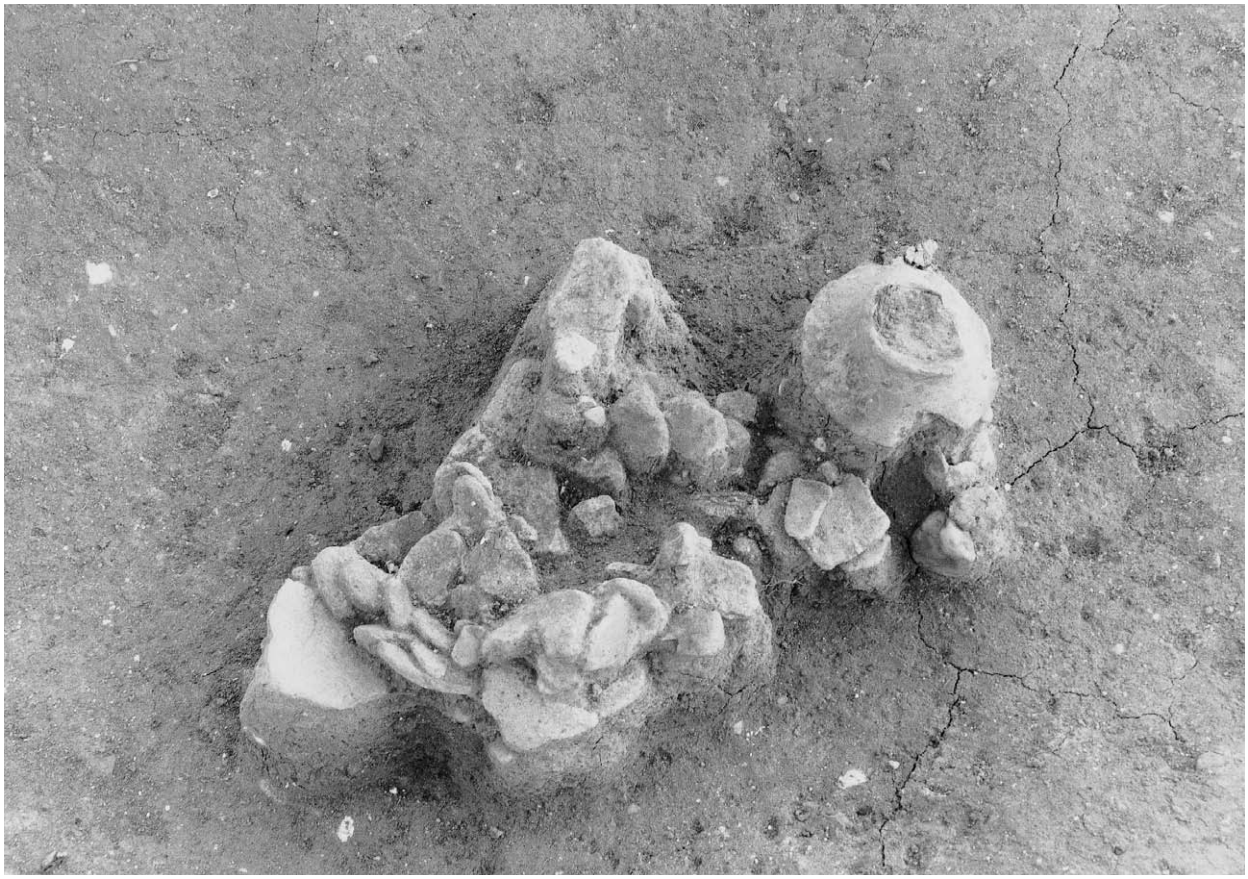
5号墓完掘状況（西から）

方形周溝墓群（北から）

方形周溝墓群（北から）

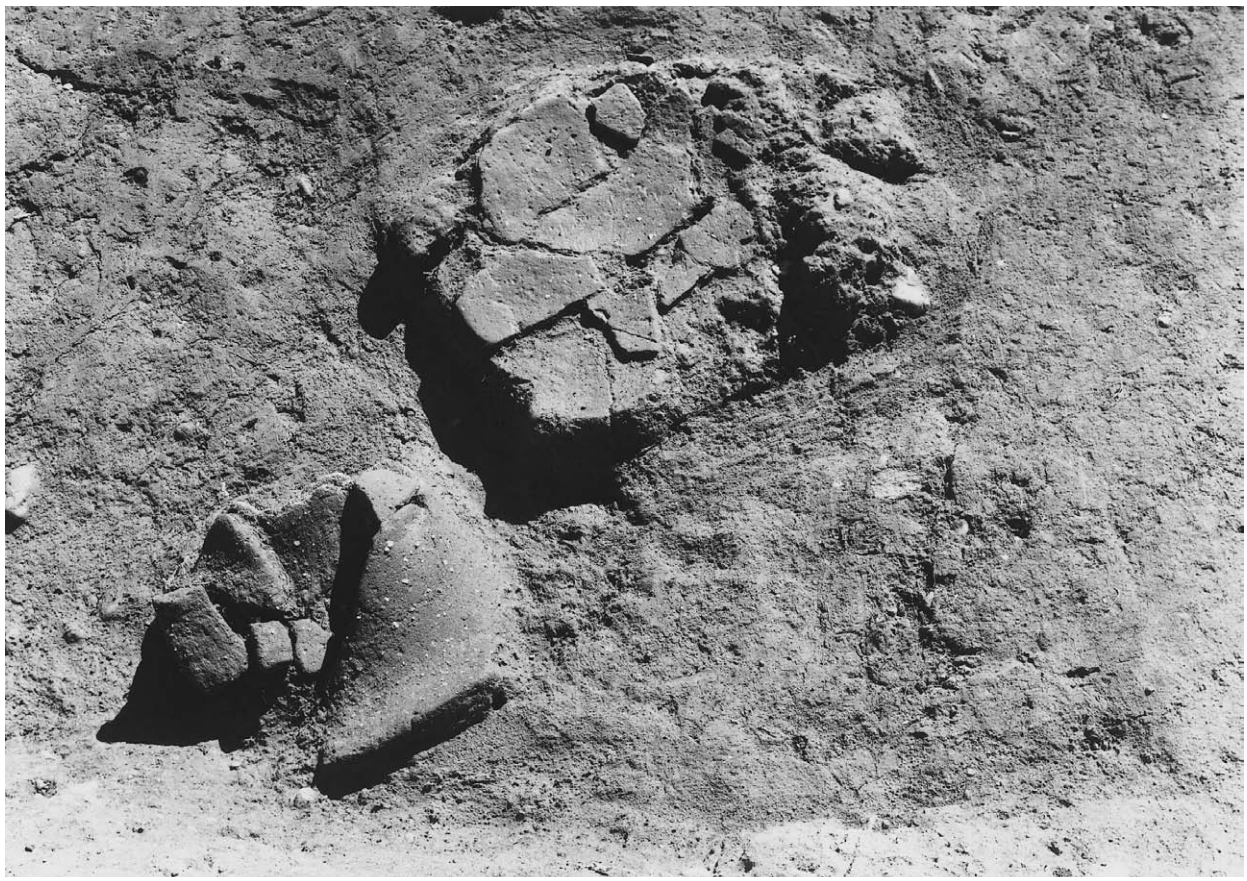
10及び11号墓完掘状況（北から）

図版13



9 号墓遺物出土状況（北から）

9 号墓遺物出土状況（南から）

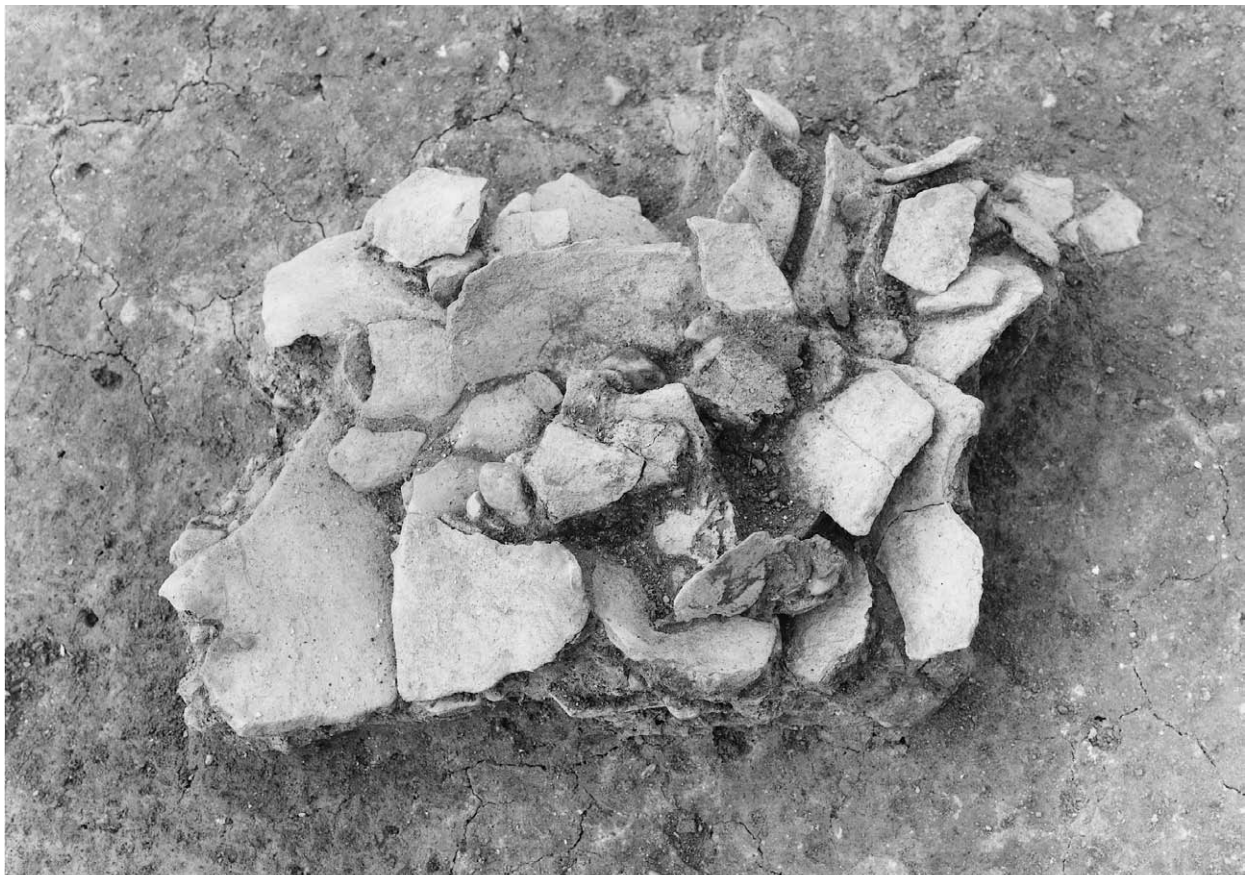


9 号墓遺物出土状況（北から）

10号墓遺物出土状況（西から）

図版15

11号墓遺物出土状況（西から）

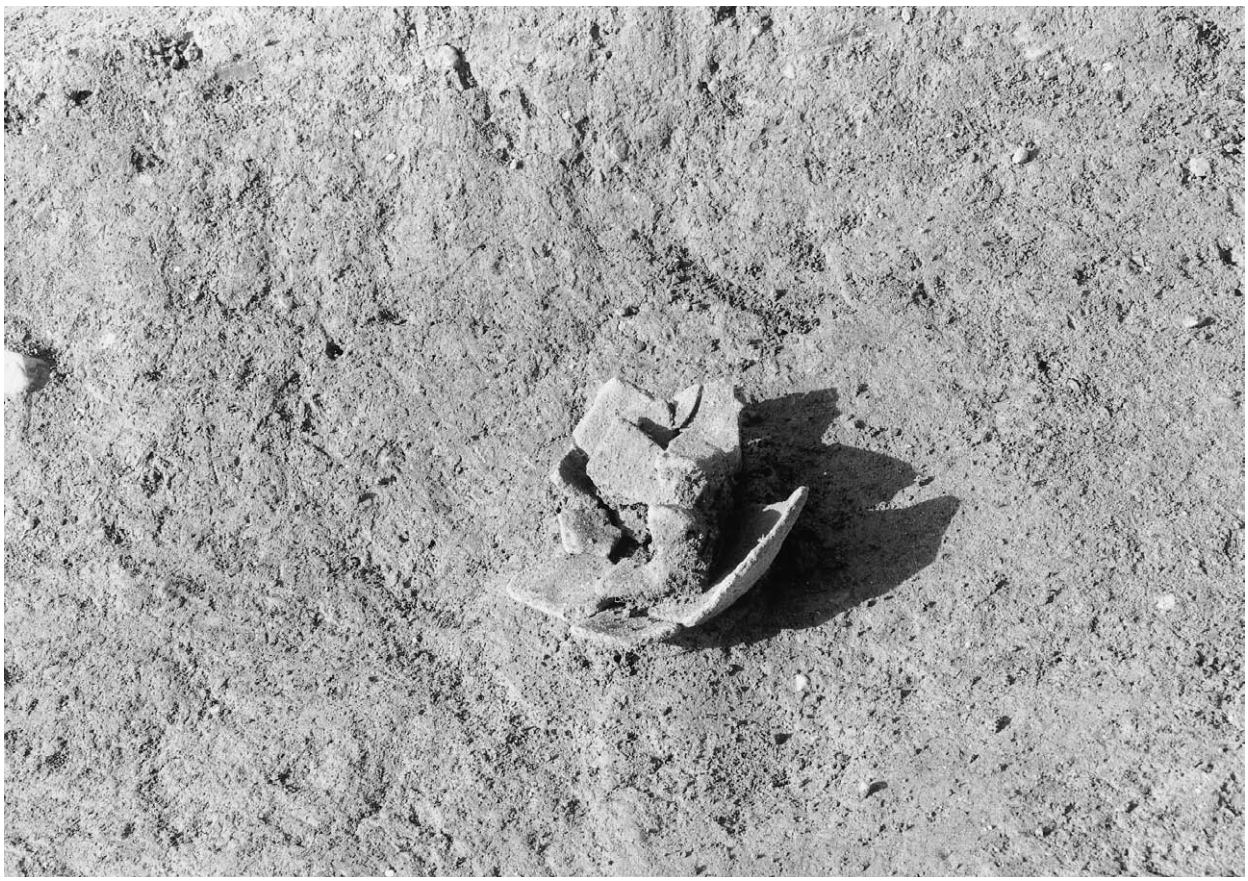


11号墓遺物出土状況（南から）

11号墓遺物出土状況（南西から）

11号墓遺物出土状況（東から）

図版17



11号墓遺物出土状況（東から）

7及び8号墓完掘状況（東から）

8 号墓完掘状況（南から）

7 号墓遺物出土状況（東から）

図版19

12及び13号墓完掘状況（北西から）

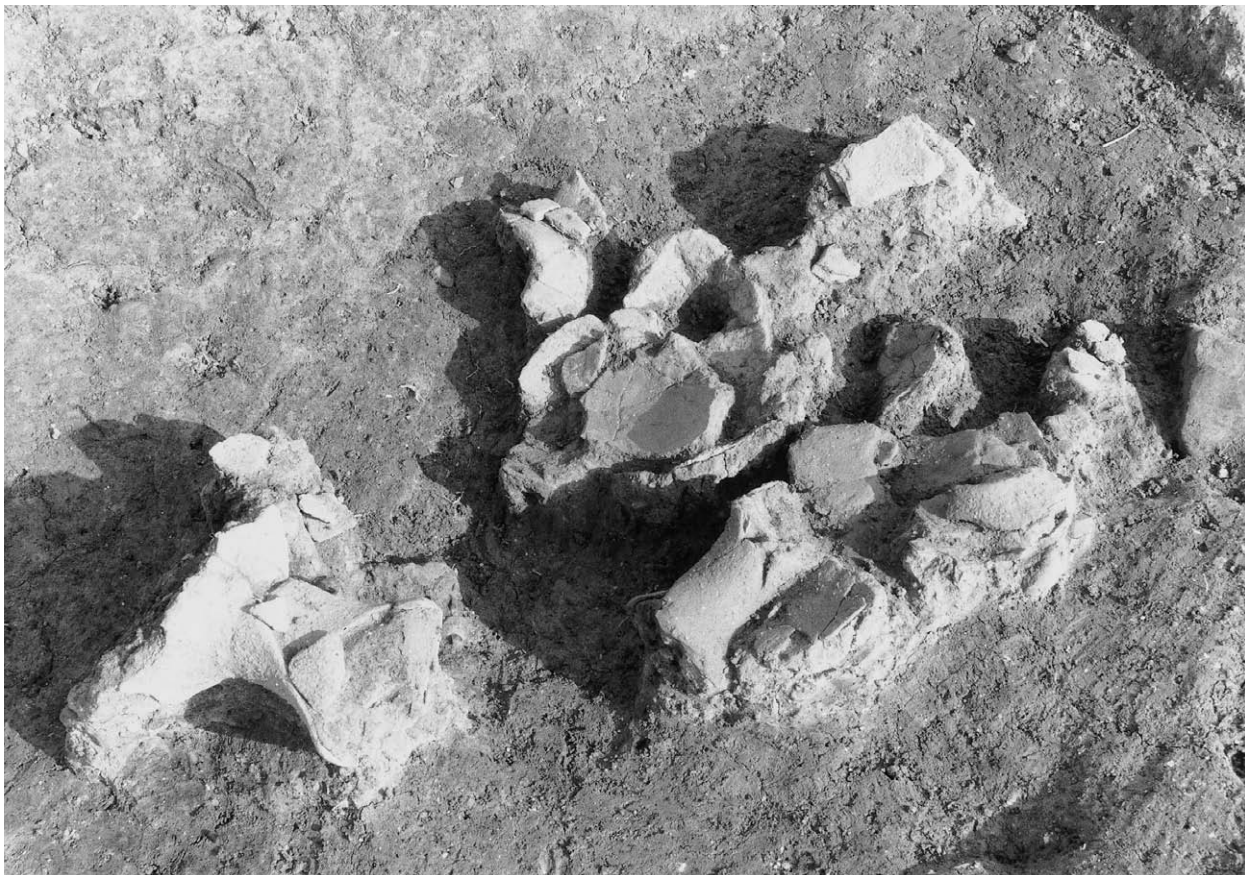
13号墓遺物出土状況（北から）

14号墓完掘状況（東から）

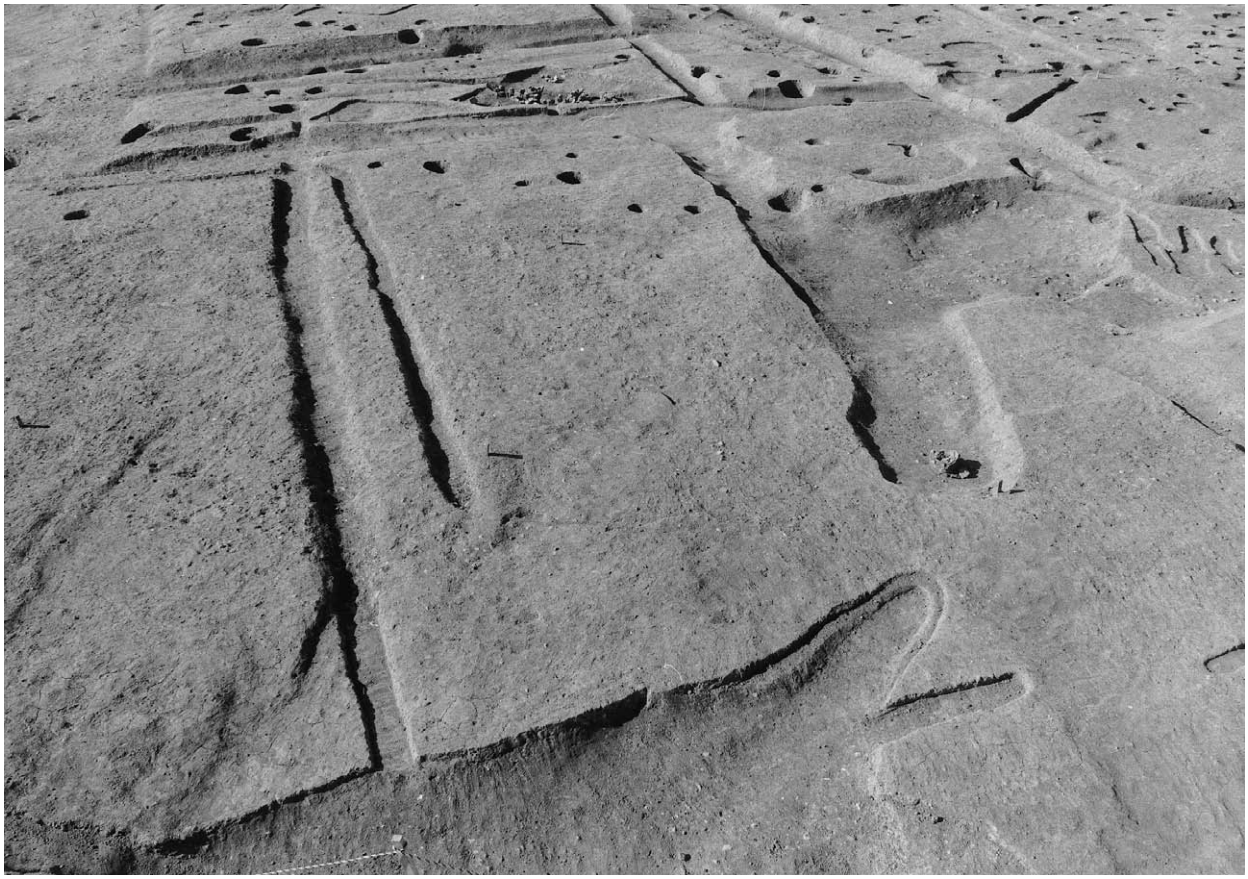
14号墓遺物出土状況（南から）

図版21

15号墓完掘状況（東から）



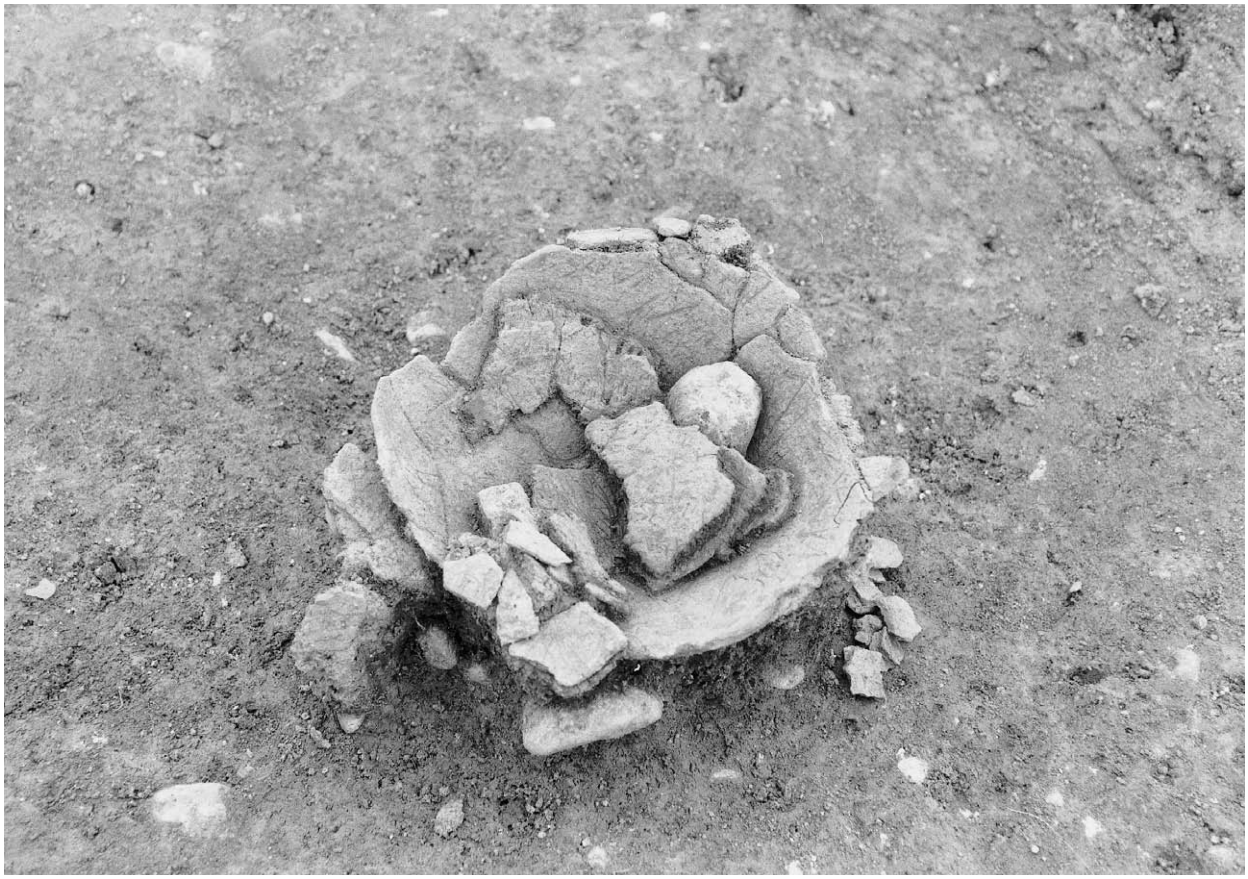
15号墓遺物出土状況（南から）



17号墓完掘状況（東から）

17号墓完掘状況（北から）

図版23



17号墓遺物出土状況（東から）

17号墓遺物出土状況（南から）

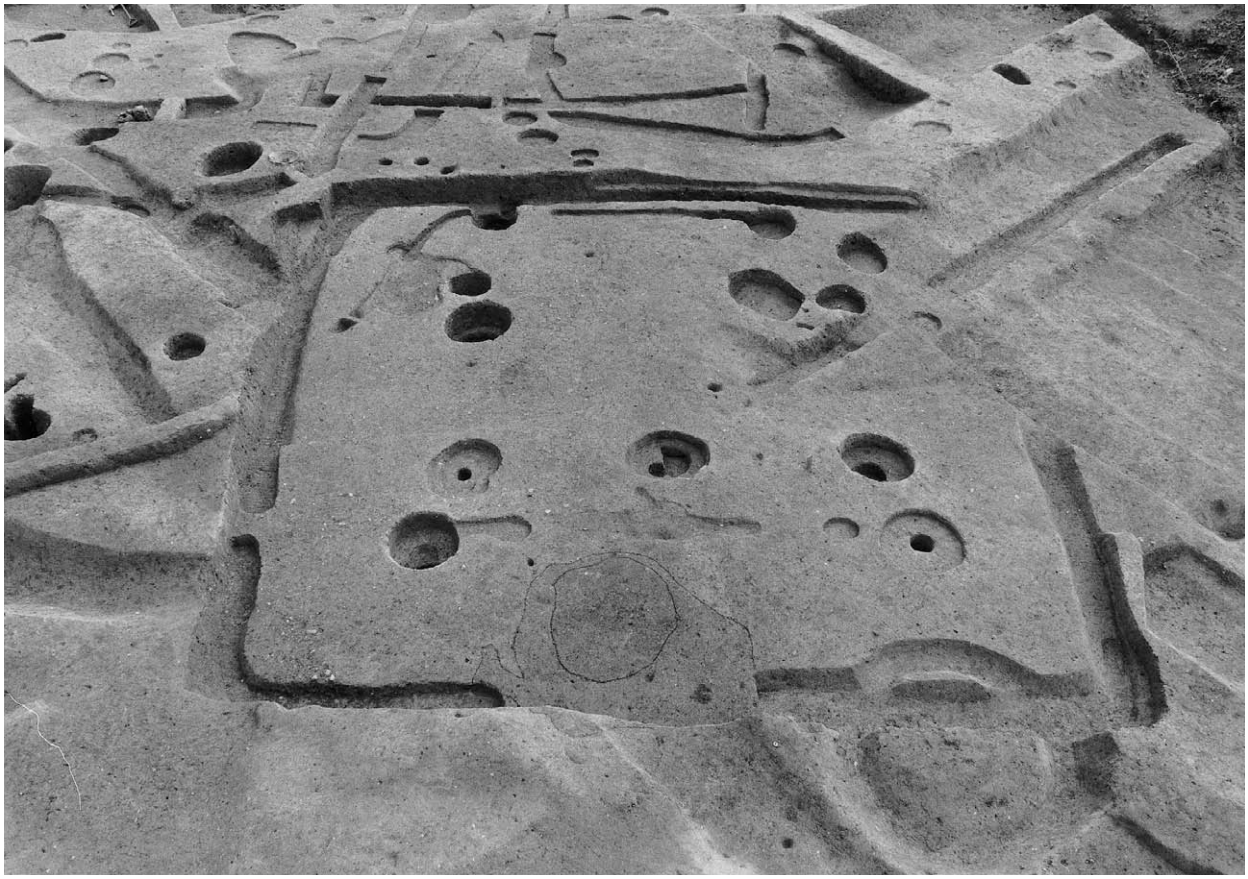
17号墓遺物出土状況（北から）

18号墓遺物出土状況（西から）

図版25

ＳＨ36完掘状況（西から）

ＳＨ42完掘状況（東から）



ＳＨ50完掘状況（北から）

ＳＨ50周辺完掘状況（北から）

図版27

ＳＨ80完掘状況（北から）

ＳＨ80及び116、121完掘状況（東南から）

ＳＨ80カマド跡遺物出土状況（南から）

ＳＨ87完掘状況（東から）

図版29

ＳＨ100及び130完掘状況（北東から）

ＳＨ100周辺完掘状況（北東から）

ＳＨ112遺物出土状況（北から）

ＳＨ149完掘状況（北から）

図版31

ＳＨ157完掘状況（北から）

ＳＨ120、161、162完掘状況（北から）

ＳＨ120、161、162完掘状況（東から）

ＳＨ176遺物出土状況（北から）

図版33

掘立柱建物群完掘状況（北から）

掘立柱建物群完掘状況（東から）

掘立柱建物群完掘状況（北東から）

掘立柱建物群完掘状況（北から）

図版35

ＳＢ164完掘状況（北から）

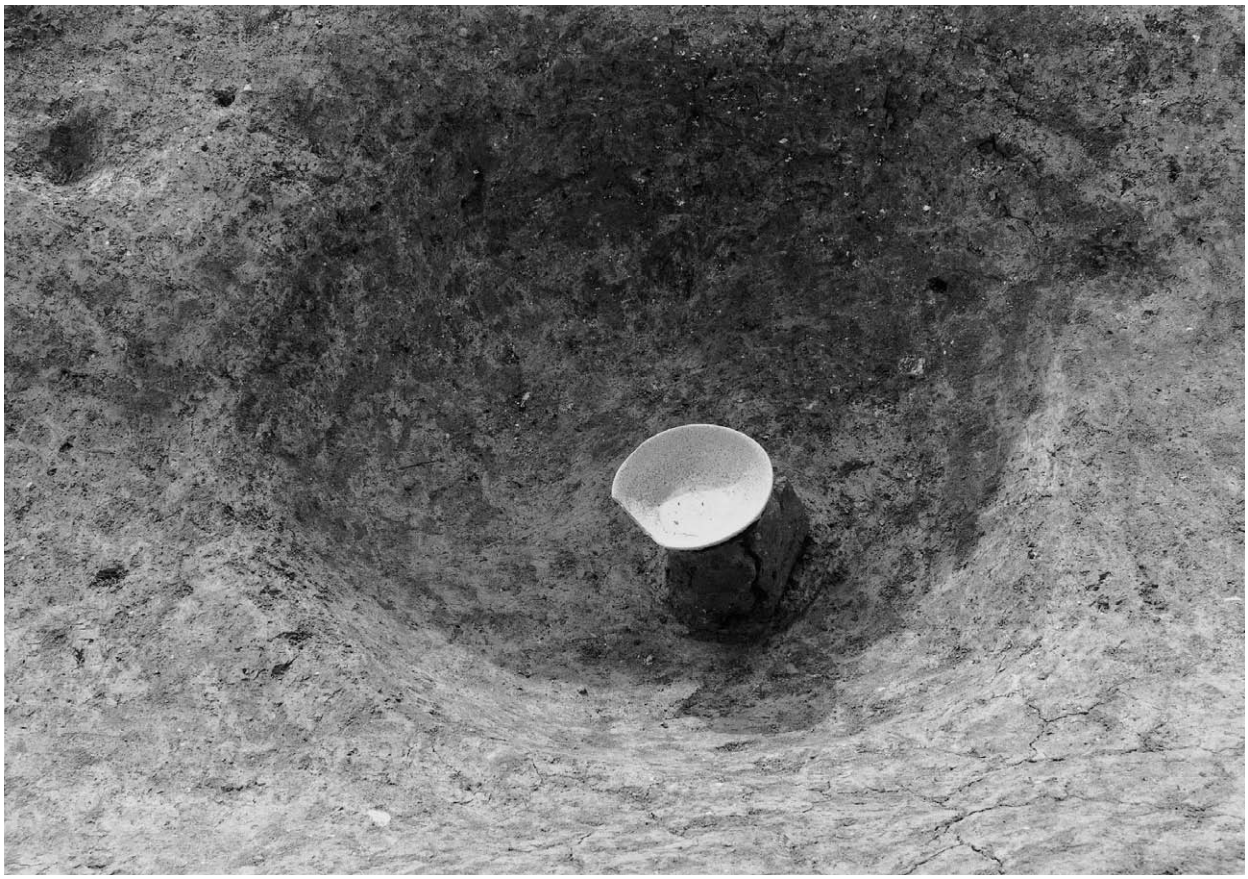
ＳＢ164完掘状況（東から）

ＳＫ143完掘状況（東から）

ＳＤ76遺物出土状況（西から）

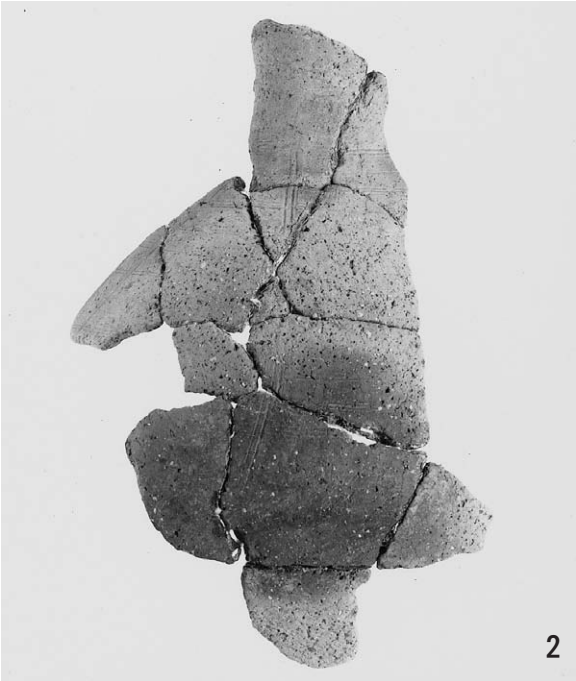
図版37

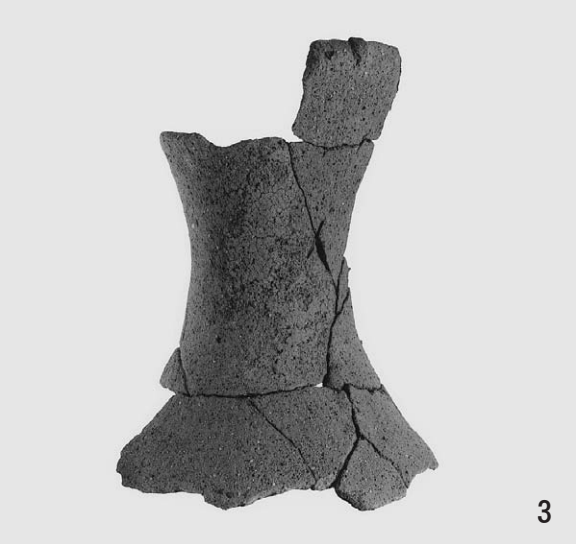
ＳＫ166遺物出土状況（東から）



ＳＫ12検出状況（東から）

1


2

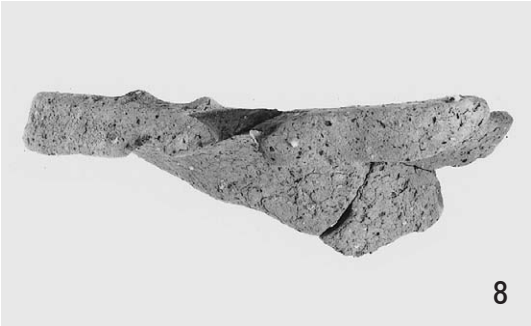

3

4

6

7

図版39


8

9

12

10

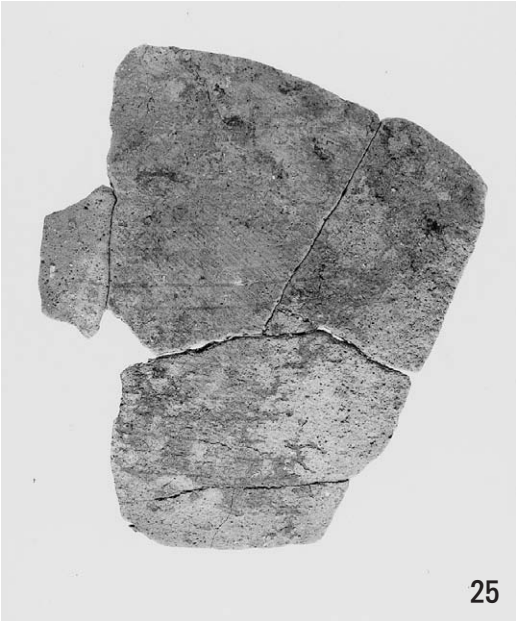
13

15

18

22

18


25

32

35

40

44

図版41

61

63

65

69

70

71

73

76

83

85

86

89

111

図版43

91

95

99

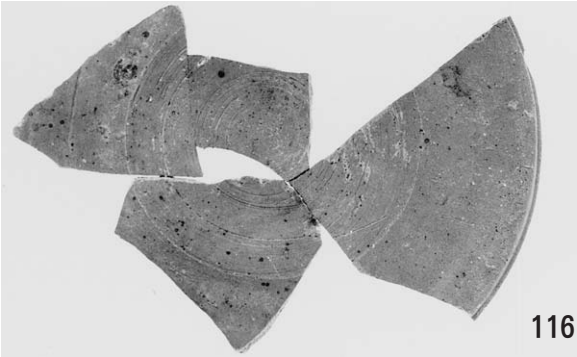
103

108

126

101

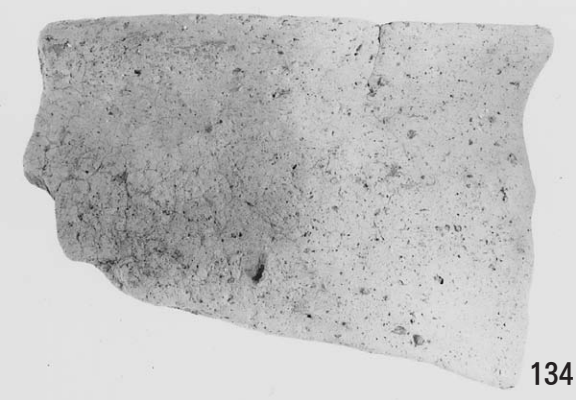
119


116

127

130

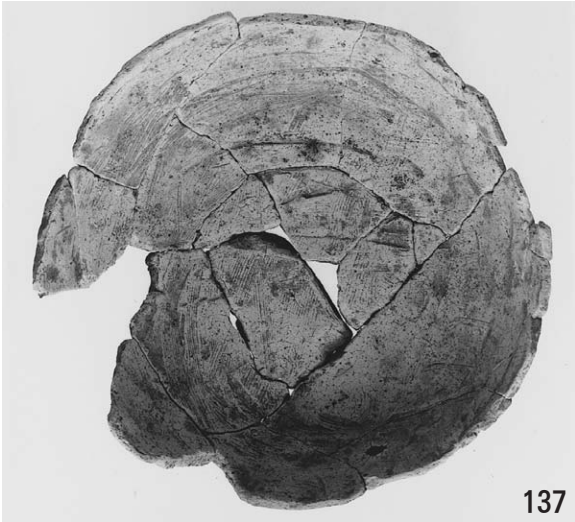
132

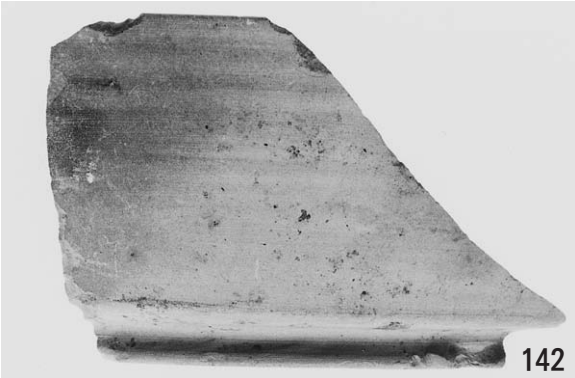

134

135

136

141


137


142

145

146

147

図版45

150

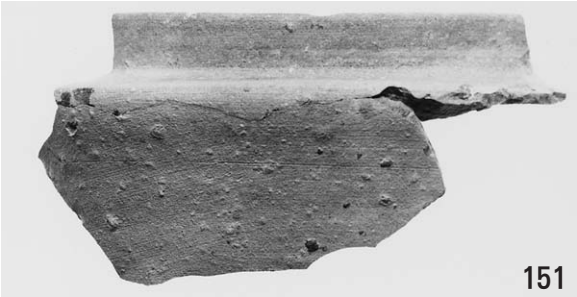
153

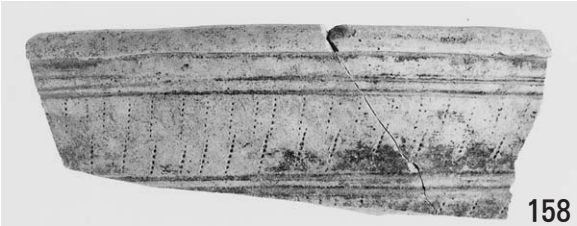
155

160

175

177


151


158

167

168

171

181

182

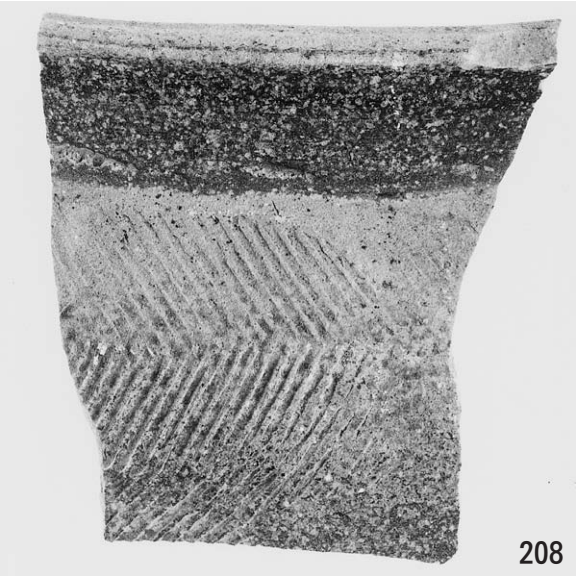
187

190

194

195

199


208

204

204

204

212

図版47

215

218

231

239

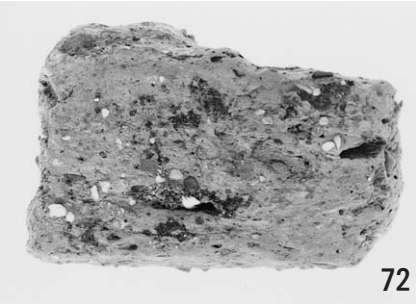
235

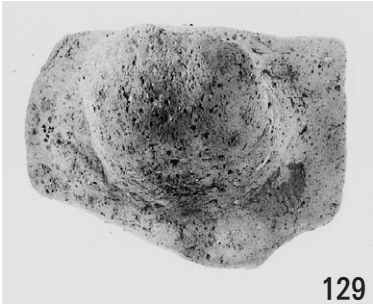
243

244

249

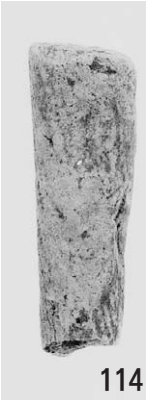
258


72


129

78

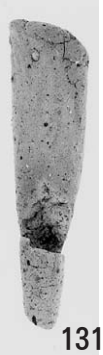
107


114

115

118

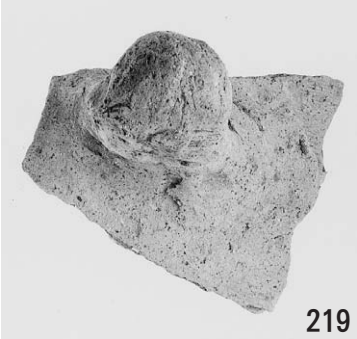
163


131

144

173

179


219

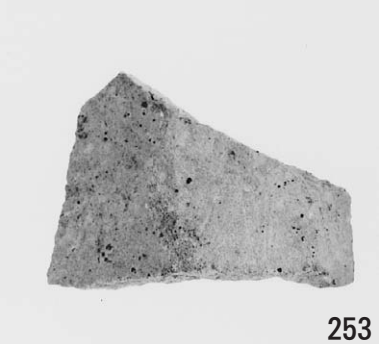
220

221

254

255

257


253

254

報　告　書　抄　録

ふりがな	やまむらいせきだいにじはっくつちょうさほうこく
書 名	山村遺跡（第２次）発掘調査報告
副 書 名	
巻 次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財報告
シリーズ番号	244
編 著 者 名	萩原義彦
編 集 機 関	三重県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川５０３　℡0596－52－1732
発行年月日	西暦2004年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やまむらいせき	みえけんよっかいちし やまむらちょう	24202	249	旧 35° 02′ 新 35° 02′ 11″	旧 136° 38′ 09″ 新 136° 37′ 59″	19990928 ～ 20010321	3,700㎡	平成11年度四日市多度線道路整備事業
山村遺跡	三重県四日市市山村町							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山村遺跡	墳墓	弥生時代	方形周溝墓	細頸壺・広口壺・太頸壺	菟上遺跡の墓域であろう
	集落	奈良～平安時代	竪穴住居・掘立柱建物　・土坑・溝	土師器杯・甕・須恵器杯蓋・杯身・鉢・灰釉陶器・緑釉陶器・製塩土器	官衙関連遺跡とみられる
	集落	鎌倉時代	土坑	陶器椀（山茶椀）	

三重県埋蔵文化財調査報告２４４

山村遺跡(第２次)発掘調査報告

２００４(平成16)年３月

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　共栄堂印刷株式会社